

# 居尾敷遺跡

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

1996

福岡県教育委員会

# 居屋敷遺跡

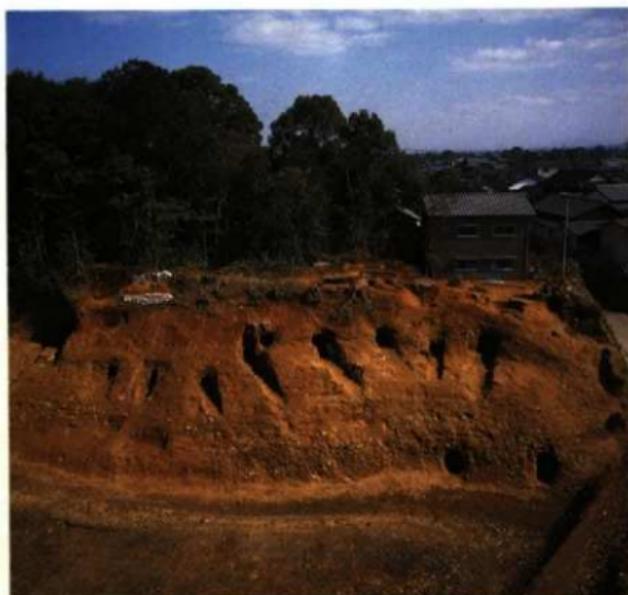
福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査



居屋敷遺跡俯瞰（西から）



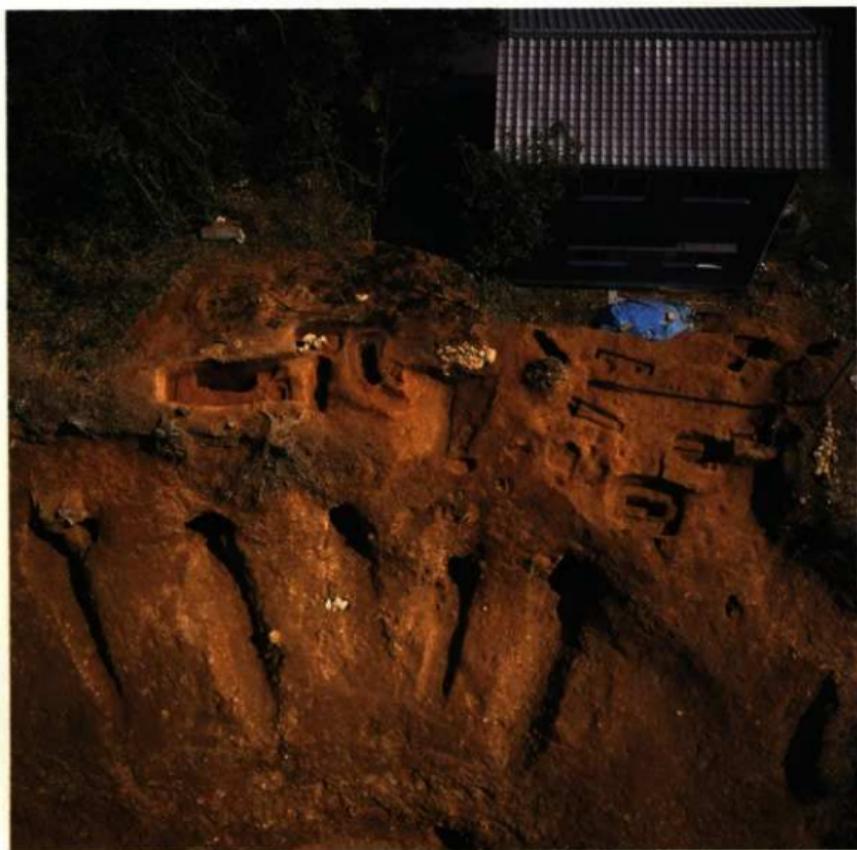
居屋敷遺跡全景（西から）



(1) 居屋敷遺跡  
近景（西から）



(2) 居屋敷遺跡  
近景（北から）



居屋敷遺跡 1区近景（西上空から）



《上》居屋敷12号横穴墓出土鈴

《下》鈴内部紐通し部分内面



(1) 居屋敷 1 号竪溝全貌（西から）



(2) 室内出土遺物（上）鼎（下）鑼

## 序

一般国道10号椎田道路は、平成6年12月25日に全線供用が開始されました。

この椎田道路に伴なう埋蔵文化財の発掘調査は、昭和61年度より実施して平成2年度までに終了をみています。

本報告書は平成元年度に実施しました、京都郡豊津町大字徳永字居屋敷に所在した遺跡について発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が、文化財愛護思想の普及並びに学術研究等の活用の一助ともなれば幸いです。

なお、発掘調査にあたっては、協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位に深く感謝いたします。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

## 例　　言

1. この報告書は、1989年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号椎田道路建設予定地に係わる埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
2. 本書は、椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第6集目で、居屋敷遺跡である。
3. 遺物の実測には、福島育子、棚町陽子、平田春美、坂田順子、藤原さとみ、堀之内明子、久富美智子、飛野博文、重藤輝行、副島邦弘が行い、挿図・図版作製・製図には豊福弥生、原カヨ子、土山真弓美、関久江と副島・飛野が、遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館復原室で実施した。
4. 遺物写真については、石丸洋、北岡伸一、遺構の写真は調査担当者の副島が、空中写真は稻富が実施した。
5. 人骨の分析には、中橋孝博、土肥直美先生（当時九州大学医学部解剖学教室）、残渦磁気測定には、伊藤晴明、時枝克安先生（当時島根大学理学部）の手を煩わした。
6. 題字は草場宗彦氏にお願いした。
7. 本書の執筆は、IV・(2)を土肥先生、III(2)を飛野が、IV・(1)を伊藤、時枝先生、他は全て副島が担当し、編集も行った。

# 本文目次

序	頁
I. はじめに	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査の組織と関係者	3
II. 位置と環境	6
III. 発掘調査の記録	9
(1) 発掘調査の概要	9
(2) 1区の遺構と遺物	14
1) 古墳時代以前の遺構と遺物	14
1. 落とし穴状土坑	14
2. 貯蔵穴	15
3. 土壙墓	17
4. 麥棺墓	27
5. その他の弥生時代の遺構と遺物	29
6. 小結	29
2) その他の遺構と遺物	32
1. 基壇状遺構	32
2. その他の遺構と遺物	32
(3) 居屋敷横穴墓群と遺物	35
1. 居屋敷横穴墓群の配列	35
2. 居屋敷0号横穴墓	35
3. 居屋敷1号横穴墓	35
4. 居屋敷2号横穴墓	37
5. 居屋敷3号横穴墓	37
6. 居屋敷4—1号横穴墓	39

7. 居屋敷4—2号横穴墓	43
8. 居屋敷5号横穴墓	50
9. 居屋敷6号横穴墓	62
10. 居屋敷7号横穴墓	68
11. 居屋敷8号横穴墓	71
12. 居屋敷9号横穴墓	75
13. 居屋敷10号横穴墓	79
14. 居屋敷11号横穴墓	81
15. 居屋敷12号横穴墓	84
16. 居屋敷13号横穴墓	98
17. 居屋敷横穴墓南支群	102
18. 居屋敷S—1号横穴墓	102
19. 居屋敷S—2号横穴墓	104
20. 居屋敷S—3号横穴墓	106
21. 居屋敷S—4号横穴墓	110
22. 小結	112
(4) 居屋敷窯跡の遺構と遺物	114
1. 居屋敷窯跡の窯本位	114
2. 出土遺物	117
3. 小結	120
<b>IV. 考察</b>	<b>123</b>
(1) 居屋敷窯跡の考古地磁気法による推定年代	125
(2) 豊津町徳永居屋敷横穴墓群出土の人骨	133
<b>V. おわりに</b>	<b>137</b>

# 図版目次

- 冠首図版 1. 居屋敷遺跡俯瞰（西から）  
2. 居屋敷遺跡全景（西から）  
3. (1)居屋敷遺跡近景（西から）  
(2)居屋敷遺跡近景（北から）  
4. 居屋敷遺跡1区近景（西上空から）  
5. (上) 居屋敷12号横穴墓出土鈴  
(下) 鈴内部紐通し部分内面  
6. (1)居屋敷1号窯跡全景（西から）  
(2)窯内出土遺物 (上) 磁(下) 麽
- 図版1 居屋敷遺跡周辺航空写真  
図版2 (1) 居屋敷遺跡発掘前状態 (2) 居屋敷遺跡表土剥ぎ  
図版3 (1) 居屋敷遺跡全景（西から） (2) 居屋敷遺跡近景（上から）  
図版4 (1) 発掘地区伐採後の水田面の試掘 (2) 水田面の試掘  
(3) 表土剥ぎ (4) 発掘調査前の安全祈願祭  
図版5 (1) 1区土壙墓群全景（西上空から）  
(2) 土壙墓群南半（北から）  
図版6 (1) 1号落とし穴状土坑（北から）  
(2) 2号落とし穴状土坑（南から）  
図版7 (1) 3号貯蔵穴（北から）  
(2) 3号貯蔵穴（東から）  
図版8 (1) 2号土壙墓（北東から）  
(2) 3(右)・4号土壙墓（南西から）  
図版9 (1) 土壙墓群南半（南から）  
(2) 5号土壙墓（南西から）  
(3) 6号土壙墓（南西から）  
図版10 (1) 7号土壙墓（南西から）  
(2) 9号土壙墓（南西から）

- 図版11 (1) 13(手前)・12号土壙墓(北東から)  
(2) 12号土壙墓(西から)  
(3) 同(東から)
- 図版12 (1) 13号土壙墓(東から)  
(2) 13号土壙墓出土遺物  
(3) 1号甕棺墓(西から)
- 図版13 (1) 2号甕棺墓  
(2) 3号甕棺墓
- 図版14 (1) 基壇状遺構(北東から)  
(2) 土壙状遺構(北から)
- 図版15 (1) 1区出土遺物
- 図版16 居屋敷遺跡横穴墓群全景(西上空より)
- 図版17 (1) 居屋敷遺跡0~4-2号横穴墓全景  
(2) 居屋敷0号横穴墓近景
- 図版18 (1) 居屋敷1、2号横穴墓近景  
(2) 居屋敷3号横穴墓近景  
(3) 居屋敷3号横穴墓遺物取上後
- 図版19 発掘風景
- 図版20 (1) 居屋敷4号横穴墓中心に近景  
(2) 居屋敷横穴群近景(西から)
- 図版21 (1) 居屋敷4-1号横穴墓全景  
(2) 居屋敷4-1号横穴墓近景
- 図版22 居屋敷4-1号横穴墓出土遺物
- 図版23 (1) 居屋敷4-2号横穴墓道出土遺物状態  
(2) 居屋敷4-2号横穴墓全景
- 図版24 (1) 居屋敷4-2号横穴墓玄室内全景  
(2) 居屋敷4-2号横穴墓出土遺物(直刀)状態
- 図版25 居屋敷4-2号横穴墓出土遺物(耳環・鉄製品)①
- 図版26 居屋敷4-2号横穴墓出土遺物(須恵器)②
- 図版27 居屋敷3・4-2号横穴墓道出土遺物(須恵器)③
- 図版28 居屋敷横穴墓群全景(4~13号横穴墓)
- 図版29 居屋敷5号横穴墓道全景(西から)
- 図版30 (1) 居屋敷5号横穴墓道遺物出土状態 (2) 閉塞石からの遺物出土状態

- (3) 居屋敷5号横穴墓全景 (4) 敷石を取り除いた後全景
- 図版31 (1) 5号横穴墓玄室の敷石 (2) 5号横穴墓敷石を取り除いた後近景
- 図版32 居屋敷5号横穴墓出土遺物(耳環・玉・鉄製品)①
- 図版33 居屋敷5号横穴墓出土遺物(鉄製品)②
- 図版34 居屋敷5号横穴墓出土遺物(須恵器)③
- 図版35 居屋敷5号横穴墓出土遺物(須恵器)④
- 図版36 居屋敷5号横穴墓出土遺物(須恵器)⑤
- 図版37 居屋敷5号横穴墓出土遺物(須恵器)⑥
- 図版38 居屋敷5号横穴墓出土遺物(その他)⑦
- 図版39 居屋敷6号横穴墓全景(西から)
- 図版40 (1) 居屋敷6号横穴墓近景(遺物出土状態)  
(2) 居屋敷6号横穴墓近景
- 図版41 (1) 墓道遺物出土状態(上から)  
(2) 墓道遺物出土状態(西から)
- 図版42 6号横穴墓玄室の遺物出土状態
- 図版43 6号横穴墓出土遺物(耳環・玉・鉄製品・須恵器)①
- 図版44 6号横穴墓出土遺物(須恵器)②
- 図版45 6号横穴墓横防空壕内出土遺物(弥生式土器)
- 図版46 (1) 居屋敷7号横穴墓全景  
(2) 居屋敷7号横穴墓閉塞石の状態
- 図版47 (1) 居屋敷7号横穴墓全景  
(2) 居屋敷7号横穴墓玄室敷石状態(上)  
(3) 居屋敷7号横穴墓玄室敷石除去後(下)
- 図版48 7号横穴墓出土遺物(耳環・玉)と墓道石組構全景
- 図版49 (1) 居屋敷8号横穴墓全景(西から)  
(2) 居屋敷8号横穴墓近景(樋石付近)
- 図版50 (1) 8号横穴墓墓道出土遺物状態(西から)  
(2) 8号横穴墓墓道出土遺物状態(上から)
- 図版51 居屋敷8号横穴墓墓道出土遺物(須恵器)①
- 図版52 居屋敷8号横穴墓出土遺物(須恵器・土師器・玉・鉄製品)②
- 図版53 (1) 居屋敷9号横穴墓全景  
(2) 居屋敷9号横穴墓閉塞の状態  
(3) 居屋敷9号横穴墓墓道からの出土遺物の状態

- 図版54 (1) 居屋敷9号横穴墓玄室全景  
(2) 居屋敷9号横穴墓玄室床面除去後
- 図版55 居屋敷9号横穴墓出土遺物（須恵器・玉）
- 図版56 (1) 居屋敷11号横穴墓全景（西から）  
(2) 居屋敷11号横穴墓閉塞状態
- 図版57 (1) 居屋敷11号横穴墓全景  
(2) 居屋敷11号横穴墓近景
- 図版58 居屋敷11号横穴墓閉塞状態と遺物出土状態
- 図版59 居屋敷11号横穴墓玄室内の出土遺物状態
- 図版60 居屋敷11号横穴墓玄室内の出土遺物状態（人骨等）
- 図版61 居屋敷11号横穴墓出土遺物（耳環）
- 図版62 居屋敷11号横穴墓出土遺物（須恵器・土師器）
- 図版63 (1) 居屋敷12号横穴墓全景（西から）  
(2) 居屋敷12号横穴墓調査後状態
- 図版64 居屋敷12号横穴墓玄室内の出土遺物状態（直刀・鈴等）
- 図版65 居屋敷12号横穴墓玄室内の出土遺物状態（直刀・玉等）
- 図版66 居屋敷12号横穴墓出土遺物（耳環・須恵器等）①
- 図版67 居屋敷12号横穴墓出土遺物（玉・刀子等）②
- 図版68 居屋敷12号横穴墓出土遺物（鉄製品・直刀他）③
- 図版69 居屋敷13号横穴墓全景（西から）  
居屋敷13号横穴墓全景（調査後）
- 図版70 居屋敷13号横穴墓閉塞状態と遺物出土状態
- 図版71 居屋敷13号横穴墓玄室内状態
- 図版72 居屋敷13号横穴墓出土遺物状態（直刀・鉄鎌等）
- 図版73 居屋敷13号横穴墓出土遺物（鉄製品・玉等）①
- 図版74 居屋敷13号横穴墓出土遺物（須恵器）②
- 図版75 居屋敷13号横穴墓出土遺物（須恵器）③
- 図版76 居屋敷13号横穴墓出土遺物（直刀・須恵器他）④
- 図版77 防空壕近景（下段） (1) 防空壕1 (2) 防空壕2
- 図版78 鋸先遺跡0区全景と居屋敷横穴墓南支群との関係（空中写真）
- 図版79 居屋敷南支群全景（西上空から）
- 図版80 (1) 居屋敷S-1号横穴墓内部  
(2) 居屋敷S-1号横穴墓完掘後

- 図版81 (1) 居屋敷S-2号横穴墓全景  
(2) 居屋敷S-2号横穴墓閉塞状態
- 図版82 (1) 居屋敷S-2号横穴墓内部  
(2) 居屋敷S-2号横穴墓完掘後
- 図版83 (1) 居屋敷S-3号横穴墓全景  
(2) 居屋敷S-3号横穴墓閉塞状態
- 図版84 (1)(2) 居屋敷S-3号横穴墓内部  
(3)(4) 居屋敷S-3号横穴墓完掘後
- 図版85 (1) 居屋敷S-4号横穴墓内部  
(2) 居屋敷S-4号横穴墓完掘後
- 図版86 (1) 居屋敷1号窯跡全景  
(2) 1号窯跡の埋出し部分付近の近景(上)  
(3) 1号窯跡の窯内遺物出土状態(下)
- 図版87 残留磁気年代測定調査風景
- 図版88 (1) 1号窯跡窯内土層状態  
(2) 焚口部の土層状態(西から)
- 図版89 窯内出土遺物(須恵器)①
- 図版90 窯内出土遺物(須恵器)②

# 挿図目次

第1図 居屋敷遺跡で最古級の窯跡発見を報じた （平成元年3月27日西日本新聞夕刊）	2
第2図 居屋敷遺跡の位置と周辺主要遺跡分布図（1/100,000）	7
第3図 発掘前の居屋敷遺跡（伐採後）	8
第4図 居屋敷遺跡周辺地形図（1/2,000）	10
第5図 居屋敷遺跡発掘区配置図（1/300）	11
第6図 居屋敷遺跡地形・遺構測量図（1/300）	12
第7図 1区遺構配置図（古墳時代以前）（1/100）	13
第8図 落とし穴状土坑実測図（1/30）	14
第9図 貯蔵穴出土土器実測図（1/3）	15
第10図 貯蔵穴実測図（1/30）	16
第11図 1・2号土壤墓実測図（1/30）	17
第12図 3～5号土壤墓実測図（1/30）	19
第13図 6～9号土壤墓実測図（1/30）	20
第14図 10～12号土壤墓実測図（1/30）	22
第15図 13～16号土壤墓実測図（1/30）	23
第16図 土壤墓出土土器実測図1（1/3）	25
第17図 土壤墓出土土器実測図2（1/3）	26
第18図 妻棺墓出土状態実測図（1/20）	27
第19図 妻棺実測図（1/6）	28
第20図 その他の弥生時代遺物実測図（1/3）	30
第21図 基壇状遺構実測図（1/60）	31
第22図 その他の遺構実測図（1/40）	33
第23図 その他の出土遺物実測図（1/3）	34
第24図 居屋敷横穴墓群配置図（1/200）	36
第25図 居屋敷0・1号横穴墓墓道断面図（1/40）	37
第26図 居屋敷1号横穴墓墓道出土遺物実測図（1/3）	38
第27図 居屋敷3号横穴墓墓道遺物出土状態（西から）	38
第28図 居屋敷3号横穴墓墓道出土遺物実測図（1/3）	39
第29図 居屋敷4—1号横穴墓実測図（1/60）	40

第30図 居屋敷4-1号狭道出土遺物実測図1(1/4) .....	41
第31図 居屋敷4-1号狭道出土遺物実測図2(1/3) .....	42
第32図 居屋敷4-2号横穴墓実測図(1/60) .....	44
第33図 居屋敷4-2号横穴墓玄室出土遺物実測図1(1/3) .....	45
第34図 居屋敷4-2号横穴墓玄室出土遺物(直刀)実測図2(1/4) .....	46
第35図 居屋敷4-2号横穴墓玄室出土遺物(鉄器)実測図3(1/3) .....	47
第36図 居屋敷4-2号横穴墓玄室出土遺物(耳環)実測図4(1/2) .....	47
第37図 居屋敷4-2号横穴墓墓道出土遺物実測図(1/3) .....	49
第38図 居屋敷5号横穴墓実測図(1/60) .....	51
第39図 居屋敷5号横穴墓墓道遺物出土状態実測図(1/30) .....	52
第40図 居屋敷5号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図1(1/1, 1/2) .....	53
第41図 居屋敷5号横穴墓玄室出土遺物(鉄器)実測図2(1/3) .....	54
第42図 居屋敷5号横穴墓墓道覆土出土遺物(石鏡)実測図1(2/3) .....	55
第43図 居屋敷5号横穴墓墓道覆土出土遺物実測図2(1/3) .....	55
第44図 居屋敷5号横穴墓墓道覆土出土遺物実測図3(1/3, 1/4) .....	56
第45図 居屋敷5号横穴墓墓道出土遺物実測図1(1/3) .....	57
第46図 居屋敷5号横穴墓墓道出土遺物実測図2(1/3) .....	58
第47図 居屋敷5号横穴墓墓道出土遺物実測図3(1/3) .....	59
第48図 居屋敷5号横穴墓墓道出土遺物実測図4(1/4) .....	60
第49図 居屋敷5号横穴墓墓道出土遺物実測図5(1/3) .....	61
第50図 居屋敷6号横穴墓実測図(1/60) .....	64
第51図 居屋敷6号横穴墓墓道断面土層図(1/40) .....	65
第52図 居屋敷6号横穴墓玄室出土遺物(須恵器)実測図1(1/3) .....	65
第53図 居屋敷6号横穴墓玄室出土遺物(玉)実測図2(1/1) .....	65
第54図 居屋敷6号横穴墓玄室出土遺物(耳環)実測図3(1/2) .....	65
第55図 居屋敷6号横穴墓玄室出土遺物(鉄器)実測図4(1/3) .....	65
第56図 居屋敷6号横穴墓墓道出土遺物実測図1(1/3) .....	折り込み
第57図 居屋敷6号横穴墓墓道出土遺物実測図2(1/3) .....	折り込み
第58図 居屋敷6号横穴墓横防空壕内出土遺物実測図(1/4) .....	67
第59図 居屋敷7号横穴墓実測図(1/60) .....	69
第60図 居屋敷7号横穴墓玄室出土遺物実測図1(1/3) .....	70
第61図 居屋敷7号横穴墓玄室出土遺物(勾玉等)実測図2(1/1) .....	70
第62図 居屋敷7号横穴墓玄室出土遺物(耳環)実測図3(1/1) .....	70

第63図 居屋敷7号横穴墓墓道石組実測図(1/40) .....	71
第64図 居屋敷8号横穴墓実測図(1/60) .....	72
第65図 居屋敷8号横穴墓墓道遺物出土状態実測図(1/20) .....	73
第66図 居屋敷8号横穴墓玄室出土遺物(管玉)実測図(1/1) .....	74
第67図 居屋敷8号横穴墓墓道出土遺物(鉄製品)実測図1(1/3) .....	74
第68図 居屋敷8号横穴墓墓道出土遺物実測図(1/3) .....	折り込み
第69図 居屋敷9号横穴墓実測図(1/60) .....	76
第70図 居屋敷9号横穴墓玄室出土遺物実測図1(1/3) .....	77
第71図 居屋敷9号横穴墓玄室出土遺物(勾玉・管玉)実測図2(1/1) .....	77
第72図 居屋敷9号横穴墓墓道出土遺物実測図1(1/3) .....	77
第73図 居屋敷9号横穴墓墓道出土遺物実測図2(1/4) .....	78
第74図 居屋敷10号横穴墓(全景)(西から) .....	79
第75図 居屋敷11号横穴墓実測図(1/60) .....	80
第76図 居屋敷11号横穴墓玄室出土遺物(耳環)実測図1(1/2) .....	81
第77図 居屋敷11号横穴墓玄室出土遺物実測図2(1/3) .....	83
第78図 居屋敷12号横穴墓実測図(1/60) .....	85
第79図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物実測図1(1/3) .....	85
第80図 居屋敷12号横穴墓玄室遺物出土(耳環・勾玉)実測図2(1/2) .....	85
第81図 居屋敷12号横穴墓墓道覆土出土遺物(鉄器)実測図1(1/3) .....	86
第82図 居屋敷12号横穴墓玄室覆土出土遺物(鉄器)実測図2(1/3) .....	86
第83図 居屋敷12・13号横穴墓玄室出土遺物(直刀)実測図(1/4) .....	折り込み
第84図 居屋敷12号横穴墓遺物出土状態実測図(1/5) .....	88
第85図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物(鈴)実測図1(1/1) .....	折り込み
第86図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図2(1/1) .....	89
第87図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図3(1/1) .....	90
第88図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図4(1/1) .....	91
第89図 居屋敷12号横穴墓墓道出土遺物実測図(1/3・1/4) .....	96
第90図 居屋敷13号横穴墓実測図(1/60) .....	97
第91図 居屋敷13号横穴墓玄室遺物出土状態実測図(1/30) .....	98
第92図 居屋敷13号横穴墓玄室出土遺物(鉄器)実測図1(1/3) .....	99
第93図 居屋敷13号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図2(1/1) .....	99
第94図 居屋敷13号横穴墓墓道遺物出土状態実測図(1/40) .....	100
第95図 居屋敷13号横穴墓墓道出土遺物実測図(1/3) .....	101

第96図 居屋敷13号横穴墓墓道覆土出土遺物実測図 1 (1/3) .....	折り込み
第97図 居屋敷13号横穴墓墓道覆土出土遺物 (石庖丁) 実測図 2 (1/2) .....	101
第98図 居屋敷S-1 横穴墓実測図 (1/30) .....	103
第99図 居屋敷S-2 横穴墓実測図 (1/30) .....	105
第100図 居屋敷S-2~4 横穴墓出土遺物実測図 (1/3) .....	106
第101図 居屋敷S-3 横穴墓・出土遺物実測図 (1/30, 2/3) .....	107
第102図 居屋敷S-3 横穴墓出土遺物実測図 (2/3) .....	109
第103図 居屋敷S-4 横穴墓実測図 (1/30) .....	111
第104図 居屋敷遺跡1号窯跡地形測量図 (1/100) .....	114
第105図 居屋敷遺跡1号窯跡窯内断面図 (1/20) .....	115
第106図 居屋敷遺跡1号窯跡実測図 (1/40) .....	折り込み
第107図 居屋敷遺跡1号窯床遺物出土状態実測図 (1/30) .....	116
第108図 居屋敷遺跡1号窯跡窯床断面図 (1/30) .....	117
第109図 窯床面出土遺物実測図 1 (1/4) .....	折り込み
第110図 窯床面出土遺物実測図 2 (1/3) .....	118
第111図 表土層出土遺物実測図 3 (1/3) .....	119
第112図 初期須恵器窯跡分布図 .....	121
第113図 居屋敷遺跡における考古地磁気試料採取箇所 .....	129
第114図 居屋敷窯跡のNRM方向 .....	130
第115図 西日本の地磁気永年変化曲線と居屋敷窯跡のNRM測定値 .....	131
第116図 居屋敷遺跡で働いた人々 .....	138

## 付 図 目 次

付図 居屋敷遺跡構造配置図 (1/200)

## 表 目 次

表1. 一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財一覧表 .....	5
表2. 玉計測表 1 .....	92
表3. 玉計測表 2 .....	93

表4. 居屋敷横穴墓一覧表	112
表5. 居屋敷横穴墓群出土の人骨	136

# I. はじめに

## (1) 調査の経過 (第1図)

一般国道10号は、本州からの玄関口である北九州市を起点とし、東九州の主要都市（行橋市・豊前市・中津市・別府市・大分市・延岡市・宮崎市・都城市等）を経て鹿児島市にいたる延長約450kmの大動脈であり、東九州地域の経済・社会・文化活動に重要な役割をはたしている。特に北九州から大分市にいたる区間は、今後一層の発展が予想される地域であり、その発展を図るために、交通体系の整備が急務となっている。

このような状況に勘案して計画が進められているのが、北九州市と大分市を結ぶ北大道路である。この北大道路も平成6年12月15日には中津市から大分市まで供用なされた。行橋バイパスそして別大道路にて大分市まで結ばれることとなった。

椎田道路建設の歴史を振り返ると、近年行橋市から豊前市に至る間は、北九州市のベッドタウンとして脚光を浴び、人口増加の著しい地域で国道の交通量は増加の一途をたどり、飽和状態に達している。このため幹線道路の機能を失いつつあり、沿線住宅の日常生活にまで影響をおよぼしている。

そのために椎田道路が計画され、国道の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため、北大道路の一環として（全延長約16.2kmを、建設費5.9km、日本道路公団10.3km）計画された。

昭和54年12月22日事業許可申請が建設大臣あて行われ、昭和55年2月8日に事業許可となる。同年10月21日には椎田道路及び日本道路公団が施行する椎田バイパスを含めて路線の発表がなされた。

これに伴って福岡県教育委員会は、建設省分の椎田道路について5工区（行橋市・豊津町）と10工区（豊前市松江）とを現地調査による分布調査を実施した。

椎田バイパスの建設を行う日本道路公団の方が用地買収が先行したため、発掘調査については、用地買収が終了した、椎田町域を昭和61年5月から開始し、昭和62年度には豊津町分を実施した。建設省についても、行橋バイパスと接合する5工区の行橋市辻垣地区について、用地が解決したので踏査を実施し、その結果を受けて、昭和62年度より本格的な発掘調査を実施することとなった。これに伴って、昭和61年5月に福岡県教育委員会は発掘調査事務所を椎田道路を中心に、北に行橋バイパス、南に豊前バイパスと北大道路に関係する発掘調査が推進するため、椎田町に県文化課椎田事務所を設置させて、発掘調査の円滑化を図った。この椎田事務所も平成6年11月末日をもって閉じた。

当該地は、一般国道10号椎田道路埋蔵文化財一覧では、第2地点徳永Aとして上げられ、古

墳時代の横穴墓群で上げられ面積は980m<sup>2</sup>であった。地籍は、豊津町大字徳永2009—1番地で、小字は居屋敷（イヤシキ）であった。この小字名をとって居屋敷遺跡と名付けた。

発掘調査は、昭和64年1月6日～平成元年4月12日までの約3ヶ月を充てた。遺跡は弥生時代の墓地群と古墳時代の横穴墓群、そして最古級の古墳時代須恵器の窯が検出された。この窯跡が日本考古学上に新たな問題を提供している。

平成7年度に整理・報告書を作製することになった。現在当該地の上には車が流れて、発掘調査当時を思い起こすよすがもない。



豊津町の居屋敷遺跡で発掘された  
初代須恵器の窯跡。

(西日本)

### 豊津・居屋敷遺跡

## 最古級の窯跡が出土

### 4世紀多元供給説裏付け?

須恵器九州でも生産



第1図 居屋敷遺跡で最古級の窯跡発見を報じた  
(平成元年3月27日西日本新聞夕刊)

## (2) 調査の組織と関係者

平成7年度における一般国道10号椎田道路関係発掘調査報告書は、

第6集 「居屋敷遺跡」

第7集 「徳永川の上遺跡II」

の2冊を刊行することとなっている。

北大道路も平成7年3月末には豊前バイパスの一般供用が開始され、北九州市から大分市まで124.8kmが完全に一本につながり、1時間半で結ばれる。設計速度は時速80km。一日当たりの車両はこれまでの2倍の1万台程度を見込まれた。これによって高速交通化が一段と進んだことで大分県や北九州市では、今後の地域間交流促進と経済の活性化が期待されている。

一般国道10号椎田道路関係発掘調査に関しての調査の組織と関係者は以下の、下記のとおりである。

### 建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	平成元年	平成7年
所長	高橋松男	大内栄吉朗
副所長(技術)	久谷秀明	高崎寿男
建設専門官	田中睦憲	阿部純弘
建設監督官	中川博勝	児玉敏之
〃	桃坂繁	
工務課長	衛藤恒利	中川博勝
工務係長	諏訪憲二	徳重栄紀
調査課長	久良木祐	田中光助
調査係長	田中敏則	竹下卓宏
技官	井上敏彦	田辺稔

### 福岡県教育委員会

	平成元年	平成7年
総括教育長	御手洗康	光安常喜
教育次長	渕上雄幸	松枝功
指導第二部長	月森清三郎	丸林茂夫
文化課長	六本木聖久	松尾正俊
文化課参事	森本精造	柳田康雄

文化課長補佐	平 聖 峯	元 永 浩 二
文化課技術補佐	宮小路 賀 宏	井 上 裕 弘
文化課参事補佐	中 矢 真 人	橋 口 達 也
	柳 田 康 雄	川 述 昭 人
	井 上 裕 弘	木 下 修
	石 山 敦	磯 村 幸 男
		兒 玉 真 一
		新 原 正 典
		中 間 研 志
庶務 文化管理係長	池 原 信 二	小 池 史 哲
事務主査	和 田 健 作	柴 田 恭 朗
主任主事	澤 田 俊 夫	久 保 正 志
		東 健 二
		高 田 裕 康

**調査及び整理報告関係(調査時)**

調査 文化課調査班総括	柳 田 康 雄
総括補佐	井 上 裕 弘
技術主査	副 島 邦 弘 (調査担当)
主任技師	緒 方 泉
"	飛 野 博 文 (調査担当)
調査員	九 州 大 学 (医)講 師 中 橋 孝 博 (医)助 手 土 肥 直 美
	島根大学理学部 教 授 伊 藤 晴 明
	助教授 時 枝 克 安

**報告者(現在)**

副 島 邦 弘 (福岡県立美術館)
飛 野 博 文 (京築教育事務所)
土 肥 直 美 (琉球大学医学部助教授)
伊 藤 晴 明 (島根職業能力開発短期大学校)
時 枝 克 安 (島根大学理学部教授)

なお、発掘調査中には、一川淳江、川本義繼、宮本工、濱島三司、諸氏の指導助言を得、遺跡の調査の折には、島根大学理学部の伊藤晴明、時枝克安両先生に残留磁気年代の測定をお願いした。

横穴墓の調査の折には、人骨の取り上げについては、九州大学医学部の中橋孝博、土肥直美両先生に指導を受けて、無事に調査を終了することができた。

発掘作業には、下記の人々から協力を得た。

大西智明（現鹿児島大学）、小野志夫、植村利道、山本喜美子、泉恭子、坪根美佐子、

原田美紀子、溝辺慶子、荒上敬子、森脇勢津子、三井恭子、末永浅枝、竹本美由紀、

末永泰子、林和子、下田スミ子、官本チツ子、下田文子、城戸歎枝、奥村洋子、

中原三重子、末永ツクエ、木本民子、馬場清子、横山康子

整理報告書作製の折には、遺物整理については岩瀬正信が統括し、豊福弥生、原カヨ子、土山真弓美、関久江、平田春美、堀之内明子、棚町陽子、福島育子、藤原さとみ、久富美智子、坂田順子の諸氏の協力を受けた。記して感謝の意を表す。

表1 一般国道10号・椎田道路関係埋文化財一覧表

平成8年3月

箇所名	地点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・m <sup>2</sup>	調査完了年 月
一般国道10号 椎田道路 (5工区)	1	辻 墳	環濠集落 旧河 游道	(33,400) 34,500	S62, S63
	2	徳永A 屋敷跡	窯 残 窑 櫛 大 墓	(980) 1,050	H1. 3
	3	徳永B 築先	古 墓 近世 墓地	5,700	H2. 10
	4	徳永C 川の上	墳 丘 墓 群 弥生・古墳	(11,250) 12,500	うち5,500m <sup>2</sup> H2. 4月 H2. 10月
椎田道路(5工区)合計					
一般国道10号 椎田道路 (10工区)	5	山 添	推 定 地	1,000	H1. 11
	6	石丸A	推 定 地	(3,000) 0	
		石丸B	縄 文 集 落	3,500	S63. 12
	7	中村A	散 布 地	7,700	うち5,000m <sup>2</sup> H1. 6月
	8-A	中村B	推 定 地	(3,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	8-B	中村B	推 定 地	(6,800) 150	完了
	9-A	黒蜂尾	古 墓 群	(14,780) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	9-B	黒蜂尾	古 墓 群	(5,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	10.	遼 仏 寺	推 定 地	(1,050) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	11	東 舟 入	推 定 地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	12	廣 山	推 定 地	(9,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
椎田道路(10工区)合計				(55,430) 12,350	100%完

## II. 位置と環境

行橋市を中心とする京都平野は、北から長狭川・今川・戸川の3本の河川によってつくられた沖積平野である。

当該地区は、戸川中流域右岸の丘陵突端部に位置している。

行政地区では、福岡県京都郡豊津町大字徳永地区である。町の北東端部で、西は戸川を境に田中、北東は行橋市、南は皆見に接する。戸川東岸の低丘陵上に位置する農業地域。

地区内を県道節丸新田原停車場線が南北に貫通し、また集落北端に五社大神社、西部に成就山淨土宗果願寺がある。

この果願寺が椎田道路にまともに路線内にはいったため、新たに直線で400m西へ移動している。

江戸時代の徳永は、元和8年(1622)には徳永村332石余り・23人・牛3匹・馬1匹と「人畜改帳」には記録されている(註1)。この徳永地区は、家臣知行地である。

享保の飢饉では、多くの犠牲者を出した。また、天保の飢饉でも同じ様な犠牲者を出している。これを供養するために果願寺に一字一石経塚を築いかれていた。この経塚については鎌先遺跡の発掘調査(註2)でその全貌が判明している。周辺の遺跡を見ると、中世期には戸川の河口ぐらの今井は港町として栄え、金屋には動物師大工の集団が専業で梵鏡を造っていた。

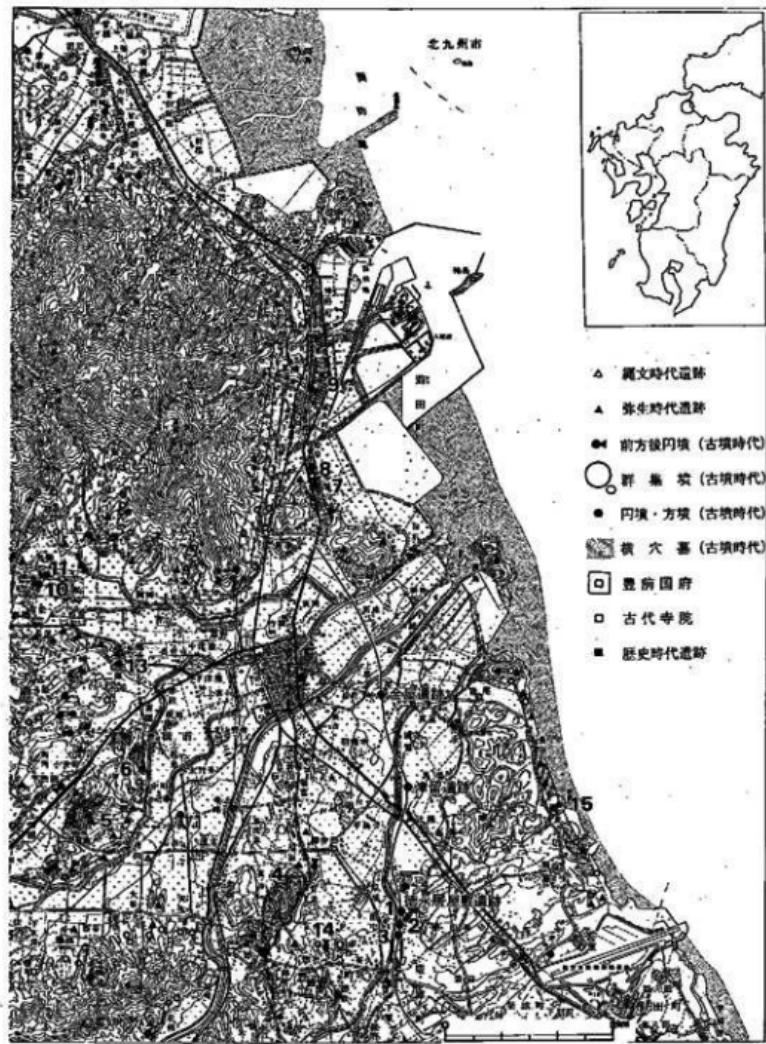
この地区にも行橋バイパスの調査(註3)によって、発掘がなされたが、中世の遺構や遺物等の検出は見られなかった。戸川を渡った対岸に津留遺跡(註4)がある。溝の中から方格規矩鏡の破片が出土している。弥生終末～古墳時代の生活遺構を検出されている。

同時期には、辻垣畠田・長通・ヲサマル遺跡、徳永鋤先(スサギ)・川の上遺跡(註5)等、また当該の居屋敷遺跡のI区では弥生時代の墓地群が検出されている。

古墳群では徳永鋤先・川の上遺跡と居屋敷横穴群が目を引く。その中でも当該地の居屋敷遺跡では横穴群の上に最古級の須恵器を焼いた窯跡が1基出土している。これは当報告書の中にはいっている。

椎田道路建設に伴って、行橋市・豊津町・築城町・椎田町等から重要な遺跡群が検出されている。縄文・弥生・古墳時代にかけてのもので、この分野に新しい遺跡達が加わって、この地域の歴史的価値を加えることになった。

豊津には、古代に国府や国分寺・国分尼寺が造営され、豊前国の中心地区がこの戸川流域である。中世以後、河口地区には沖積地が広がり今井で代表される港町が開かれた。当該地区は普通の純農村として村落を形成したと考えられる。その流れは現在までいたっているが、椎田道路の建設によって、周辺部は完全に様変わりをしていっている。

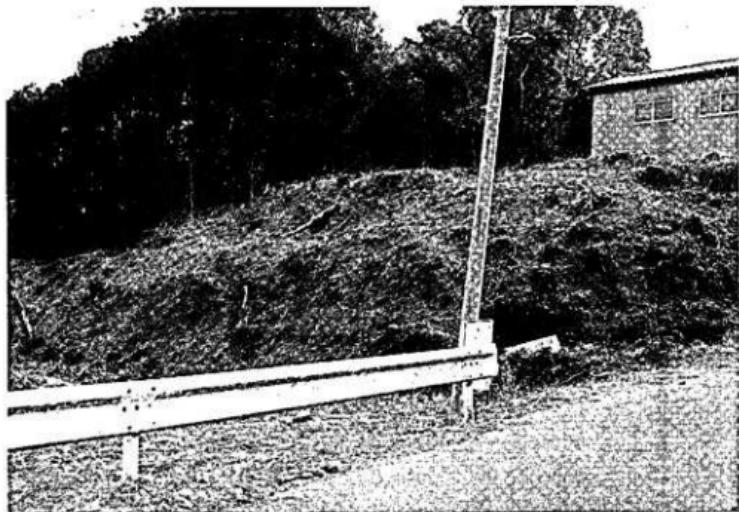


第2図 居屋敷遺跡の位置と周辺主要遺跡分布図 (1/100,000)

- |            |            |             |
|------------|------------|-------------|
| 1. 德永店屋敷遺跡 | 6. 前田山遺跡   | 11. 大丸古墳    |
| 2. 鋤先遺跡    | 7. 郡所山古墳   | 12. ピワノクワ古墳 |
| 3. 徳永川の上遺跡 | 8. 番塚古墳    | 13. 庄屋塚古墳   |
| 4. 竹並遺跡    | 9. 石塚山古墳   | 14. 惣社八幡古墳  |
| 5. 下稗田遺跡   | 10. 徳永丸山古墳 | 15. 石並古墳    |

(註)

- 註1 『角川日本地名大字典40 福岡県』角川書店 1988
- 註2 副島邦弘・中橋孝博・古賀英也・桜木晋一『鎧先遺跡』「一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告」第5集 1995 福岡県教育委員会
- 註3 行橋バイパスの発掘調査は、2カ所で、福岡県教育委員会から調査報告書が刊行されている。  
副島邦弘『津留遺跡』「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1991  
副島邦弘『金井遺跡』「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 1992
- 註4 『津留遺跡』「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1991
- 註5 一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書は次の通りである。  
副島邦弘編『辻垣フサマル遺跡』第1集 1993  
柳田康雄編『辻垣畠田・長通遺跡』第2集 1994  
緒方泉・副島邦弘・飛野博文『团後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡』第3集 1994  
柳田康雄・緒方泉『徳永川の上遺跡I』第4集 1995  
副島邦弘編『鎧先遺跡』第5集 1995
- 当該遺跡は第6集目にあたる。



第3図 発掘前居屋敷遺跡（伐採後）

### III. 発掘調査の記録

#### (1) 発掘調査の概要

当該遺跡の発掘調査は、昭和64年1月6日～平成元年4月12日までの3ヶ月を充てた。

当該地は椎田道路の第2地点で、田中渡橋までの丘陵の法面約980m<sup>2</sup>で徳永A地点として、一般国道10号椎田道路（5工区）の中で上がっていた。

地籍は大字徳永字居屋敷2009-1番地である。

小字の居屋敷は第3地点の鶴先遺跡の0・1・2区迄の土堀線を境界としていた。鶴先と居屋敷遺跡の字境であった。面積が多い鶴先を遺跡名称とした。

鶴先遺跡の0区では法面に4基の横穴墓を検出している。これを居屋敷横穴墓群の南支群とした。町道によって法面がカットされて田中渡橋とつながるものである。

当該の居屋敷遺跡は、法面に、分布調査の折に2基の防空壕と上面に防空壕に転用された横穴墓を確認した。このことを受けて発掘調査用の試振を実施した。その結果法面に横穴墓群を検出した。

平成元年に調査された地区は、丘陵の平坦面をI区とし、法面で横穴墓群そして初期須恵器の窯跡が見い出された。

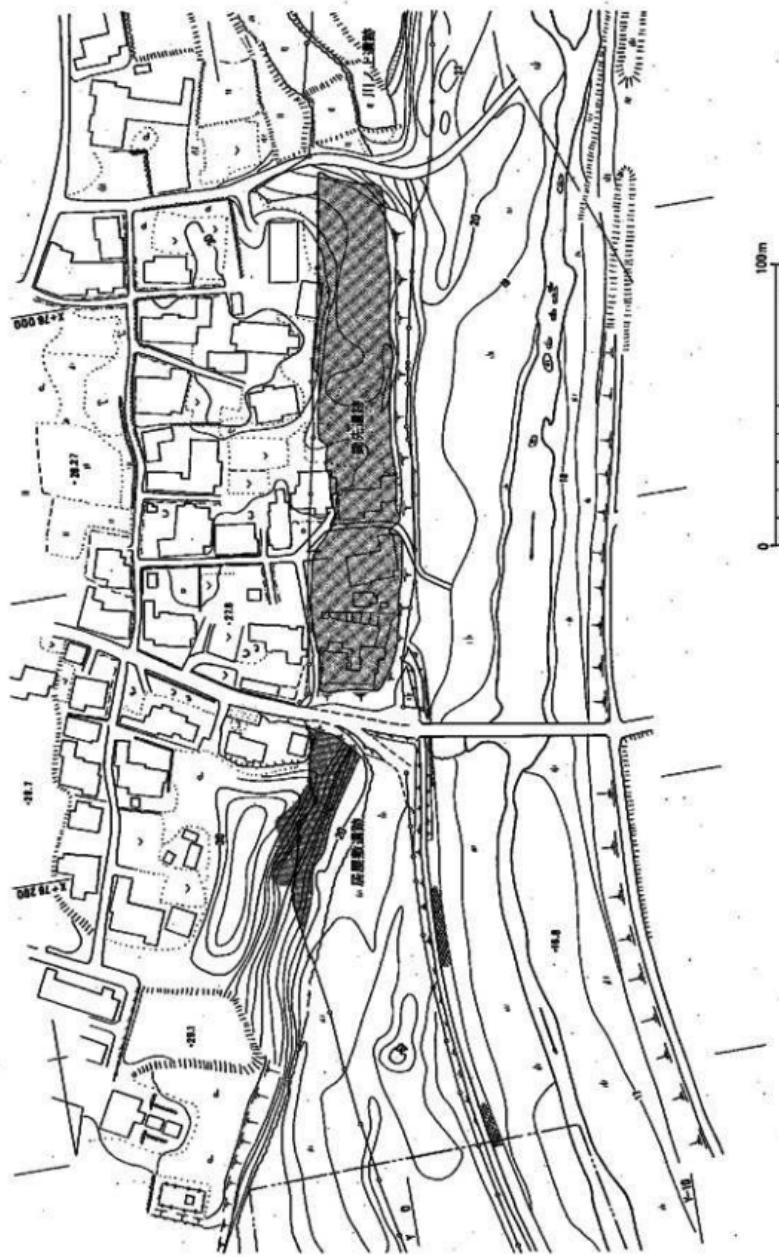
居屋敷遺跡から検出された遺構

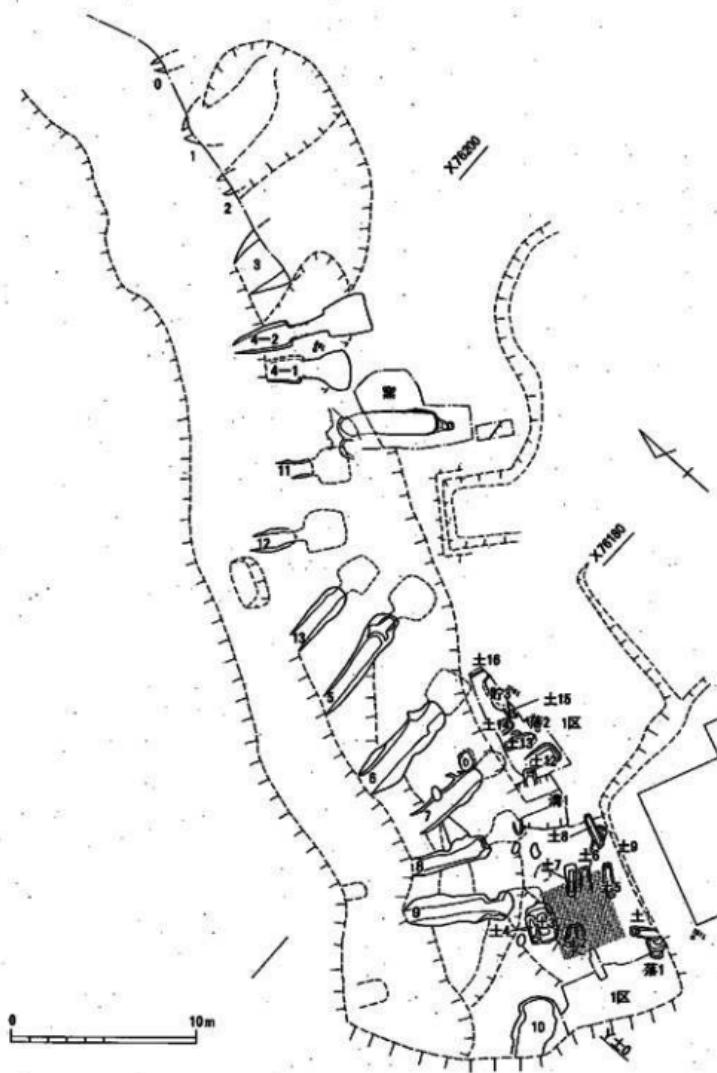
I 区	落とし穴状土坑	2 (縄文時代か)
	貯藏穴	3 (弥生時代)
	土壙墓	16 (弥生時代)
	甕棺墓	3 (弥生時代)
	基壇状遺構	1 (近世)
	溝状遺構	1 (時代不明)
	大型不整形土坑	1 (時代不明)
法 面	横穴墓群	15基 (古墳時代)
	窯跡 (須恵器)	1基 (古墳時代)

以上が検出された遺構の主要なものである。一口にいえば、弥生時代の墓地群と古墳時代の横穴墓群そして初期須恵器の窯跡である。

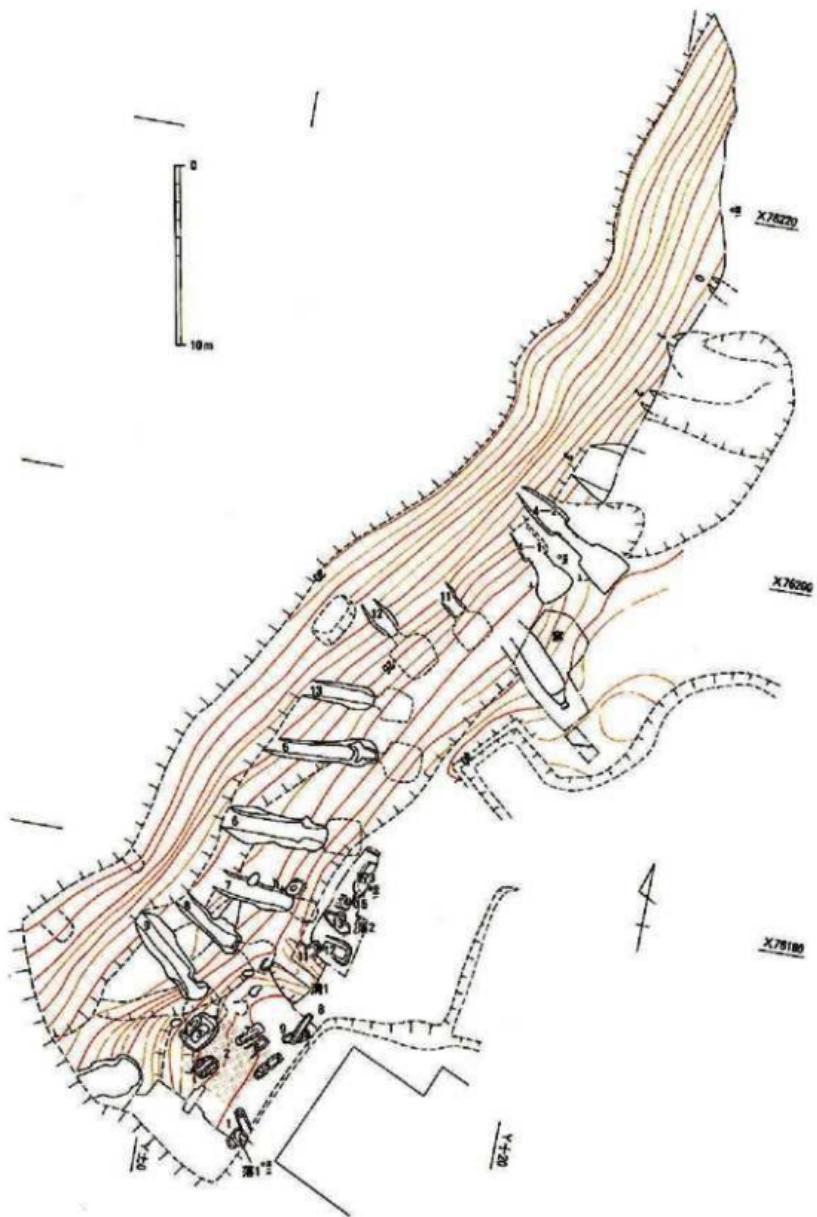
以下、項を新ためて説明を付加する。弥生時代の遺構を中心とする丘陵平坦地であるI区から説明を付加する。

第4圖 居屋地道路周辺地形図 (1/2,000)

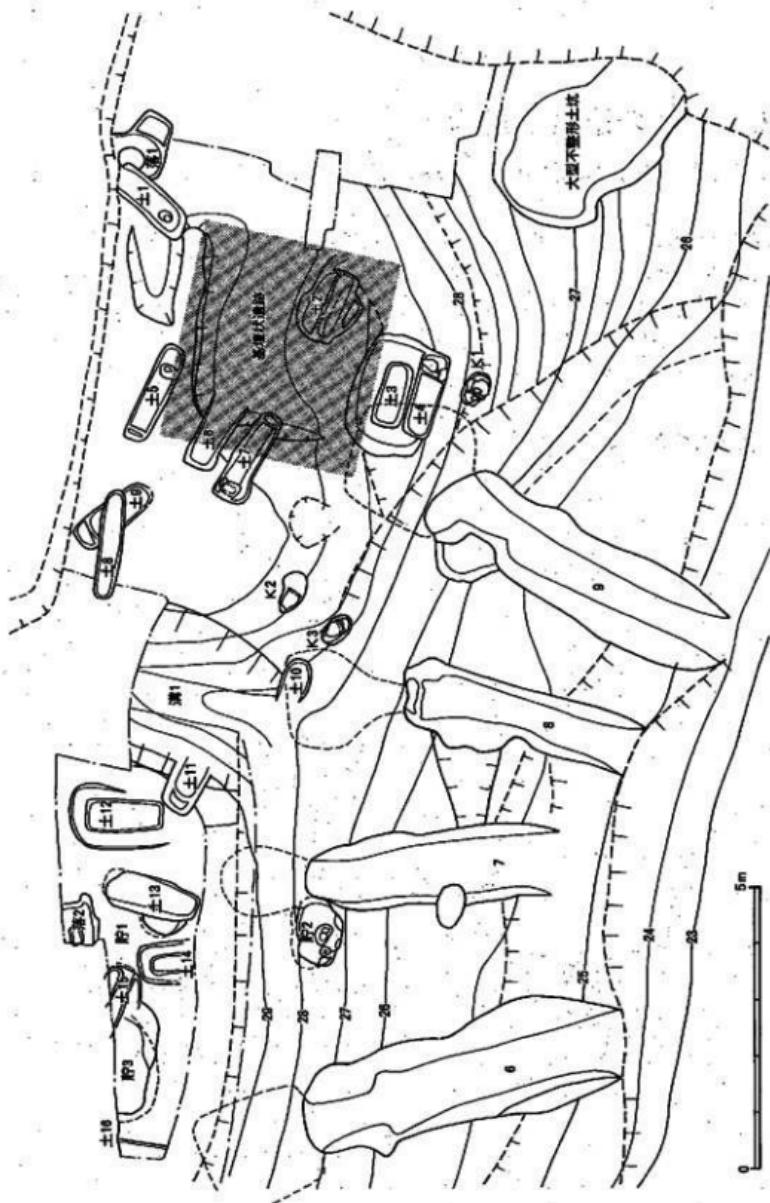




第5図 屋敷遺跡発掘区配置図 (1/300)



第6図 居住地遺跡地形遺構測量図 (1/300)



第7圖 1區遺跡配置圖（古秦時代以前）(1/100)

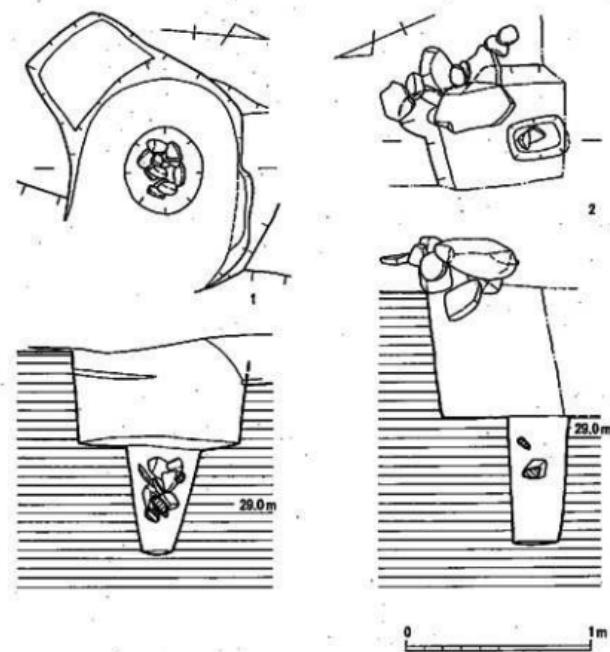
## (2) I 区の遺構と遺物

### 1) 古墳時代以前の遺構と遺物

段丘頂部の平坦面で、落とし穴状土坑や貯蔵穴・土壙墓などを密集して検出した。段丘縁辺部のごく一部の調査であったが、内容は豊かである。周辺はかなり宅地化が進むが、調査地付近のみは山林となっており、今後の開発に注意を要する。

現状では調査地と祓川との間に狭隘な平坦面が形成されているが、この部分は幾度となく氾濫に見舞われたようである。

#### 1. 落とし穴状土坑



第8図 落とし穴状土坑実測図 (1/30)

### 1号落とし穴状土坑（図版6、第8回）

調査区南東隅にある。平面形は長軸1m強、単軸1mほどの長円形を呈し、深さは0.6mがある。坑底中央部に直径0.4~0.5m、深さ0.6mの小坑が穿たれ、内部に小砾が詰まっていた。

出土遺物はない。

### 2号落とし穴状土坑（図版6、第8回）

段丘頂部調査区の北端近くにあり、調査区外に統くために全体は不明である。したがって、この種の遺構とする確信はないが、その可能性が高いと考えている。

長方形を思わせるプランの一部、 $0.5 \times 0.8m$ を検出した。これも底に深さ0.7mの小坑があり、小砾2点が転落していた。埋土は大部分が灰褐色の一様な土で、出土遺物はない。

なお、遺構の肩で検出した砾群は隣接する土壤基に伴うものであろう。

## 2. 貯蔵穴

### 1号貯蔵穴（図版5、第10回）

2号落とし穴状土坑のすぐ西側で検出し、13号土壤基に切られる。口径・底径ともに0.7m前後の円形に近いプランを有し、深さ約1.4mを測る小型の貯蔵穴である。

出土遺物はなかった。

### 2号貯蔵穴（図版5、第10回）

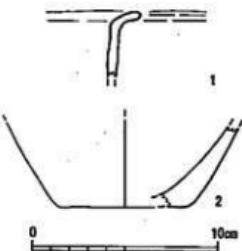
1号貯蔵穴の西側に位置する。長軸約1.1m、単軸0.8mの不整円形プランを有し、深さは約0.3mを測る。これも出土遺物はない。

### 3号貯蔵穴（図版7、第10回）

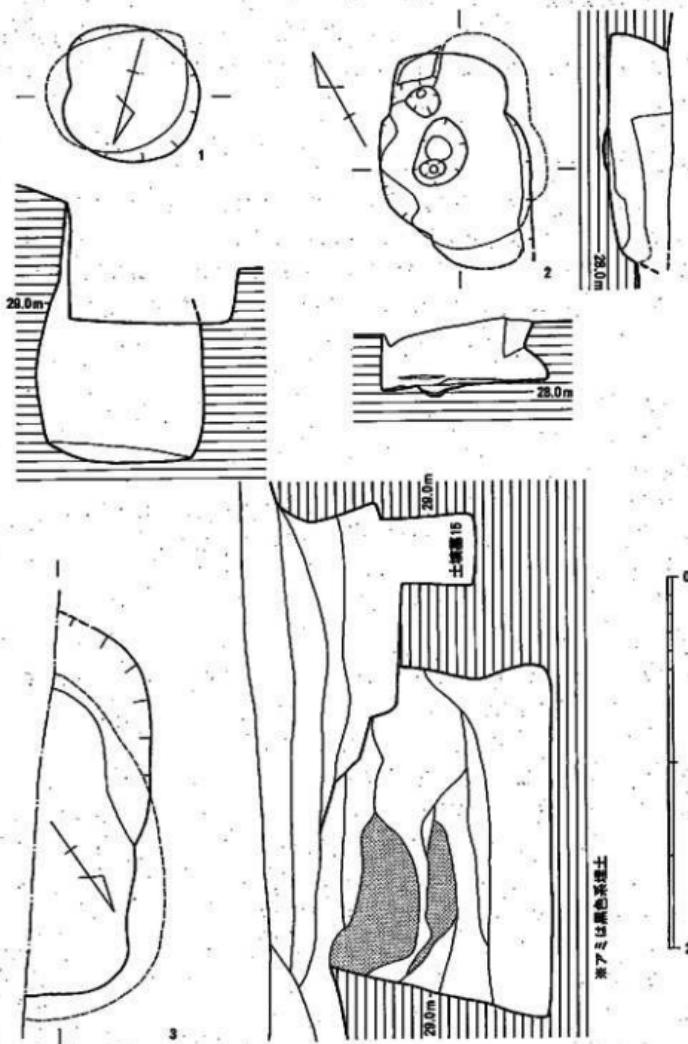
1号貯蔵穴の北東にあって、15号土壤基に切られ、その約1/2を調査した。調査を行った中では最も規模が大きく、底径約2m、深さは1.1mである。埋土は上層部に黒色系の土が入り、下層部分には混ざりのない地山の土が堆積している。

#### 出土遺物（第9図）

①はくの字に近く外反する口縁部を有する壺の小片。器表は荒れる。②はやはり壺の底部小片。



第9回 貯蔵穴出土土器実測図(1/3)



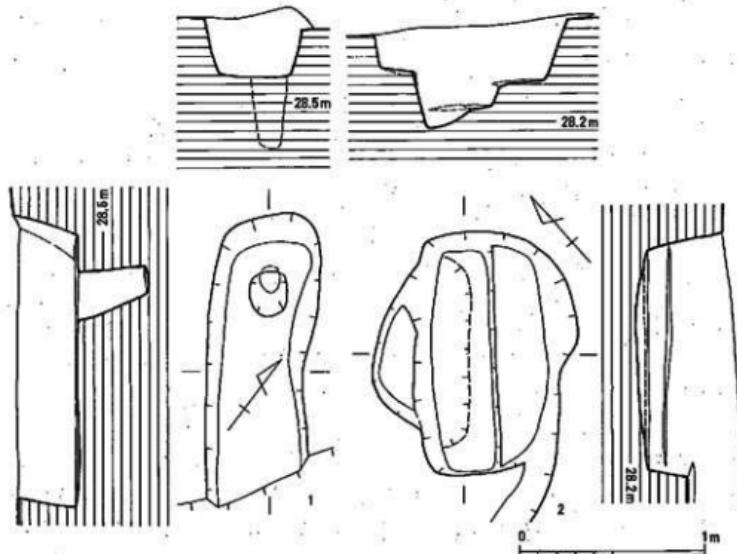
第10図 貯藏穴実測図 (1/30)

### 3. 土 墓

道路部分で16基を、窓跡周辺の用地外でもそれらしい遺構を検出した。調査区南半では概ね等高線と平行に、北半ではそれと直交するような方向で掘り込まれている。調査中の遺物取り上げに際して遺構番号に混乱が生じておらず、対応関係にいささかの不安がある。土壙墓群に伴う遺物や甕棺に顕著な時期差が認められないことから、群の形成時期の一端示すものとして了解していただきたい。

#### 1号土壙墓 (図版5, 第11図)

1号落とし穴状土坑を切っており、民家の造成時に一部が破壊される。平面形は隅丸長方形を呈し、幅0.5m強、長さ1.5m以上の規模で、深さは約0.3mが残る。北端小口付近に径0.2m、深さ0.4mの柱穴状の穴が穿たれる。出土遺物はない。



第11図 1・2号土壙墓実測図 (1/30)

### 2号土壙墓（図版8、第11図）

1号土壙墓の北にある。墓壙は長辺が2段に掘削され、上段の規模は $1.3 \times 1\text{m}$ 、下段短辺は $0.45\text{m}$ である。深さはそれぞれ $0.4\text{m}$ 、 $0.1\text{m}$ が残る。床面を掘りすぎたが、出土遺物はない。

### 3号土壙墓（図版8、第12図）

2号土壙墓の北西に近接し、4号土壙墓との切り合いに気付かず発掘したためにその先後関係を確認できていない。これも床面の検出を失敗している。

墓壙は2段で、それぞれの平面規模、深さは $2.2 \times 1.4 \times 0.6\text{m}$ 、 $1.15 \times 0.5 \times 0.5\text{m}$ である。

### 4号土壙墓（図版8、第12図）

切り合い関係は未確認であるが、床面が浅いことから3号土壙墓に後出するものと思われる。墓壙平面は長方形に近く、その規模は $1.6 \times 0.5 \times 0.1\text{m}$ となる。なお、南西小口付近にのみ小口板を立てた痕跡が残る。

#### 出土遺物（第16図）

3・4号土壙墓のいずれに伴うものか確認できなかったが、図示したような長頸壺片が出土している。口端部を内側へつまみ出すとともに、外面に断面三角突帯を付す。器表は荒れるが、内外面に赤色顔料が観察できる。

### 5号土壙墓（図版9、第12図）

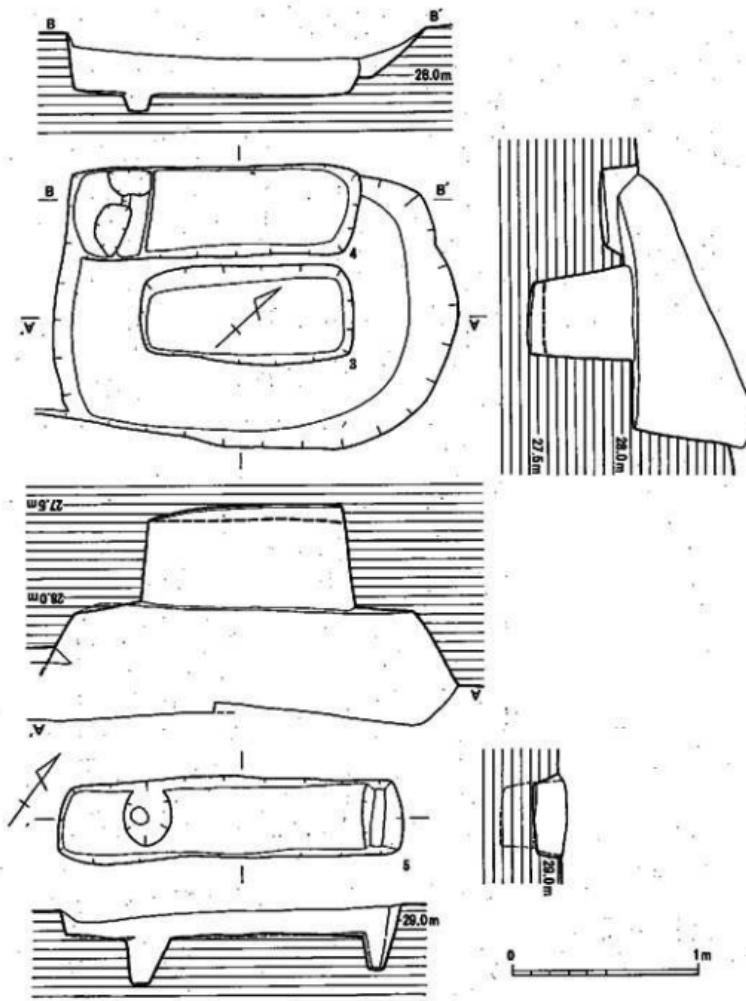
1号土壙墓の北にあり、後述する6・7号土壙墓と平行して並ぶ。墓壙平面はほぼ長方形で、規模は $1.85 \times 0.45\text{m}$ 、深さは $0.15\text{m}$ である。床面はほとんどで水平であるが、北東小口部分で壁に添う小口板の掘り込み跡が、南西小口からやや離れた位置で直径、深さともに $0.2\text{m}$ 強の柱穴状の坑が確認された。出土遺物はない。

### 6号土壙墓（図版9、第13図）

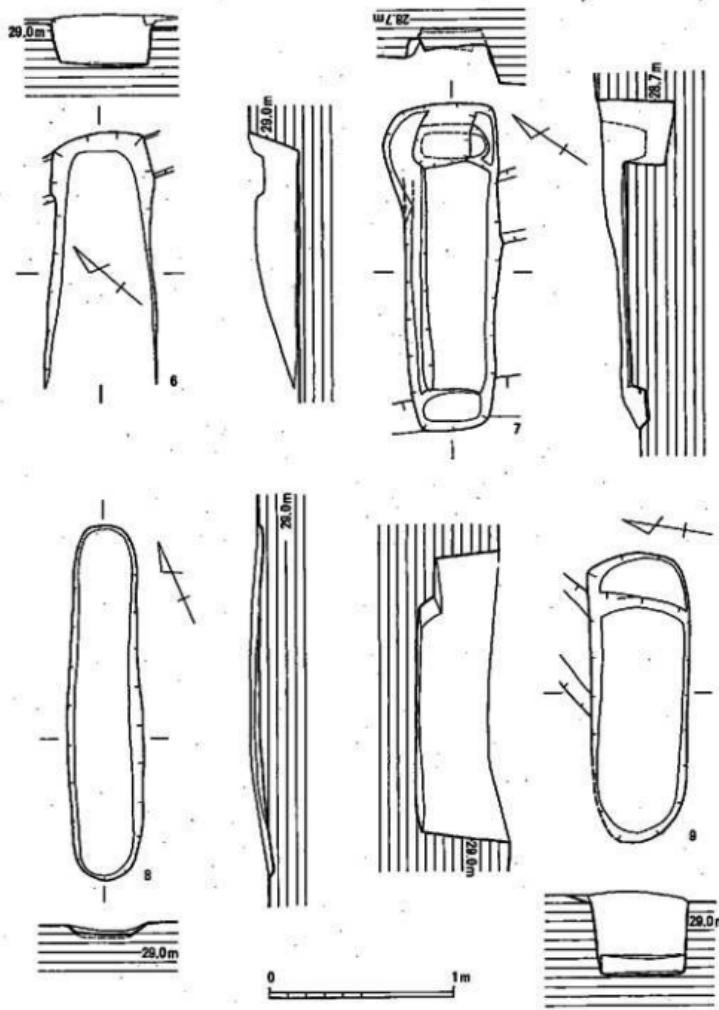
5号土壙墓の北西に隣接する。南西半がすでに削平されるが、長さ $1.45\text{m}$ 、幅 $0.5\text{m}$ 、深さ $0.3\text{m}$ の規模の長方形プランで残る。出土遺物はない。

### 7号土壙墓（図版10、第13図）

6号土壙墓の北西に並列する。平面形は隅丸長方形で、規模は $1.75 \times 0.5\text{m}$ 、深さは最高で $0.2\text{m}$ が残存する。北東部分が樹根によって擾乱を受け、南東長側辺での発掘を失敗したが、周囲に木棺材の痕跡が残っていた。小口では裏込めを大きくとり、かつ深く掘られている。頭位は若干高くなる北東に求められよう。出土遺物はない。



第12図 3～5号土壤基質測定図 (1/30)



第13図 6～9号土壤基実測図 (1/30)

#### 8号土壙墓（第13図）

5号土壙墓の北東に近接してあり、今回調査した中で唯一、9号土壙墓と埋葬部が切り合う。平面プランは長円形に近く、その規模は $1.9 \times 0.4m$ 、深さは $0.1m$ に満たず床面を残すのみである。出土遺物はない。

#### 9号土壙墓（図版10、第13図）

8号土壙墓に切られる。これも平面プランは長円形に近く、その規模は $1.55 \times 0.5m$ 、深さは約 $0.5m$ ある。東小口に $0.2m$ の高さで地山削出しの枕が付設しており、頭位が判る。出土遺物はない。

#### 10号土壙墓（第14図）

土壙墓群調査区の中程にあり、溝に切られて北東半を失う。隅丸長方形プランのようで、残存部の規模は長軸 $0.8m$ 、短軸 $0.5m$ 、深さ約 $0.3m$ である。出土遺物はない。

#### 11号土壙墓（第14図）

10号土壙墓の東にあって、これも溝に切られる。平面プランは隅丸長方形で、残存規模は $1.05 \times 0.6m$ 、深さは $0.45m$ である。北東小口にこれも地山削り出しの枕が付され、その高さは $0.2m$ であった。これも出土遺物はない。

#### 12号土壙墓（図版11、第14図）

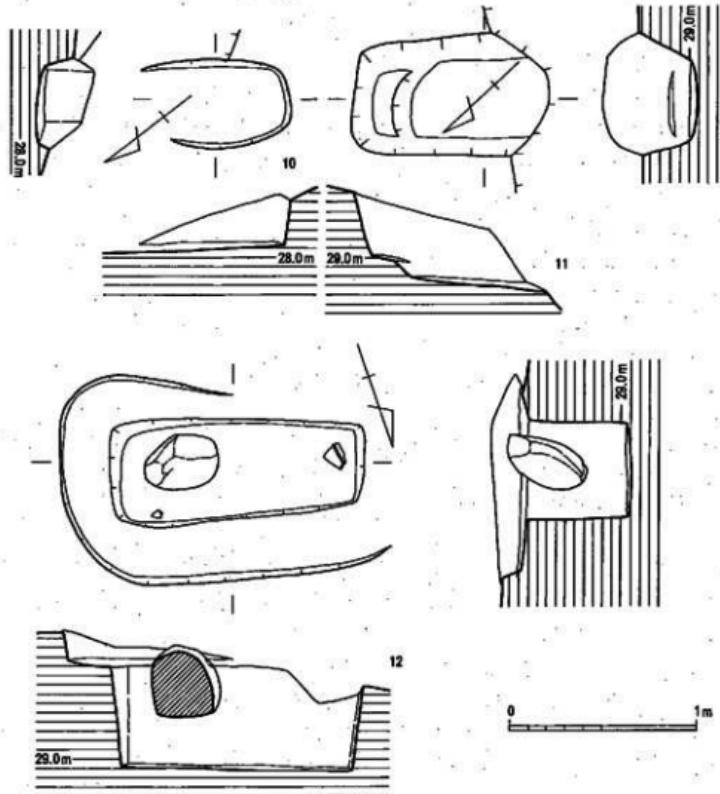
11号土壙墓の東に接して位置し、主軸は等高線に対して直角方向に近い。墓壙は2段となり、上段は西端で途切れるが長軸 $1.8m$ 、短軸 $1.1m$ 、深さ約 $0.2m$ の規模である。埋葬部は長方形に近いプランで、長軸 $1.4m$ 、短軸 $0.4 \sim 0.55m$ 、深さは約 $0.5m$ となる。四周の墳体はほぼ垂直に近く立ち上がる。

埋葬部に径 $40cm$ 前後の轟が転落したような状況で出土したが、これは頭位に置かれた標石であったと思われる。また、土器片が同じく転落したような状態で出土している。

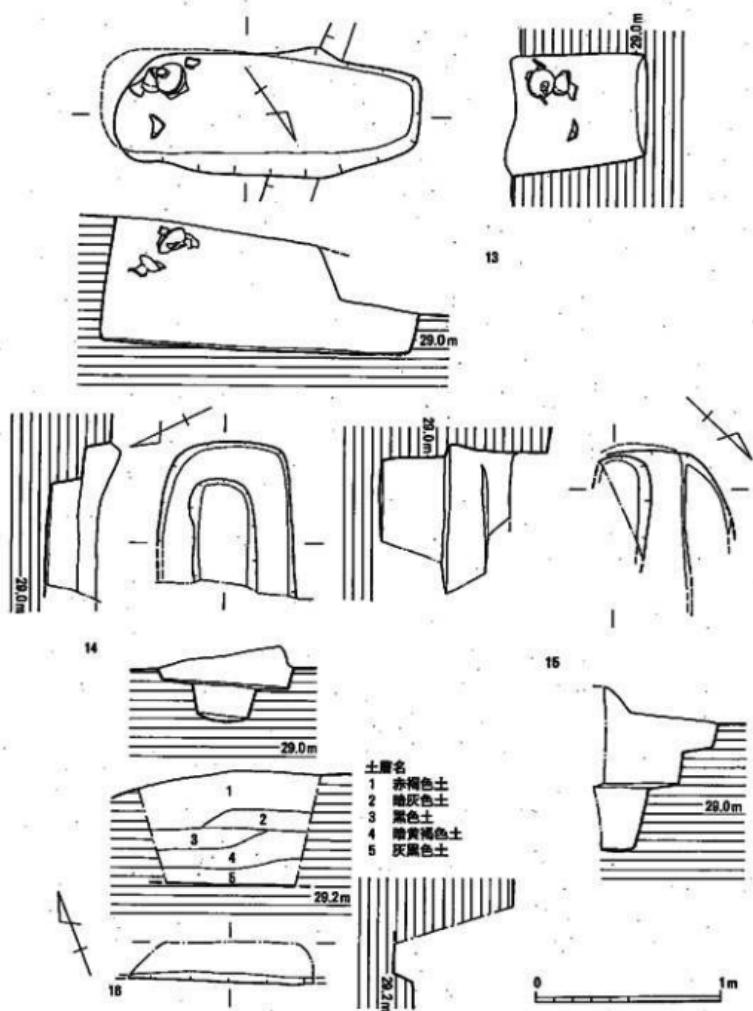
#### 出土遺物（図版15、第16図）

冒頭に記したようにすべてが12号土壙墓から出土したものとの確証はないが、報告しておく。  
②は長頸瓶で、図示した部分はほぼ完周する。口端部を外方に肥厚させ、さらに下位に突帯を2条付す。内面の指撫で痕が顕著である。③～⑦は高杯である。③は約 $1/4$ が残存し、器表が荒れるが赤色顔料を観察できる。④は図中程で上下に分離していて図上復原したものである。杯部底面は上方から充填して整形する。約 $1/8$ が残る。⑤～⑦の脚端部はいずれも小片であり、復原性に確信はない。⑧の外面に赤色顔料が残るほか、いずれも器表の残存状態が悪い。

⑧は鋸先状口縁を有する要の小片で、これも復原口径には自信がない。口縁部はほぼ水平に拡張される。⑨は口縁部と体部が接合しえないが同一個体であろう。口縁部はくの字形に屈折し、端部が小さく肥厚する。頸部内面は強く撫でられて匙面状に窪み、外面には断面三角突帯を付す。また、体部最大径部分にも同様な突帯を2条付している。これも器表の荒れが著しく、調整痕はほとんど観察できない。



第14図 10~12号土壤基実測図 (1/30)



第15図 13~16号土壤基実測図 (1/30)

### 13号土壙墓（図版11・12、第15図）

12号土壙墓とほぼ並行して位置するが、主軸は描わない。また、2号落とし穴状土坑上面で検出した礫群はこの土壙墓の頭位に近接しており、その標石であったと思われる。

墓壙は頭位が崩れるようだが、足位の形状から推して長方形プランのようである。上端での規模は $1.65 \times 0.6m$ 、深さ $0.65m$ であるが、頭位のみ壁体がオーバーハングしており、これが原状を示すものかも知れない。

### 出土遺物（図版15、第16図）

頭位の埋土中で示したように転落したような状況で多くの土器が出土している。

1は深鉢形の精製土器で、約 $1/2$ が残存する。外面にのみ赤色顔料を塗布する。口端部に外形する面を造るが、その他の器形的装飾はない。2は脚付壺の精製品。扁球形の体部中位に断面M字形の突帯を付し、その上の2カ所、90度の位置に径 $10mm$ 強の小孔を穿つ。また、底部近くに焼成後にあけられた径 $2\text{センチ}$ 強の穿孔があるが、先の2孔とは無関係な位置にある。脚部の接合は、底部の形状から推して上方から充填しているようである。外面全面を細密な窪磨きで仕上げ、赤色顔料を施す。3は壺、4は高杯であろう。いずれもほぼ水平に伸びる鋤先状口縁を有し、4は内外面に赤色顔料を塗布する小片。5は小片。これも内外面に赤色顔料が観察できる。6は口端部付近の大部分を失うが、完形に復しうる高杯である。体部は内彎する椀形となり、口端部は断面方形に近い形で終わる。脚部は小振りで、内面に絞り痕が著しい。これも外面から杯部内面にかけて赤色顔料が付される。7も同形態の高杯脚部の残片。8は壺の小片で、体部最大径部に断面M字突帯を2条付す。

### 14号土壙墓（第15図）

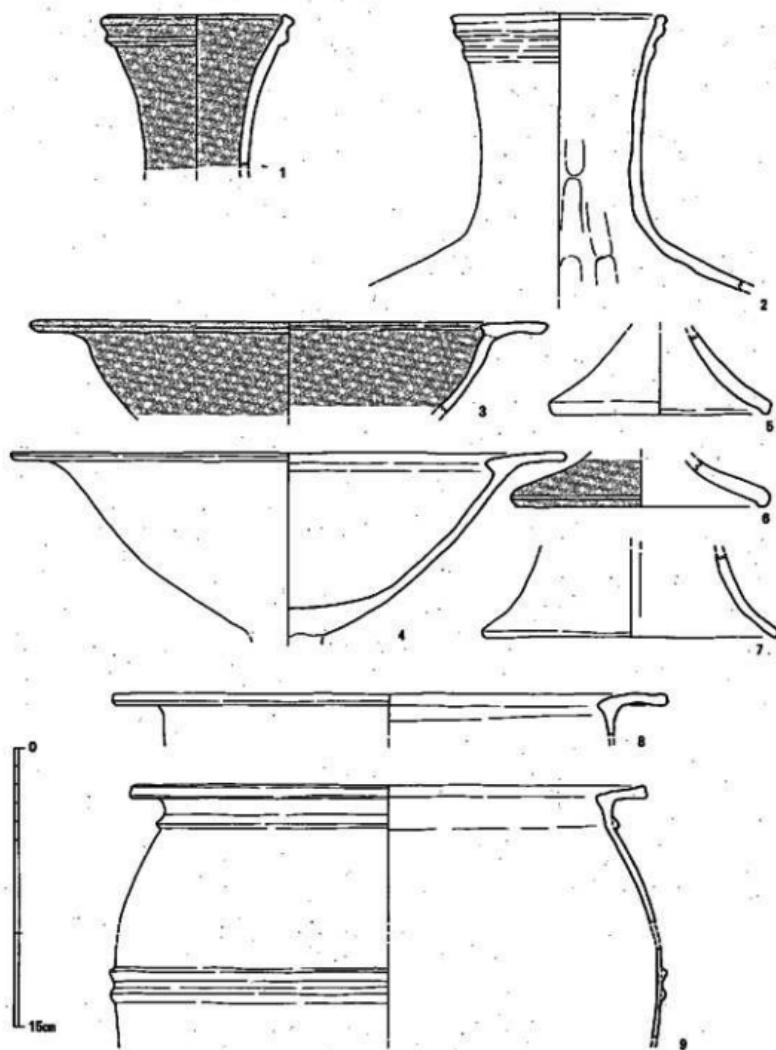
13号土壙墓の北に隣接し、方位は若干異なる。西半は株のために発掘を行っていない。墓壙は2段で、いずれも平面形は鵠丸長方形である。上段は幅 $0.75m$ 、長さ $0.8m$ 以上、深さ $0.2m$ 、埋葬部は幅 $0.35m$ 、長さ $0.6m$ 以上、深さ $0.2m$ の規模となる。出土遺物はない。

### 15号土壙墓（第15図）

14号土壙墓の東に隣接するが、主軸方位は全く異なり直角に近い配置をとる。大部分が調査区外へ続き、その一部を調査したのみである。墓壙は2段となるが、小口部分のテラス面が小さく、埋葬部の幅は $0.3m$ 前後、深さは $0.35m$ である。なお、岡では3段となるが、最上段のそれは確信がない。出土遺物はない。

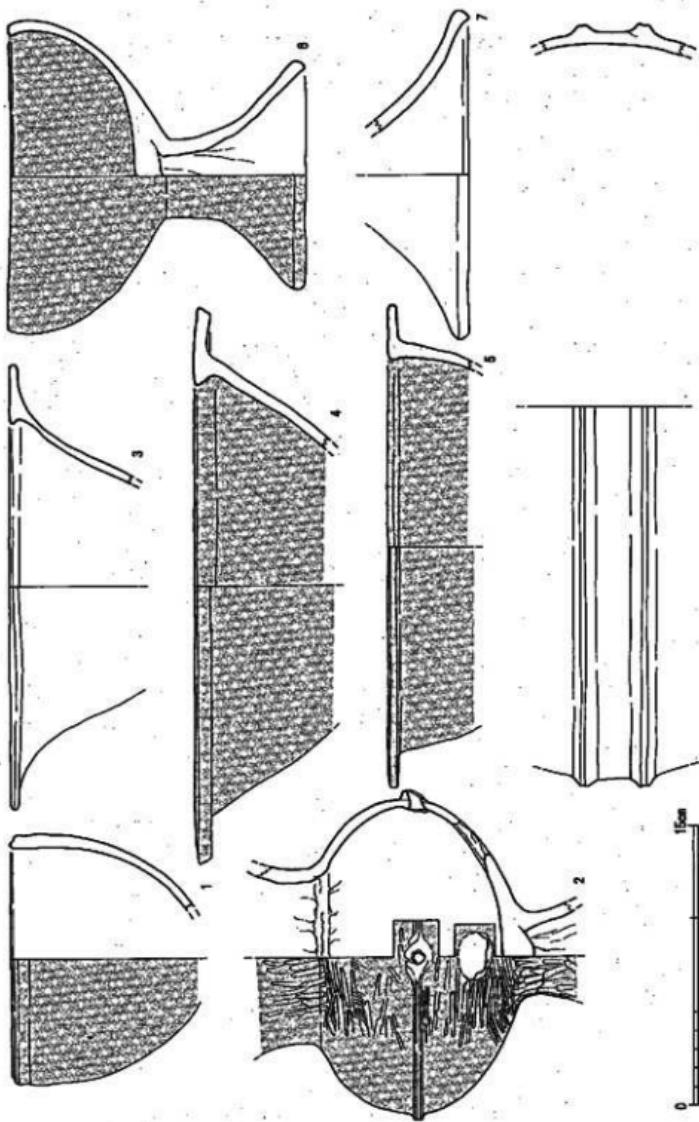
### 16号土壙墓（第15図）

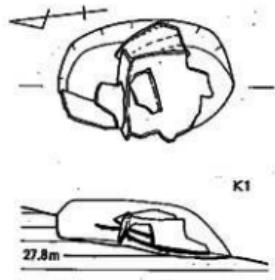
調査区東端でその一部を確認しただけで、これも確信はないが、おそらく2段墓壙の土壙墓と思われる。長さ $1m$ 以上、深さ $0.1m$ である。出土遺物はない。



第16図 土壌基出土器実測図1 (1/3)

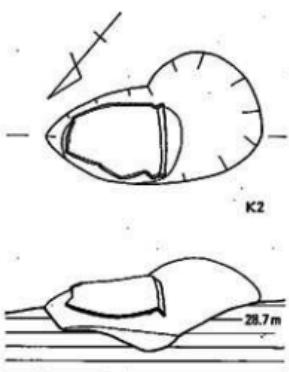
第17圖 土壤露出土壤尖端圖 2 (1/3)





#### 4. 壺 棺 墓

土壤墓を検出した地区の中、中央付近から南半部にかけて3基の小児用壺棺を検出した。いずれもすでに上半部を失い、かろうじて残存する有様であった。整理に至る過程で、一部の土器が所在不明になっており、すべての個別実測図を提示できないことを記しておく。



##### 1号壺棺墓（図版12、第18図）

4号土壤墓西の斜面にある。上壺の一部および下壺の一部が残っていた。

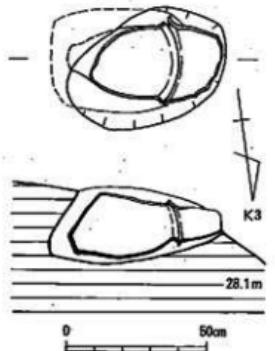
##### 上壺（第19図）

検出状況実測図では口縁部までが残存しているように記してあるが、整理の段階では体部のみが判明している。かなり胴張りのある小片で、断面M字形の突帯2条が残る。

##### 下壺（図版15、第19図）

これは検出時の下半が所在不明となっている。口縁部は若干垂下するタイプの鋸先状口縁部で、口端部外面を強く横撫でし、頸部直下に断面M字形の突帯を1条付す。

外面とともに丁寧な横撫でで仕上げ、外面には赤色顔料が塗布される。



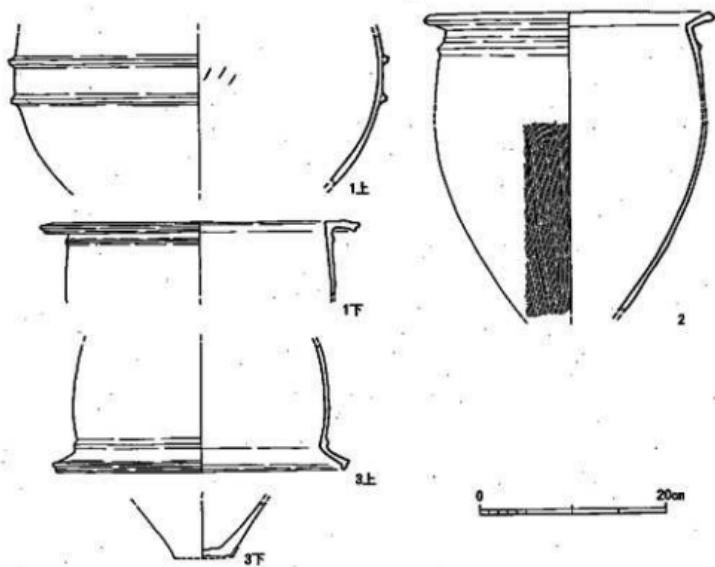
##### 2号壺棺墓（図版13、第18図）

10号土壤墓の南にあり、下壺の一部が残るので、上壺の存在は不明である。

##### 下壺（図版15、第19図）

底部を欠き、体部上半で接合しないが、およその形状は判る。口縁部はいわゆるくの字口縁で、端部が外方に肥厚し、頸部下に断面三角突帯を1条巡らせる。体部の仕上げは、内面は磨滅して判然としないが、外面は刷毛目で行う。体部外面に煤が付着しており、日常土器を転用したことが窺える。

第18図 壺棺墓出土状態実測図 (1/20)



第19図 鮫棺実測図 (1/6)

### 3号鮫棺墓 (図版13, 第18図)

2号鮫棺墓の北に接するが、やはり主軸方位は描わない。墓壙は床面がほぼ長方形に近いプランで、西側、地形的に低い方から掘り込まれている。3基の鮫棺墓の中では最も残りがよいが、下壙が所在不明となっている。

### 上壙 (図版15, 第19図)

いわゆる跳ね上げ口縁を有する壙で、口端部は上方へつまみ出され、ほぼ頸部に断面三角形の突帯を1条付す。体部外面は突帯とともに磨滅しているが、内面は丁寧に撫でて仕上げられる。全体に二次的な火熱を受けて赤く変色しており、これも日常土器の転用品であろう。

### 下壙 (第19図)

調査時の所見ではくの字形口縁を有し、突帯を付さない、やはり日常土器の転用品と思われるものである。底部を図示した。

## 5. その他の弥生時代の遺構と遺物（図版15、第20回）

窯跡の確認調査を行うためにあけたトレンチ調査で検出した土壙基（あるいは祭祀土坑か）、調査区内で採集した弥生土器をまとめて紹介する。

①から④は窯跡東のトレンチから出土した一括資料である。①は口頸部を失うが、その他の部分はほぼ半分が残存する。張りのある扁球形体部で、外面は全面に赤色顔料が塗布される。器表は荒れる。②も同型の壺で、やはり外面は赤色塗装が施される。③は大型の壺の小片。外表はやはり磨滅が著しい。④は完形の高杯で、椀形半球形の杯部に水平にのびる鋸先状口縁部を付す。脚部は小振りで、柱状部には縱方向の範磨きが観察できる。裾は開きが小さく、端部は誇張されていない。赤色顔料は付されていない。

⑤はやはり窯跡付近から出土した、1/3弱の残片。口端部を若干誇張し、下位に突帯を付す直口壺で、内外面に赤色顔料が残る。

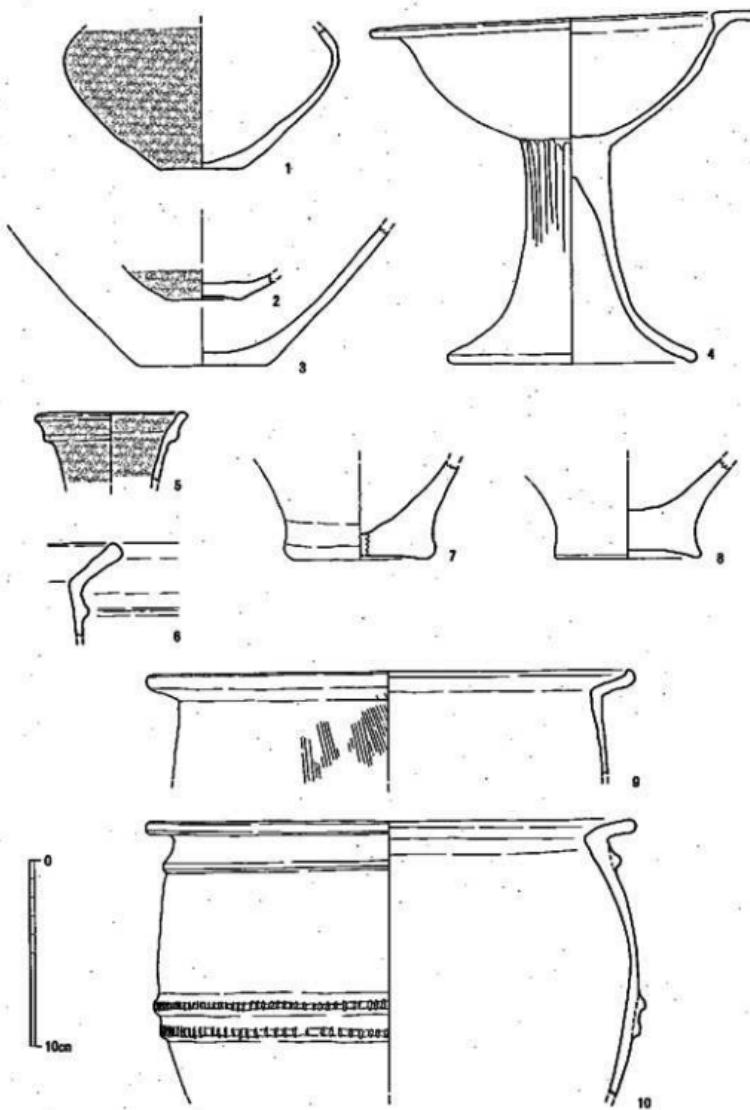
⑥～⑨は南端部分の土壙基周辺の表土から出土したものである。⑥はくの字口縁を有し、頸部直下に断面三角突帯を付す壺の小片。口端部の誇張は見られない。⑦・⑧は甕底部、器形から見て前期的であり、貯蔵穴に伴うものであろう。⑨はくの字形に外折する口端部を上方につまみ上げる壺で、小片であり復原口径には自信がない。外面は刷毛目で、内面は丁寧な撫でで調整される。

⑩は調査区南端付近の貯蔵穴出土と注記がなされ、3号貯蔵穴のものかと思われるがここにあげる。図示部分がほぼ完存する甕で、口縁部はくの字形と鋸先状形態の中間的なものとなり、頸部直下に断面M字形の突帯を、体部最大径部分のやや下位にやはり断面M字形で、頂部に刻みを付す突帯を2条巡らせる。器表は荒れる。

## 6. 小 結

以上の中、落とし穴状遺構は近年相次いで出土例が報告されている。卑近な例では、本遺跡の1km足らず南で調査された徳永川の上遺跡で46基が調査・報告されており、中に本遺跡例に似て小礫が数点入ったものもある。出土遺物はないようであるが、他遺跡同様に縄文時代に属するものと考えられている。本遺跡でも出土遺物はなく、所属時期は定かでないが、少なくとも土壙基に先行することは確かである。

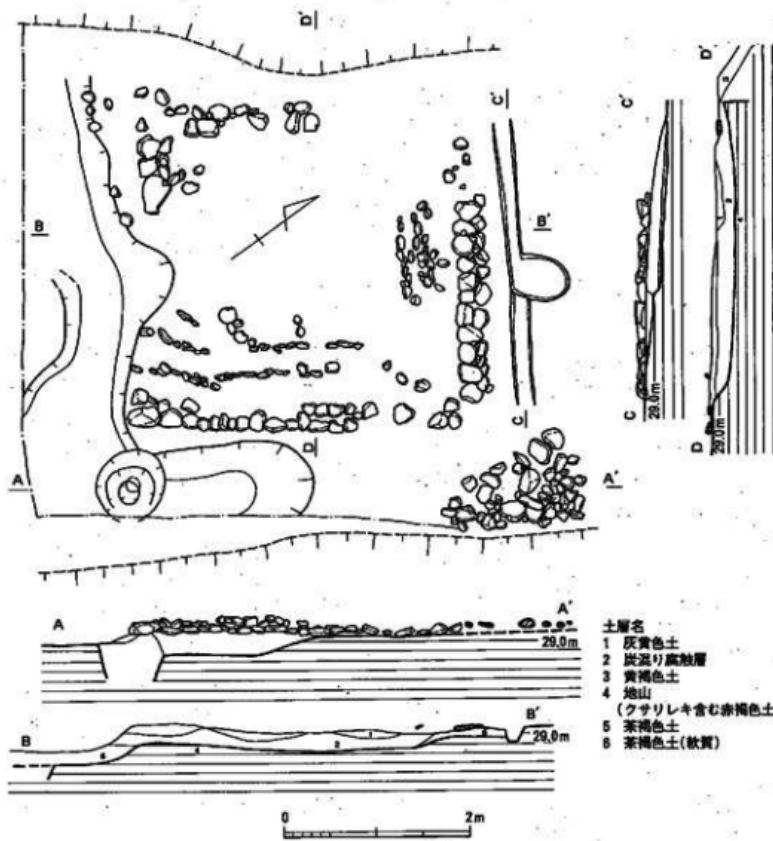
土壙基の所属時期についてはいくつかの有効な土器があり、また小児甕棺も当然それらと同時期に営まれたものであると思われる。それらはほぼ水平に延びる鋸先状口縁や肩張りの弱い甕、脚部が未発達な椀形の高杯など中期前半から中期後半に属するものである。それに先行する貯蔵穴も出土遺物は乏しいが、周辺から出土した土器も併せて考えれば前期末ないし中期初頭頃



第20図 その他の弥生時代遺物実測図 (1 / 3)

に営まれたものであろう。

以上を整理すると、この段丘上では弥生前期末から中期初め頃に集落が営まれ、その後中期前半頃から墓地として利用された。落とし穴状土坑は土壤墓に先行することは確かであり、また貯蔵穴と同時期に存在したことも考えがたいことから、弥生時代前期以前に設置されたものといえる。



第21図 基壇状遺構実測図 (1/60)

## 2) その他の遺構と遺物

今回の調査では、段丘上から近世以降と思われるいくつかの遺構を検出している。出土遺物等、年代を示す遺物が出土していない遺構も含めてここで紹介する。

### 1. 基壇状遺構（図版14、第21図）

調査区南端にある。西は段丘の肩に接し、南は道路によって大きく開削される角に位置する。現状では東側にも民家が存在して一段低くなる。

この遺構は表土を約20cmほど掘削して検出した。北東および南東片に整然と川原石が並べられており、西角でもその一部が検出されたことから建物跡と判断したものである。南東片では大振りの石材の内側にも小川原石が並ぶように見えるが、この意味は判らない。

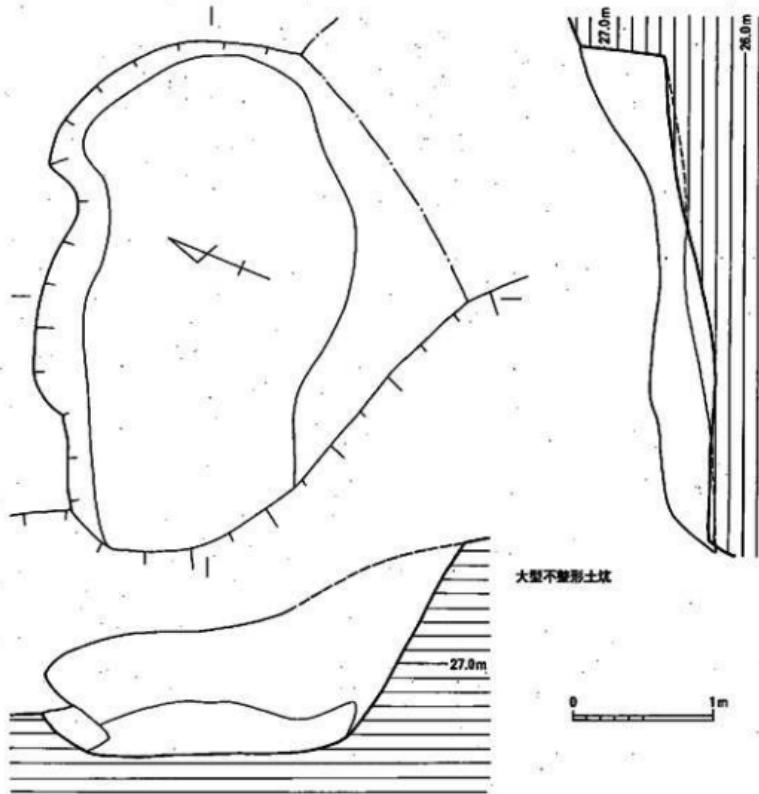
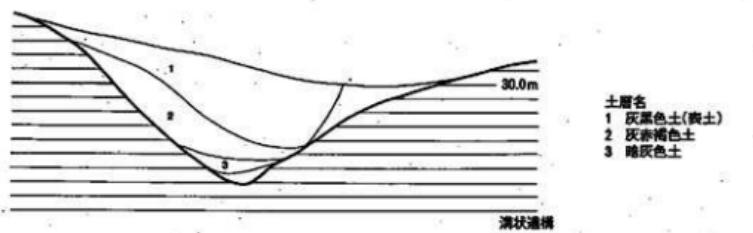
南西一北東の土層では、石材の内側に針金や地下足袋のゴムなどを含む腐植土層が入っており、これは建物の廃絶後に混入したものと思われる。それと直交する土層ラインの西端でその腐植土層に川原石がのっているが、この部分の石材は配列が乱れており上記の想定を覆すものではない。

この基壇状遺構の南西～南東辺にかけては深さ0.2m、幅1m前後に復原できる雨落ち溝と思われる浅い溝が巡っており、この埋土からはセルロイドやラムネ瓶などの残片が出土した。北東辺では様相が異なり、幅0.1m、深さ0.1mの小規模な溝が掘られ、中央付近に深さ0.2mに満たない土坑が配される。土坑埋土の観察を怠っているが、基壇状遺構のほぼ中央に位置することから無関係とは思えない。この辺の石列は現状では他に比して念入りに組まれており、あるいは扉がこの方向を向いていたのかも知れない。

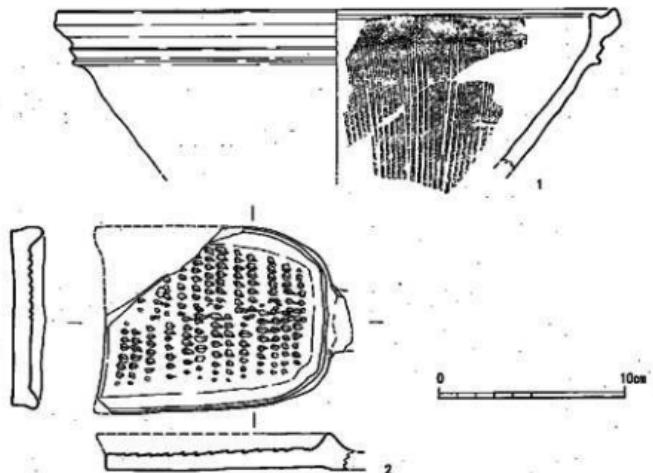
### 2. その他の遺構と遺物

#### 溝状遺構（図版5、第8・22図）

土壌墓群の中央を横切って、調査範囲内では直線的に祓川へ向かう、幅2.8m、深さ1.1mの断面V字形の溝である。埋土の大部分が拳大～人頭大の川原石を含む灰黒色土である。埋土の状態からみてさほど古い遺構とは思えないが、出土遺物がないために判然としない。



第22図 その他の遺構実測図 (1/40)



第23図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

#### 大型不整形土坑 (図版14、第22図)

調査区南端の斜面にあり、道路で一部が破壊される。残存部は幅3m、長さ3.6m、深さ1m弱の規模である。埋土の記録を怠るが、調査時は擾乱坑との印象を受けた。

出土遺物には土器片若干があるが、土坑の時期を示すものとは思われない。

#### 近世の遺物 (第23図)

いずれも基壇状造構付近の表土から出土したものである。

①は高取系の摺鉢。口唇部を受け口状に成形し、口縁部下外面に隆帯を付す。胎土は暗灰褐色を呈し、釉は灰茶褐色に発色する。なお、口端部付近は灰黒色となる。近世後期の小石原焼であろう。②は陶製おろし皿。胎土は非常に緻密で、全面に施された釉は暗茶褐色に発色する。外底面は範削り痕が観察できる。

### (3) 居屋敷横穴墓群と遺物 (図版16~85・第24図~第103図)

#### 1. 居屋敷横穴墓の配列 (図版16・第24図)

発掘区は、東側は道路敷一杯の法面の部分を発掘調査を実施した。

第4図の網かけの法面部分の調査で、河岸段丘の法面は北側につづいているため、横穴墓群の続きも考えられるが、道路敷の範囲の調査となつた。

しかしながら、横穴墓群は北側に続く。今後、椎田道路が開通した後の開発に、注意が必要である。

今回の横穴墓群は、2段となっており、今期の大戦中の防空壕を入れると3段に見える(図版1~3)

最上の段は、床面の高さが、標高25.4mで、下段は標高が24m前後で屍床である。

上段は0号~10号横穴墓で、下段が11~13号横穴墓で、南支群もはいっている。では順を追って説明を付加する。

#### 2. 居屋敷0号横穴墓 (図版17, 第25図)

道路計画の北側の境界ぎりぎりにあるもので、第5図の様に基道のみを捕促した。主体部については、道路計画外にあるために発掘調査は行わなかった。

基道は、境界線ぎりぎりの50cmのみを発掘調査を行つた。

基道の断面はV字形に近いU字形をなしている。地山は花崗岩バイラン土を切つてつくられている。

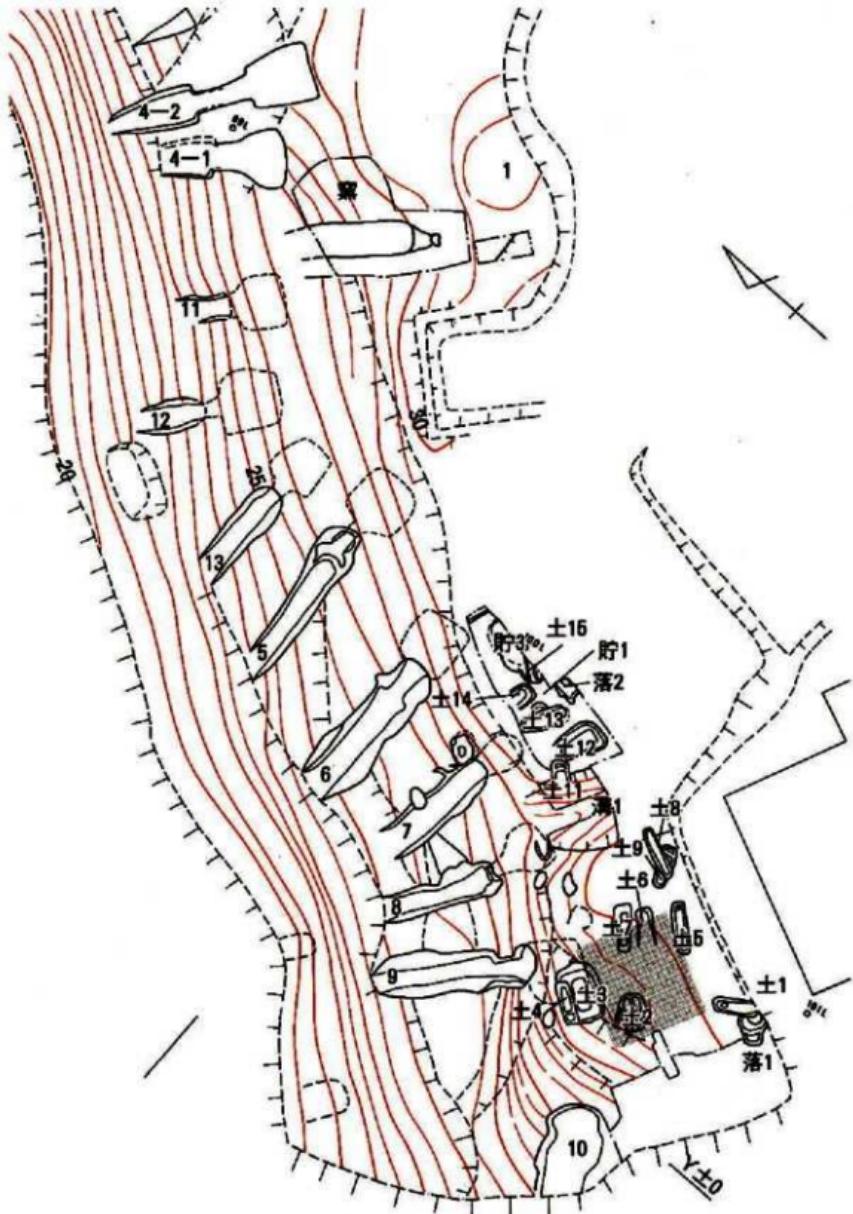
基道の断面を見ると(第25図)旧地表①の上に2次的な表土層が20~40cm前後、基道を中心に盛り上がって堆積している。太平洋戦争中の防空壕を掘った掘出しの土である。断面からは2度ほど作り直されている。基道は地山を切り込んで80cm前後を測る。

この横穴墓群は、近くの人には古くから知られ、一部開口したものもあったと考えられ、防空壕に転用もされている。

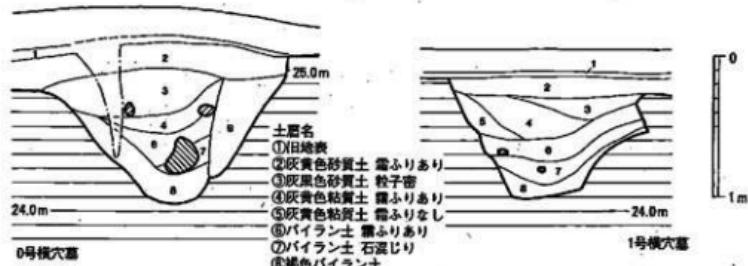
発掘面積が狭かったため遺物出土は見られない。

#### 3. 居屋敷1号横穴墓 (図版18, 第25図)

道路計画の境界ぎりぎりに検出されたもので0号横穴墓より3~4m南に位置するもので、第5図の様に基道のみ捕らえた。主体部については、道路計画地外であったため、発掘調査は



第24図 屋敷横穴墓群配置図 (1/300)



第25図 居屋敷0・1号横穴墓基道断面図（1/40）

基道一部調査のみであった。

墓道はU字形を呈し、底面まで80~90cm前後を計測する。第25図（右）側のように、墓道としての凹状態が長期間存在したため、4枚ほどの土層がみられ、最下部が墓道の底面で、当初の面である。それから追葬が実施された面がバイラン土石混じり層で、墓道は掘られたままの状態で土石の堆積がみられる。自然の堆積にまかせるまで、時間は推移したものである。

主体部は防空壕に転用されて、天井等が崩れ荒れるにまかせられていた。今回は発掘調査地区外であり、危険防止の意味から調査を断念した。

発掘調査は墓道の一部のみの狭い範囲であった。墓道の下部⑦層より、須恵器の壺の胴部の小破片が1点出土している。

#### 出土遺物（第26図）

須恵器の壺の胴部破片で、墓道の下部の7層付近の中央部付近から検出されたものである。表面にはタタキのうちにカキメを施して、器面の調整を行っている。内面は青海波のタタキである。胎土に細粒砂を含み、色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。口径・高さは小破片のため計測できず。

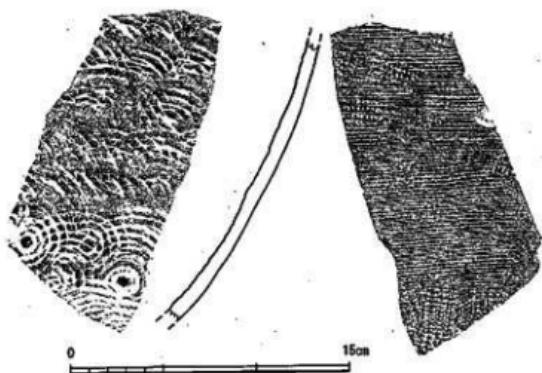
#### 4. 居屋敷2号横穴墓（図版18、第5図）

1号横穴墓の南側位置し、3m前後離れているもので、道路境界線のぎりぎりの位置で墓道の一部を捕獲したもので、断面を見ると地山（巣岩）をU字形に切り、最も調査区としては狭い範囲で第5図に示す位置に立地している。

一部は防空壕に転用されたものと考えられる東側奥は陥没している。

墓道先端部の発掘調査で、出土遺物は検出できなかった。幅1mで奥行が50cm前後を計測する。

#### 5. 居屋敷3号横穴墓（図版18、第27・28図）



第26図 居屋敷 1号横穴墓道出土遺物実測図 (1/3)

2号横穴墓の南側にあって、墓道のみの狭い部分の調査であった。主体部は路線外のため発掘調査を実施しなかったものである。現在、雑木林の中に現状のまま保存されている。

墓道先端部の一部分であったため、幅2.5m前後、奥行1m前後の発掘調査であったが、出土遺物の検出がみられた。

それが第27図の様な状態である。出土遺物は甕が2点と落石状態が検出された。

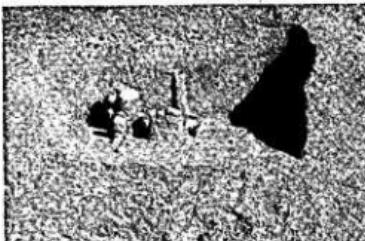
墓道はU字形を呈するもので、奥に主体部は残っているものと考えられる。

#### 出土遺物 (第28図)

①・②とも墓道下部面で出土したものである。器種2点とも甕である。

甕 (第28図①・②) ①は底部が欠損しているもので、口径10.4cm、残高11.5cmを計測する。胎土に微砂粒を含み、色調は内面黄灰色、外面黄灰色が黒味を帯びている。焼成は良好である。器面の調整は、ヨコナデを中心で、頸部に2条の沈線文を施し、受皿部下端に1条の浅い沈線文を有している。肩部径は9cm前後を測る。

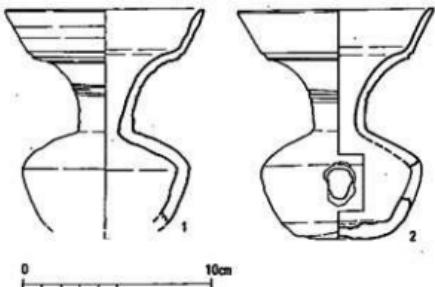
②も小形の分類にはいるもので、口径10.4cm、器高が12.2cm、底径5cmを測る。肩部径は8.4cmで、穿孔径は2cm前後である。頸部に2条の沈線文と受皿部下端に1条の沈線文を有している。胎土に細粒砂を若干含み、色調は灰黄色で焼成は良好、器面の調整は受皿部から肩部上半はヨコナデで、口注の穿孔部以下は回転ヘラケズリのちに部分的にヨコナデ、底部付近には回



第27図 居屋敷 3号横穴墓道出土遺物出土状態 (西から)

転ヘラケズリが残り、底部はナデしている。内面はナデ仕上げである。

この3号横穴墓の時期は墓道の遺物からは須恵器型式でIV期にはいるもので、7世紀前半頃を一応充てたい。



第28図 居屋敷3号横穴墓墓道出土遺物実測図 (1/3)

#### 6. 居屋敷4—1号横穴墓 (図版20・21・22, 第29~31図)

当該横穴墓の位置は、3号横穴墓の8m南に4—2号横穴墓の2.5m前後南にあって並列している。1号塚跡とは北西側に4m前後離れている。

当初は1基であると思っていた。北側横の落ち込みが防空壕であったため、これを4号横穴墓として発掘調査を実施した。ところが、防空壕を精査してみると、横穴墓を転用していることが判明したため、技番を付けたものである。

横穴墓の主体部には玄室と羨道部と墓道からなっているものである。当該横穴墓は1基道1基室からなっている。

##### 玄室 (図版21, 第29図)

横の防空壕から北側は壊されているが、辛うじて、底面の一部と羨道部と閉塞石の一部が残っていた。南側の壁面は全体的に残っていた。

主軸をN-55°Wにとり、平面形は巾着形を呈している。立面形は天井部の崩壊がみられるが、南壁からはドーム型になるものと思われる。

床面の施設には、床面の四壁に沿って周溝がまわっている。一段低くなりながら羨道に落ちている。

床面には手墳の河原石を敷いて敷石としている。

羨道は20~30cmほど低く、その部分に人頭大の河原石を積んで、閉塞石としている。

床面と羨道部の一段落ちた面に出土遺物が検出されている。杯蓋・杯身・平瓶・長頸壺・高杯・壇・大甕の破片等がそれであった。原位置を保っていた。玄室内床面からは遺物の出土はみられなかった。平たい河原石をきれいにならべていたと考えられるが、2次的に荒れている。

玄室及び羨道・墓道までの内法を、詳細にすると、玄室の奥壁から墓道の残存長は $450 + \alpha$  cm

で、墓道は185cmで法面にいたっている。墓道と羨道との接合点は、両方向に30cm前後張り出して逐次すぼまって墓道下端と一致している。玄室～墓道までの平面形を示すと巾着形になる。

玄室は最大幅220cm前後、奥壁部付近が最大である。主軸部で縦255cmで一段落ちる。

羨道部では、幅が90cm、壁はほぼ直立している。長さが約100cm前後の計測する。

墓道は羨道との接点で30cm前後張り出し部を持って、法面に至っているわけで、約200cm前後を計る。北側の張り出し部は防空壕等で破壊されていたが幸うじて検証できた。墓道からの出土遺物は検出されなかった。

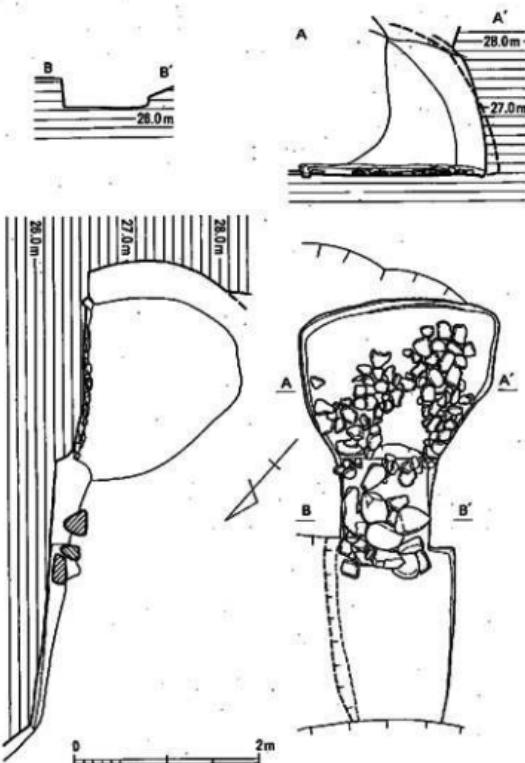
#### 出土遺物（図版22、第30・31図）

羨道と玄室の一段落ちた境界面から出土したもので、須恵器の各器種がみられた。

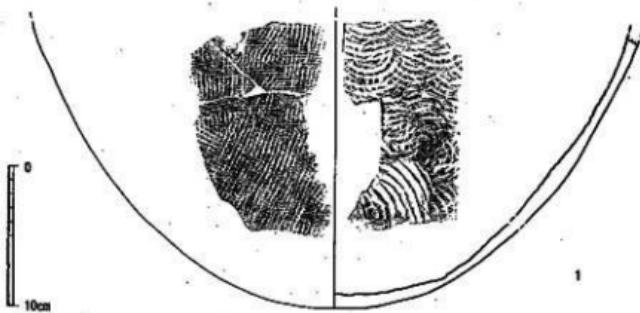
甕（第30図①）大甕の胴部下半破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は内外とも黄味灰色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、外面はカキメのち格子のタクキで、内面は青海波のタクキである。

杯（第31図②～⑥）杯蓋は②・⑤、杯身は③・④・⑥である。

②・⑤の蓋は口径が相違している。②は口径13.4cmで、器高3.9cm、胎土に細粒砂を含み、色調は明灰色で一部に灰をかぶっているため黒味を帯びている。焼成は良好である。器面の調整



第29図 居屋敷4-1号横穴墓実測図（1/60）

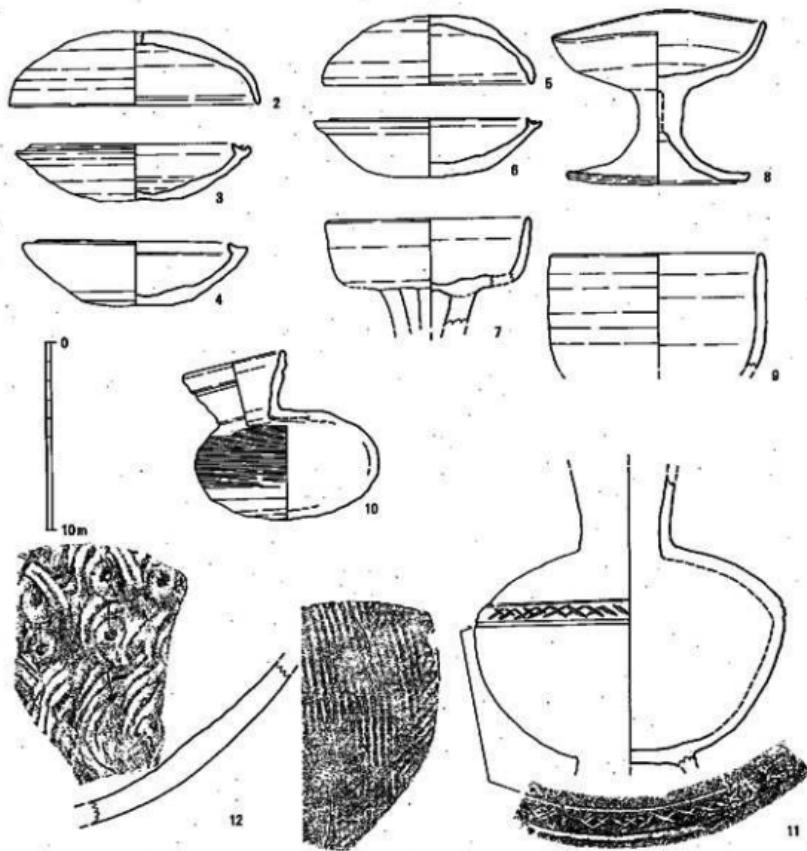


第30図 居屋敷4-1号横穴墓葬道出土遺物実測図1 (1/4)

は回転ヘラケズリと回転ヨコナデで、内面は回転ナデである。⑥は一まわり小さなもので、口径11.1cm、器高3.6cm、胎土に砂を多く含み、色調は内面黄灰色を呈し、外面も黄灰色で、天井部は黒変している。焼成はあまい。器面の調整はマメツして不明である。杯身は③・④・⑥とも返りがあるもの。③は口径10.8cm、器高30cm、受け部径12.6cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はナデ仕上げである。返りは太くなっている。④は口径10.15cm、器高は3.4cm、受け部径は11.9cmで、胎土に砂粒を含み、色調は外面青灰色で、内面は灰色に赤味を帯びている。焼成は良好で、器面の調整は底部付近は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデである。⑥は口径11.1cm、器高3.1cm、受け部径は12.1cmで胎土に細粒砂を多く含み、色調は内面は緑灰色で外面は暗灰色で、灰かぶりがみられる。器面の調整は底部付近がヘラキリのみで他は内外とも回転ナデで、返りは細身で調整がとれている。

高杯(第31図-⑦・⑧)両方とも小形のものである。⑦は胎土に細粒砂を含み、色調は明灰色で、焼成は良好である。器面の調整は杯部はナデ仕上げで、脚部には透かしが3個有している。復原口径は11.0cm前後になるもの。⑧は半分欠損しているもので、杯部にはひずみがある。口径11.3cm、底径9.6cm、器高9.1cmである。胎土に細粒砂を多く含み、色調は青灰色に黒味を帯びている。焼成は普通である。器面の調整は外面脚部とも回転ナデで、杯部の内面はナデである。脚柱部の径は2.5cm前後で、底径が9.6cmであるためにラッパ状に開く。

壺(第31図-⑨)口縁部破片で、口径11.3cm、残高6cmで、底部が欠けている。胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外とも青灰色で若干の黒味を帯びている。焼成は良好で、器面の調整は回転ヨコナデである。



第31図 居屋敷4-1号横穴墓羨道出土遺物実測図2 (1/3)

平瓶(第31図-⑩)小形の完形品で、口径5.6cm、器高9cm、胎土に細粒砂を若干含み、精良なる粘土を使用したもので、色調は灰色で、部分的に黒味を帯びている。器面の調整は、口造りはヨコナデで、頸部もナデで、胴部は細かいカキメ、下半はナデと、底部はヘラケズリで、ロクロは時計まわりである。肩部にはやきぶくれが3ヵ所ある。

口縁内外と外面肩部に灰かぶりがある。

**長頸壺** (第31図-①) 胎土に細粒砂を含み、色調は灰白色で、内面は灰色で、焼成は良である。口縁部付近と高台部付近が欠損している。器面の調整は肩部最大径の肩部に沈線文の中に刺突文をあしらっている。それ以下はヨコナデその下が回転ヘラケズリである。肩部上面から頸部はマメツして不明である。頸部内面はヨコナデである。外面全体に灰かぶりで、表面厚ぼったい自然釉がたれている。外部の3カ所に別の土器の破片がくっついている。

**甕** (第31図-②) 中形の甕の底部付近の破片である。胎土に細粒砂を若干含み、色調は内面が黄灰色で、外面は灰黄色で青味を帯びている。器面の調整は外面は平行のタタキで、内面は青海波のタタキである。器壁の厚さは1.5~1.8cmを測る。

出土遺物等から6世紀末から7世紀初頭の年代を充てたい。いわゆる須恵器編年のIIIb~IV型式にはいる。<sup>(21)</sup>

## 1. 居屋敷4-2号横穴墓 (図版23~27、第32~37図)

当該横穴墓は防空壕によって大半は破壊されていた。その大半は玄室部分で、羨道の一部まで至っていた。墓道については良好な状態で残っていた。4-1号横穴墓の北側に並列する位置で検出されたもので、当初は防空壕の位置付けであったが、詳細な調査の結果横穴墓を捕促できた。

玄室床面の敷石は動かされ抜かれていたが、若干の遺物が検出された。羨道部の閉塞石の残りもよく、墓道には高杯・瓶等の遺物も原位置を保持されていた。

当該横穴墓は玄室+羨道+墓道からなっているもので1墓道1墓室から成っている。全長は765cmで、主軸をN-59°Wにとり西に開口する。

### 玄室 (図版24、第32図)

防空壕によって北側から壊されている。辛うじて奥壁付近の一部が残っていた。

横穴墓の平面形は羽子板状を呈している。玄室は奥壁が最長幅で200cm、漸次長さが狭くなり玄門部幅で150cmで、玄室の長さは230cmである。天井の残高は奥壁より60cmの所で、床面から165cmを計測する。天井高はそれより50cm前後高くなると思われる。玄門部は、玄室床面より10cm前後一段低くなっている。床面の敷石は若干残っている。防空壕に使用した時、玄室の中には20cm前後の堆積土があったため、第32図の様に鉄轍・太刀・須恵器(提瓶・杯)耳飾等が原位置で検出された。

羨道部の閉塞石は人頭大の偏平な河原石を使用し8~9石積上げて120cm前後残っている。羨道の断面はU字形を呈して、長さ200cm、幅80cm、約100cm前後の深さを測る。

墓道と羨道の接点は、両方に30cm前後の張り出しを設けている。その位置が最大幅145cmで

順々に狭くなつて、法面に至つてゐる。羨門部から法面までの長さは325cm、幅が40cmを計測する。人一人はいる幅である。

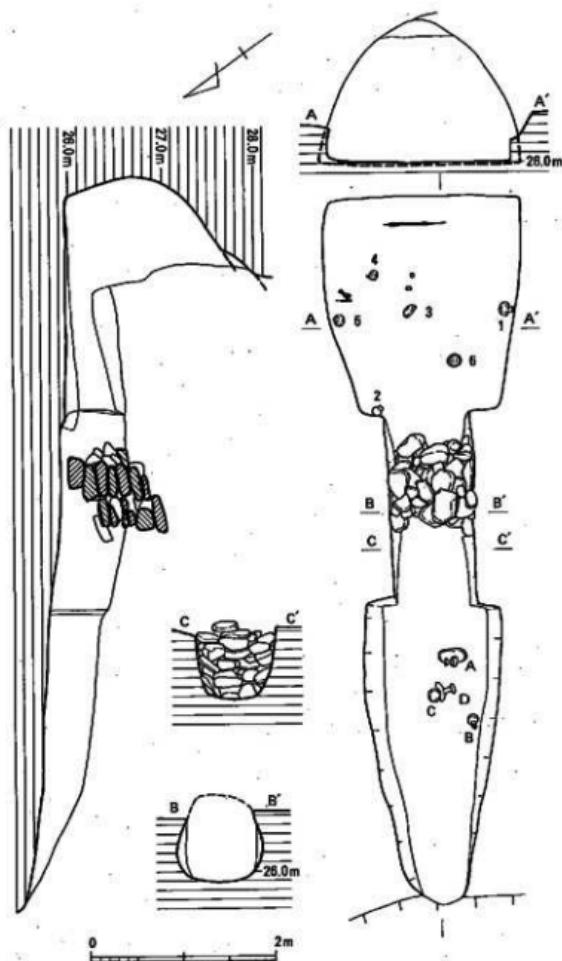
墓道からの出土遺物は、羨門部より高杯2点と砾が原位置で検出されている。遺物は墓道底より若干浮いた状態であった。

#### 出土遺物（図版25～27、第33～37）

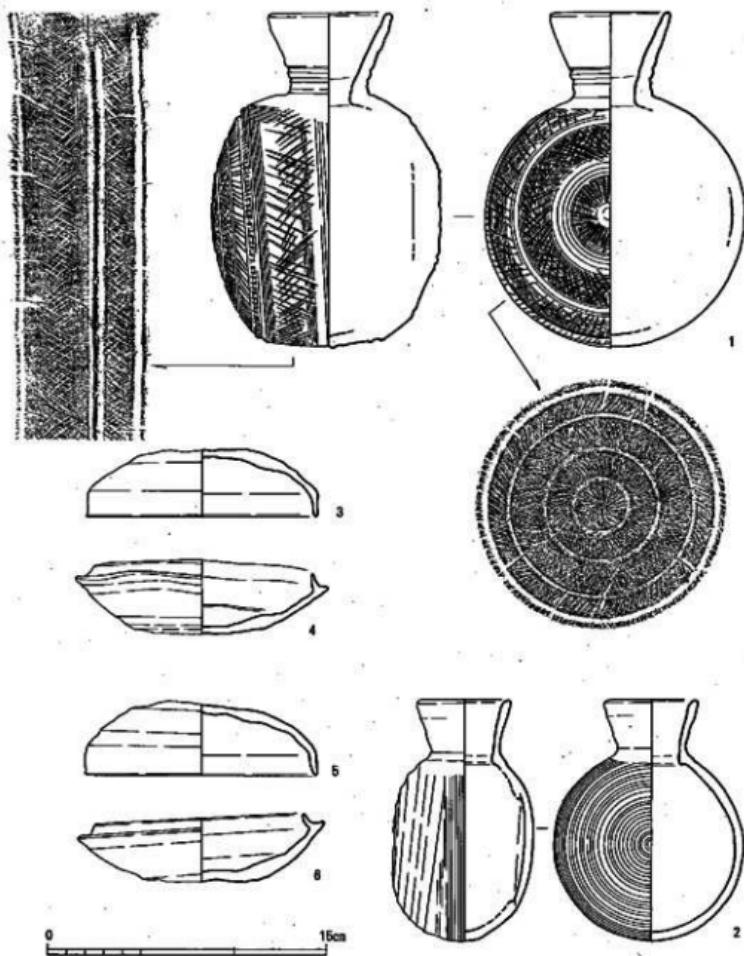
玄室から出土した遺物から説明を付加する。第32図の様に出土遺物は原位置で残っていたもので、須恵器（提瓶・杯）・鉄製武器（太刀・鐵鎌）・耳環等が副葬されていた。

#### 須恵器（図版26・27、第33図）

提瓶（①・②）①は玄室の右側近部から出土したもので技番（第32図の玄室内の遺物番号を示す）で表示している。胎土に細粒砂を若干含み精良なる粘土を使用している。色調は暗灰色、焼成は良好である。口径6cm、器高17.7cm、器面の調整は非常に丁寧な造りである。文様



第32図 居屋敷4-2号横穴墓実測図（1/60）



第33図 厄屋敷4-2号横穴墓玄室出土遺物実測図1 (1/3)

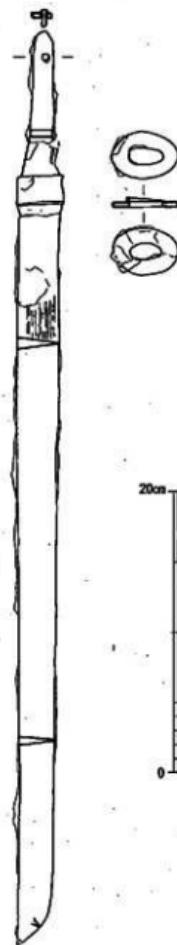
体を全体にいれている。頸部下部に3条の細い沈線持ち、両面とも同一の文様帶をもち、側面についても同様である。肩部から底部まで沈線を同心円状とし、カキメの後に櫛あるいはヘラによる刺突文を施している。文様体は5~6本が1単位で櫛の可能性が強いが、斜上からの//文様と×の文様が沈線をはさんで交互に出ている。灰をかぶった面もある。口頸部はヨコナデである。②は左袖の所で検出したもので、口径5cm、器高12.7cmで、胎土に細砂を含み、色調は黒灰色で焼成は良好である。器面の調整は口頸部はヨコナデで肩部はカキメの後にナデ、部分的に灰かぶりである。側面はヘラケズリでロクロの回転は時計まわりである。

杯(③・④・⑤・⑥)蓋は③・⑤で、身は④・⑥である。③は口径12.3cm、器高3.55cmである。胎土に砂粒を若干含み、色調は内外とも黒灰色で、焼成は良好である。⑤は左側辺部中心部で伏せた形で出土したもので、口径12.3cm、器高3.75cmである。胎土に細粒砂を若干含み、色調は青灰色、焼成は良好である。両方とも器面の調整は同じで、天井部外面は未調整の部分をもち、他は回転ナデ、天井内面はナデ仕上げである。身の④は口縁部に歪みがあるもので、口径10.9cm~11.8cmで、器高3.2~3.6cmである。受部径は13.6cmで、外面灰かぶりである。胎土に細粒砂を若干含み、色調は暗灰色、焼成は良好である。器面の調整は口縁部から肩部下半まで内外とも回転ヨコナデで、底部及び内底はナデである。⑥は口径11.25cm、受部口径は13.25cmで、器高3.05~3.6cmで、傾斜がある。胎土に砂粒を含み、色調は暗灰色で、焼成は良好である。器面の調整は、口径から肩部中央まで回転ナデ、底面は未調整で、内底はナデである。受け部の返りは整っている。

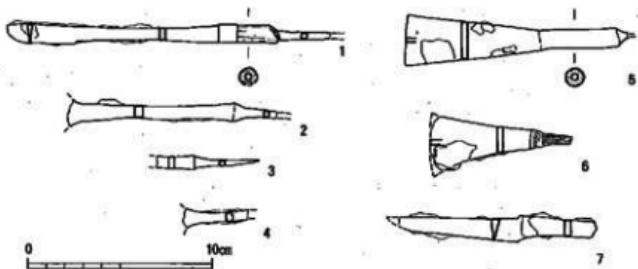
#### 鉄製直刀(図版25、第34図)

奥壁に沿って検出されたもので、長さ64.5cmで刃身幅3cmで、平棟平造りである。柄身には目釘穴に釘が残っている。鍔は素環で、厚さ0.5cmで、長径は5cmを計測する。ハマキも残っており、一部に木質も残っている。柄頭からみると若干内弯気味となる。重量は460gを越える程度である。刃先端部は若干欠けている。

#### 鉄鎌(図版25、第35図)



第34図 居屋敷4-2号  
横穴墓玄室出土遺物  
(直刀) 実測図2  
(1/4)



第35図 居屋敷4—2号横穴墓玄室出土遺物(鉄器)実測図3 (1/3)

左側辺寄で第32図で示す遺物番号の4・5付近にあるもので、鉄製武器の一類である。①は刀身形の鉄錆で、ほぼ完形に近い。矢柄には櫻皮巻かれており、その下に竹の部分が残っている。

②・③・④は鉄錆の基部の一部である。⑤・⑥は所謂矛箭式方頭である。⑦は刃先端が直線をなしている矢柄の櫻皮巻と竹の木質部が残っている。⑧は先端部の左右が途中で欠損している。矢柄は一部に櫻皮が残り、木質部がのぞいている。

#### 刀子(⑦)

鉄錆類と一緒にあげたもので、刀身6.5cmで刃先が欠損している。つくりは平棟平造である。細身でよく使用されたものと思われる。刀子としては小さな部類。

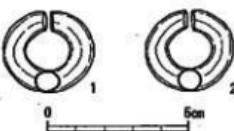
#### 耳環(図版25、第36図)

玄室中央部付近から対になって出土したもので、①・②とも銅地銀張である。①は銅質はあまりよくないが、銀箔は本来の面をだすが落した箇所が多い。銀は黒化するが、よい色の部分も一部に残っている。②は①に比較して銅質は良いがやや鏽でくらむ、そのため切妻がはいり銀箔のとれた部分がある。黒化した部分もあってまだらになっている。一般的にはよい色を呈している方である。重さは26g前後を計る。

#### 墓道(図版27、第37図)

墓道から出土した遺物は、覆土からは8点と床面で番号を入れて取り上げたものは3点である。第32図でアルファベットでA・B・C・Dの4点として取り上げたが、C+Dは同一個体となった。

高杯(①~③)①は須恵器で、胎土に細砂を若干含み、色調は暗灰色で、焼成は良で、器形に歪みがある。口径9.8~10.4cmで略楕円形を呈し、器高7.6~8.7cmで底径は8.5cm前後を計測す



第36図 居屋敷4—2号横穴墓  
玄室出土遺物(耳環)実測図  
4 (1/2)

る。器面の調整はナデ仕上げで、脚部にシボリ痕が見られる。脚部内面を除きほぼ全体に灰をかぶる。杯部内底面には窓内の付着物がつく。Aで表示しているものである。(3)は土師器で口径14.8cm、器高14.2cmで、胎土に細砂を含み、色調は橙褐色を呈し、焼成はあまり。器面の調整は摩滅しているため不詳。脚分内面はナデである。脚底径は13cm前後を計測する。CとDが合体したものである。

肆 (2) 須恵器でBで表示したものである。胎土に細粒砂を若干含み、色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。口径は13.5cmで器高14cm前後を計測する。器面の調整は口注の穿孔面の上端に2条の沈線を持ち、以下底部までは回転ヘラケズリである。沈線より上部は回転ヨコナデで、内面もナデである。頸部は外外面にシボリ痕が残っている。内側には穿孔された時の破片がはいっている。

墓道覆土から出土したものは杯・甕・蓋等であった。番号順に説明を付す。

(4)は杯蓋でボタン状のツマミを有しているものである。口径12cm前後で歪んでいる。器高3.12cm、ツマミ高0.5cmである。胎土に細砂を多く含み、色調は黄灰色、焼成は普通である。内外面とも灰かぶりの痕がみられる。

(5)も杯蓋で、ツマミの部分が欠損しているもので、口径11.0cm、受部径13.0cm、器高は2.0cmで、受部の返りは(4)に似ている。胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外とも黄茶褐色で、焼成は良である。

(6)は杯身である。口径10.7cm、器高2.8cm、受部径12.8cmで、胎土に細粒砂を若干含み、色調は青灰色、焼成は良好である。器面の一部に灰かぶりの痕跡あり。

(7)は蓋で、胎土に細粒砂を若干含み、色調は明灰色で焼成は良好である。口径10.5cm、器高3.9cmである。

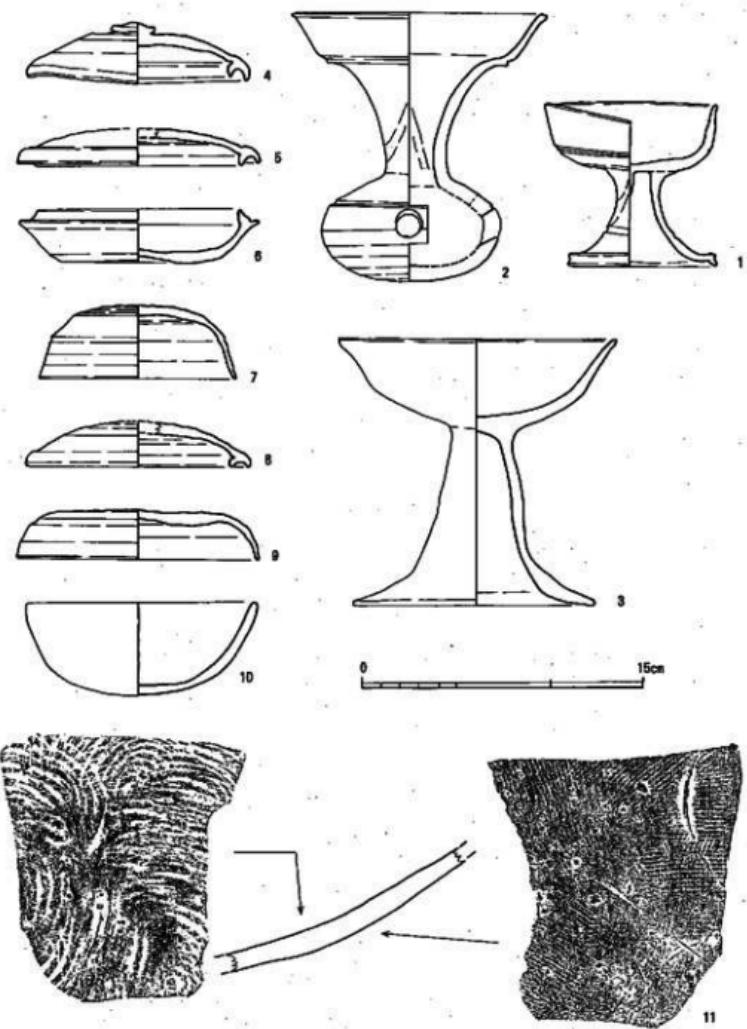
(8)も杯蓋で、口径12.0cm、器高2.5cm、胎土に細粒砂を若干含み、色調は外外面は灰色で、外側は黒灰色で、灰をかぶっている。天井部にツマミを有するものと考えられる。

(9)も杯蓋で、口径13.0cm、器高2.6cm、胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外とも灰色を呈し、焼成は良好である。

(4)～(9)までの器面の調整は、天井部及び底部は回転ヘラケズリで、他は回転のナデで仕上げられている。

(10)は土師器の壺で、口径12.2cm、器高は5cm前後を計る。胎土に細砂を若干含み、金雲母片も見られる。色調は外外面とも赤褐色を呈し、焼成はあまり。器面の調整は摩滅しているため不詳である。

(11)は甕の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は外外面とも黄味を帯びた灰色である。焼成は良好である。器面の調整は、外面は平行のタタキと内面は青海波のタタキである。器壁は厚く1.2cm前後を計測する。



第37圖 居屋敷4—2号横穴墓墓道出土遺物実測図（1/3）

4-2号横穴墓の時期は、玄室及び墓道出土の遺物から、須恵器の編年のIV型式を中心とするもので7世紀前半を充てたい。

#### 8. 居屋数 5号横穴墓 (図版29~38, 第38~49図)

当該横穴墓は4-1号横穴墓の南側で、6号横穴墓の北側に位置する。4-1号と6号の間に一段下がって、11~13号横穴墓がある。法面の傾斜が10mほどきつくなっているために、占地位置が相違している。

当該横穴墓はほぼ完全な形で検出された。玄室は奥壁まで220cmで床は河原石で敷石されている。羨道は120cm、墓道580cmである。羨道部は閉塞石の残りも良く、ただ上部に空間がある。墓道には底面より浮いた状態で遺物が検出されている。

玄室からは耳環1点・土玉・鉄製武器・馬具等が検出されている。

当該5号横穴墓は玄室+羨道+墓道からなっているので1墓道1墓室からなっている。全長920cmで、墓道の主軸をN-90°Wにとり西に開口する。

しかしながら、玄室は墓道より南側に振っている。そのために2本の主軸線を設置した。

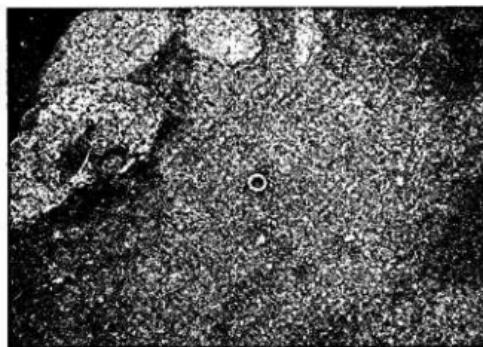
玄室 (図版30・31, 第38図)

玄室の平面形は2.20m×2.20m隅丸正方形で、壁に沿って周囲に排水施設の周溝を持っている。玄室断面はドーム状を呈し、天井高は床面より90cm前後を測る。玄門部は玄室の床面より15cm前後一段低くなっている羨道にいたっている。

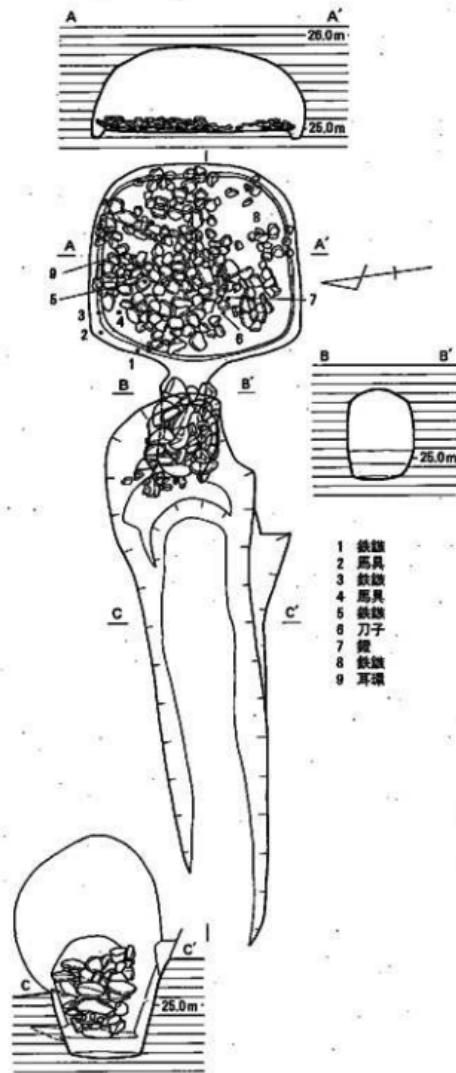
床面には偏平な河原石を敷いて敷石をしている。右奥は空間の部分が広がっている。

出土遺物は第38図の様に鉄鎌・馬具・刀子・土玉・耳環等を検出している。

横穴墓室は丁寧な仕上げで、工具痕の痕跡も残っていない。



耳環出土状態 (5号横穴墓)

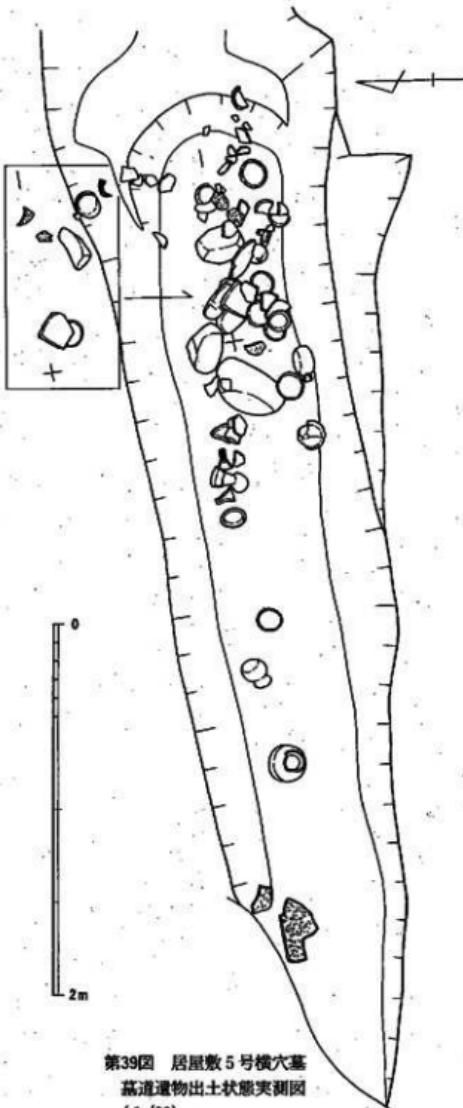


第38図 居屋敷5号横穴墓尖測図 (1/60)

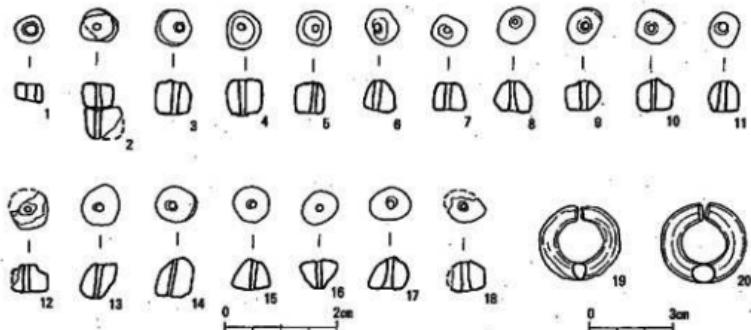
羨道部の閉塞石は人頭大の河原石を使用し、8~9石を積上げて、100cm前後が残っている。人が入れるような空間がある。後世の人が入ったことが考えられる。羨道の入口断面は楕円形を呈している。左側は少しくぼみ、右側は膨らんでいる。長さ120cm、幅70cm、高さ100cmを測る。なお閉塞石の間から耳環が1点出土している。

墓道と羨道の接点は左側に40cm、右側に30cm前後の張り出しを設けている。その位置が最大幅110cmで漸次狭くなって、580cmで法面に至っている。

羨道からは多量の須恵器が出土している。第39図のように、しかしながら墓道底よりかなり浮いた状態であった。



第39図 居屋敷5号横穴墓  
墓道遺物出土状態実測図  
(1/30)



第40図 居屋数5号横穴墓玄室等出土遺物（玉類）実測図1（1/1・1/2）

#### 出土遺物（図版32～38、第40～48図）

玄室内と墓道を中心に多量の出土遺物が検出された。第38図の玄室の遺物出土状況を見てほしい。須恵器等の器物ではなく、鉄鎌・馬具を中心に、若干の玉類と耳環等であった。墓道は第39図のように須恵器・土器等の器物で、多量の出土量であった。では玄室内から出土した遺物から説明を加える。

**ガラス玉（第40図①）** 直径5.5mmの色はコバルトブルーを呈するもので、気泡が入っているため材質は良くない。

**土玉（②～⑩）** 17点検出されたもので、②の様に重なっているものもある。形は一定せず作り方は雑である。⑪～⑯までは若干赤味を帯びている。色調は黒色である。重量は1gにみたない。

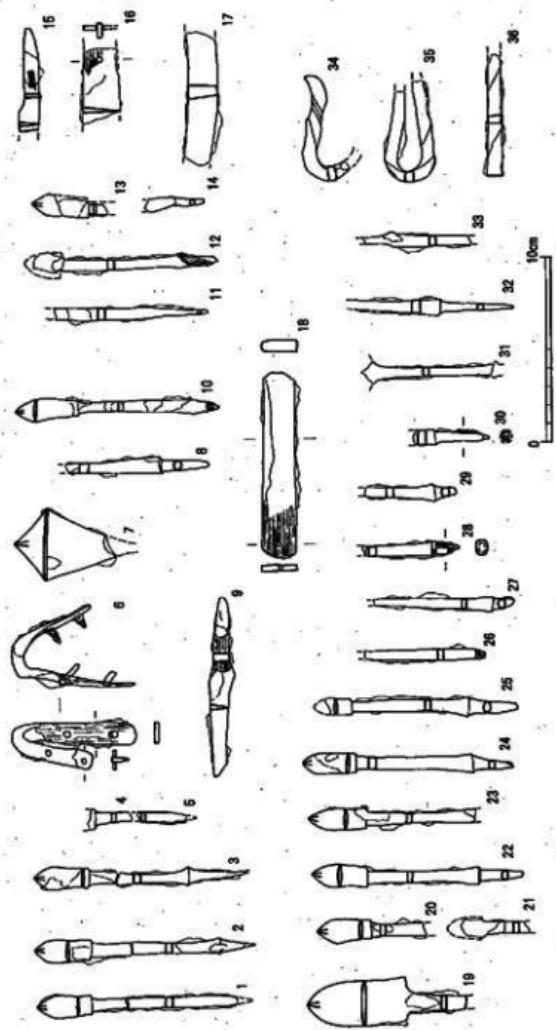
**耳環（⑯）** 開塞石の覆土から出土したもので銅地となっている表面はでこぼこである。銅質は良くない。直径3.0cm、厚みが0.5cmである。重さ11.9g。

**耳環（⑰）** 玄室内の東北側の中央の床面より出土したもので銅地銀張である。銅質は良く、銀箔の本来の色を出しているところもあるが、全体に黒化している。直径3.0cm、厚み0.8cmで重量感がある。重さ24.6g。

**鉄鎌（図版33、第41図）** 鉄鎌には各種ある北西隅に集中して出土したものである。大形のものは⑦・⑯である。他はすべて中形のもの（①～⑤・⑧・⑩～⑭・⑯～⑮）で実用品で、細根式のものである。②・⑯～⑮でほぼ全長は11.5cm前後である。木質部が残っているものもある。

**刀子（図版32、第41図）** ⑨・⑯である。⑨は全長9.8cmで、刀身は5.5cmでよく使用されている。柄は木質が残っている。平棟平造である。⑯は柄部分で木質が残っている。刀身の残長は2cmぐらいで切先部が欠損している。造りは平棟平造である。

第41图 居里家5号椭穴墓室出土文物(铁器)实测图2 (1/3)



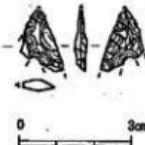
馬具（第41図⑥・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯） ⑥は鎧の先端部の一部で、鉄には木質が残っている。⑩・⑪・⑫も鞍金具の一種と思われる。⑬は鉄も残っている。⑭は側縁部を隅丸にそろえている。横の中央部に鋤留孔もある。⑮～⑯は引き手金具の一種と考えられる。鎧にはネジがはいっている。

#### 墓道（図版38、第42～48図）

覆土から出土したものでは、歴史時代の土師質の小皿と瓦質の火舍・弥生式土器片・石鏃等が混入していた。

石鏃（第42図） サヌカイト製で一部欠損している、断面はレンズ状を呈し、厚手のものである。重量は0.3g。弥生期のものである。

第42図 居屋敷5号横穴墓道覆土出土遺物  
(石鏃)実測図1(2/3)



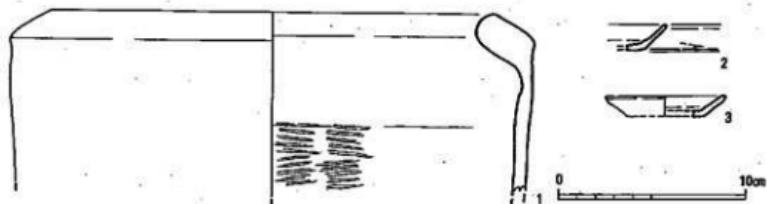
#### 歴史時代遺物（第43図）

火舍（①） 手あぶりに使用されたものである。胎土に細粒砂を含み、色調は内外面とも黒色で焼成は硬質で所謂瓦質である。器面の調整は外面はヨコナデで、内面の頸部までヨコナデ、それ以下はタタキが入っている。内面にススが付着している。

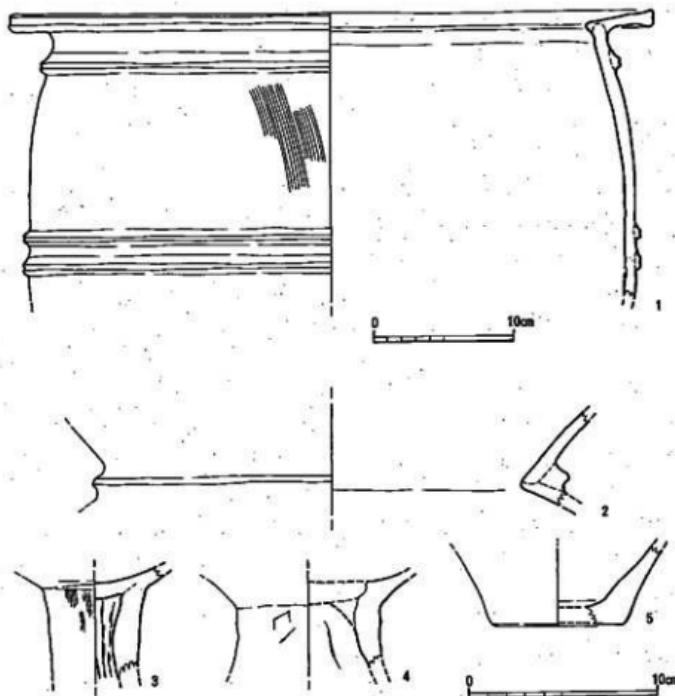
小皿（②・③） 両方とも土師質のもので、③は口径6.4cm、底径4.0cm、器高1.1cm、色調は暗黄茶褐色を呈し、焼成は良好である。底部は糸切り痕が残っている。②は③と同器種の破片である。

#### 弥生時代遺物（第44図）

弥生式土器の変形土器・高杯等の破片がみられる。①は変形土器で、口径46cmである。口縁部は鋸先口縁をなし直下に一条の凸帯を有し、胴部に二条の突帯を有しているものである。ハケメが一部に残っている。②も変形土器の口縁部直下の破片である。口縁部は「く」の字状をなすもので、屈曲部に三角突帯を有している。③は高杯の破片で、胎土に砂粒を含み、雲母・赤褐色粒を混入している。色調は黄茶褐色で、脚部の一部に丹が残っている。供獻土器の一種



第43図 居屋敷5号横穴墓道覆土出土遺物実測図2(1/3)



第44図 居屋敷5号横穴墓墓道覆土出土遺物実測図3 (1/3, 1/4)

である。④も大形の高杯の破片で、胎土に細粒砂を多く含み、色調は内外とも灰黄褐色を呈している。工具痕が一部に残っている。

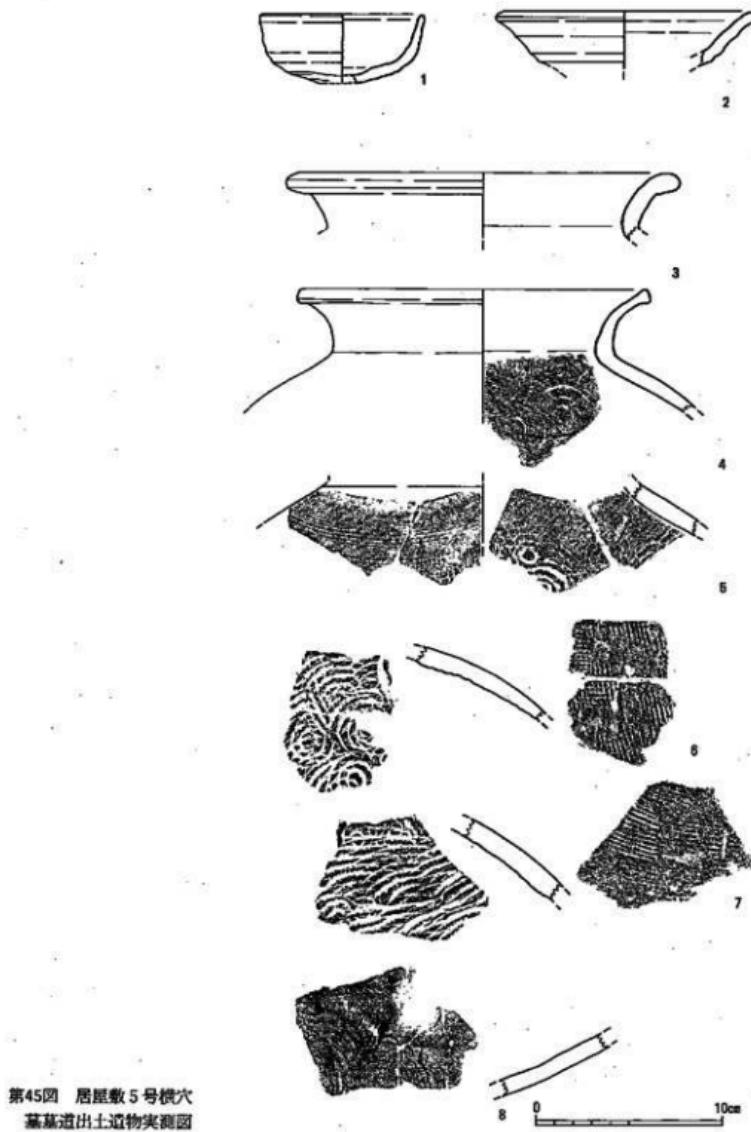
底部(⑤)　変形土器の底部で、胎土に細・粗粒砂を含み、赤褐色粒もみられる。色調は内面は黄褐色で、外面は丹塗りである。底径は7.0cmである。

これらの弥生後期の土器片は、上面にある弥生遺構からの流れ込みである。

#### 古墳時代遺物（第45～49図）

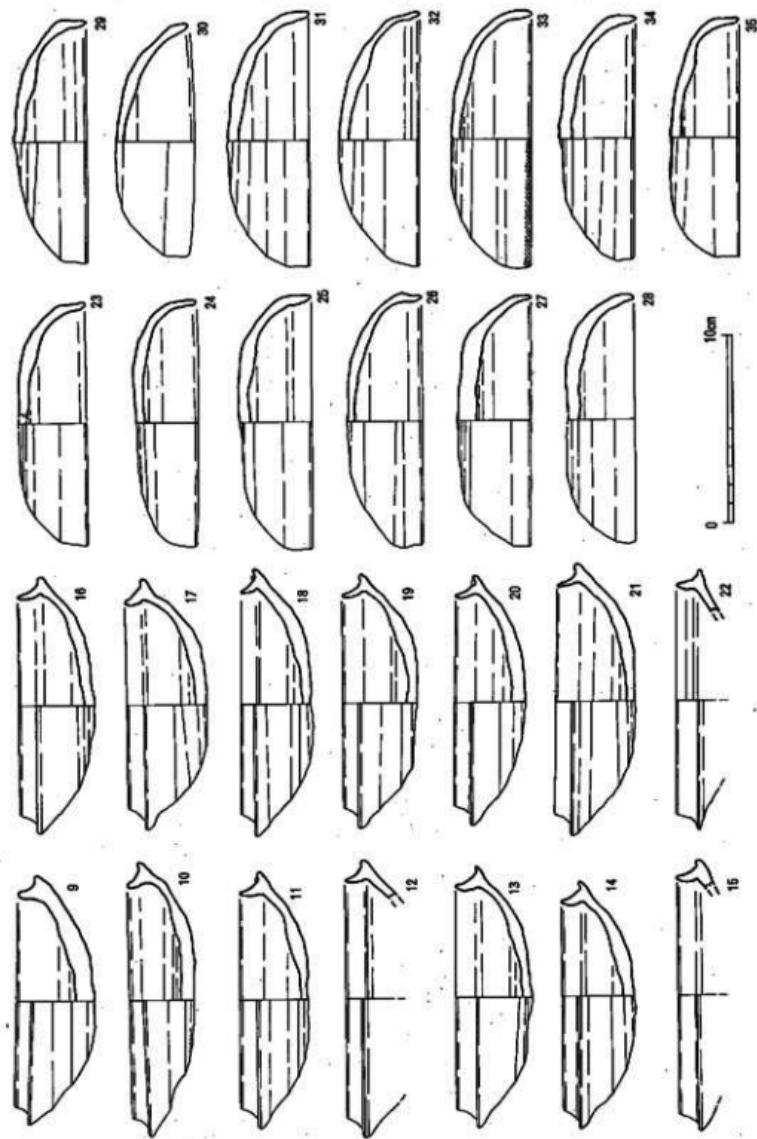
では本来の古墳時代の遺物の説明を加える。最初に破片のものを中心に述べる。

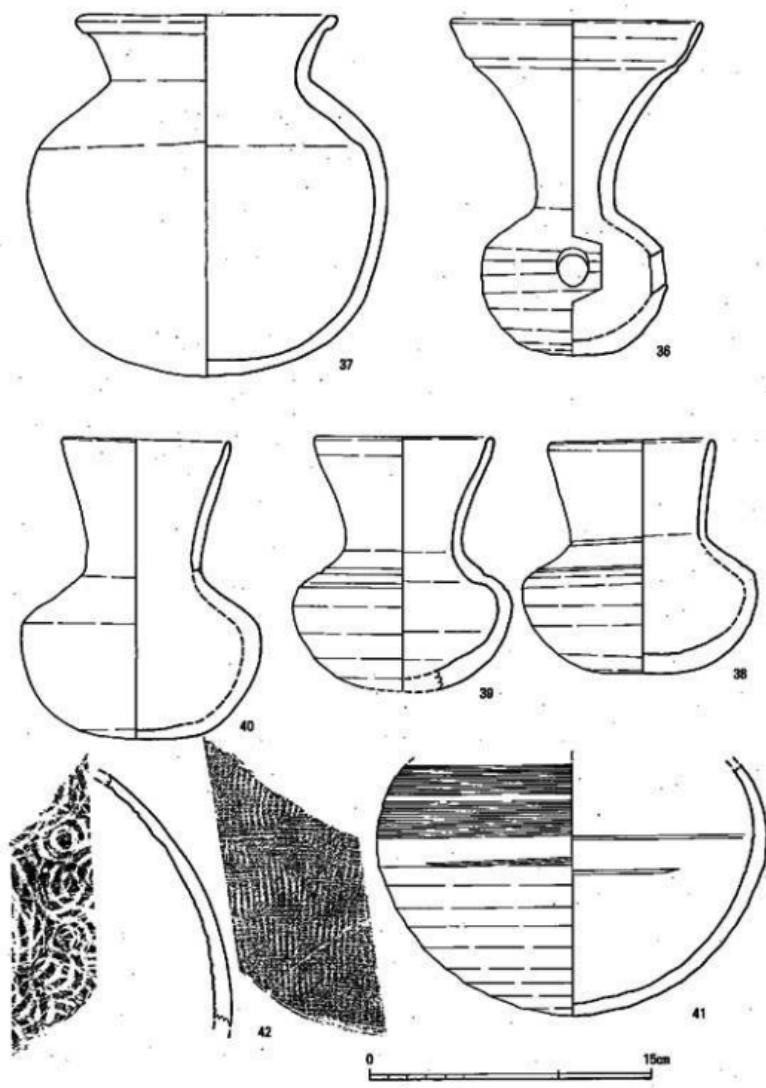
杯(①)　口径は8.8cm、器高3.6cmで、色調は灰色を呈している。器面の調整は底部は静止



第45図 居屋敷5号横穴  
墓墓道出土遺物実測図  
1 (1/3)

第46图 层级数5号标尺量度出土遗物实测图2 (1 / 3)





第47图 居屋数5号横穴墓道出土遗物実測図3 (1/3)

のケズリ後にナデている他は内外ともヨコナデである。

高杯 (②) 杯部破片、口径14cm、残高4cmである。胎土には、精良の粘土を使用し、色調は内外とも黒灰色で灰をかぶっている。焼成は良好である。器面の調整はヨコナデ。

壺 (③) 復原口径は21cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はヨコナデである。

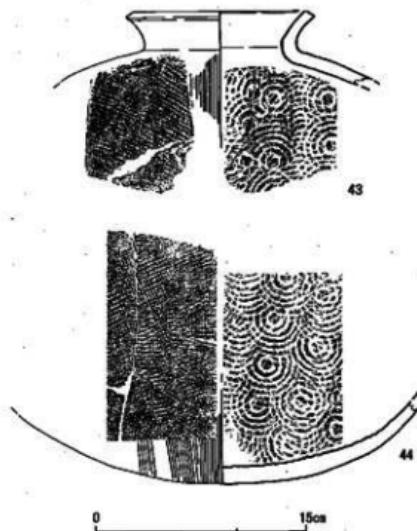
壺 (④～⑧) ④は口縁部の破片で復原口径は18cm、胎土に砂粒を多く含む、焼成はあまり。色調は黄茶色である。器面の調整は外面はマメツしている不詳で、内面は頸部下半に青海波のタタキを有する。⑤～⑧は胴部の小破片で、⑤は頸部に近くで、他は胴部である。器面の調整は内外面ともタタキである。⑤の外面は回転ナデとタタキ後にカキメを施している。

杯 (第46図) 身は⑨～⑫、蓋は⑬～⑮である。完形品が大半であった。身の口径は11～13cmで器高も4cm前後を計測する。蓋についても口径は12.3～13.6cmである。器高でも4cm前後に計測できる。両者とも胎土には黑色粒子含む細砂粒を含み、色調は灰色から灰黒色・灰青色を呈しているもので、焼きがあまい。⑯は茶褐色をなしている。⑰には口唇部にハケメが施されている。器面の調整は天井部と底部が回転ヘラケズリで、他はヨコナデである。内底部と天井部内側はナデ仕上げである。

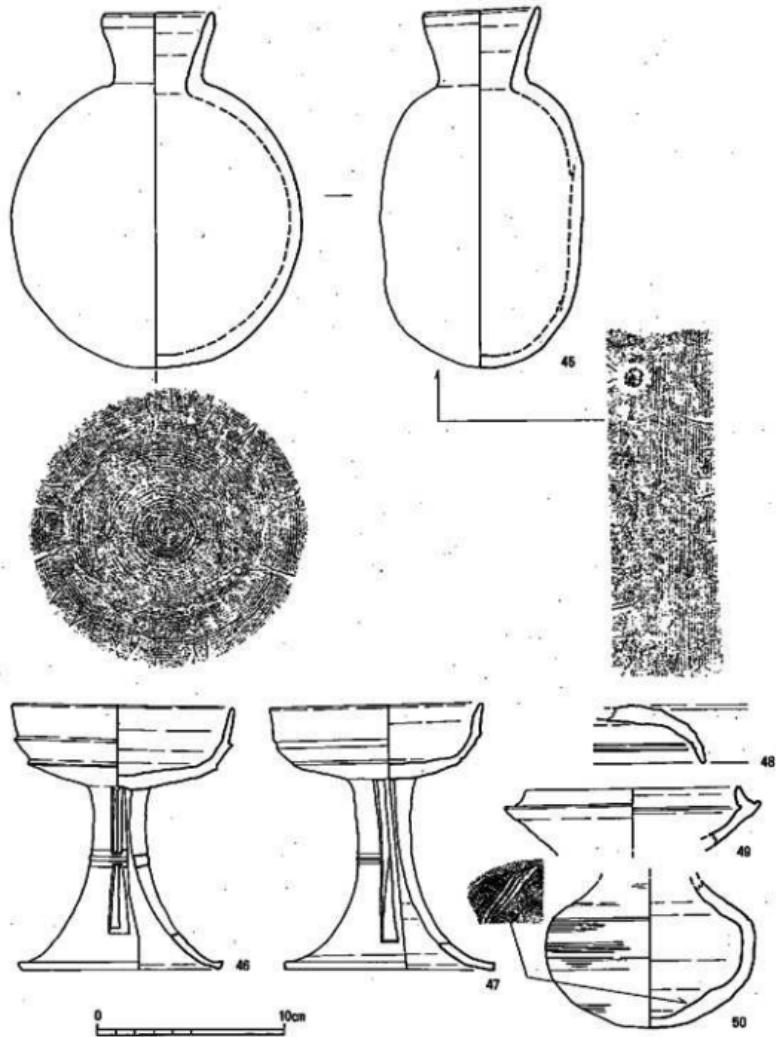
壺 (⑯) 復原口径13.4cm、器高17.8cmで、胎土に細・粗砂粒を含んでいる。色調は灰色～黒色を呈するもので、焼成は堅固である。灰を多くかぶっている。黒斑が底部から胴部半まで見られる。

壺 (⑰) 中形のもので、口径14cm、器高19.1cm、色調は茶灰色を呈し、焼成はあまり。胎土に砂粒を多く含む、器面の調整はマメツして不詳である。

長頸壺 (⑯・⑰・⑲) 口径が8.9～9.5cmのもので器高は⑯が16.1cm、⑰は12.5cmである。胎土に細砂粒を含み、黒色粒子も見られる。色調は灰色・青灰色から黒色である。焼成は⑯が



第48図 居屋敷5号横穴墓墓道出土遺物実測図4 (1/4)



第49図 居屢数5号横穴墓道出土物実測図5(1/3)

良く、他は軟質である。器面の調整は⑩は内外とも風化が著しく、不明である。⑪で代表させると、頸部から内底までヨコナデで、肩部沈線を入れてその下半から底部まで回転ヘラケズリである。

甕(⑪～⑭) 大形甕の破片である。⑪の最大胴径は20.8cm、⑬の復原口径は12.4cmである。胎土には細粒砂を若干含む精良なる粘土を使用し、焼成は良好で、色調は灰色から黒灰色までの間を呈している。⑪の器面の調整は肩部はカキメで、胴部最大径の下半はケズっている。ロクロの回転は時計まわりである。内面ナデである。⑫・⑬・⑭は内面の調整は青海波のタタキである。外面にはタタキのちカキメを施しているものがみられる。⑭は底部付近の破片で、⑬は口縁部付近の破片である。

提瓶(⑮) 復原口径6.2cm、器高19.1cmで、胎土に細粒砂と黒色粒子を含み、色調は灰色～黒色を呈し、焼成は堅固である。器面の調整は口縁部から頸部まではヨコナデ、左側の肩部付近は回転ヘラケズリ、胴部中央部付近はナデ、下半は回転ヘラケズリ、右側は肩部から底部まではカキメである。

高杯(⑯・⑰) ⑯は口径11.3cm、器高14.2cm、脚高10.9cm、脚幅径10.9cmで、胎土に細粒砂と黒色粒子を含み、色調は灰色から黒色を呈し、焼成は堅固である。器面の調整は杯部の内底はナデで他はヨコナデである。透かしは表裏2ヶ所で上下に穿孔している。ねじり痕が脚部内面にみられる。⑰は口径11.2cm、器高14.3cm、脚高10.3cm、脚幅径11.1cmである。胎土に細粒砂と黒色粒子を含み、色調は灰色を呈し、焼成はあまり。器面の調整は⑯と同じ、透かしは表裏2ヶ所である。脚部内面にねじり痕が見られる。

#### 閉塞石の中から出土した遺物(⑯・⑰・⑲)

杯(⑯・⑰) ⑯は蓋の口縁部の小破片である。胎土に精良なる粘土を使い、色調は灰色で、焼成は良好である。器面の調整は内外面ともヨコナデである。⑰は身で、復原口径は11.4cmである。胎土に砂粒をほとんど含まず、色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はヨコナデである。

罐(⑲) 球形部の小破片で、そぞ口の円孔の部分は欠けている。胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰色から黒灰色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は胴部下半から底部まではケズリ、胴部上半はカキメをナデ消し気味である。内面はナデで一部分に櫛描条痕が残っている。

以上、出土遺物から7世紀前半から中葉の年代を充てたい。須恵器IVa型式である。高杯については古い型式がみられる。

### 9. 居屋敷6号横穴墓(図版39～44、第50～57図)

当該横穴墓は5号横穴墓の南側3mに位置して、7号横穴墓の北側でもある。玄室と羨道そ

して墓道をもつもので、全長8mを計測する。

その内訳は、玄室が200cm、狭道が125cmで、墓道が475cmである。墓道は左右とも30cm前後の張り出しを持って、順々にすばまつてくるが、当該横穴墓は30cmほど狭くなっているが、他比較すると一番幅広い墓道である。

第51図は墓道の断面土層図である。墓道底の地山まで120cmで、地山をU字形に掘っている。1基道1横穴墓である。墓道からは若干浮いた状態で遺物が出土している。また、玄室内からも鉄鎌・玉・耳環・須恵器等の副葬品が検出された。

当該横穴墓は主軸をN-95°-Wで西に開口している。

玄室の平面形は隅丸正方形(210cm×215cm)で、排水溝を壁の周囲に巡らせていている。幅10~15cmで深さ10cm内外である。玄室全面に偏平な河原石で敷石している。出土遺物は右袖に須恵器杯が3点と排水溝の中から鉄鎌2点、そして耳環が、南壁ほぼ中央部寄東側で対になって検出された。玄室断面はドーム形をなしている。壁面は風化が著しいため、天井部崩れている部分もある。

狭道部は玄室床面より一段10cmほど低くなっている。長さは125cmで幅60cmで閉塞石の大半は防空壕で壊されている。基部には人頭大の河原石を使用している。張り出し部は立柱をなしたようみえる。などらかな傾斜を持って墓道へ行く。

墓道は475cmあって、法面にいたっている。順々になだらかな傾斜がついている。玄室床面より、60cm下がっている。先端部付近で若干浮いた状態で遺物が検出されている。(図版41)

#### 出土遺物(図版41~44、第52~57図)

玄室内と墓道から遺物が検出されている。

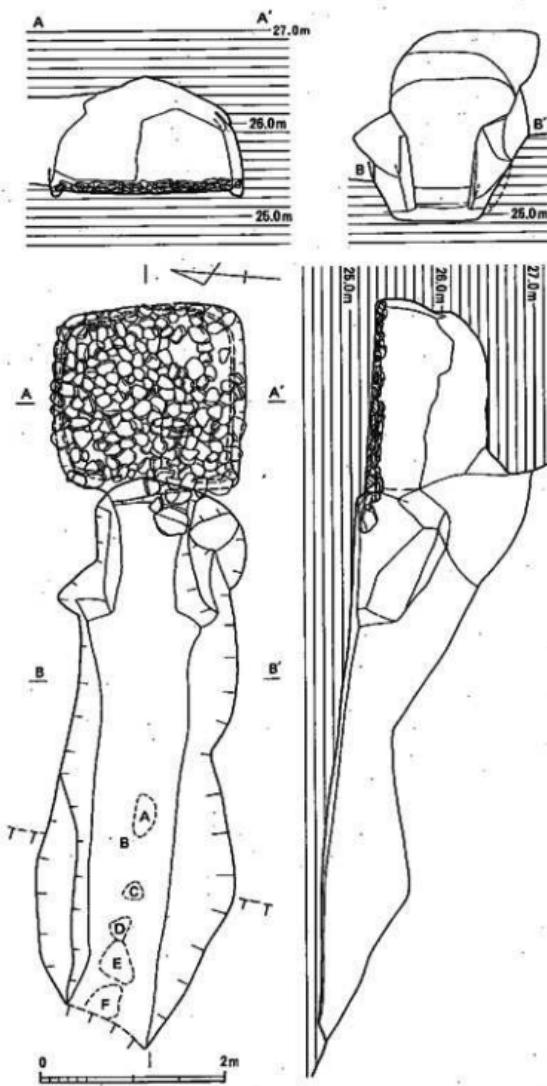
#### 玄室(図版42、第52~55図)

玄室の内から出土した遺物は、須恵器・玉・耳環・鉄鎌等の副葬品である。

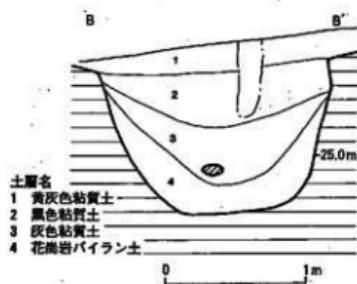
杯(第52図①~③) ①・②は蓋で、③は身である。①は口径10.8~11.6cm、器高3.3cmで歪んでいる。胎土に細粒砂を若干含み、色調は、外面灰黄褐色、内面茶褐色を呈している。焼成は良好である。②は口径9.8~11.2cm、器高3.3cmで歪んでいる。胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外面とも赤味を帯びた灰黄褐色を呈している。焼成は良好である。③は身である。口径12.0cm、器高3.3cmで、胎土に細砂を若干含み、色調は明灰色で、焼成は良好である。器面の調整は3点とも同じ技法使用している。天井部と底部がヘラケズリの他は内外面ともヨコナデである。

3点とも須恵器の編年ではIVa期に入る。

玉(図版43、第53図) 南壁の中央部で、付近で5点まとめて出土したガラス製の小玉である。色調は明るいブルーと濃紺に近いブルーである。長径は3.5mm~4.5mm間にあるもので、全てに気泡が入っている。造りは雑である。厚さは②1mmで③が3mmである。埋葬者の副葬品である。



第50図 居屋数 6号横穴墓実測図 (1/60)



第51図 屋敷6号横穴墓墓道断面土層  
図(1/40)

墓道出土遺物(図版41、第53~55図)

墓道から出土した遺物は、A・B・C・D・Eと群分けしている。先ず須恵器でないものから説明を付加する。

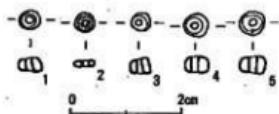
鉄鎌(第55図②) 墓道のB群から出土したもので、矛箭式の方頭鎌とみられるもので、鐵自体平造りである。基本的には殺傷能力は半減するが、刃部の造りが相異なる。断面形は長方形で、刃部も同一である。

須恵器(図版43・44、第56~57図)

A・C・D・Eのグループごとに分類した。

高杯(①) 墓道の奥部分に位置するA群もので、

口径12.5cm、器高15.7cm、裾径11.4cm、透かし3ヶ所、上下にある。胎土に細粒砂を少々含み、色調は外面は黄灰色から黒灰色を呈し、内面は灰色から黒灰色を呈し、灰をかぶっているため、

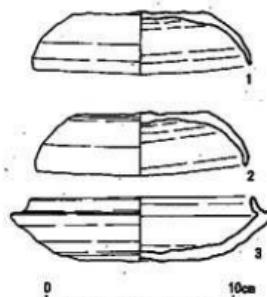


第53図 屋敷6号横穴墓玄室出土  
遺物(玉類) 実測図2(1/1)

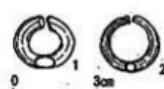
耳環(図版43、第54図) ①は南壁中央部から北へ50cmの位置で検出されたもので、もう1点の②は玉が出土した位置とほぼ一致する。②は①に比べて細身である。①は銅地銀張で、径が2.1cm、表面に綠青がふき出している。②も銅地銀張で径が2cm、銀のような黒化した部分がある。極めてろくなっている表面を綠青と泥がおおっている。

鉄鎌(第55図①) 右袖の排水溝付近で検出されたもので、片丸造である。方頭鎌の一種にはいる。残長が7.5cmで、幅2.1cmで刃部は直線となる。

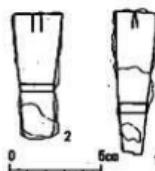
以上が玄室から出土した遺物である。



第52図 屋敷6号横穴墓玄室出土遺物  
(須恵器) 実測図1(1/3)



第54図 屋敷6号横穴墓玄室出土  
遺物(耳環) 実測図3(1/2)



第55図 屋敷6号横穴墓玄室出土  
遺物(鉄器) 実測図4(1/3)

一部に自然釉の発色を見る。器面調整はヨコナデで杯部内底はナデである。口縁部直下に沈線が2条まわっている。焼成は良好である。

杯(②～⑤) ②・③・④は蓋で、⑤は身である。②は口縁部破片で、胎土は精良な粘土を使用し、色調は灰色で内面一部黒色を呈する。③・④は口径が前者11.7cm、後者が10.5cmで、器高はほぼ同一の3.5cm前後を計測する。色調も同じ系統で若干④が黒味をおびている。両者とも胎土には細粒砂がはいり、焼成は良好。器面の調整は天井部が回転ヘラケズリの他は、回転ヨコナデを内面まで施している。⑤は身で口径9.6cm、器高3.45cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は暗灰色で外面の一部に褐色を呈する。焼成は良好である。器面の調整はヨコナデを中心に行して、底部のみ回転ヘラケズリである。3点ともA群より出土したものである。

杯(⑥・⑦) C群より出土したもので、蓋が⑥で、身が⑦である。⑥は口径10.6cm、器高3.5cm、胎土に細粒砂を若干含み、色調は外面が灰黒色で内面灰白色である。焼成は良好で、器面の調整は③に同じである。⑦は口径11cmで、器高3.3cm、受部径13cmで、受部高0.5cmである。胎土に細粒砂を若干含み、色調は外面とも黄灰色を呈し、内面が黒味を帯びて、暗灰色に近い色調である。焼成は良好で、器面の調整は⑤と同じ、底部が回転ヘラケズリ後一部にナデしている。

#### E・F群出土遺物(第57図)

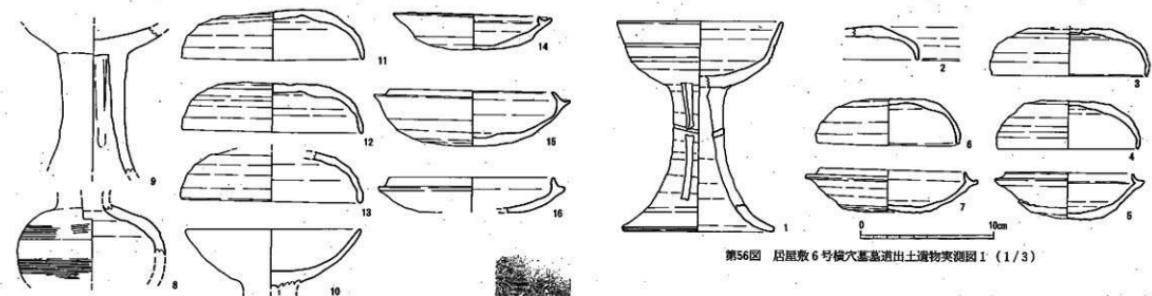
⑫がF群で、他はE群である。

球(⑧) 球体部の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色である。焼成は良好で、器面の調整はカキメの後にナデしている。穿孔部の破片ではない。最大周径11cmを計測する。

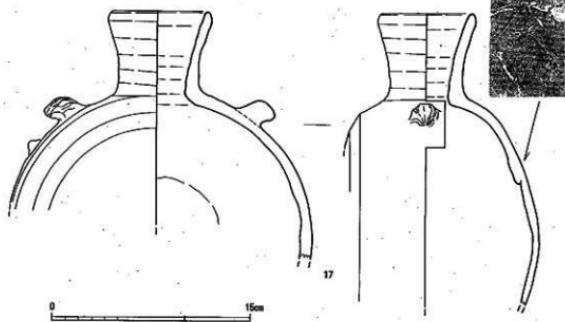
高杯(⑨・⑩) ⑨が脚部破片・⑩は杯部の破片である。⑨は胎土に細粒砂を多く含み、雲母・角閃石及び赤褐色粒をも含んでいる。色調は黄褐色を呈し、焼成はあまり。器面の調整はマツツしているため不詳。脚部内側はナデである。⑩は復原口径13.1cmで、胎土に細砂を若干、雲母・赤褐色粒を含み、色調は褐色を呈し、焼成はあまり。器面の調整はマツツしているため、不詳。

杯(⑪～⑯) 蓋が⑪～⑬、身が⑭～⑯である。⑪・⑫・⑬は口径が13.6cmに一致している。器高は3.8cm前後で、略一である。胎土も細粒砂を若干含み、色調も内外とも黄灰色から黒灰色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は同一技法である天井部が回転ヘラケズリで他は回転ヨコナデで、天井部内面は回転ヨコナデの後にナデしている。

⑭・⑮・⑯は身である。⑭は復原口径は9.9cm、器高2.75cm、受部径11.9cmで、受部高0.1cmである。蓋の可能性もある。胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外とも黒味を帯びた茶褐色である。焼成は良好である。⑮は口径12.4cm、器高3.75cmで、受部径が14.8cm、受部高0.5cmである。胎土は⑬と同じで、色調も同系統である。焼成も良好である。⑯は復原口径12.4cmで、

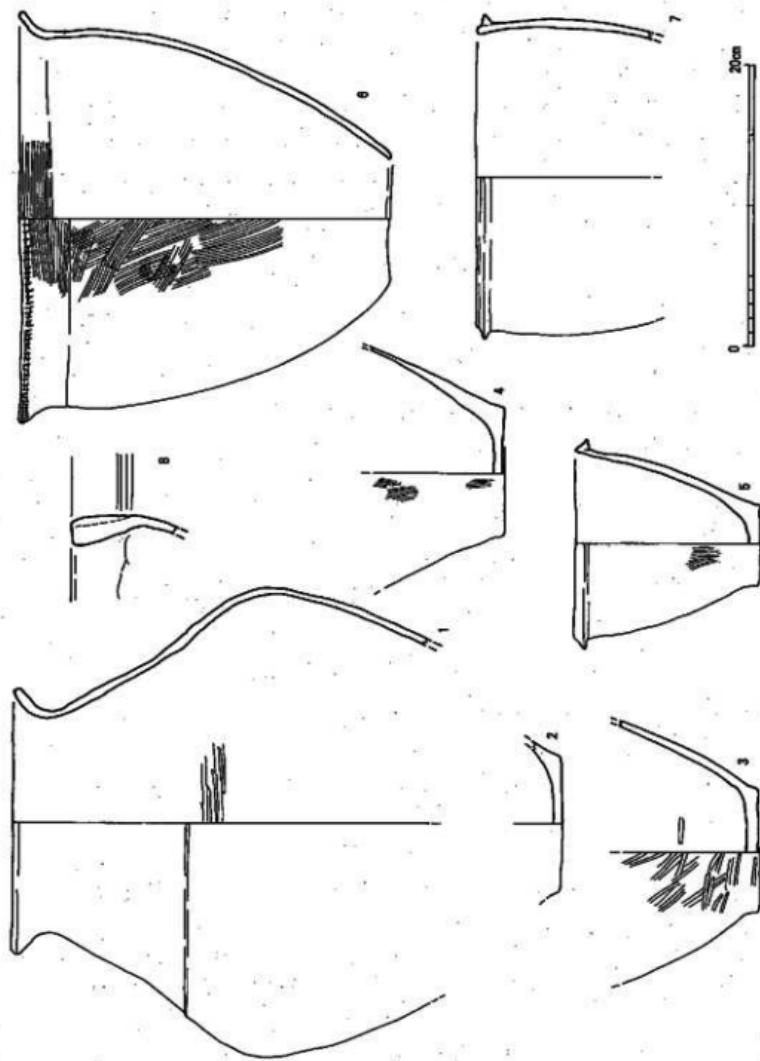


第56图 后层数6号横穴墓道出土遗物实测图1 (1/3)



第57图 后层数6号横穴墓道出土遗物实测图2 (1/3)

第58圖 居殿6號帶火爐的空壺內出土遺物素描圖 (1/4)



受部径14cm、受部高0.8cmで返り肉厚である。胎土は⑯と同じで、色調は黄褐色を呈している。三者とも器面の調整は同一技法である。底部が回転ヘラケズリとヘラケズリ後ナデで、他は回転のヨコナデ、内面も同様である。

提瓶(⑰) 胎土に細粒砂を多く含み、口径7.7cm、色調は外面は黒灰色を呈し、内面は明灰色をなし、自然釉が部分的に付着している。全体に灰がかぶり、口縁から肩部にかけて、自然釉として発色している。肩部下半には別個体の土器片が融着している。焼成は良好で、器面の調整は腰当部分は回転ヘラケズリで、他方はカキメ、口縁部の造りは回転ヨコナデである。内面も回転ヨコナデである。

以上、出土遺物から6号横穴墓は7世紀初頭から7世紀中葉までに充てられる。所謂須恵器編年型式IVa期にあたる。

#### 居屋敷6号横穴墓北横の防空壕内より出土した遺物（図版45・第58図）

5号と6号横穴墓の間に、太平洋戦争中の防空壕が掘られているため、5号・6号横穴墓は若干破壊されて、両方から行けるように利用転用されている。巧妙につくられている。これによつて6号横穴墓の閉塞石は壊されていたわけである。

防空壕の床土の中から出土した遺物は①～⑦までは弥生式土器で、①は壺形土器で、⑥は瓶で、その他は壺形土器であった。⑧は瓦質のもので中世の火舎の口縁部破片であった。詳細の説明は省く。

弥生式土器はI区からの流れ込みである。

#### 10. 居屋敷7号横穴墓（図版46・47、第59～63）

当該横穴墓は、北側に6号横穴墓より2.5mで、南側の8号横穴墓から2.5mのほぼ等間隔の位置にある。

主軸をN-75°-Wで、西に開口し、玄室+羨道+基道となるわけで、全長は5.90m弱である。その内分は玄室1.50m・羨道1.20m・基道3.20mとなる。1基道1横穴墓の形態である。

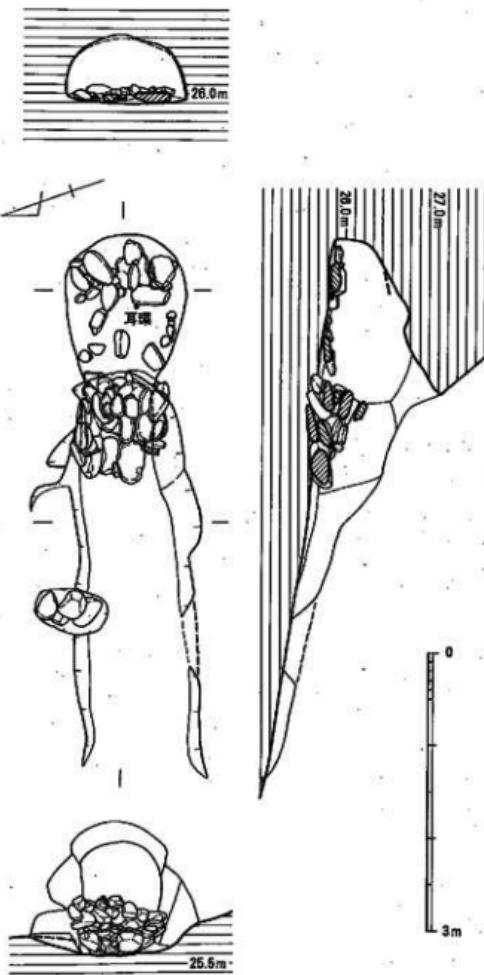
その羨道の北側に、西の法面より、1mのところにこの羨道を切って、石組遺構が検出されている。第63図がそれである。これについては項を改めて説明を加える。

出土遺物は全て玄室の中から検出された。土師器小皿1・耳環3・勾玉1・ガラス玉1であった。

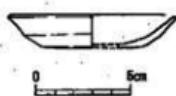
閉塞石はしっかりと組まれているが、その上の壁を崩して、中世時代に人が入ったものと考えられる。その時使用したものが土師器小皿である。そのために床石の河原石が荒らされている。

しかしながら閉塞は残りが良くて、ほぼ羨道部を覆う。羨道は羨道からの同幅で設なまれているもので、飾るという行為はみられない。

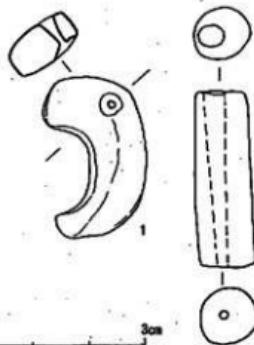
**玄室**（図版46・第59図）  
 平面形は縦長の巾着形を呈したもので、長軸150cm、短軸は120cmで天井断面はドーム形で人一人がやっと面積である。天井まで高さ60cmで、奥壁面が高く、順々に傾斜しながら法面まで至っている。玄室と羨道の境界には頗著な変化はないもので、奥壁を0とし法面までの深さは70cm前後の傾斜面となる。検出された遺物は玄室の中央部付近である。耳環出土地付近で土師器の小皿出土している。勾玉及び管玉は奥壁の敷石の下から出土している。また、原位置で捕らえることができず、上地を篠にかけて、ガラスの小玉1点・耳環を2点検出している。基本的には玄室中が狭くて人間一人が丁寧な発掘作業できなかつたことである。



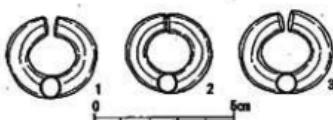
第59図 居屋敷7号横穴墓実測図(1/60)



第60図 居屋敷7号横穴  
墓玄室出土遺物実測図  
1 (1/3)



第61図 居屋敷7号横穴墓玄室  
出土遺物(勾玉等)実測図2(拡大)



第62図 居屋敷7号横穴墓玄室出土遺物(耳環)  
実測図3 (1/2)

#### 出土遺物(図版48、第60~62図)

小皿(図版60) 灯明皿と使用されたもので、口径9.0cm、器高1.8cm、底径5.5cm、胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外面とも暗茶褐色を呈し、焼成はある。器面の調整はマツツして不詳である。

勾玉(図版48、第61図①) 玄室の敷石の下から出土したもので、材質が悪いがメノウ製である。裏面には剥離がある。色調はこげ茶色を呈する。重量は6.0gである。穿孔技術が今一歩である。

管玉(図版48、第61図②) 同じく玄室の敷石の下から出土したもので、若干の傷があるが、材質的には良い方の碧玉で、大振の玉である。色調は緑に黄味が下半部付加している。重さ6.0g。

ガラス小玉(図版48、第61図③) 直径4mm、孔径が1.5mmである。色調はライトブルーで、気泡が若干入っている。厚さは2mmで、きれいな玉である。

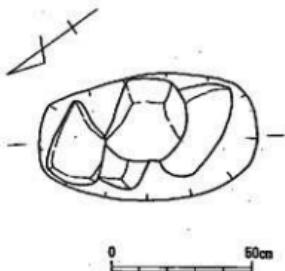
耳環(図版48、第62図) 3点が玄室内より出土したもので、①は敷石下で原位置で捕獲したが、②・③は床面の上地の中から見つけたものである。

①は直径3.2cmで、太身のもので、銅地銀張と思われるが銅質が悪いため銀箔をうまく出せない銀箔を一部欠き、銅地を見せていている部分がある。重量19.2gである。②は非常に残りの良いもので銅地銀張で、銅質は安定し銀はほぼ本来の色を残し、太身のもので重量感はある。重量22.4gである。③も直径3.2cmで、銅地銀張である。銅質は安定している銀も本来の色を残す。

銀箔が一部とれ、銅地むき出しの部分もある。太身のもので重量感がある。重量21.0gである。

以上、出土遺物からみると、歴史時代の中世期に、横穴墓内が荒らされて、めぼしいものは盗まれたものと考えられる。玄室と閉塞石との間の壁を崩して中へ入ったもので、取り残しのものが検出された。

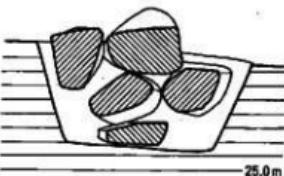
当該横穴墓の時期は7世紀半頃と考えている。



#### 墓道内石組 (図版48, 第63図)

墓道北側の一部を切って、土壤の平面形が橢円形で長軸78cm、短軸44cmで、上面に4石を組んでいる。上面より深さ35cmで略一的に床面になる。壁断面を見るに丁寧に整えられる。U字形の断面である。この造構からは出土遺物はみられなかつた。主軸をN-35°-Eである。

当該7号横穴墓が造営された後に、つくられたものである。埋土の分析を行っていないために、土壤であったか、ただの土壤であったかは不明であるが、調査したものとしては、陪臣的な存在の犬などの家畜の墓を考えたいものである。蛇足ながら……。



第63図 居屋敷7号横穴墓墓道石組実測図  
(1/40)

#### 11. 居屋敷8号横穴墓 (図版49~52, 第64~68図)

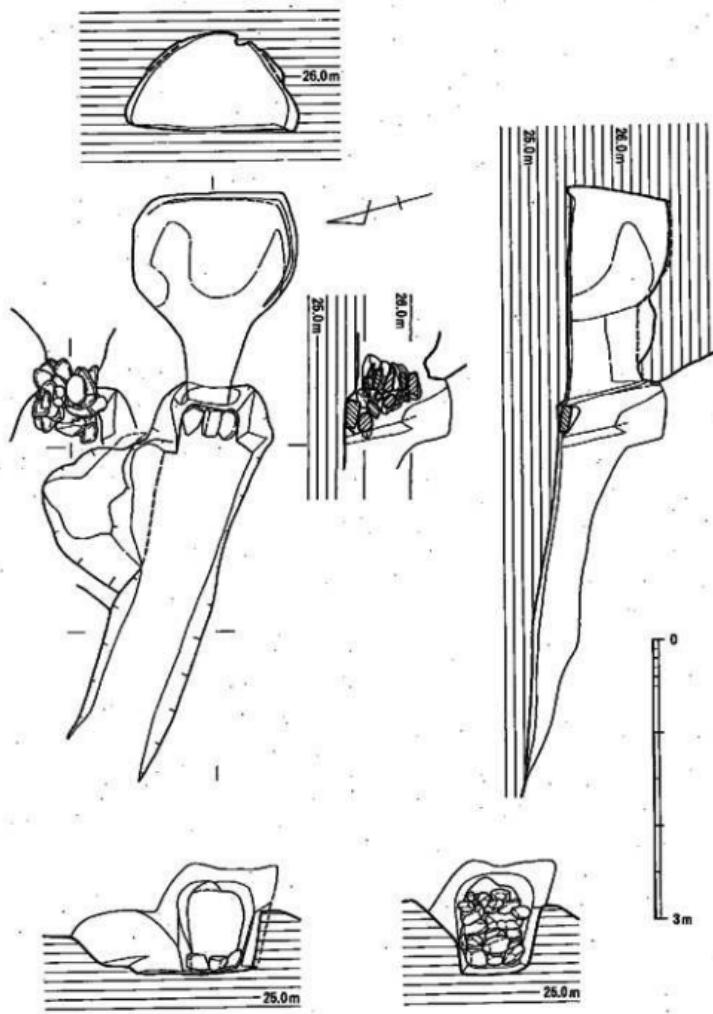
当該横穴墓は、北側に7号横穴墓2mで、南側の9号横穴墓からも2mである。

玄室の主軸をN-79°-Wで、略西に開口する。横穴墓は玄室+羨道+墓道で、全長は約630cmで、玄室の主軸と墓道の軸はまがっている。墓道が北側に50cmずれている。その内訳は玄室150cm、羨道110cm、墓道380cmとなる。1墓道1横穴墓の形態をとる。

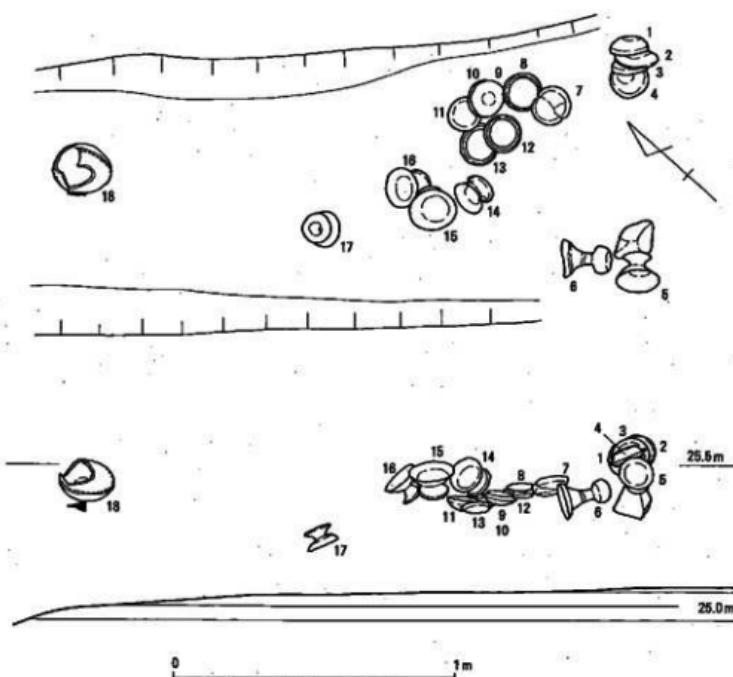
出土遺物は、玄室の中から管玉3・ガラス玉2点が出土しているが、玄室内は敷石もなく、荒らされている。排水溝は奥壁に沿って造られている。

羨道部の閉塞石の上部が壁が崩れて人間一人入れる状態の空間が空いている。閉塞石はきっと組まれている。樋石の部分で一段10cmくらい下がっている。

墓道と嵌門部の接点は20cm前後の張り出しをもって、墓道を狭くして、立柱をつくっているように飾るということを行っている。



第64図 居屋数8号横穴墓実測図(1/60)



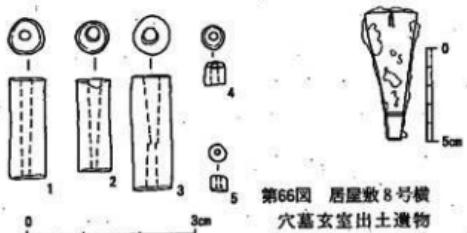
第65図 屈屈數8号横穴墓墓道遺物出土状態実測図(1/20)

墓道の縦断面を見ると順々に法面向かって下っている。墓道からは完形の須恵器が供獻されている。第65図がそれである。出土遺物の器種は杯が多く、碟・高杯・短頸壺と鉄鎌等が浮いた状態で検出されている。

#### 玄室(図版49、第64図)

平面形は所謂巾着形のもので、175cm×150cmで、天井までの高さ100cmで、断面はドーム形である。右側壁に沿って排水溝をもち、奥壁にも確認できるが、左側壁は若干とらえにくい。基本的には、袖がつくられていないため、玄室の入口を羨道部の接点が不明となるが、これが巾着形の特長である。しかしながら天井部の縦断面を見ると、曲線の関係でより理解できる。しかし天井部の崩壊で当該墓は正確にはならなかった。

左右側壁及び奥壁には工具痕の痕跡が残っている。工具の歛は9cm幅のもので、刃先は1cm



第66図 居屋敷8号横  
穴墓玄室出土遺物  
(管玉) 実測図(1/1)

第67図 居屋敷8号横  
穴墓墓道出土遺物  
(鉄製品) 実測図1  
(1/3)

弱弯曲している。右側壁では天井から60cmは横位方向に、それより下は斜行横位で削りだしている。奥壁は中軸線より右側壁に向かって、斜行の右方向で、同じく左側壁に向かって斜行の左方向で削りだしている。左側壁では奥壁より開口方向に向かって斜行方向へ、半分より下は奥壁方向に向かって斜行方向へ、上下が逆方向に削りだしている。天井の一部でありて硬かったのか、堀残しの部分もある。奥壁の左右から天井に向かって稜線が入っている。家形になるものと考えられる。玄室天井の前庭部が崩れているため、稜線は不明である。

遺物の出土は管玉3点・ガラス玉2点であった。原位置は不明である。

#### 出土遺物(図版51・52、第66図)

玄室の中の上地から中から出土したもので管玉3点、ガラス玉2点がふるい出された。

管玉(①・②・③) 3点とも碧玉製で、①は孔径2.5mm、長さ1.75cm、幅0.6~0.75cm、色調はモスグリーンで黄味かかっている。重量1.4g。②は孔径2.5mm~1mmで、長さ1.65cmで、幅0.63cmで暗緑色を呈している。重量1.2gである。③は孔径3.0mm、下が2.0mm、長さ2.05cm、幅が7.0mmで、暗緑色を呈している。われ口2ヶ所あり、いずれも丸く研磨されている。重量1.7g。細身の玉である。

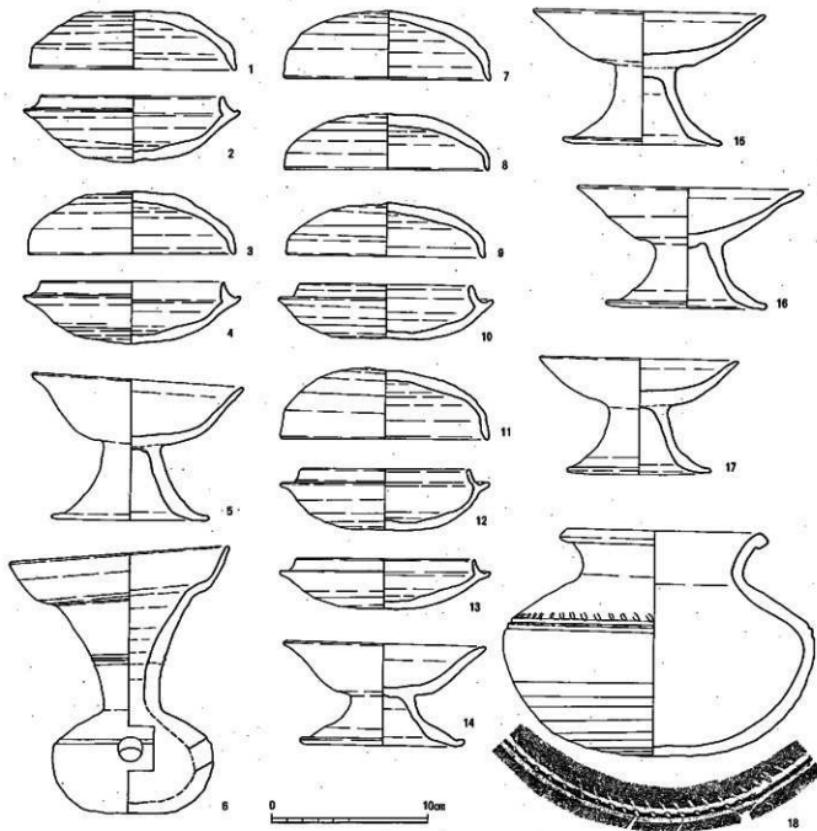
ガラス小玉(④・⑤) ④は径4.3mmで、厚さ3.5~4.3mmで、重量0.1g。色調は水色が若干濁っている。⑤は径が3.5mmで、厚さ2.8mmで、色調は水色透明度が高い。重量は0.1gにも満たない。

#### 墓道(図版50、第67・68図)

墓道から浮いた状態で出土したもので、須恵器は各器種がある。その中でも杯が多い。鐵鏡が1点出土。

鐵鏡(第67図) 短頭壺と共に伴したもので、所謂矛箭式方頭鏡である。平造りで、基部に木質が残っている。重量12.3gである。

#### 須恵器(図版51、第68図)



第68圖 居屢數8號橫穴墓墓道出土遺物素描圖2 (1/3)

第65図の取り上げ番号順に並べた。

杯 (①～④, ⑦～⑬) 蓋は①・③・⑦・⑧・⑨・⑪で、身は②・④・⑩・⑫・⑬である。蓋の口径は12.6cm～13.4cmで、器高は3.4 cm～4.5cmである。胎土に細粒砂を含み、色調は内外面とも灰色から灰黒色を呈するものが多く、焼成は良好である。身の口径は10.9cm～11.9cmで、器高3.5～4.3cmである。胎土・色調は同系統であり、焼成もほぼ良好である。⑬は一部に灰をかぶっている。器面の調整は同一技法である。すなわち、蓋では天井部が回転ヘラケズリの技法で、他は内面までヨコナデからナデ仕上げである。身についても言えることで、底部は回転ヘラケズリで他は内底までヨコナデとナデである。

高杯 (⑤・⑭～⑯) 5点出土している。器形は同一系態のもので、口径は12.5～14.8cmで、器高は、6.7～9.5cmまでの各種がある。脚高は3.2cmから5.1cmで、底幅径は9.2～10.3cmである。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は橙褐色で、焼成は軟質である。器面の調整は内外とも風化著しく調査不明である。脚内面は抉り取りの後にナデしている。⑯は口縁部から脚部にかけて黒斑がある。

聰 (⑯) 口径14.3cmで、器高は16.2～17.3cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は灰色から灰黒色を呈し、焼成は堅固である。注水口の内側に灰をかぶっている。頸部に2条の沈線と球体部中央部に沈線を1条入れている。器面の調整は球体部の胴部以下底部までは、回転ヘラケズリで、他はヨコナデで内面も同じである。

短頸壺 (⑮) 復原口径は11.45cmで、器高14.5cmである。胎土に細砂を多く含み、色調は内外面とも淡黄灰色で焼成は良好である。器面の調整は、肩部下半から底部までは、回転ヘラケズリで、他は内面まで回転ナデと内底面はナデである。肩部には2条の沈線と、ヘラによる刺突文を施している。これと鉄錆が共存している。

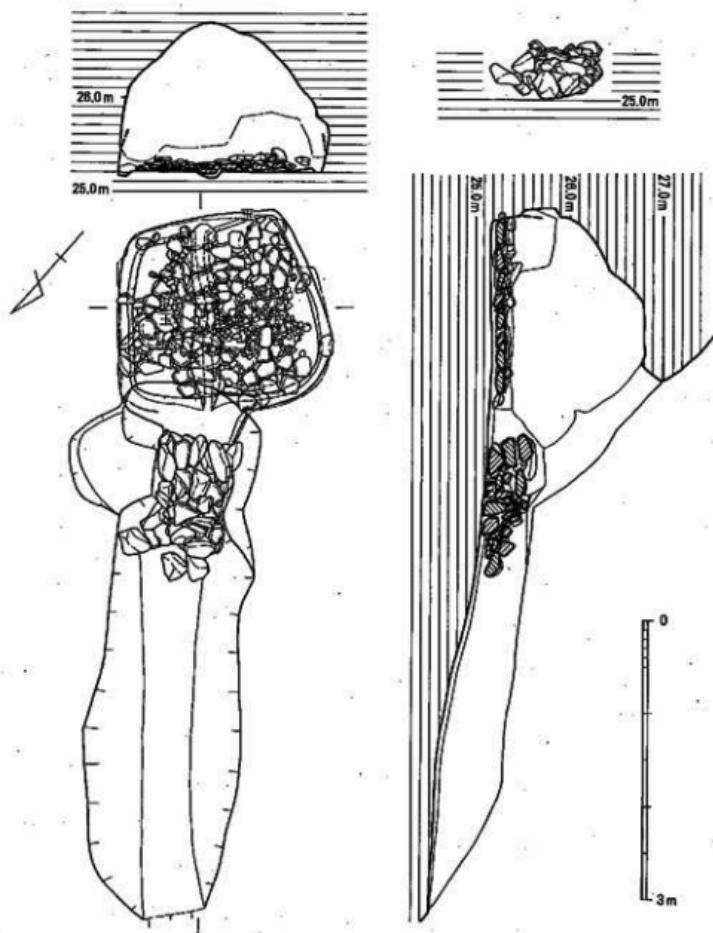
以上の出土遺物から7世紀前半頃に造営された横穴墓である。須恵器の型式では、IVa期である。

## 12. 居屋敷9号横穴墓 (図版53～55、第69～73図)

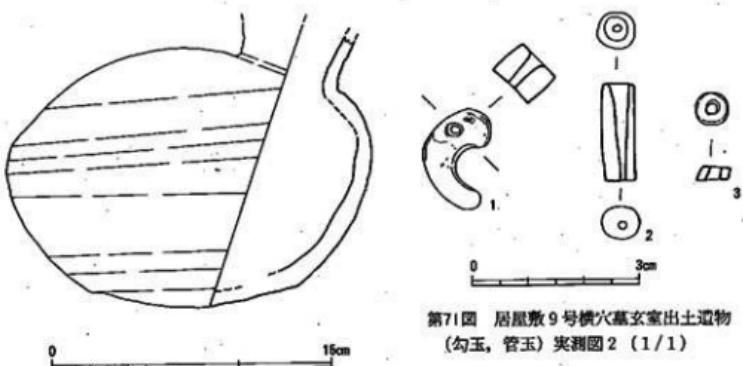
当該横穴墓は北側に8号横穴墓まで2mで、ほぼ横に並列する。

当該横穴墓は主軸はN-41°Wで、西に開口する。玄室+羨道+墓道で、全長は745cmである。その内訳は玄室210cm、羨道110cm、墓道425cmとなる。墓道は玄室に対し、北側に若干振っている。辛うじて主軸が墓道にのった。1基道1横穴墓の形態をとるものである。

出土遺物は、玄室の中から須恵器の横瓶と勾玉・管玉・ガラス玉・土玉が出土している。また、墓道からも若干の須恵器破片が底面から少し浮いた状態で検出されている。



第69圖 居原敷9號橫穴墓剖面圖 (1/60)



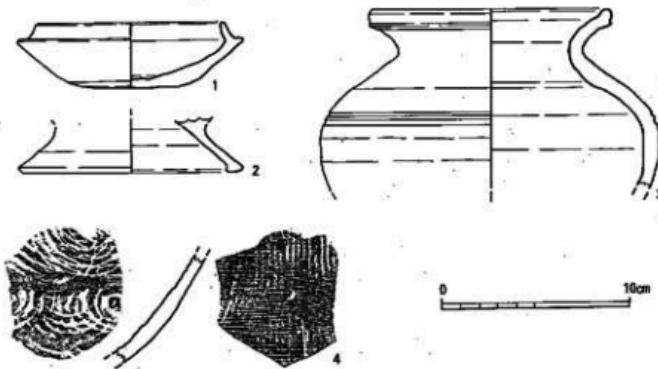
第71図 居屋敷9号横穴墓玄室出土遺物  
(勾玉、管玉) 実測図2(1/1)

第70図 居屋敷9号横穴墓玄室出土遺物実測図(1/3)

#### 玄室(図版54、第69図)

平面形は不整方形を呈し、奥壁が幅170cm、最大幅230cm、長さ210cmを計測する。壁の周間に、約20cm幅で周溝を持っている。玄室中央部の東西方方向に、長さ約200cm、幅20~30cmで排水溝を抜いて周溝の補填している。床面には偏平な河原石を敷石として使用し、河原石と河原石の間に砂利を引いて、二重にしている。出土遺物の玉は奥壁右端部付近と玄室中央部より、横瓶は左袖部入口付近で出土している。

玄室断面はドーム状をなすと思われるが、天井が崩壊しているため、不明である。天井高は



第72図 居屋敷9号横穴墓墓道出土遺物実測図1(1/3)

奥壁よりで約120cm、他は崩れて正確には捕促できない。

後道部は敷石面より約10cmほど下がっている。後門部から墓道にいたっている。後門部と墓道の接点には見かけの立柱となると思われる。30cm内外の張り出し部は北側のみに見られる。南側は不明である。

墓道の縦断面は順々に下り勾配で法面にいたっている。墓道からは若干浮いた状態で出土遺物が検出された。



第73図 居屋敷9号横穴墓墓道出土遺物実測図2 (1/4)

#### 出土遺物 (図版55、第70・71図)

玄室から出土した遺物は横瓶と玉類である。

横瓶 (図版55、第70図) 口縁部が欠損しているもので、残高は15cmである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰色で、焼成は良好である。器面の調整は内外面ともヨコナデで、胴部は回転ヘラケズリの後にナデである。

勾玉 (図版55、第71図①) ガラス製もので玄室の中央部付近から敷石の間から出土した。色調は水色で、気泡が入り出来はよくない。重量1.9gで、穿孔は一方からである。

管玉 (図版55、第71図②) 水晶製のもので、奥壁の右端で出土した。長さ1.7cm、直径6~7mm、孔径は1.5~4mmで、一方からの穿孔である。材質は悪く、透明度はない。

ガラス小玉 (図版55、第71図③) ガラス製で色はミドリ色である。直径は約5mmで、孔径は2~3mmで、厚さは2~3mmである。勾玉の近くで検出される。

土玉 (図版55) 勾玉・ガラス小玉の付近で出土したもので、約20点が検出されている。5~6点は原位置で捕らえられたが、その大半は上地をふるた時罐の中から出ているもので、作りも雑で、連玉3個見られる。大きさはまちまちである。

#### 墓道から出土した遺物 (第72・73図)

須恵器の破片である。

杯 (第72図①) 身の破片で、口径12cm、器高3.45cm、色調は灰色である。胎土に小砂を含

み、焼成は難で若干あまい。器面の調整は底部が回転ヘラケズリで、他は回転ナデと内面はナデである。

台付壺（第72図②） 脚部破片である。底径は12.0cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は明灰色で、焼成は良好である。器面の調整は内外面とも回転ヨコナデである。

短頸壺（第72図③） 復原口径は12.8cmで、残高10cmで、胎土に細粒砂を若干含み、色調は内外面とも暗灰色で外面の一部に灰かぶりの後あり、焼成は良好である。器面の調整は内外面とも回転ヨコナデである。

壺（第72図④） 洞部破片で、胎土には精良の粘土使用し、内外面とも明灰色で、焼成は良好である。器面の調整は外面はカキメ後タタキで、内面は青海波のタタキである。器壁の厚さは1.0cm前後である。

壺（第73図） 大壺の洞部破片である。胎土に細砂を若干含み、色調は内外面とも灰黄緑色で焼成は良好である。器面の調整は外面が平行のタタキで、内面は青海波のタタキである。器壁は1.0～1.3cmの厚さである。

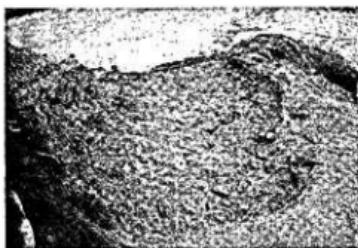
以上の出土遺物から、IV a 期を充て、当該の9号横穴墓の年代は7世紀前半頃に比定できる。

### 13. 居屋敷10号横穴墓（第74図）

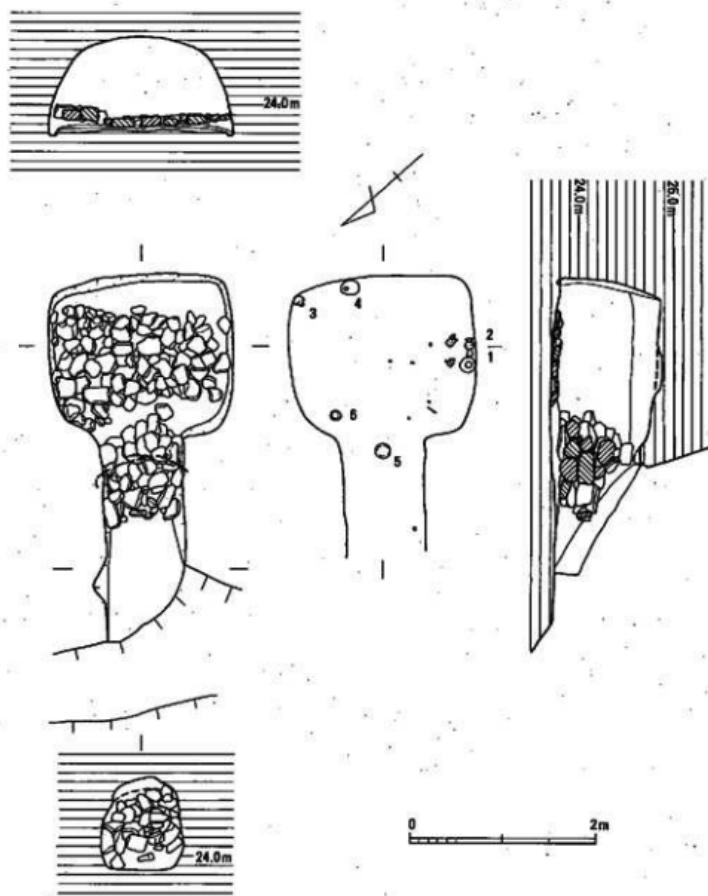
道路側の崖面にあって、戦争中に防空壕に転用し、道路拡張の折りに削ったという、旧地主の話であった。

調査をした結果、完全に破壊されたくぼみのみ検出された。

一応ここでは横穴墓として上げるが、疑問点もある。主軸をN-115°Wに略西に開口するもので、平面形は不正楕円形を呈し、片側が道路に切られる。順々に道路側に下り勾配で落ちていく。出土遺物は見られなかった。1区ではその他の遺構の中で説明されている。



第74図 居屋敷10号横穴墓全景（西から）



第75図 居屋敷11号横穴墓実測図 (1/60)

#### 14. 居屋敷11号横穴墓（図版56～62、第75～77図）

当該横穴墓は、法面のほぼ真中にあって、傾斜がきつい位置にある。すなわち4—1号横穴墓と5号横穴墓の間、約10m間に急傾斜であるために一段約2m下った位置で、ほぼ3mの等間隔で3基の横穴墓を検出した。北から11号横穴墓、12号横穴墓、13号横穴墓とした。この上4m高位置には1号窓跡の焚口が検出されている。

当該遺跡では中位置、あるいは中段で、下段には2基の防空壕が出ている。防空壕は上段と下段にある。

では、前置きはこれぐらいにして、本題にはいる。

当横穴墓の主軸はN46°Wで、西に開口する玄室+狭道+墓道で、全長は400cmである。その内訳は玄室165cm、狭道100cm、墓道（北側）135cmである。1墓道1横穴墓の形態をなす。

出土遺物は、玄室の中から須恵器4点・土師器2点・人骨2体・耳環5点・刀子1本が検出されている。

しかしながら、日曜日作業中止の日（2月12日）に、子供達の悪戯に遭い、1点を残し持つて行かれていた。その後の調査ではほぼ戻ってきたが、刀子のみが行方不明となり出てこなかった。

墓道からの遺物の出土は見られなかった。

##### 玄室（図版59・60、第75図）

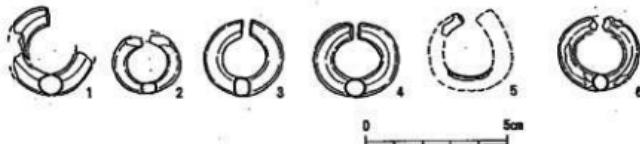
平面形は方形（200cm×180cm）を呈し、壁に沿って排水用の周溝を巡らしている。天井高は床の敷石から90cmを計測する。玄室の縦断面はドーム形で左右にU字形の浅い溝を作っている。敷石をはずして地山面を見ると、凸凹で排水に適している。右袖を正確に掘削されて造られているが、左袖はゆるやかに造営されている。

狭道部の閉塞石は下から積み上げて、最上段部では中央部から斜めに入れている。狭道部の幅は85cmである。

墓道は狭道と同じ幅で、見かけの立柱は造営していない。

狭道部の左側壁で密着したように耳環が1点検出されている。埋葬者のものがとれたのだろうか……？

##### 出土遺物（図版58～62、第76・77図）



第76図 居屋敷11号横穴墓玄室等出土遺物（耳環）実測図1 (1/2)

遺物は玄室から出土したものが大半である。第75図は遺物の出土状態の位置を入れている。悪戻されたものは原位置がずれているかもしれないが落とし込んでいる。また図版58を参照されたい。

人骨（図版60、第75図） 人骨2体（成人）は並列するように頭を南位方向に位置している。その周辺部に刀子や耳環が出土している。人骨についての考察はIV-②にある。参考されたい。

耳環（第76図） 玄室から出土したものは①～⑤で、⑥は墓道側面から出土したものである。①は半欠品である。直径は3.3cm銅地銀張で、芯の銅は完全になくなっている。銀箔は厚さ1mm通り、黒化する一部金色のところあり金箔も一部混ざっている。太身のものである。②は細身のもので、直径2.5mm、銅地銀張である。一部に芯が出ているところもある。③は太身のもので、直径3.0cmで、銅地銀張銀青が吹いているところも一部あり、④は太身のもので、直径3.0cmで、銅地銀張である。銅質安定、銀は一部に黒化しているところあり、その一方で、本来の色を残すところもある。金色に近いところもあるので、再度の処理が必要であろう。⑤は銅地の芯がなくなっている。金箔張の部分が辛うじて残っている。⑥は墓道側面で出土したもので、銅地だけになっている。銅質悪く、多孔質で欠損しているところ多い。直径2.8cmである。

#### 須恵器（図版62、第77図①②③④⑦）

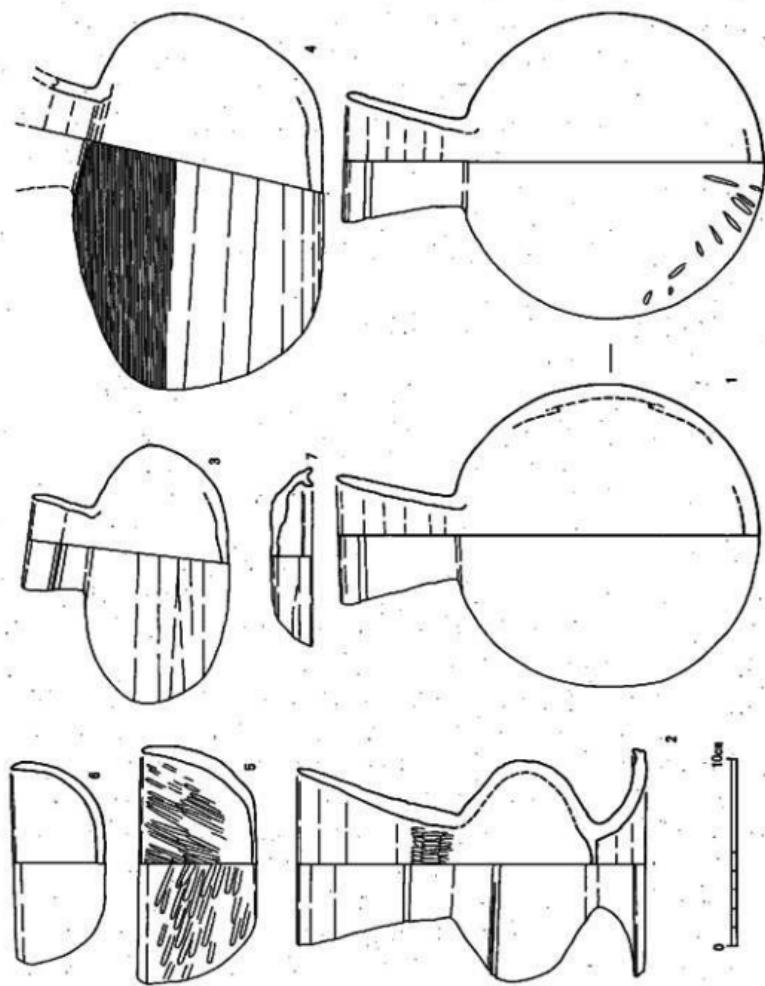
瓶（①） ①は右側壁中央部より出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は灰色で、口径6.9cm、器高22.2cm、焼成は堅固である。器面の調整は肩から底部まで丁寧なナデで、口縁部から肩まではヨコナデで内面もヨコナデである。

台付壺（②） ②横倒しなって①の横に位置するもので、台付壺である。胎土に細粒砂を含み、黒色粒子も含む、色調は灰色である。焼成は硬く、堅固である。口径9.3cm、器高18.5cm脚径12.0cmである。器面の調整は頸部から胴部下半までカキメで、他はヨコナデ、内面もヨコナデで、頸部内面はヘラ状のものでナデしている。特長ある須恵器である。

平瓶（③・④） ③は左側壁の東側の奥に横転して出土した小形の瓶である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰色から紫灰色である。焼成は堅固である。口径5.1cm、器高11.0cmで、器面の調整は胴部から底部にかけてはカキメで、それより上はヨコナデで内面までいたっている。④は奥壁中央部北よりあって、口縁部が欠けている。胎土に細粒砂を含み、黒色粒子も混ざる、色調は灰色で、焼成は堅固である。器面の調整は頸部下半から肩部まではカキメで、それより以下はナデで、胴部下半から底部は回転ヘラケズリである。頸部上半はヨコナデで頸部内面もヨコナデである。

杯（⑦） 蓋である。胎土に細粒砂を若干含んで、色調は灰色から暗灰色を呈し、焼成は良好である。口径9.7cm、器高2.3cmである。器面の調整は、天井部はナデで、口縁部までは、1/2周ほどヘラケズリで他はヨコナデで、内面もヨコナデで、天井内底面はナデである。編年型式ではIV bの範囲にはいる。内面の一部を除いて全体に灰をかぶっている。受け部に重ね焼きの他の土器の口縁部が付着している。

第七圖 居屋數11号櫛穴墓文室出土遺物素描圖2 (1/3)



### 土師器（図版62、第77図⑤⑥）

杯（⑤・⑥）⑤は口径12.0cm、器高6.3cmで、胎土に細粒砂を含み、赤色粒子・金雲母も混入している。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は口縁部から胴部下半までヘラミガキで、底部はヘラケズリである。内面はヘラミガキで、内底面はナデである。⑥は口径10.0cm、器高5.1cmで、⑤より一回り小形である。胎土に細粒砂を含み、色調・焼成は前者と同じで、器面の調整は底部がヘラケズリで、他はナデで、内面もナデである。基本的には、土師器も須恵器の技術を会得している。

以上のことから、当該11号横穴墓の年代は、7世紀半頃で、須恵器のIVb期に充てたい。

### 15. 居屋敷12号横穴墓（図版63～68、第78～89図）

当該横穴墓は、11号横穴墓の3m南で、13号横穴墓の3m北に位置する。中段の真中である。当該横穴墓の主軸はN-53°Wで、西に開口する玄室+羨道+墓道で、全長525cmを計測する。その内訳は玄室220cm、羨道90cm、墓道215cmである。1墓道1横穴墓の形態をなす。

出土遺物は、玄室から、この横穴墓群の中で、もっとも多く副葬品を持っていた。これは、埋葬者が4体も入っていたためである。人骨4体分で、残りは非常に悪い。耳環4点・直刀2本・小刀1本・須恵器1点・鉄鎌6点・金銅製鈴8点・勾玉2点・管玉1点・ガラス玉234点、の検出された。副葬品の中では、特に金銅製の鈴が興味を引くものであった。その他には、墓道からは浮いた状態であるけれど、鉄鎌と須恵器の大甕の破片が覆土中より出土している。

#### 玄室（図版63～65、第78図）

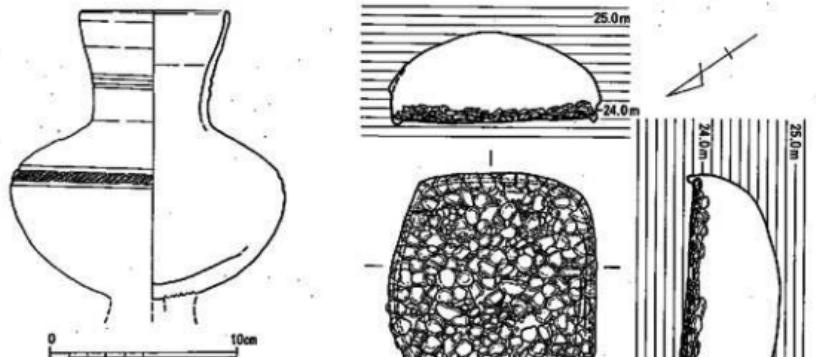
平面形は方形(220cm×220cm)を呈し、若干奥壁が40cmぐらい短い。遺物の集中はほぼ3ヶ所に分かれている。左袖には小刀・鈴・勾玉含む玉類が群として、奥壁に沿って頭頂骨や歯を含め、玉とかたまっている。玄室中央部に耳環等を中心にグルーピングでき、中央部南壁面には直刀2本、鉄鎌5本、須恵器（脚付甕）1点その直刀の北側に頭頂骨がひくりかえっていた。

周壁に沿って、排水用の周溝を巡らせて、羨道部にいたっている。天井高は敷石から90cmを計測する。玄室の縦断面はドーム形で左右にU字形の浅い溝をつくっている。敷石をはずして地山面を見ると凸凹が多く、排水に適している。左右の袖を掘削されて、ほぼ対称に造営されている。

羨道部には、一段下がり框石に至っている。框石は羨道一杯の大きめの河原石を使用し左側のすき間に小さな河原石を嵌めて塞いでいる。墓道と羨道は同じ幅で、見かけの立柱の飾はない。墓道覆土から大甕の口縁部と胴部破片が墓道底より浮いた状態で鉄鎌1点出土している。

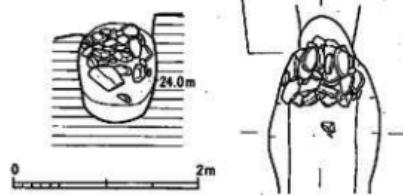
#### 出土遺物（図版65～68、第78～88図）

遺物の大半は玄室の床面から出土したもので、それぞれにグルーピングできる。玉類につい

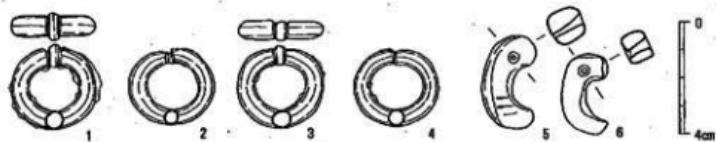


第79図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物実測図1 (1/3)

第78図 居屋敷12号横穴墓実測図  
(1/60)



第80図 居屋敷12号横穴墓玄室  
出土遺物(耳環・勾玉)実測図  
2 (1/2)



ではグループごとに分けて説明する。

人骨（図版64、第78図） 人骨は4体である。保存状態が悪いため、頭頂骨が残っているものが2体分で、他は大顎骨や歯冠等であった。詳細については考察の中で述べられている。追葬があったわけでも、南側の直刀の1本には人頭大の偏平な河原石が乗っており、その上にもう1本の直刀があった。

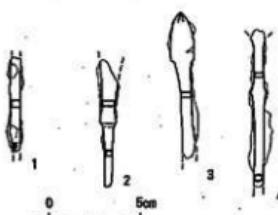
須恵器（図版65・66、第79図）

右袖で口を奥壁側に向けて倒れて出土したもので、脚付壺である。脚部は欠損している。

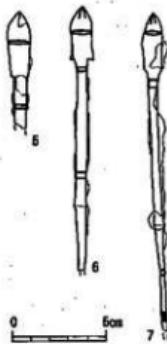
脚付壺（第79図） 口径7.7cm、残高15.5cmで、脚分を打欠いている。胎土に細砂粒を含み、黒色粒子も含む、色調は灰色から黒色を呈し、焼成は堅固である。外面全体及び、口縁部内面の一部は灰をかぶっている。器面の調整は口縁部から頸部にかけてはヨコナデで、2条の沈線を施し頸部つけ根から胸部中央部まではカキメで、櫛の刺突文を上下の沈線で文様体として、それ以下はカキメを施している。内面はヨコナデからナデである。脚付の部分は継ぎ目から欠落している。

耳環（図版66、第80図①②③④） ①・②は対のもので、約25cm離れている。玄室中央部より北側に位置し、③・④は①・②より西北側にこれも25cm離れている。追葬終了後、入口を開口したのは、発掘調査の折りであった。①は直径3.2cm銅地銀張で、銀は黒化、緑青がふいている。銅質が悪いため銅地がむき出しの部分がある。切れ目のところにガラス玉が入っている。重量17.4gである。②は直径3cmで、銅地銀張のもの。銅質はやや悪し。銷のため、銀箔を押し上げている。全体に緑青をふいている。銀は黒化し、銅地はむき出しだけである。重量11.2g。③は直径3.1cmで銅地銀張のもので、銅質はよくない。表面に緑青が膜状につく、銀は黒化している。切れ目にガラス玉が入っている。重量16.5g。④は直径3.0cmで、銅地銀張のもので、表面に緑青が膜状に付着し、銀箔はわずかに見えるだけだ。銅質はあまりよくない。重量11.5g。

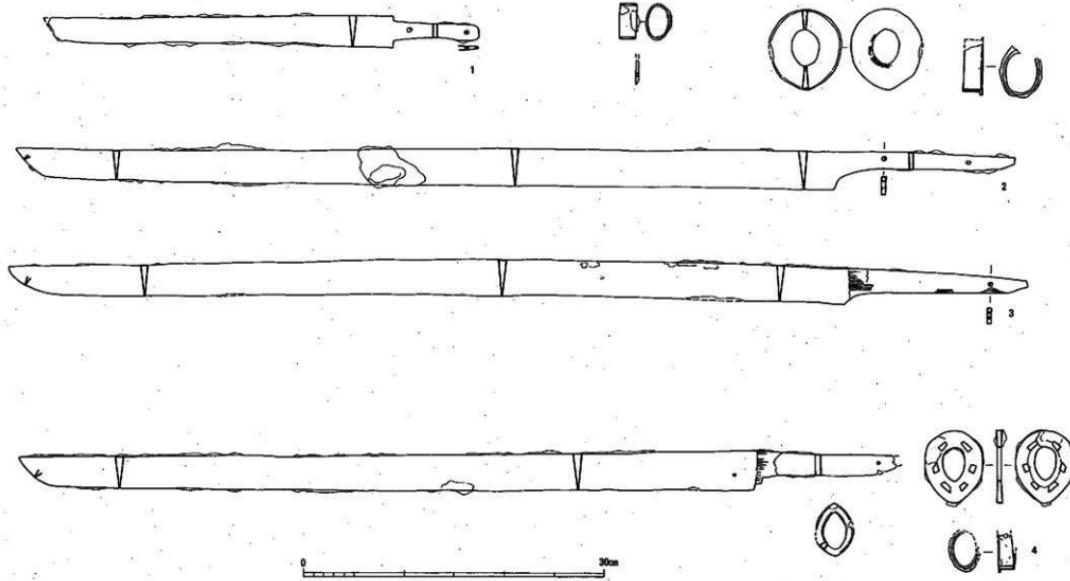
勾玉（⑤・⑥） ⑤は左袖の鉢の近くで出土したもので、石材はメノウで、若干の傷もある。背の部分は磨きが今一歩である。色調は白黄色を呈する。全長3.5cmで、穿孔は一方からであ



第81図 居屋敷12号横穴墓覆土等出土遺物(鉄器)実測図 1  
(1/3)



第82図  
居屋敷12号横穴墓  
玄室出土遺物鉄器  
実測図 2 (1/3)



第83圖 居址12号・13号横穴墓出土遺物(直刀)実測図 (1/4)

る。孔径は0.5cmで、細いところ0.2cmを計る。重量9.5g。⑥はほぼ中央よりの西側から出土したもので、全長2.8cmで、穿孔は両方からあけている。孔径は0.5cmである。材質はメノウである。色調は、白黄色で、石脈がある。重量は5.7gである。

#### 鉄製武器（図版67・68、第81～83図）

鉄鎌・直刀・小刀・刀子がはいる。武器が中心に出土しているのは、右袖のコーナーで南壁面である。

鉄鎌（第78・79図） ①は墓道から出土しているので後で説明する。②・③・④は玄室右袖の排水溝中より検出されたものである。また、⑤・⑥・⑦は右袖のコーナーで直刀の下にあったものを集めた。②・④は軸部の破片である。③は先端部矢の部分で尖根式で、平行形で逆反がつくものである。片丸造りである。残長8cmである。⑦は全体の形態が理解できるもので、残長が17cmである。竹の木質部が残っている。下端の5.5cmが竹で隠れる部分である。矢鐵は3cmが刺突部である。尖根式で平根形のもので、若干の逆反が造るものである。重量15gで、強弓が必要である。片丸造りである。⑥も同じ形態のもので、矢鐵の部分には逆返りがついているものである。⑤は矢鐵の部分の破片である。⑥・⑦は平造りである。

直刀（図版68、第83図） ①は左袖の鉢出土付近からでた小刀である。②・③は右袖で2本重なって出土したもので、③が上で②が下である。その間隙に偏平な河原石が敷いてあった。

①はハバキを保持したもので、鍔がなかった全長は柄まで44cmを計る。刀身は35cmで平棟平造である。重量は416.7g。勾玉・鉢も近くから出土している。②は鉢・ハバキ等の拵も残っているもので、鉢は素環である。直径8cm、短径7cm、横円形をなす。ハバキには木質が残っている。全長100cm（柄18cm・刀身82cm）幅3.7cm、平棟平造である。重量は刀身だけで1029.5gを測る。③は全長102cmで、柄18cm、刀身84cmで拵の部分は欠失していた。刃部は基部のが1部欠けているが、見るからに大振の太刀である。造りは平棟平造りで、柄には木質が残っている。刃部基部に2mmほどの孔がある。重量1124.8gで、当時は立派なものであったことが思われる。

#### 鉢出土状態（図版64、第84図）

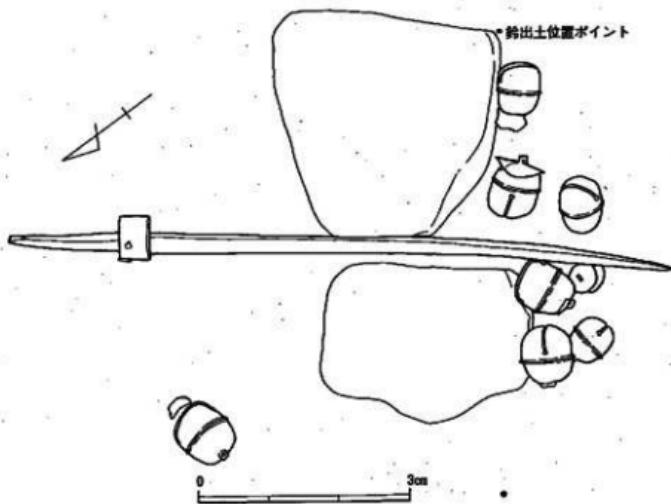
右袖より、第84図の様にまとめて出土したもので、小刀を中心に8個まとめて検出された。

#### 鉢（冠首図版5、第85図）

①は全体図と断面図を示したもので、銅地金箔張りで、中に鉄玉が入っている。紐付け部は新留タタキ込みである。造りは型抜きで精細なもので、円座を④の様な半径1.8cm円形の銅板に金張であるが、その部分は欠失している。重量21.4gである。

②は鉢体の長軸は3.8cm、短軸は3.6cmで、紐付け部0.7cm、本当に大振の鉢で、金箔で円座ついての当時の様子が目に浮かぶ。

③は大きさも①に同じで紐付け部の位置が相異なるが、新留のタタキが違う。重量16.3gで



第84図 居屋敷12号横穴墓遺物出土状態(鈴を中心に)実測図 (1/5)

ある。銅地金張。

③は大きさもほぼ同じで、円座の一部が残っている。鉄芯も中に入っている。銅地金張、鉛留である。18.6 g

④は円座も紐付部を完全に残り、鈴全体は同形、同一寸法で、重量33.9 g である。銅地金張、鉛留である。

⑤は円座の部分も残っており、鈴全体は同じ形で寸法も同様である。重量は17.5 g を測る。銅地金張である。

⑥は鈴本体は同形で寸法も同じである。重量は22.9 g を測る。銅地金張である。

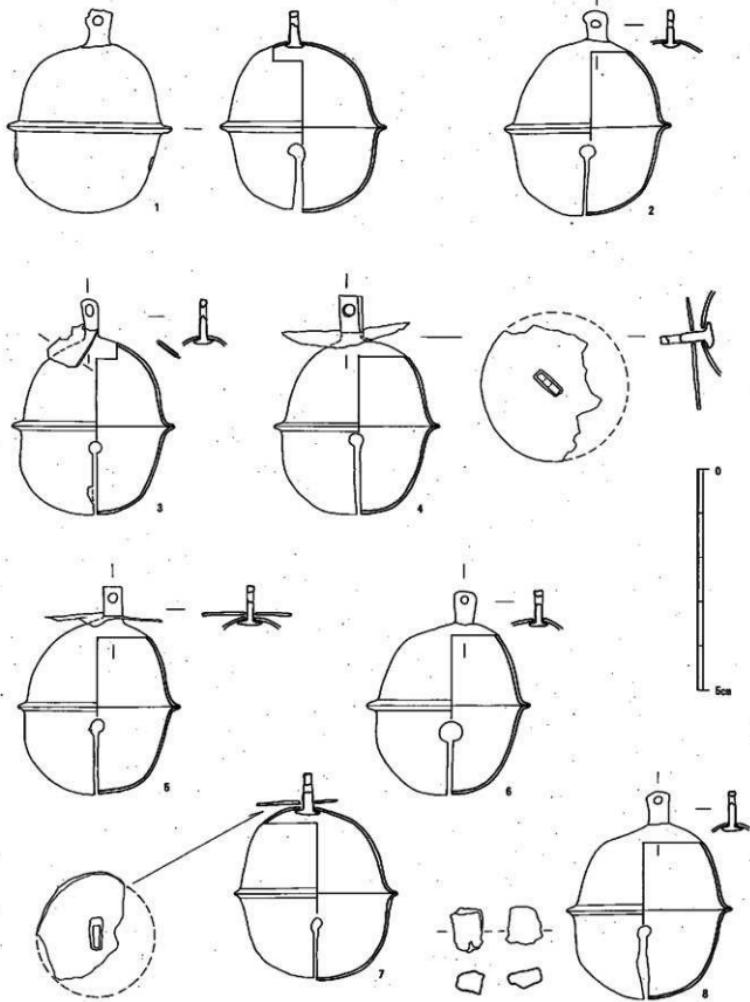
⑦は円座が残っており、鈴全体は同形で、寸法も同様である。重量13.4 g で、銅地金張である。

⑧は鈴本体が割れている。2 個鉄芯が中に入っている。鉛留であることが理解できたものである。重量11.7 g である。鉄芯が入ると 3 g 加わることとなる

#### 玉類 (図版67, 第86~88)

東奥の頭頂骨付近から大量のガラス玉が出土している。管玉も 1 点検出された。玉には大・中・小の 3 分類できる。

管玉 (第86図①) 碧玉製で、全長 4 cm, 幅1.2cm, 孔径 2 ~ 4 mm である。片面からの穿孔である。重量は3.7 g。



第85图 居星数12号横穴墓玄室出土遺物(鈴)実測図1 (1/1)

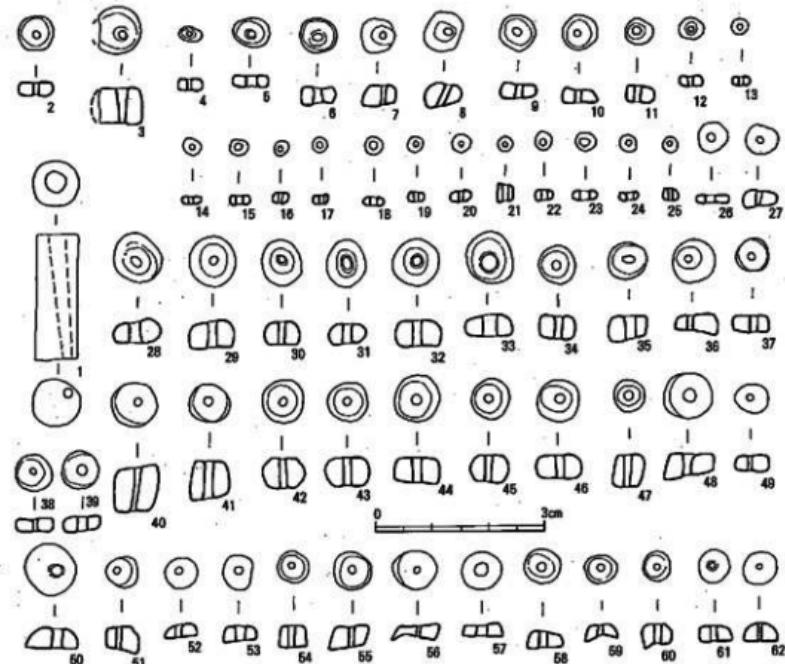
玉(図版67、第86~88図) 全てガラス製のもので、断面を見ると、統一性がなく、作り方が雑である。職人の技術は今一步である。

玉は大・中・小の3分類できる。大は直径8mm以上のもの、中は直径が4~7mmのもの、小は3mm以下のもので、中分類が大半を占める。第86図は中分類を集めてみた。重量は1gにも満たないものである。表2~表3で計測値を示す。

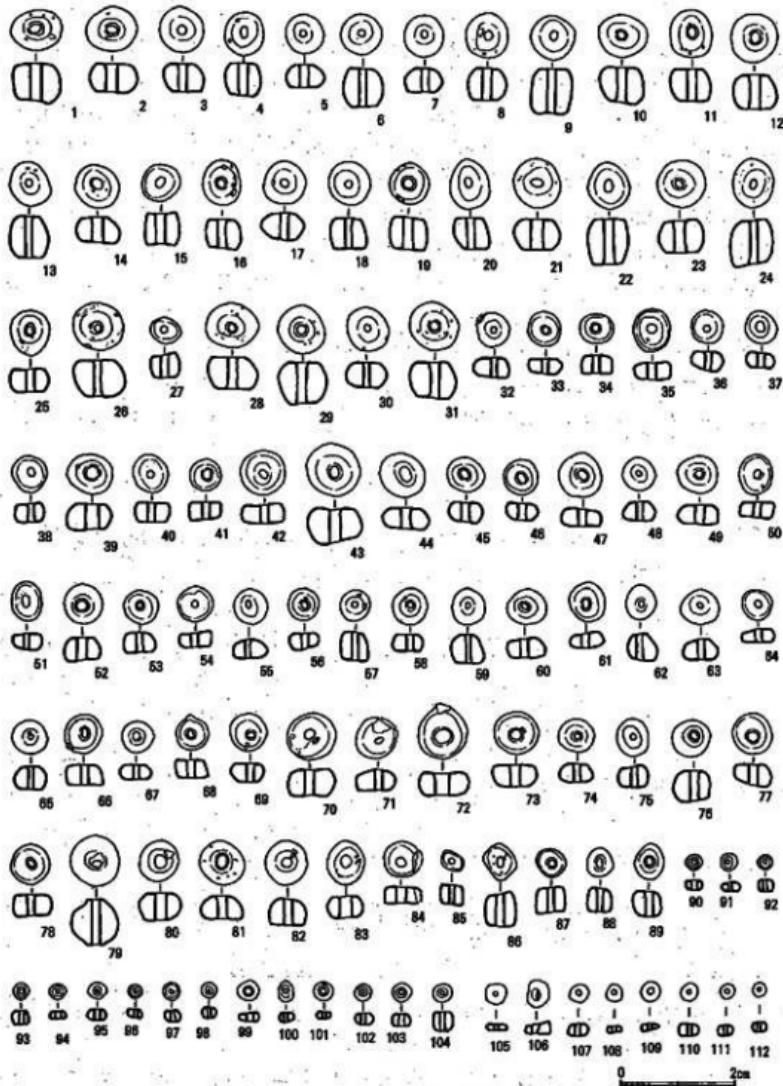
墓道覆土出土遺物(第78図・第89図・図版68) 墓道から浮いた状態で検出されたもので、大甕である。これと鉄錐が1点出土している。

鉄錐(第81図①) 墓道中より閉塞石近くから出土したもので、錐の基部の破片である。尖根式に分類できる。

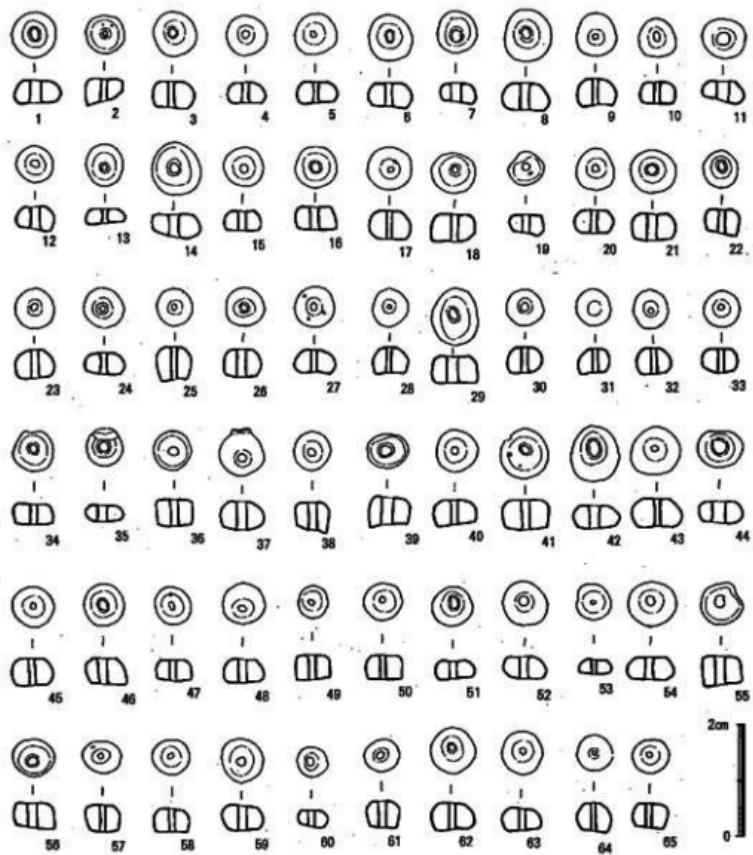
大甕(第89図) ①は口縁部から肩部破片で、復原口径は24.2cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黄味おびた灰色で、一部に黒色を呈する。灰かぶりところが内外面に部分的にある。焼成は良好である。器面の調整は頭部以下は平行のタタキの後にカキメで口縁部は頭部に1条の



第86図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図2 (1/1)



第87図 居屋敷12号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図3 (1/1)



第88図 居屋敷12号横穴墓玄室出土物(玉類)実測図4 (1/1)

沈線を施している。タタキ後ヨコナデで、口縁内面と同じで、脚部内面は青海波のタタキである。

②は胴部破片で器面の調整はカキメ、下部に格子目タタキ、内面は青海波のタタキ、①と②は同一個体と思われる。

③は胴部下半の小破片で、器壁の厚さは1.2cmである。器面の調整はカキメ後に格子目タタキで、内面は青海波文のタタキである。胎土に細砂を含み、色調は内外面とも黄灰色を呈している。焼成は良好である。

表2 玉計測表1 (第88回)

	径(mm)	厚(mm)	重(g)	色	取上No.	備考
1	8.3~8.0	4.0~3.8	0.4	薄水色		
2	7.2~6.9	4.4~2.9	0.3	リ		
3	8.6~8.2	4.6~4.1	0.5	リ		
4	7.4	4.2	0.35	明薄水色		
5	7.7~7.2	4.2~3.8	0.35	リ		
6	8.05~7.95	3.9	0.35	リ		
7	7.8~7.5	3.7~3.3	0.3	リ		
8	9.6~8.9	4.4~4.1	0.6	リ		
9	7.8~7.6	4.8~4.6	0.4	リ		
10	7.3~6.9	4.8~4.6	0.4	リ		
11	7.4~7.2	4.4~3.3	0.3	リ		
12	7.3~6.5	4.3~4.1	0.3	リ		
13	6.8~6.7	3.6~3.2	0.3	リ		
14	9.5~9.0	4.6~3.5	0.55	リ		
15	7.2~6.9	4.0~3.8	0.3	リ		
16	7.9~7.3	4.3~4.1	0.4	リ		
17	8.0~7.8	4.8~5.2	0.45			
18	7.8~7.5	5.2~4.6	0.4	リ		
19	6.5~6.0	3.8~3.0	0.2	リ		
20	7.2~7.1	4.0~3.6	0.25	リ		
21	8.1~7.8	4.7~4.2	0.4	リ		
22	6.5~6.2	4.6~3.9	0.25	リ		
23	7.0~6.8	4.8~4.6	0.3	リ		
24	7.6~7.4	4.0~3.4	0.3	リ		
25	6.9	5.8~5.5	0.4	リ		
26	7.6~7.5	4.9~4.5	0.35	リ		
27	7.8~7.4	4.3~3.9	0.35	リ		
28	7.0~6.9	4.8~4.6	0.35	リ		
29	10.2~9.4	5.1~4.9	0.75	リ		
30	6.6~6.4	4.8~4.7	0.3	リ		
31	6.5~6.4	4.4~4.2	0.3	リ		
32	7.0~6.9	4.8~4.5	0.3	リ		
33	6.6	4.7~4.0	0.3	リ		
34	7.5~7.3	4.1~3.5	0.3	リ		
35	6.9	3.5~3.1	0.2	リ		
36	7.3~7.1	4.7	0.4	リ		
37	9.0~8.3	5.5~5.0	0.5	明紺色		
38	6.5~6.3	4.8~4.6	0.3	リ		
39	8.1~7.0	5.3~4.9	0.4	リ		
40	7.7~7.6	4.6~4.4	0.4	リ		
41	8.9~8.7	5.3~4.8	0.5	リ		
42	9.6~9.2	4.3~3.2	0.4	リ		
43	9.0~8.5	4.8~4.3	0.5	リ		
44	8.1~6.9	4.1~3.7	0.3	リ		
45	7.5~7.4	5.1~4.6	0.35	リ		

一部欠損  
タテ方向のシワ有り  
突出部あり、切り取り痕か

	径(mm)	厚(mm)	重(g)	色	取上No	備考
46	7.5~7.2	5.3~4.5	0.4	明 色		
47	6.9	4.9~3.5	0.2	〃		
48	8.0~7.6	4.5~4.3	0.3	〃		
49	6.6~6.4	4.5~4.4	0.2	〃		
50	7.0	4.6~4.4	0.3	〃		
51	7.4	3.8~3.1	0.3	〃		
52	8.4~8.1	4.6~4.3	0.4	〃		
53	6.6~6.3	3.8~3.5	0.2	〃		
54	8.4~8.1	4.5~3.9	0.4	〃		
55	8.2~7.9	5.3~4.6	0.4	〃		
56	7.8~7.2	5.0~4.3	0.4	〃		
57	6.9~6.6	4.9	0.3	〃		
58	6.9~6.5	4.6~4.4	0.3	〃		
59	8.1~7.8	4.4~4.1	0.4	〃		
60	6.1~5.6	3.3~2.9	0.15	〃		
61	6.7~6.3	5.0~3.5	0.2	〃		
62	8.2~8.1	5.3~4.5	0.4	〃		
63	8.0~7.6	4.0~3.8	0.3	〃		
64	6.9~6.8	5.1~4.9	0.3	〃		
65	6.6~6.4	4.5~4.3	0.25	〃		

表3 玉計測表2 (第87回)

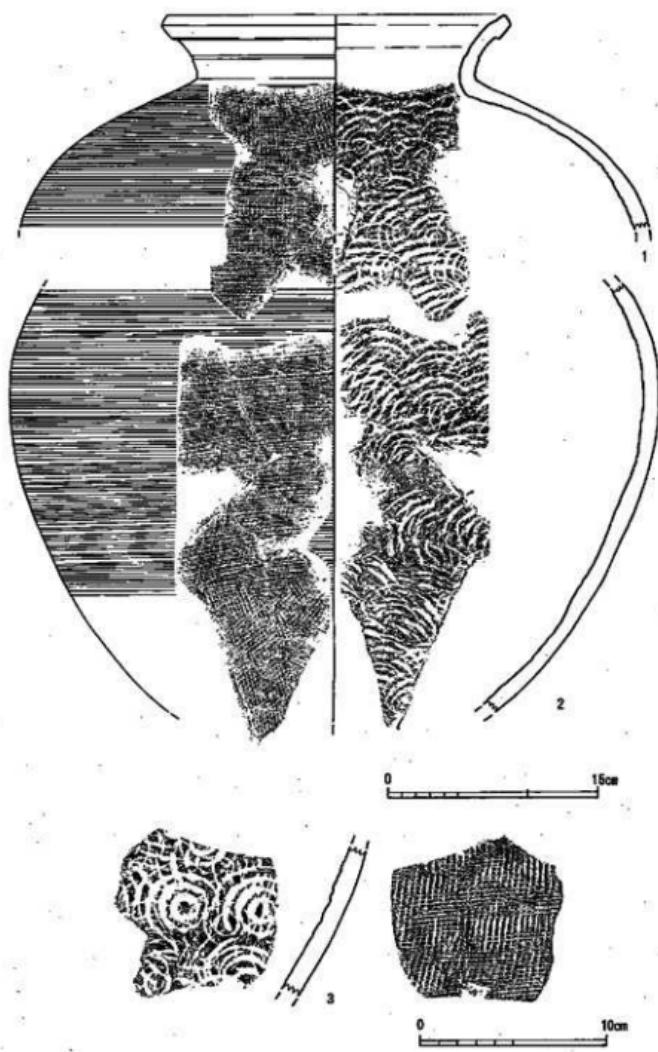
	径(mm)	厚(mm)	重(g)	色	取上No	備考
1	9.5~8.7	6.5~6.8	0.7	暗 色	1	上面、下面の研磨顕著
2	9.0~8.1	5.9~5.5	0.6	〃	3	〃
3	8.25~8.1	5.3~5.1	0.5	〃	5	〃
4	8.0~7.4	5.9~5.7	0.45	〃	13	〃
5	6.0~5.65	3.4~3.3	0.1	〃	15	〃
6	7.7~7.2	6.75~6.5	0.6	〃	16	〃
7	7.7~7.2	4.3~4.2	0.3	〃	17	下面にひねった痕あり
8	7.8~7.6	5.4	0.5	〃	18	〃
9	8.0	7.8~7.65	0.8	〃	19	〃
10	8.8~7.7	7.1~6.3	0.6	〃	20	〃
11	8.65~7.5	5.7~5.5	0.5	〃	21	〃
12	9.1~8.3	6.8~6.5	0.7	〃	23	〃
13	7.75~7.4	7.35	0.6	〃	25	〃
14	8.3~7.5	4.6~4.55	0.35	〃	26	〃
15	6.4	6.15~5.5	0.4	〃	34	〃
16	8.2~7.0	5.7~5.3	0.4	〃	39	〃
17	7.3~7.1	4.9~4.7	0.35	〃	40	〃
18	7.8~7.7	5.5	0.45	〃	44	〃
19	7.6~7.4	5.7~4.6	0.4	〃	45	〃
20	8.4~7.5	5.9~5.5	0.55	〃	53	〃
21	9.3~8.65	5.8~5.3	0.65	〃	58	〃
22	8.4~7.9	7.0~6.4	0.7	〃	63	〃
23	8.8~7.8	6.3~6.0	0.6	〃	65	〃

表3 玉計測表3 (第87回)

	径(mm)	厚(mm)	重(g)	色	取上No	備考
24	8.7~8.1	8.1~7.7	0.85	暗紺色	71	下面にひねった痕あり
25	7.4~7.3	4.1~4.0	0.35	〃	73	〃
26	9.6~8.7	6.9~5.6	0.75	〃	76	〃
27	5.6~4.95	4.6~4.0	0.15	〃	91	〃
28	9.7~8.3	6.4~5.8	0.65	〃	95	〃
29	8.8~8.3	7.5~6.9	0.75	〃	100	〃
30	7.8~7.25	4.8~4.7	0.3	〃	101	〃
31	9.0~8.2	6.6~6.2	0.7	〃	〃	〃
32	6.1~5.9	3.4~3.2	0.15	明紺色	2	
33	6.5~6.3	3.35~2.8	0.1	〃	6	
34	6.0~5.65	3.4~3.3	0.1	〃	7	
35	7.3~7.0	3.6~3.05	0.2	〃	8	
36	6.3~5.9	3.9~3.7	0.1	〃	9	
37	7.7~6.0	3.4~2.6	0.1	〃	57	
38	6.6~6.4	3.6~3.4	0.1	〃	〃	
39	7.4~8.2	4.7~3.8	0.35	〃	12	
40	6.9~6.7	4.4~4.0	0.25	〃	14	
41	6.05	3.9~2.7	0.2	〃	22	
42	8.15~7.7	4.0~3.3	0.3	〃	27	
43	9.6	6.3~5.6	0.75	〃	28	
44	8.5~7.8	3.8~3.5	0.3	〃	29	
45	6.7~6.6	4.0~3.6	0.2	〃	33	
46	6.5~6.3	3.5~3.3	0.15	〃	36	
47	7.8~7.5	3.8~3.4	0.3	〃	38	
48	6.3	3.5~3.3	0.1	〃	41	
49	7.15~6.7	3.5	0.15	〃	42	
50	7.3~6.6	3.4~2.9	0.2	〃	43	
51	6.7~5.7	3.1~3.0	0.15	〃	48	
52	7.5~7.3	4.3~3.9	0.3	〃	49	
53	6.3~6.0	3.5~3.3	0.1	〃	52	
54	6.4~6.3	3.15~2.55	0.2	〃	54	
55	6.3~6.1	3.8~3.5	0.15	〃	56	
56	5.9~5.7	3.3~2.9	0.1	〃	57	
57	5.6~5.5	5.3~5.1	0.2	〃	59	
58	6.0	3.5~3.2	0.15	〃	61	
59	6.5~6.2	4.7	0.2	〃	62	
60	7.2~6.7	4.0~3.2	0.25	〃	66	
61	7.1~6.7	3.3~2.3	0.15	〃	67	
62	6.2~5.9	4.8~4.5	0.2	〃	68	
63	6.8~6.5	4.1~3.3	0.15	〃	69	
64	6.0~5.8	3.8~2.0	0.1	〃	75	
65	6.2~6.0	4.4~4.2	0.2	〃	77	
66	7.2~6.8	4.0~3.85	0.3	〃	78	
67	6.1~6.0	3.4~3.2	0.15	〃	79	
68	6.4~6.2	3.5~3.0	0.15	〃	84	

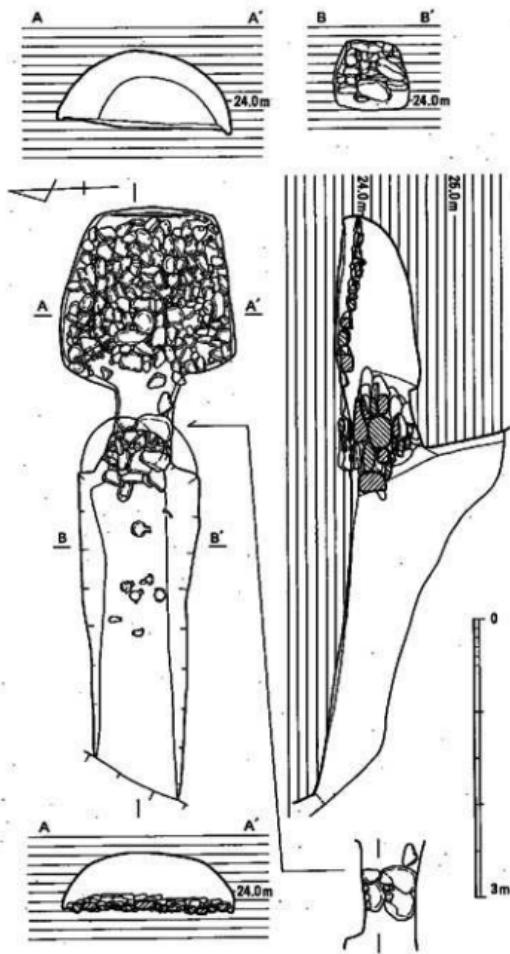
表3 玉計測表4 (第87回)

	径(mm)	厚(mm)	重(g)	色	取上No.	備考
69	6.8~6.6	3.9~3.0	0.2	明紺色	86	
70	9.2~8.6	4.6~4.1	0.5	〃	88	
71	7.7~7.1	4.2~3.7	0.25	〃	89	
72	9.0	4.9~4.0	0.5	〃	90	一部欠損 突出部あり
73	8.0	4.1~3.8	0.35	〃	94	
74	6.2~5.9	3.5~3.25	0.15	〃	97	
75	6.8~6.5	4.0~3.9	0.2	〃	103	
76	6.7	5.1~4.6	0.25	〃	105	
77	7.5~6.9	4.1~3.9	0.25	〃		
78	7.4~7.2	4.3~3.6	0.3	〃		
79	9.1~8.9	8.05	0.75	暗紺色	60	
80	7.6	5.0	0.25	〃	61	
81	8.3~8.1	4.0~3.8	0.35	薄明青色	87	
82	8.05~7.9	5.25~5.0	0.4	〃	93	
83	7.7~7.2	4.1~3.4	0.25	暗紺色	102	
84	6.7	3.35~3.2	0.15	明紺色	104	一部欠損
85	4.5~4.3	3.5	0.05	明紺色	4	
86	6.3~5.9	6.1~5.15	0.3	紺色	32	
87	5.4~5.0	4.8~4.4	0.15	明青色(濁)	72	
88	5.2~4.8	4.5~4.2	0.1	〃	74	
89	6.1~5.65	4.5	0.1	〃	96	
90	3.2	1.85	0.05	明紺色	30	
91	3.4	1.95	0.05	〃	46	
92	3.15	2.4	0.05	〃	47	
93	3.5	2.6	0.05	〃	80	
94	3.3	1.6	0.05	〃	83	
95	3.4	2.0	0.05	〃	98	
96	2.9	1.85	0.05	〃	99	
97	3.55	2.6~2.4	0.05	明青色	55	
98	3.0	2.2	0.05	〃	50	
99	4.0~3.65	1.7	0.05	〃	81	
100	3.7~3.2	2.2~1.8	0.05	〃	82	
101	3.5	1.7	0.05	〃	101	
102	3.4	2.2	0.05	明緑色	37	
103	3.7~3.4	2.6	0.05	明青緑色	70	
104	4.0~3.8	3.8	0.05	明水色	24	
105	3.5	1.2	0.05	明紺色		
106	4.5	2.5	0.05	明紺色		
107	3.0	2.2	0.05	明水色		
108	3.0	1.2	0.05	〃		
109	3.5	1.5	0.05	明紺色		
110	3.1	2.4	0.05	明青緑色		
111	2.6	2.1	0.05	明青色		
112	2.4	1.8	0.05	〃		



第89图 居屋数12号横穴墓墓道出土遺物実測図 (1/4・1/3)

以上の出土遺物からみて、当該横穴墓の時期は7世紀前半頃に位置づけられる。



第90図 居屋敷13号横穴墓実測図 (1/60)

## 16. 居屋敷13号横穴墓（図版69～76、第90～97図）

当該横穴墓は、12号横穴墓の3m南にある。中段の端となりその南はテラス状の台地となって、5～9号横穴墓の墓道域となっている。

当該墓は玄室+羨道+墓道からなり、全長620cmを測る。玄室は左右袖で20cm前後の出入りがある。中間をとって、180cm、羨道が90cm墓道は350cmである。墓道には供獻土器が墓道底から浮いた状態で出土している。玄室からは直刀・鉄鎌・ガラス玉等が検出され、須恵器等の器は出土していない。1墓道1横穴墓の形態である。

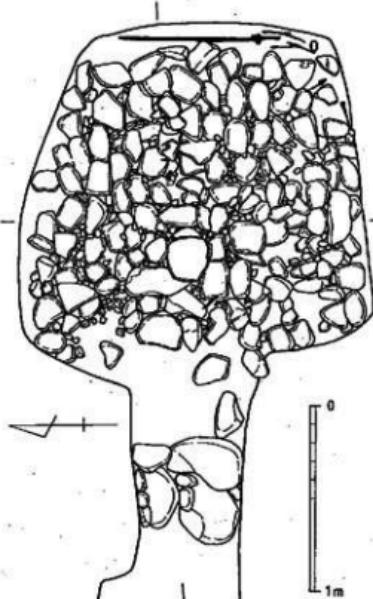
### 玄室（図版71、第90・91図）

平面形は方形を呈し、左右袖は一直線に描っていない。中央部で幅が185cm、長さ180cmである。左袖が奥壁から190cmで、右袖が奥壁から170cmで計測する。周間に排水溝が巡る。出土遺物は奥壁の周溝の中から直刀1点、鉄鎌4点、鉄輪1点が出土して、人骨の足付近から刀子1点とガラス玉が頸の位置付近で散らばっていた。人骨は辛うじて残っていた。性別不詳で残りは悪い。第91図が出土状態の実測図である。羨門部の框は5石をもって間隙に小石をつめている。天井高は敷石床面より70cmを計測し、断面はドーム形を呈し、左右に排水溝を營けている。前庭部が広く、奥壁20cmほど短い。

羨道部は左右の長が相異なる。左袖100cm、右袖が110cmである。

羨道には左側には20cm前後の張り出しを營けて右側は羨道下場と一致している。上面は見かけの張り出し部を營けなための立柱となり、左側は立派な立柱と正面からみると見える。羨道幅は60cm前後である。

閉塞石は、ぎっちりと河原石を入れている。下に入頭大の河原5段～6段くみ、その間隙に手頃な河原石を入れ閉塞している。



第91図 居屋敷13号横穴玄室遺物出土状態  
実測図（1/30）

出土遺物 (図版72・73, 第92・93図)

人骨は幸うじて残っていたが、性別年齢不詳である。

**刀子** (第92図①) 全長13cmで、柄4.5cm、刃部が8.5cmで、柄の部分に木質が残る。刃部幅1.5cmで、平棟平造である。良く使用されている。

**鉄鎌** (第92図②～⑤) 周溝の中から出土したもの全長が15～17cmで、残りが良い。②～④は尖根式のもので、②は木質が残っている。平丸造りである。⑥は斧箭式の方頭形である。軸部に木質が残っている。

**鉄輪** (第92図⑥) 楔円形をなすもので、短径4.0cm、長径5.3cmで、木質が残っている。刀の拵であろう。

**玉** (第93図) ⑦～⑪はガラス製の丸玉である。気泡が入っている。粒が崩っていない。材質は良くない。色調はコバルトブルーからブルーまである。

**直刀** (図版72, 第83図④) ④は柄の一部は欠失しているが、大振で鍔・ハバキ等の拵がしっかりしている。鍔長径7.5cm、短径6cmで、鍔環は6カ所窓が孔いている。ハバキを木質が残っている。重量は979.3gで、全長は87.5cmで、柄の残長14cm、刃部は73.5cm、幅3.75cm、柄の部分には木質が残っている。刀身は内弯している。

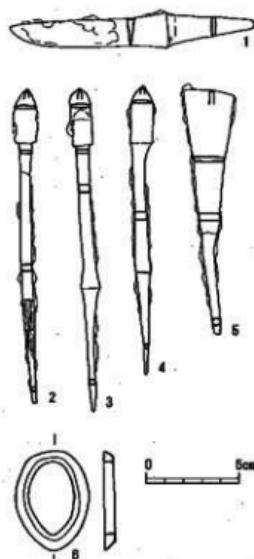
墓道出土遺物 (図版69, 第94～97図)

第94図が出土状態図である。墓道入口は近くの遺物は墓道底から若干浮いた状態であるが、他の遺物は完全に50cmぐらい浮いている。須恵器と石庖丁の破片が覆土中より出土している。

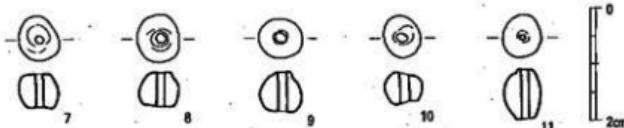
**須恵器** (第95図)

墓道入口部付近をまとめてみた。

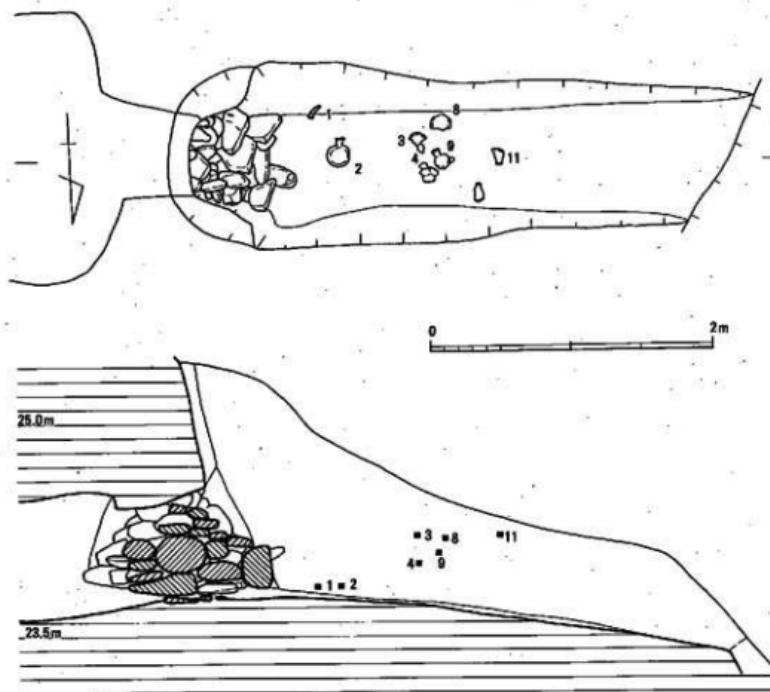
**提瓶** (①) 胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で、焼成は良好である。器面の調整は頸部か



第92図 居屋敷13号横穴墓玄室  
出土遺物(鉄器)実測図1(1/3)



第93図 居屋敷13号横穴墓玄室出土遺物(玉類)実測図2(1/1)



第94図 居屋数13号横穴墓道遺物出土状態 (1/40)

ら口縁部までがヨコナデである。腹部からカキメで底部までいたっている。

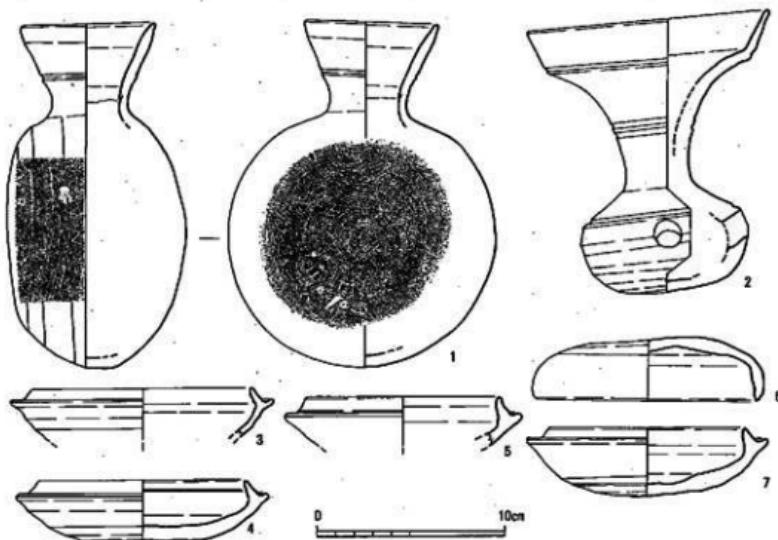
罐(②) 胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で、焼成は良好である。器面の調整は球体部下半はカキメで、それより上はヨコナデである。頸部にはねじり痕がみられる。

杯(③～⑧) ⑥は蓋、他は身である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で灰青色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は底部付近は回転ヘラケズリで、他はヨコナデ、内底部はナデである。⑥は天井部が回転ヘラケズリで、天井内面はナデである。他はヨコナデである。

須恵器編年型式のIV期である。

#### 墓道覆土出土遺物 (図版76、第96・97図)

出土状態図第94図の墓道中央部分出土の遺物をまとめてみた。

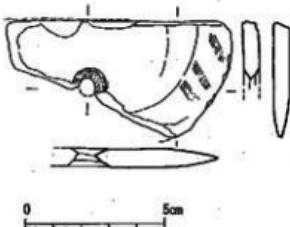


第95図 居屋敷13号横穴墓墓道出土遺物実測図（1/3）

**提瓶（①・②）** 小形なもので、胎土に細粒砂を含み、色調は灰色から青灰色を呈している。器面の調整は腰当部は回転ヘラケズリと口頸部はヨコナデである。焼成は良好で、①はヘラ記号が残っている。

**瓶（③）** 平瓶の胴部である。胎土には細粒砂を含み、色調は灰青色で、焼成は良好で、器面の調整は、胴部下半はカキメで、上部はカキメ後ナデている。内面はヨコナデである。

**高杯（④・⑤・⑥）** ④は図上復原できたもので、透しを上下にもっているので、口径11.2cmで、器高14.5cmである。脚部内面にねじり痕が残っている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。杯部に2条の沈線をもっている。⑤は脚部の小破片である。⑥も小形の高杯の脚部の根部である。器面の調整はナデである。胎土は④と同じ、焼成は良好で、色調は灰青色に黄味をおびている。



第97図 居屋敷13号横穴墓墓道出土遺物  
(石瓶丁) 実測図2（1/2）

**罐 (⑦・⑧・⑨)** ⑦は口縁部、⑧・⑨は球体部の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は⑦は内外面ともヨコナデである。球体部の底部はカキメで、その上半はカキメの後でナデである。

**杯 (⑩～⑫)** ⑩～⑫までは蓋で、⑬～⑯までは身である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰色～青灰色を呈している。焼成はほぼ良好である。器面の調整は、蓋は天井部と、身は底部に特長をもつ、すなわち回転ヘラケズリで他はヨコナデかナデで仕上げられている。同一技法である。

**土師器 (⑭・⑮)** ⑭は高杯の裾部の破片である。⑮は壺形土器の底部である。マメツがひどく調整は不明。

**石庖丁 (第97図)** 大形石庖丁の破片である。石材は粘板岩製である。上部の弥生遺跡から流入したものである。

出土遺物からみて、須恵器の編年のIVa期にあたるため、7世紀前半頃に当該横穴墓の年代を充てたい。

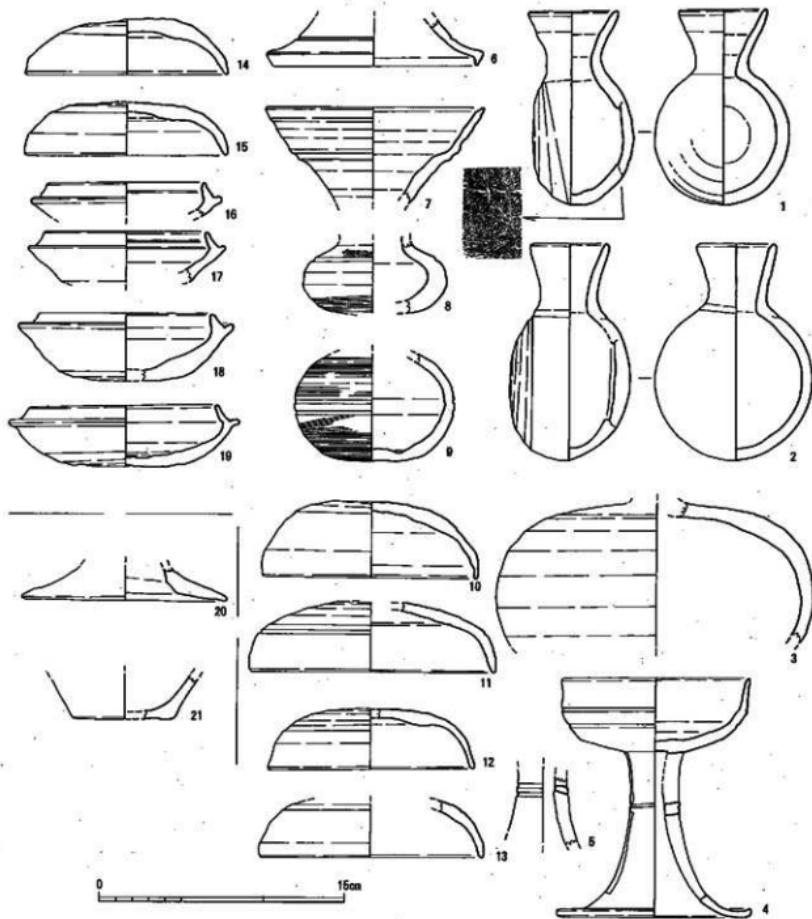
### 17. 居屋敷横穴墓南支群 (図版78・79、付図)

昨年に報告した鶴先遺跡の崖面に等間隔に4基の横穴墓を検出している。横穴1号墓を居屋敷S-1号横穴墓と改称する。これによって、横穴2号・3号・4号墓は、それぞれに居屋敷S-2号横穴墓、居屋敷S-3号横穴墓、居屋敷S-4号横穴墓と改称する。今後これに統一する。

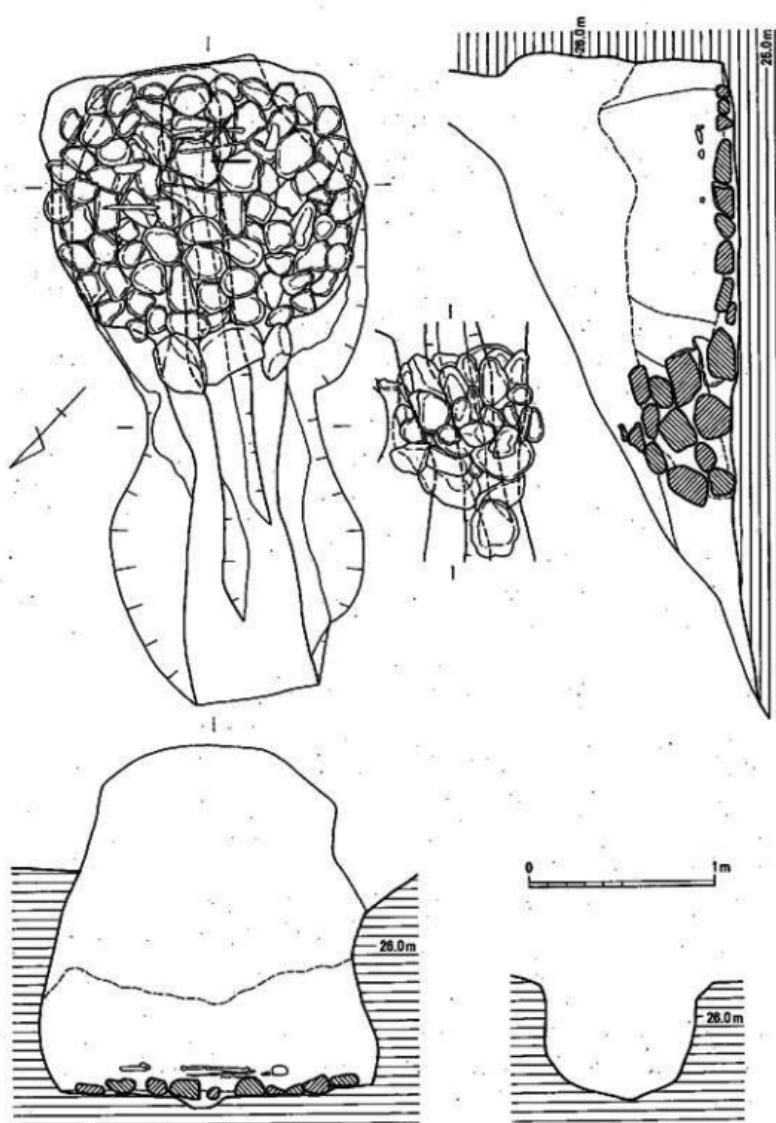
### 18. 居屋敷S-1号横穴墓 (図版80、第98図)

道側に一番近い位置で、残りの状態は良好である。主軸をN-45°Wで、玄室と墓道をもつものである。1墓道1横穴墓の形態である。

川の崖面から奥壁までの長さ340cmで、玄室は幅が170cm、奥壁から框石までの長さ170cm、平面形は不整形形を呈している。墓道部の入口まで170cmである。墓道部は最大幅が140cm、下端で60cmで、全長170cmである。閉塞の状態は長さ120cmに積まれ、高さ60cmで閉塞されている。最終埋葬以前の閉塞石には間層が目立たないが、上部の閉塞石の石材の間に土砂を多く含む。玄室の床面には中央に排水溝をもち、幅30cm、長さ250cmである。溝は極めて浅く奥と先端では高低差は5cmである。玄室の奥壁近くに、床面から頭を南位として人骨が残っていた。人骨は成



第96図 居屋敷13号横穴墓墓道覆土出土遺物実測図1



第98図 居屋敷S-1横穴基実測図 (1/30)

人男性のもので、副葬品は検出できなかった。

砂砾層の蜜岩を切り込んで横穴墓が掘られ、玄室の床石は偏平な河原石を敷石としている。蜜岩に掘られた排水溝は、その部分に蓋状に石の長手を溝と直交させている。そしてその間層をはさむ。ただし、蓋は概石よりも内側のみである。

床石は概石内側まで、墓道部ではない。横穴墓の全体としては、歪みが目立つが、藻を含み、軟・硬部がいりまじった地盤のために、やむを得ないものである。天井部の崩壊が数カ所見られる。

### 19. 居屋敷 S-2号横穴墓 (図版81・82、第99・100図)

S-1号横穴墓の南にあって、造り出し状の羨道の意識をもつたものである。その南側の造り出し部は削平されている。主軸を N-63°-W で西側に開口する。玄室と羨道と造り出状をもつた墓道をもつ、1基道1横穴墓の形態である。

玄室の平面形は隅丸方形で、30cmほど張り出して、60cmの羨門部を營けている。袖石風に一石を立石させ、外側の石を3段に構築している。横には2石をならべて60cm幅で羨門部を意識的に造り上げている。

墓道部は羨道の入口より60cmほど北側にはいる。西側80cmほどで、崖面に同化している。当該横穴墓も蜜岩をくり貫いて造られているもので、玄室の床面に偏平な河原石をもって敷石されている。

玄室をつくるために、意識的に奥壁から10cm前後の傾斜を付けて床となし、羨道の1/3のところで10cmの段を付けて下がり、そして羨道から墓道入口で50cm順々に下がってくる。70cm前後の高低差をもっている。

出土遺物は南側の羨道部に蓋と高台付杯が検出された。

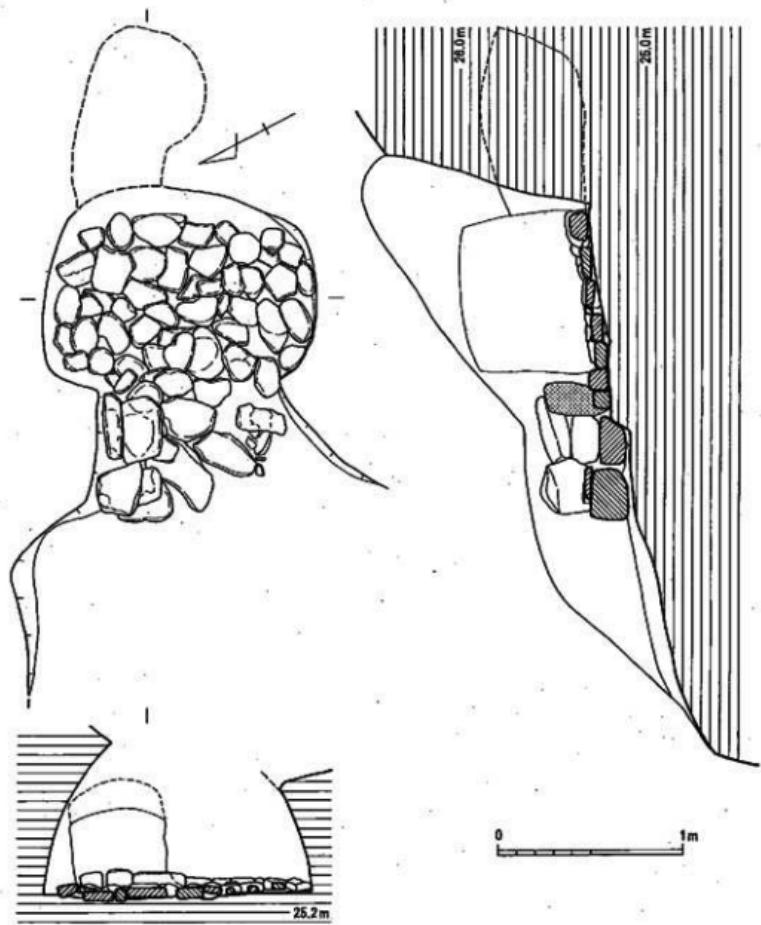
奥壁部には後世にイモ穴が掘れている。

#### 出土遺物 (第100図)

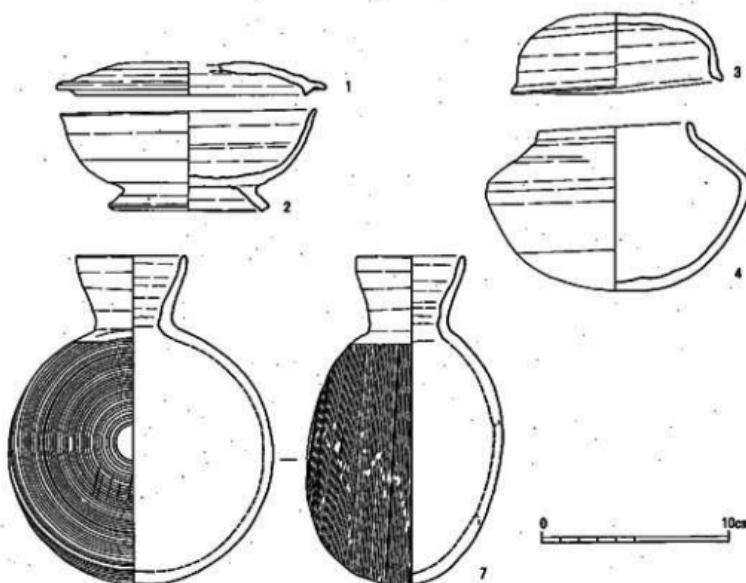
羨道部の南側から出土したもので、須恵器の蓋と高台付杯である。

蓋(①) 天井部にツマミがつくもので、復原口径が14.6cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で、赤味をおびている。窯の温度が上がってない。所謂素焼きである。他はヨコナデ、受部をもっている。

高台付杯(②) 胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒味をおびた灰青色で、焼成は良好である。口径13.7cm、器高5.3cm、底径8.7cmである。器面の調整は体部下半がヘラケズリで、他はヨコナデ、内面はナデ仕上げで、製品として良くない。



第99図 居屋敷 S-2 横穴墓実測図 (1/30)



第100図 居屋敷S-2～4横穴墓出土遺物実測図 (1/3)

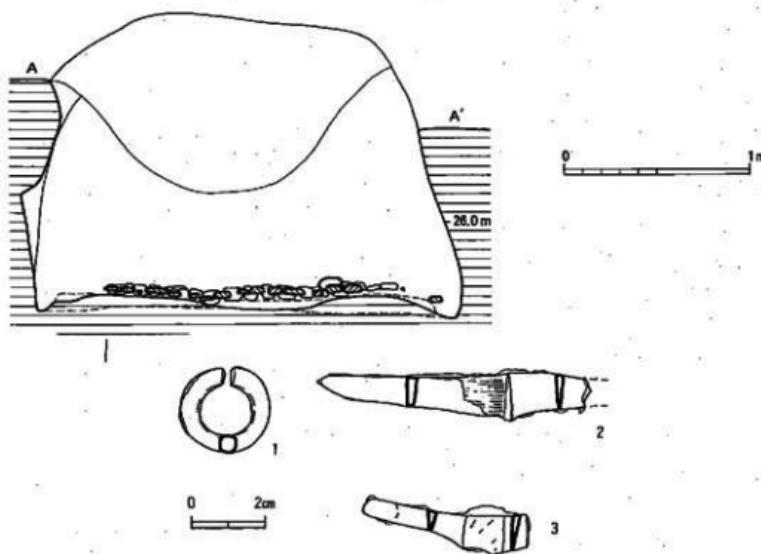
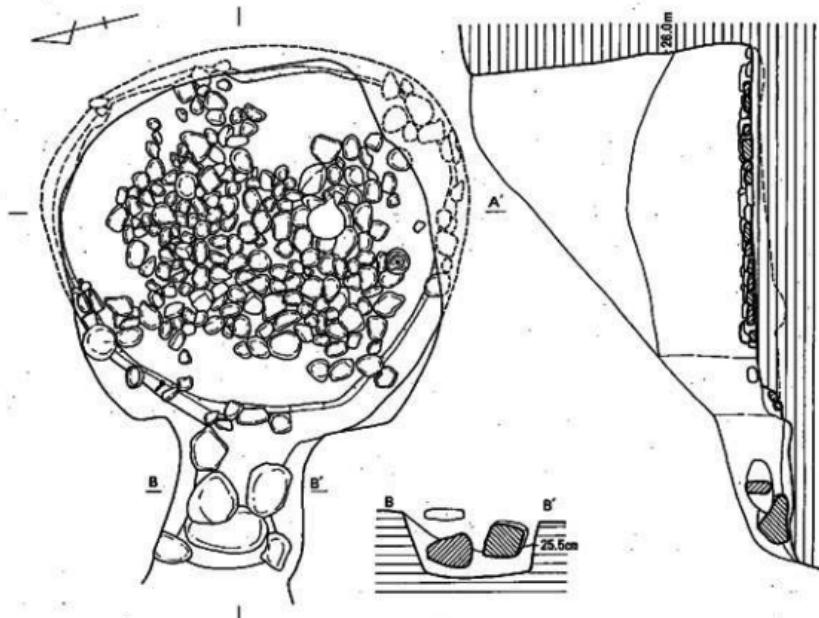
時期的には、出土遺物から須恵器IV bと考えられる。年代は7世紀前半から7世紀半頃を充てたい。

## 20. 居屋敷 S-3号横穴墓 (図版83・84, 第100~102図)

S-2号横穴墓の南側にあって、墓道の一部を残して削平されている。当該横穴墓は蜜岩をくり貫いて造られているもので、奥壁が高く順々に川側に傾斜している。

主軸をN-64°-Wで西に開口する。玄室の平面形は巾着形で、直径230cmの円形をなしているもので、それに残長1mほどの墓道を付設しているものである。奥壁から壁に沿って、幅が10cm前後の深さ10cmの排水溝を掘っている。床には河原石を敷いて床をつくっている。しかしながら1/2は後世の人たちによって荒らされている。天井部までの断面はドーム状をなしている。出土遺物はこの横穴墓が一番もっていた。

出土遺物は排水溝の中から刀子・耳環が検出されている。土器類についても、北壁側の中央



第101図 居屋敷S-3横穴墓・出土遺物実測図実測図 (1/30・2/3)

より前面に提瓶と蓋が出土し、中央部より南に提瓶と直口壺が出土していた。蓋は横向きであった。

墓道は10cmほど一段下がった状態で幅が80cm残長が1mである。閉塞時に使用した河原石が残っている。墓道の深さは30cmである。断面はU字形をなしている。墓道から出土遺物はなかった。

#### 出土遺物（第100・101・102図）

床面と排水溝中より出土したもので、耳環・刀子2点と須恵器が出土した。

耳環（第101図）(①) 金張のもので、青銅に金箔を張ったもので、径が2.3cmである。重量15.2gで重さを感じる。

刀子（第101図）(②・③) 南側の奥壁から出土したもので、②は刀子の柄部分で木質部も残っている。刃部は細身でよく使用されている。③も②の横から出土したもので、刀子の柄の部分である。ハバキの位置が若干残っている。刃部の断面は二等辺三角形で平棟平造である。

#### 須恵器（第100・102図）

壺（第100図）(④) 直口壺とセットとなるもので、④にともなう。

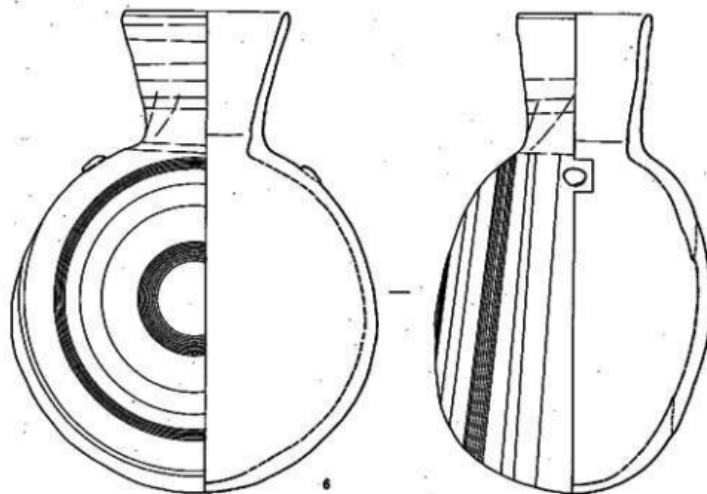
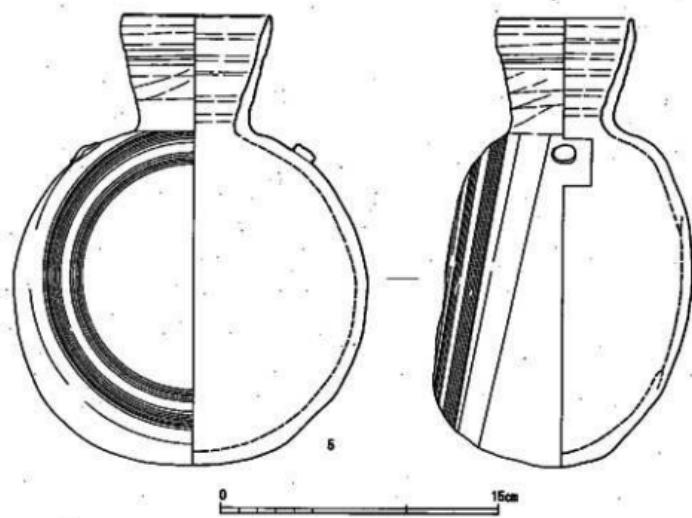
胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で口径11.3cm、器高3.6cm～4.3cmでひずんでいる。器面の調整は天井部は回転ヘラケズリで、他はナデ仕上げである。焼成は良好である。

直口壺（第100図）(④) ④とセットとなるもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒味をおびた灰青色で、口径8.0cm器高9.0cmで、最大径14.0cmである。口が直口する。

器形は肩部にひずみがある。焼成は良好で、器面の調整は底部ケズリで、他はヨコナデで、ナデ仕上げである。

提瓶（第102図）(⑤・⑥) ⑤は中央より北側より出土。⑥は中心部の南で、実測中心線にのっている。前者の⑤は、胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で黄味をおびる。口径7.3cm～8.0cmで、器高24.0cm、最大胴径19.2cmである。焼成は良好である。器面には口縁部直下に2条の沈線をもち、頸部にボタン状の把手をもつ、背部にはカキメをもっている。縁部から胴部には灰をかぶっている。調整はヘラケズリとナデを併用している。⑥は胎土に細粒砂を含み色調は灰青色で、黒味をおびている。口径7.0cm、器高25.2cm、最大胴径20.0cmである。頸部内面と外面半分ぐらいいは、灰かぶりのため、自然釉になっている。焼成中に置いた置台の跡が残っている。焼成は良好で、胴部とカキメとナデである。

出土遺物から、当横穴墓の年代は、6世紀末から7世紀半頃を充てる。



第102図 居屋敷S-3横穴墓出土遺物実測図 (1/3)

## 21. 居屋敷 S-4号横穴墓（図版85、第103図）

S-3号横穴墓の南に位置し、墓道部と玄門部を削平されて、玄室の平面形は胴張りの正方形を呈している。

主軸 N-78°-W で、西に開口する。

南北方向は395cmと東西方向は残長365cmである。玄室をくり貫いて横穴墓を造っている。奥壁と周囲の壁には幅10cm、深5~7cm前後の排水溝がまわっている。中軸線の南側にも幅35cmで、深さ8cmの排水の溝が確認されている。

床面には河原石を敷石としている。奥壁と西端では6~8cm高低差がある。奥が高く西が低い。横断はほぼ水平であるが、北と南にU字形の排水溝をもつ、傾斜に沿って偏平な河原石を敷いているため奥壁近くが高くなる。

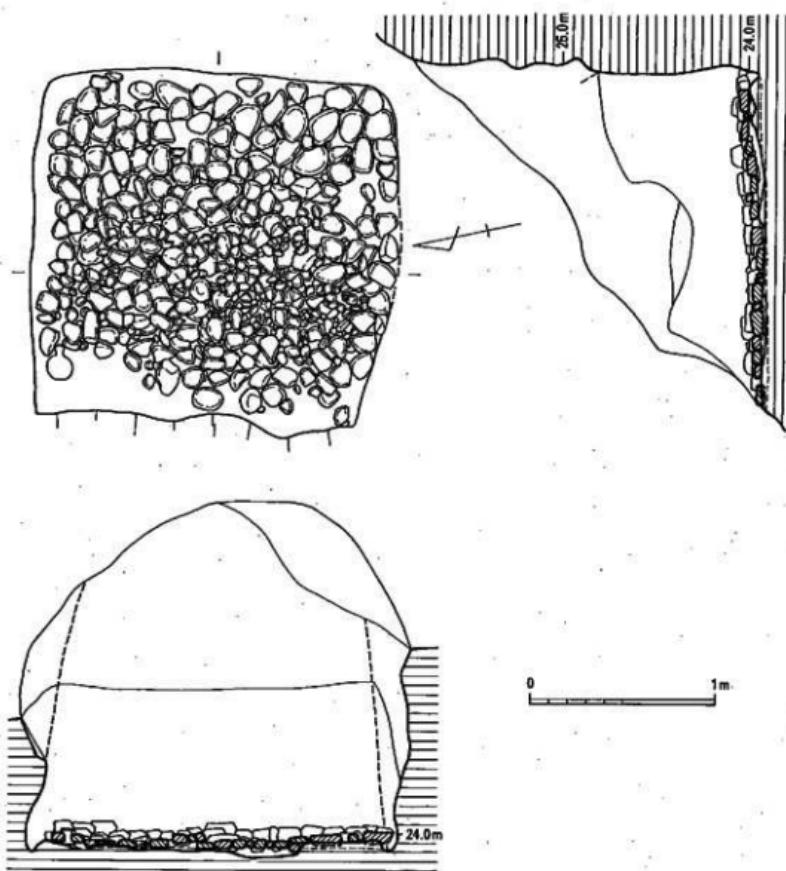
出土遺物は北西端のコーナー付近で、小形の提瓶が床面より出土している。

### 出土遺物（第100図）

玄室の北西コーナー付近から出土した提瓶である。

提瓶(⑦) 胎土に細粒砂を含み、色調は、灰青色で、口径6.0cm、器高17.6cm、最大胴径14.1cmである。器面の調整は、胸部はカキメを施し、口縁から頸部直下までヨコナデ仕上げである。胴には工具痕がこっている。焼成は良好である。

出土遺物から当横穴墓の年代は、7世紀初頭から7世紀半頃に位置付けされる。型式から言えればIV b期が主である。



第103図 居屋敷S-4 横穴墓実測図 (1/60)

## 22. 小 結

当該横穴墓の時期は出土遺物から6世紀末から7世紀半頃までの須恵器編年ではIV期a・bが主である。一覧表を示してまとめとする。

表4 居屋敷横穴墓一覧表

横穴墓番号	横穴墓主軸 たてじぶんじゆく	横穴墓平面形	閉塞石 ひさいせき 有無	出土遺物		須恵器 しゆえき 編年	時期
				墓道	玄室		
0号 横穴墓	墓道のみ	一	—	—	—	—	—
1号 横穴墓	調査で 不明	一	—	須恵器片	—	—	—
2号 横穴墓	—	一	—	—	—	—	—
3号 横穴墓	—	一	—	須恵器 (JR 2点)	—	IVa	7世紀前半
4-1号 横穴墓	150×220	N-55°-W 巾着形	有	—	須恵器(壺・杯・高杯・ 壺・平瓶・長颈壺)	IIIb-IVa	7世紀初頭
4-2号 横穴墓	200×230	N-59°-W 羽子板状	有	須恵器・土師器	耳環2・直刀1・刀子・鉄 鏡・須恵器6	IVa	7世紀前半
5号 横穴墓	220×220	N-90°-W 方形	有	弥生土器5・火合・小 皿・須恵器50・石鏡	鉄鏡・馬具・耳環・土糸・ 刀子・ガラス玉	IVa	7世紀前半
6号 横穴墓	210×215	N-95°-W 方形	有	須恵器17・鉄鏡1	須恵器3・ガラス小玉・ 耳環2・鉄鏡1	IVa	7世紀前半
7号 横穴墓	150×120	N-75°-W 巾着形	有	—	灯明皿・勾玉・管玉・ガ ラス玉・耳環	IVb	7世紀半
8号 横穴墓	175×150	N-79°-W 巾着形	有	須恵器18・鉄鏡	管玉3・ガラス小玉2	IVa	7世紀前半
9号 横穴墓	230×210	N-41°-W 不整形	有	須恵器5	玉(勾玉・管玉・ガラス 小玉・土玉)須恵器1	IVa	7世紀前半
10号 横穴墓	破壊	N-115°-W 不整橢円形	—	—	—	—	—
11号 横穴墓	200×180	N-46°-W 方形	有	耳環1	人骨2・耳環5・刀子1・須 恵器4・土師器2	IVb	7世紀半
12号 横穴墓	220×220	N-53°-W 方形	有	鉄鏡・須恵器片	人骨4・直刀3・鉄鏡・鉄 8・耳環4・須恵器・玉類	IVa	7世紀前半
13号 横穴墓	185×180	N-85°-W 方形	有	須恵器26・土師器2・ 石盾1	人骨1・直刀1・鉄鏡4・刀 子1・ガラス玉・鉄輪1	IVa	7世紀前半
S-1号 横穴墓	170×170	N-45°-W 不整形	有	—	人骨1	—	7世紀半?
S-2号 横穴墓	160×100	N-63°-W 巾着形	有	須恵器(蓋・高台付杆)	—	IVb	7世紀半
S-3号 横穴墓	直径230	N-64°-W 巾着形	有	—	耳環1・刀子2・須恵器 (蓋付直口壺・提梁)	IVb	7世紀半
S-4号 横穴墓	395×365	N-78°-W 方形	有	—	須恵器(銘板)	IVb	7世紀半

当該横穴墓群は、戸川の河川敷を大きな墓道と考えることができないだろうか。

例えば、竹並横穴墓群<sup>(1)</sup>では、横穴墓の発掘調査は1,000基に及んでいるため、検証例が多い。竹並の横穴墓の時期は5世紀後半から奈良時代までみられる。

5世紀後半の横穴墓は不整形な玄室に短い狭道が付設され、鏡を副葬するものもある。6世紀前半の横穴墓は規模も大きく、玄室も家形となり、横穴墓として完成した姿を示す。6世紀後半になると、横穴墓の数も急激に増加し、1つの墓道に複数の横穴墓をもつものも現れる。1つの横穴墓に埋葬される人々が血縁的に近いものに限られてくるようになる。7世紀後半から8世紀段階では量的に激減するものである。全期間にわたって横穴墓の形態的な変化をたどることができている。

竹並遺跡の中で6世紀後半から7世紀初頭には1つの墓道に複数の横穴墓をもつものが目を引くものである。家族墓的様相を見出される。

戸川と墓道と考えるならば、前述と同じ状況を呈していることになる。

横穴墓群の土層は古生代の砂疊層で、居屋敷付近で小さなこぶ状を呈している。この層を掘って横穴墓を造営している。このこぶ状が南支群のS-4号横穴墓にいたっているわけで、河岸段丘の壁は南行くほど逐次低くなっている。

地層がこの付近で相違している砂疊層から沖積層に変化しているもので、隣接の鍋先遺跡<sup>(2)</sup>では、3区に7基の高塚の円墳を検出している。

時期的には横穴墓群と同時期に造営されている。このことは、土層の相違を上げることができる。

横穴墓に埋葬者と、高塚に埋葬された人との当時における階級的差異についてはどうであったかは、詳細には証明できなかった。

これを今後の課題として残しておく。

#### 註

註1 舟山良一「須恵器の編年2、九州「6土師器と須恵器」『古墳時代の研究』1991、雄山閣

註2 「竹並遺跡(弥生・古墳)」竹並遺跡調査会編 1978 竹並遺跡発掘調査団

註3 副島邦弘編「鍋先遺跡」椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第5集 福岡県教育委員会

#### (4) 居屋敷窯跡の遺構と遺物 (図版86~90, 冠首図版6, 第104~111図)

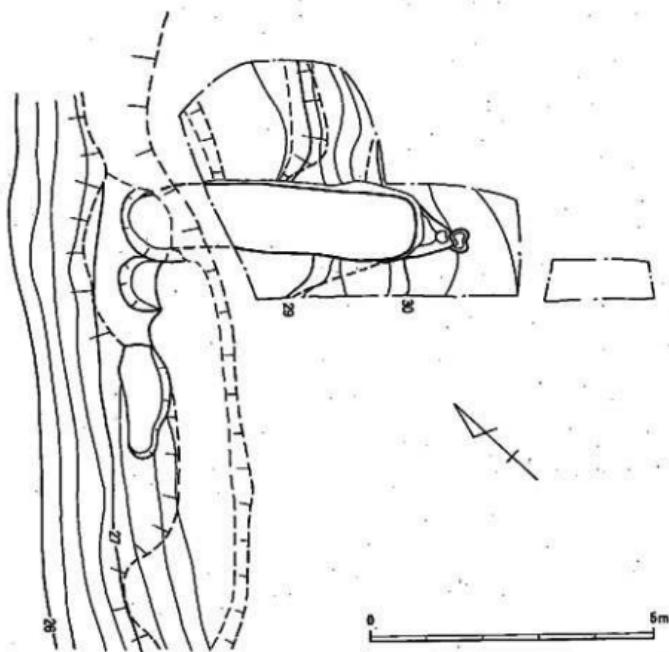
##### 1. 居屋敷窯跡の窯本位

窯跡の位置は、丘陵の最上部にあって、4—1号横穴墓南側、11号横穴墓の上面に位置している。標高28m~29m前後にあたる。

窯は道路の法面境界線上にあって、試掘の折に窯本体の焚口の一部を検出した。このことを受けて、 $2 \times 10\text{m}$ の $20\text{m}^2$ を地権者から借上げて、窯本体の発掘調査を実施した。

主軸をN—45°—Wにとり焚口は西方向である。煙出しが東にとる。全長600cm、幅120cm、半地下式の窯である。

窯本体の平面形は、焚口が若干細身で本体はずん胴を呈している。最大幅は窯の最奥部で120cmを測る。焚口は100cmで、前庭部の広がりはない。



第104図 居屋敷1号窯跡地形調査図 (1/100)

**焚口部** 幅100mで、床面は緩傾斜面をなしている。左右の壁は、U字形で若干開き気味である。操業面をみると2回ほどの改造を行っている。焚口の標高は27mである。

**燃焼部** 焚口から窯内のどのあたりまでを燃焼部と考えるかは区別がむずかしいが、道路境界線の位置が、床面の傾斜角度が相違する。これを燃焼部にあてたい。

**焼成部** 燃焼部より床面の傾斜が緩やかになり、傾斜角度は25°を測る。窯体幅は110cmで、煙道付近で120cmを測る。床面は若干の凹凸がある。焼台として、こぶし大の河原石や人頭大の偏平な河原石も利用して、置台としている。B-B'の断面を見ると中央部が凹み、壁は内傾しながらドーム状になるものと考えられる。この窯は操業後2回の改造がみられる第105図の断面実測図で示す。

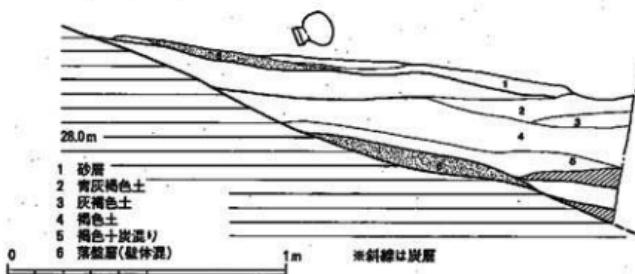
**煙出部** 窯の奥部の煙出部分は、床面からほぼ直角に壁となっている。煙出し部は大半が破壊されているために、造構を正確に把握することが出来なかつたが、50cm東側に煙出し部の一部を検出した。赤変してバリバリの状態であった。平面形が不整梢円形を呈し、長軸が40cmで、短軸が20~25cmで、残深は10cmを計測する。周辺には灰原等は検出できなかつた。

#### 窯内遺物の出土状態（図版89・90、第107・108図）

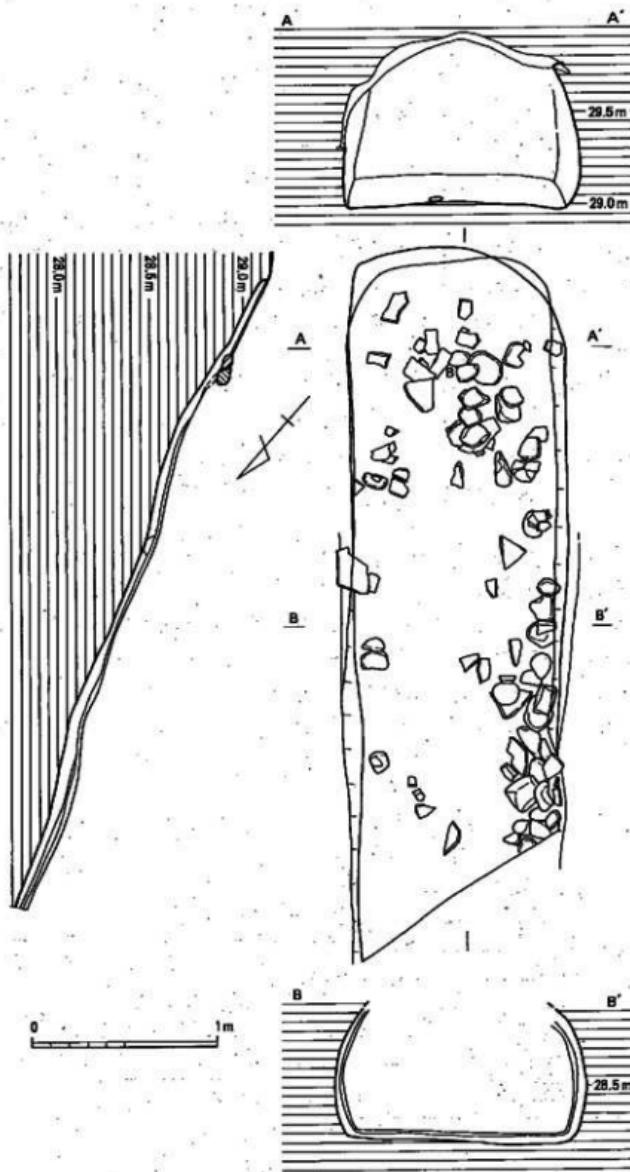
床面から大甕破片・完形の跡が出土している。

跡は床面より30cm浮いた状態で、口を東側に横転したような形で検出された。基本的には3次の床面に横たわっていたものである。第105図は窯内断面を見ていただきたい。焼成時の砂床が3枚ほど見られる。最終床面に密着して甕が出土したことが理解できる。

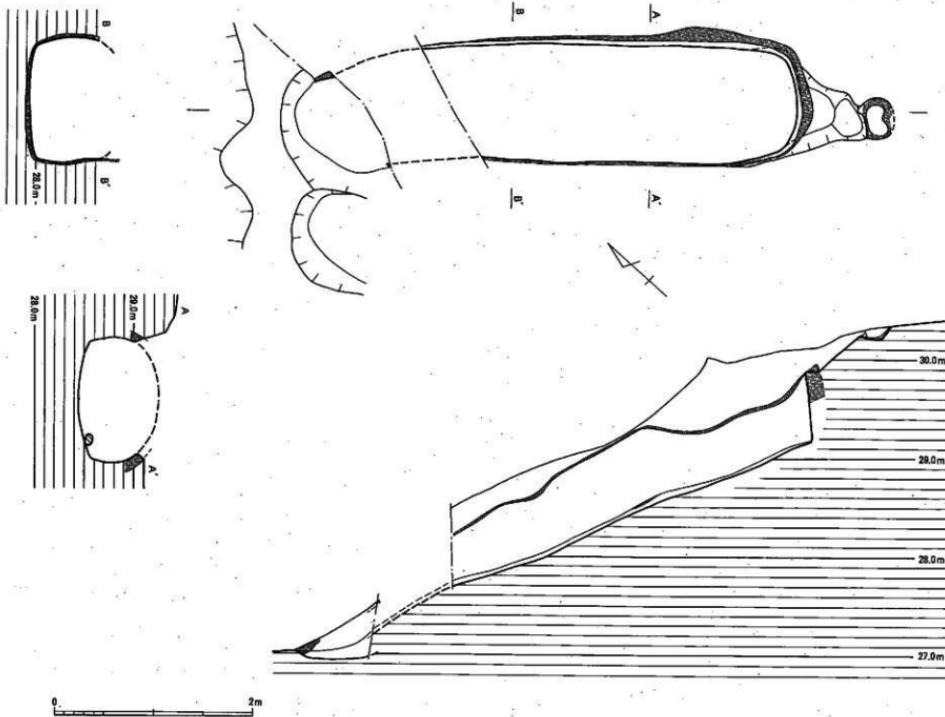
大甕の破片は床面に密着したものと若干浮いた状態のものもみられ、置台の可能性が大であ



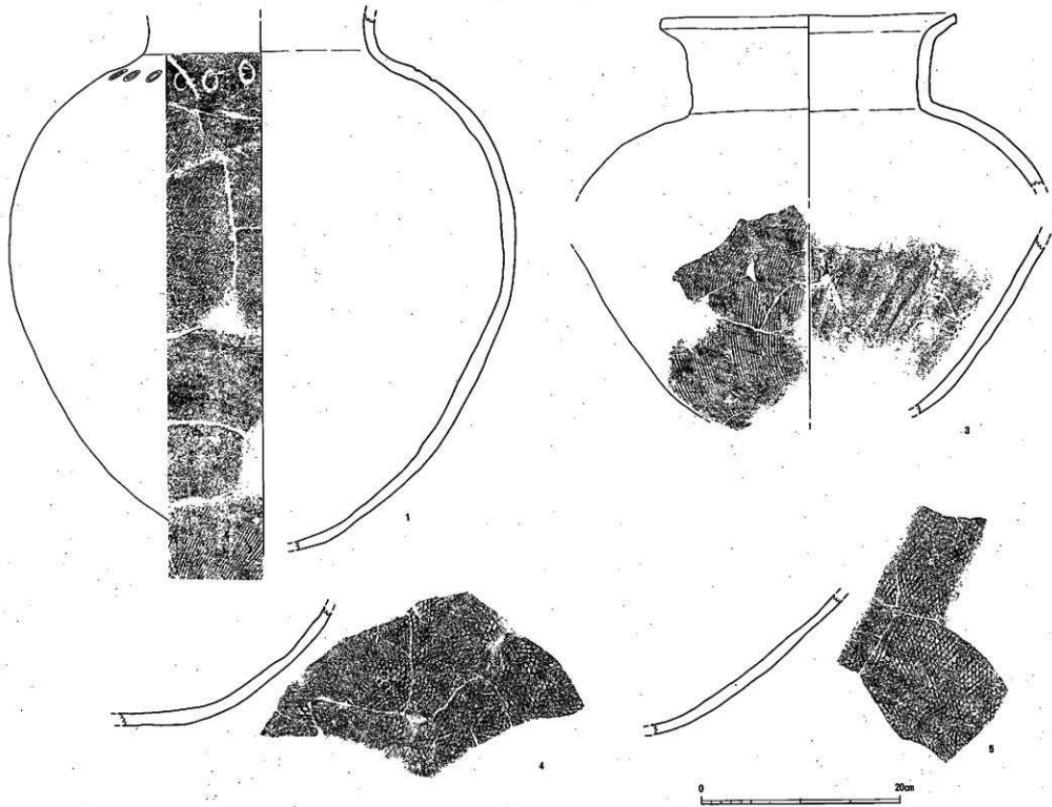
第105図 居屋敷1号窯跡窯内断面図（1/20）



第107図 居屋敷1号窯床遺物出土状態実測図 (1/30)



第106图 后屋救1号深孔实测图 (1/40)



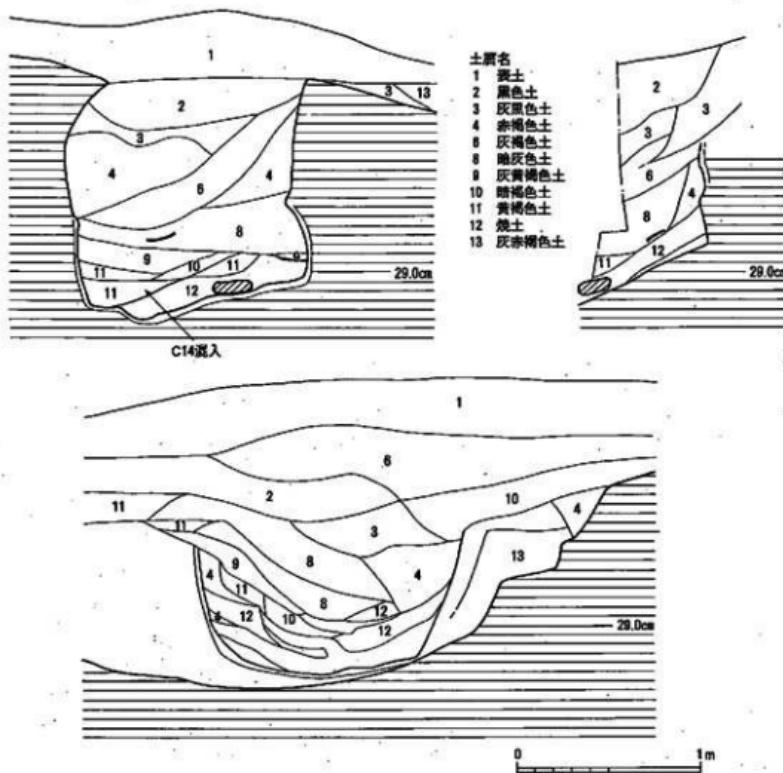
第109图 层级数1号墓随葬品出土物实测图1 (1/4)

る。破片に番号付けして、その動きを追うと、窯東壁奥から焚口付近まで移動がみられる。大形壺の口縁（第109図②）とスタンプをもつ壺（第109図①）等がそれである。

## 2. 出土遺物（図版89・90、冠首図版6、第109・111・112図）

窯内から出土したものを取り上げる。砾以外は全て壺の破片である。

壺（①・②・③・④・⑤・⑦・⑧）



第108図 居屋敷1号窯跡窯横断面土層図（1/30）

①は胎土に砂粒を含む、茶黄色から黒灰色を呈し、焼成は軟質で、土師質である。胸部破片で頸部に楕円文のスタンプ文が刻されている。腹部最大径は、50cm前後である。器面の調整は頸部以下は平行タタキメである。内面はナデ仕上げである。

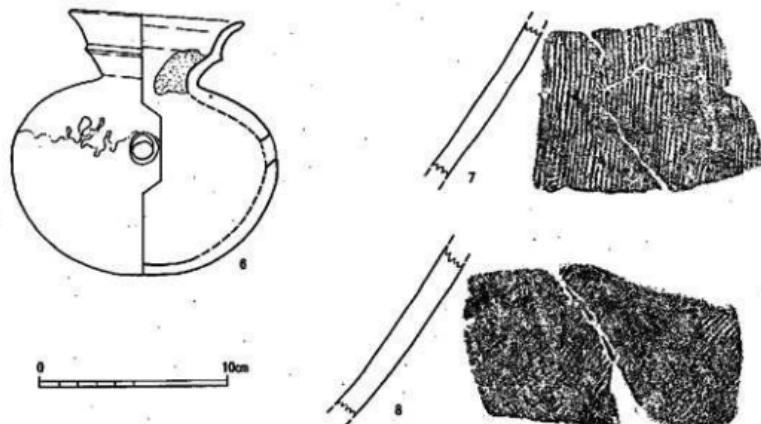
②は甕の口縁部破片で、復原口徑29.8cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、色調は黒味をおびた灰黄色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、内外面ともナデである。

③は甕の底部近くの破片で、胎土に砂粒を含み、色調は茶黄色から黒灰色を呈し、部分で色調が相異する。焼成は良い方である。器面の調整は内面はヘラナデで、外面は平行のタタキメである。

④・⑤は両方とも、斜格子文のタタキメを外面に施している。内面はナデである。胸部下半から底部かけてのものである。④は胎土に細粒砂を含み、色調は内面は黄褐色から暗灰褐色で置台とし使用されたもので、焼成良好である。⑤は胎土に細砂を若干含み、色調は内面が黄褐色で、外面・底部は明橙色で、他は黒色である。焼成は良好である。

⑦・⑧は胸部破片で、外面に平行のタタキメを施している。内面はナデである。⑦は胎土に細粒砂を含み、色調は白黄灰色で、外面は白黄灰色から黒色を呈している。取り上げ番号No.7で、No.32と同一個体で、焼成は良好である。⑧は胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色を呈し、取り上げ番号のNo.21である。焼成は良好で、器壁の厚さは1.3cmで、厚さを感じる。

肆 (6)



第110図 居間数1号窯跡窯床面出土遺物実測図2 (1/3)

この窯から出土した遺物の中で最高級のもの。胎土に細粒砂を含み、色調は灰色で、焼成は堅固である。口径9.4cm、高さ14.1cmの光品である。鋭く調整を施した2重口端をもち、体部に濃厚な自然釉が残るが、底部の焼きは不良である。器面の調整はヨコナデを中心として、丁寧なナデを施している。2重口端部には自然釉の発色がみられる。

この遺物からほぼ年代をおさえることが出来た。

#### 表土層からの出土遺物（第112図）

窯跡の表土層から出土したもので、甕は①で、焙烙は④で、③は線香立、②は摺鉢である。

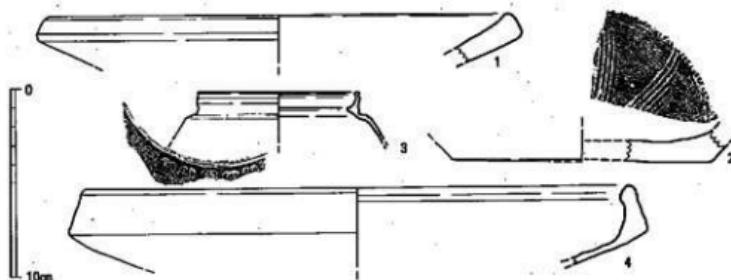
甕（①） ①は復原口径25.2cmである。口縁部の一部が黒色であった。胎土に細砂を若干含む、焼成は良好である。

焙烙（④） ④は口径29.4cmで2重口縁である。胎土に細砂を若干含み、色調は明褐色を呈し、外面の口縁部から瓶底下半にかけてススの付近がみられる。

線香立（③） 復原口径は8.6cm、胴部に文様帯をもっている。文様帯はハート形である。色調は鮮褐色で、精良なる粘土を使用している。焼成は良好である。近世のものか、線香立である。薄手のもの。

摺鉢（②） 胎土に細砂を若干含み、色調は、褐色で、復原口径は14cmで、⑥本の櫛目を1単位とした条文で空間を詰めなかったら、割付けている。小形の摺鉢である。近世の所産のものである。

表土層から出土したものは、近世のものが多い。近くに墓地がある。



第112図 居屋敷1号窯跡表土層出土遺物実測図3 (1/3)

### 3. 小 結

出土遺物によって、最古級の窯跡であることが理解できた。

また残磁年代測定によても、5世紀初頭の数値が示されている。

この窯跡が椎田道路建設によって東側の境界線上に検出されたわけで、この徳永の小丘陵は統くわけで、窯跡もほぼ群をなすもので、近くに窯跡の存在が考慮される。今後の課題が大きい。窯跡自体は完全に残っている。

#### 北部九州における初期須恵器の窯跡について若干のまとめ

日本における初期須恵器の窯跡は、近年各地で確認されている。

かつて初期須恵器の窯跡は陶邑古窯跡群の一須賀窯跡に限定されていたことから、田辺昭三氏は次の様に述べている。「日本で須恵器生産が開始されたときから、地方窯が成立するまでの最初の数十年間、須恵器は、陶邑とその周辺から、一元的に供給されていたということである」<sup>(11)</sup>とした。

しかしながら、その後の調査が進展していくなかで、数多くの初期須恵器の段階の地方窯跡が発見された。第112図の様に、当然矛盾が生じてきたのである。

その矛盾は、2点ほどに大きく要約される。

1. 地方窯成立の時期がさかのぼる。

2. 北部九州に見られるような、陶邑古窯跡群とは異なる系譜と考えられる窯跡の存在が明らかになったことである。

こうしたことから、地方窯の成立はこれまでのように全てが陶邑古窯跡群を経由することではなく、朝鮮半島から直接的に渡来した工人によって生産が開始され、日本における須恵器生産が「多元的」に行われたとする。所謂「多元論」の提唱が行われた。

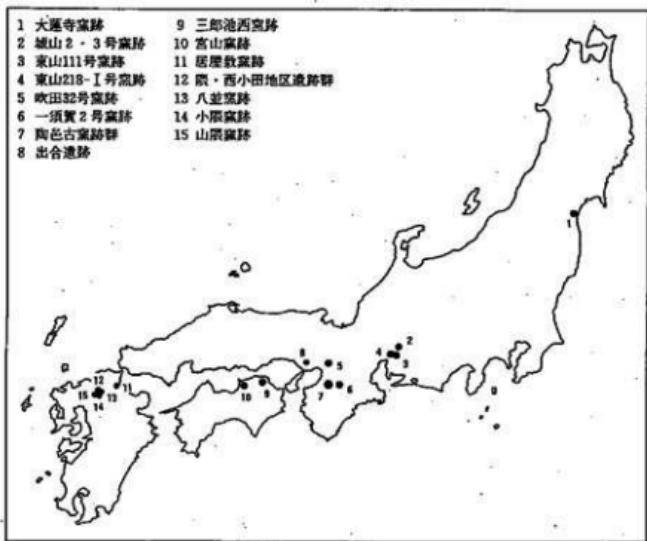
植野浩三氏は、「初期須恵器窯の解釈をめぐって」<sup>(12)</sup>の中で、陶邑古窯跡群と系譜を異するといわれる窯跡の検討を行ったが、各報告者が系譜の違いの根拠として強調している陶邑窯との相違点について、逆に共通点を重視する必要性を述べ、陶邑窯内の型式変遷の範囲で把握できる点を指摘し、必ずしも北部九州を除く他の一群は、陶邑窯と異なる系譜とは断定出来ないというものであり、陶邑窯からの影響を再考する必要性を説いている。

九州地方での初期須恵器の窯跡は本窯跡を入れて5ヶ所が知見されている。全て福岡県である。

1. 居屋敷窯跡 (京都郡豊津町大字徳永字居屋敷)

2. 限・西小田窯跡 (筑紫野市限・西小田)

3. 八並窯跡 (朝倉郡夜須町大字八並字鳥巣)



第112図 初期須恵器塚跡分布図

4. 小原塚跡 (朝倉郡夜須町大字下高場)

5. 山原塚跡 (朝倉郡三輪町大字山原字城山)

以上である。近年甘木市池の上墳墓群、古寺墳墓群が調査され、出土した伽耶系須恵器が近くの山原・八並・小原などの朝倉塚跡群の製品と類似することが確認された。また、本塚跡の発見と発掘調査、稲・西小田地区塚跡での発掘調査を含めて、小田富士雄氏はこれらのものを伽耶系須恵器として、陶邑との違いを明らかにされている<sup>(33)</sup>。また、この土器群については、西谷正氏は陶邑より早く生産が開始されたと考えられている<sup>(34)</sup>。

とともに、かくにも、本塚跡の発掘調査によって初期須恵器の塚跡が増えた。その点が、朝倉地区ではなく、旧豊前国の海外線近くに位置する地理的に影響が考慮される瀬戸内海と直結することが理解できる。

このことが意味することは今後に多くの問題を考古学上に提供することが考えられる。

(註)

- 註1 田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工芸』390 1971年
- 註2 植野浩三「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第6集 奈良大学文学部  
文化財学科 1988
- 註3 小田富士雄「九州地域の須恵器と陶質土器」『陶質土器の国際交流』柏青房 1989
- 註4 西谷正信「討論初期須恵器研究の諸問題」『日本陶磁の源流』1984

## IV. 考 察

### (1) 居屋敷窯跡の考古地磁気法による推定年代

伊藤晴明・時枝克安  
(島根大学理学部)

### (2) 豊津町徳永居屋敷横穴墓群出土の人骨

土肥直美  
(琉球大学医学部解剖学第1講座)



## (1) 居屋敷窯跡の考古地磁気法による推定年代

島根大学理学部

伊藤 晴明

時枝 克安



# 居屋敷窯跡の考古地磁気法による推定年代

伊藤 晴明・時枝 克安

(鳥根大学理学部)

## はじめに

北部九州地域では、古墳時代中期前半（5世紀前半）頃の初期須恵器窯とされる窯跡群が福岡県朝倉郡三輪町山隈、小隈、八並等で確認されている<sup>1)</sup>。特に、山隈窯跡群については、九州大学文学部西谷正教授らによる本格的な調査研究<sup>2)</sup>が進行中であり、その詳細が判明しつつある。山隈窯跡群において最初に発掘調査された1号窯跡の考古地磁気法による焼成年代は、5世紀中葉（A.D. 450±40）を示唆している<sup>3)</sup>。しかし、考古学的な知見によると、山隈窯跡群は5世紀前半に初期須恵器を焼いていた須恵器窯と考えられている。従って、山隈窯跡群1号窯跡に対する考古地磁気推定年代は、考古学的知見より少し新しい年代を与えたことになる。

窯や炉跡の操業年代を求める自然学的な手法としては<sup>4)</sup>、熱ルミネッセンス法<sup>5)</sup>、考古地磁気年代推定法<sup>6)</sup>等がよく知られ、焼成年代を探る有力な手段として広く活用されている。特に、考古地磁気法は、高温で加熱された焼土を測定試料としているため、須恵器窯跡のように高温で長期間焼成され、大量の焼土を残す遺跡においては威力を発揮している。

今回推定された居屋敷窯跡の考古地磁気推定年代は、

A.D. 440 ± 10年

となった。この推定年代は、先に測定された山隈窯跡群1号窯跡の考古地磁気推定年代とほぼ同じ値である。

## 1. 窯跡の概要

居屋敷窯跡は、福岡県京都郡豊津町徳永（33°41'14"N, 131°00'00"E）に位置し、祓川の東岸にある小丘陵の西側斜面で検出された須恵器窯跡である。窯跡の規模は、焚口から煙出しまでの全長が6m、焼成室幅が1.2m程の半地下式登窯である。窯の主軸は等高線に直交するようにして構築されていた。天井は完全に崩壊し詳細については不明であるが、床面の勾配は焼成室中央付近で約25度であった。固く焼きしめられた茶褐色に変色した焼土は、窯壁では厚さ5cm程、床面では厚さが場所によりまちまちであったが、厚いところで3~5cm程残存していた。この窯跡は、全体的に焼土の残りがよく、考古地磁気測定用試料としては最適の遺存状態であった。

## 2. 試料の採取

考古地磁気測定用試料は、1989年4月7日快晴の日に採取することができた。居屋敷窯跡では、次に述べる手順に従い試料を採取した。最初に、瓦加工用の小ハンマーで固い焼土層を、一辺5cm程の立方柱状に削り、取り上げやすいよう形を整える。次に、軟らかく溶かした石膏を整形した焼土部全面にかけ、焼土試料が崩れないよう固定する。その後、すぐに上面か側面に少し固めの石膏をかけ、一辺5cmの正方形アルミ板を押しつけて一つの平面をつくっておく。ある時間放置し石膏が固まると、試料の方針をこの平面で測定し記帳する。最後に、採取箇所を確認してから試料を取り上げ、採取作業は終了である。この方法による一個の焼土試料の重さは100~200gである。採取する試料数は、窯跡の規模や焼土の残り具合に依存するが、一つの窯跡から通常10~20個程度採取している。

居屋敷窯跡では、固く焼きしめられた厚さ5cm前後の焼土が床面や側壁に残存していたが、側壁は窯後に傾いている“おそれ”があるため今回は壁面から試料を採取しなかった。試料は床面のできるだけ広い範囲から採取するようにし、焚口から窯尻にかけて約3.5m位の間に残存する茶褐色の焼土層から40個採取した。試料の採取箇所は第113図に示してある。

## 3. 測定結果

採取した焼土試料は実験室に持ちかえり、ダイヤモンド・カッターで一辺4cm程の立方体状に整形し、再び石膏をかけて固め測定用試料とした。この室内処理の段階で、1割程度の試料が破損し、測定不能になる場合が出てくる。試料の自然残留磁気（NRMと略記）は、すべて無定位磁力計で測定した。NRM測定結果は、下記の示す通りである。ただし、整形段階で破損した試料3個は最初から除外し、また測定した37個のうちで、NRM方向の偏りが大きく、信頼できない2個の試料はこのデータから除外してある。

$$N = 35$$

$$D_m = -0.2^\circ$$

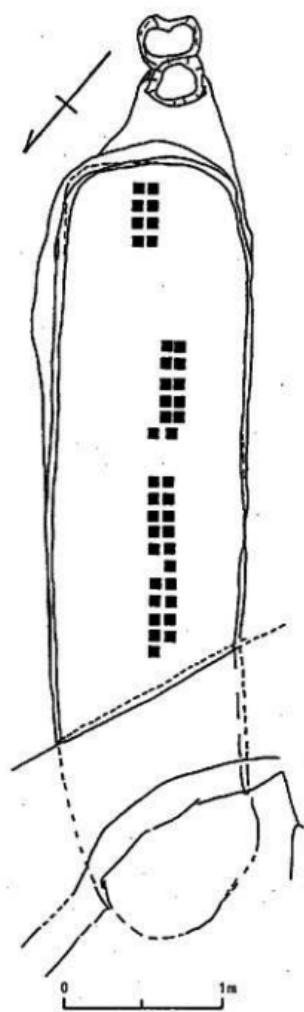
$$I_m = 15.8^\circ$$

$$K = 281.1$$

$$\theta_{95} = 1.4^\circ$$

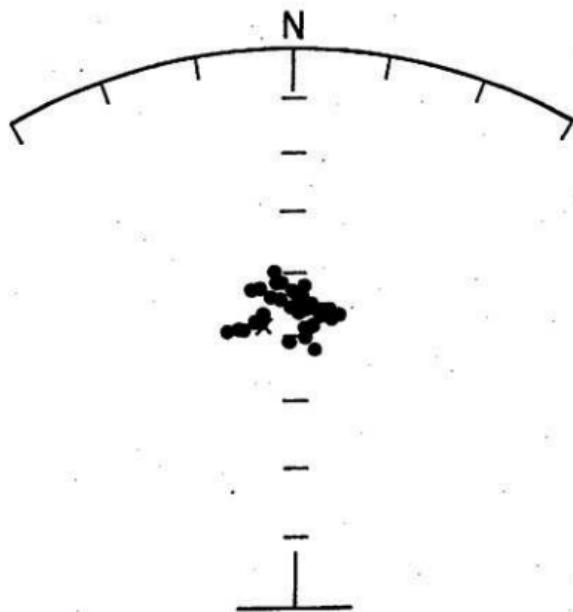
ここで、Nは測定試料数、 $D_m$ は平均偏角、 $I_m$ は平均伏角、KはFisherの信頼度係数、 $\theta_{95}$ は同じく誤差角である。

試料それぞれのNRM方向は第114図に示してある。第114図から明らかなように、方向のバ



第113図 層壓敷窓跡における考古地磁気試料採取箇所 (■印)

ラツキは比較的小さく集中度もよい。信頼度係数が大きく誤差角が小さい場合は、バラツキが小さく方向の信頼性が高いことを示しているが、上記の測定結果では、信頼度係数が比較的大きく、誤差角が比較的小さな値(1.4°)である。従って、今回得られた居屋敷窓跡のNRM測定結果は信頼してよいデータだと考える。

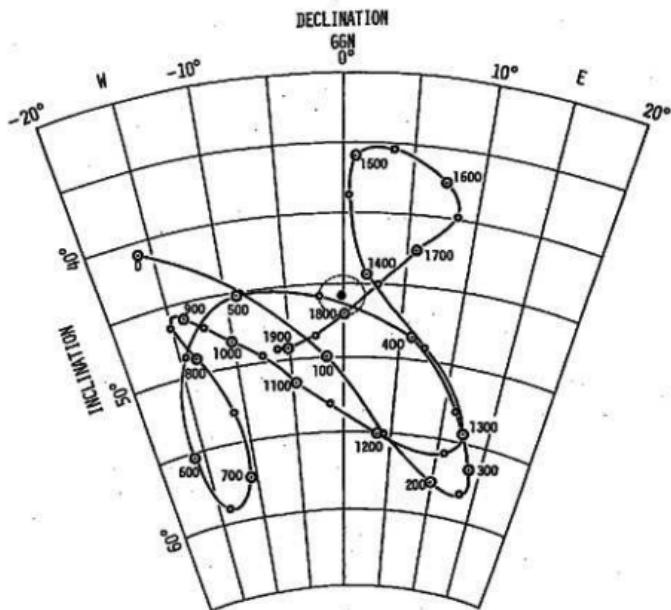


第114図 居屋敷窓跡のNRM方向  
×印は現在（1980年）の地球磁場の方向

#### 4. 年代の推定

年代測定には、時間尺度となる地磁気永年変化曲線が必要である。幸いに西南日本では、過去2000年にわたる地磁気永年変化曲線が広岡<sup>7)</sup>の精力的な研究により、作成され広く利用されている。

居屋敷窓跡から得られたNRMの測定値は $D_m = -0.2^\circ$ ,  $I_m = 45.8^\circ$ であった。年代を推定するには、この測定値を地磁気永年変化図にプロットし、その点から近接する曲線に垂線を下ろし交点の年代を読み取ればよい。第115図はNRM測定値を西南日本の地磁気永年変化図にプロットしたものである。第115図から読み取れる居屋敷窓跡の推定年代は、



第115図 西南日本の地磁気永年変化曲線と居屋敷窓跡の  
NRM測定値 (●印)

- A. D. 440±10  
A. D. 1400±20  
A. D. 1790±20

となる。測定値が3つの曲線に近接しているため、この図からは3つの年代値を読み取ることができる。しかし、居屋敷窯跡は、初期須恵器を焼いた窯跡であることを考慮すれば、A. D. 1400±20とA. D. 1790±20の二つの年代値は除外してよい値である。従って今回の測定による居屋敷窯跡の考古地磁気推定年代はA. D. 440±10となる。この推定年代は、初期須恵器を生産した山隈窯跡群1号窯跡の考古地磁気推定年代<sup>10)</sup>(A. D. 450±10)とほぼ一致した値である。

初期須恵器とされているのは、陶邑の型式編年でI型式1段階から3段階までであるが<sup>11)</sup>、実年代は5世紀前半に比定できると考えられている<sup>12)</sup>。もし、この型式編年が正しいとすれば、近畿地方と北部九州地域では、この時代の偏角が度数食い違っていたと考えてよいことになり、北部九州地域におけるこの時代の考古地磁気研究に一つの問題を投げ掛けることになるかも知れない。

最後に、今回考古地磁気試料採取の機会を与えていただき、種々便宜をはかっていただいた福岡県教育庁文化課の方々、特に発掘現場でお世話になった副島邦弘、飛野博文の両氏に心からお礼を申し上げる。

#### 註

- 1) 中村浩：須恵器、柏書房、25~41、1990。
- 2) 九州大学考古学研究室：山隈窯跡群の調査—福岡県朝倉郡三輪町所在の初期須恵器窯跡群—、九州考古学、第65号、49~86、1990。
- 3) 伊藤晴明・時枝克安：山隈窯跡の考古地磁気学的研究、九州考古学、第65号、93~96、1990。
- 4) 遠藤邦彦：14C年代測定法、考古学ライブラリー1、ニュー・サイエンス社、1978。
- 5) 市川米太：土器の年代をはかる—熱ルミネッセンス法、馬淵久夫・富永健編「考古学のための化学10章」、東京大学出版会、71~114、1981。
- 6) 中島正志・夏原信義：考古地磁気年代推定法、考古学ライブラリー9、ニュー・サイエンス社、1981。
- 7) 広岡公夫：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、第15巻、第4号、200~203、1977。
- 8) 註3参照。
- 9) 註1参照。
- 10) 森浩一・石部正志：後期古墳の討論を回顧して、「後期古墳の研究」、古代学研究30号記念特集、古代学研究会、1~6、1962。

(2) 豊津町徳永居屋敷横穴墓群出土の人骨

琉球大学医学部解剖学第1講座

土 肥 直 美



# 豊津町徳永居屋敷横穴墓群出土の人骨

琉球大学医学部解剖学第1講座

土 肥 直 美

平成元年度、九州大学医学部解剖学第2講座に依頼された福岡県豊津町徳永居屋敷横穴墓群出土の人骨について、その所見を以下の通り報告する。

## 1. 出土人骨

依頼された人骨は、11号横穴墓、12号横穴墓、13号横穴墓から出土したものである。人骨の保存状態は全体的に悪く、取り上げられた骨はほとんどが小片や細片になっている。

## 2. 人骨所見

### 1) 11号横穴墓人骨

#### 保存部位および被葬者の構成

それ程離れていない2カ所から、頭蓋骨小片がそれぞれ少量検出されただけである。骨の厚さ等から、いずれも成人に達しているか、あるいはほぼ成人に達するくらいの年齢であると思われるが、ほとんどの部位が消失しているために性別等の判別はできなかった。また、骨の保存状態が極端に悪いために、検出された骨片が同一個体に属するか、別個体であるかの判別も困難であるが、位置関係からは別個体の可能性が高いと思われる。

### 2) 12号横穴墓人骨

#### 保存部位

頭蓋骨片2体分、大腿骨片3体分、脛骨片3体分、上腕骨片1体分、そのほかに少量の骨片と歯牙片が検出された。

#### 被葬者の構成

大腿骨および脛骨が3体分あるので、最低3体の被葬者が葬られていたことは確実である。しかし、ほとんどの骨は埋葬時の原位置を保っておらず、個々の骨について個体識別をすることは難しい。したがって、4体を超える被葬者が葬られていた可能性はきわめて強いと思われる。

性別・年齢については情報量が少ないので、かなり大雑把な推測しかできないが、頭蓋骨のうち一つは女性の特徴を示し、縫合の状態や歯牙片の咬耗度から成年に達して間もないくらい（20代はじめ）の年齢であろうと思われる。他の一つも成年に達していれば女性の可能性が強い。また、3体分の四肢骨はいずれも細く華奢で女性的である。しかし、上腕骨は比較的頑丈な特徴を示すことから、被葬者の中には男性も含まれていたのではないかと思われる。

以上の所見から、12号横穴墓には少なくとも女性3体と男性1体が葬られていたものと推定される。

### 3) 13号横穴墓人骨

#### 保存部位および被葬者の構成

検出できた人骨は保存不良の四肢骨細片と歯牙片のみである。ほとんどが原形をとどめないと同時に腐朽しているので骨種の同定は困難であるが、出土時の位置関係から推定して、埋葬されていたのはおそらく1体であろうと思われる。性別・年齢の推定は保存状態が悪いためにできなかった。

## 3. まとめ

以上、3つの横穴墓から出土した人骨についてその調査結果をまとめると、下表のようになる。人骨の保存状態が極端に悪く、形質等の調査ができなかったのは残念である。豊津町からは節丸大塚古墳人のような保存良好な古墳人骨も得られているが、この地域の古墳人の形質的変異を知るためにまだ十分な資料数とはいえない。更なる追加資料の出土が望まれる。

最後に、人骨調査に当たり多大のご援助をいただいた、福岡県教育委員会の副島氏、九州大学の中橋助教授に心から謝意を表します。

表5 居屋敷横穴墓群出土の人骨

	推定最小個体数	被葬者の構成
11号横穴墓	2	性別不明の成人2体
12号横穴墓	4	20代女性1体、成人女性2体、成人男性1体
13号横穴墓	1	性別不明の成人1体

## V. おわりに

前章までが、居屋敷遺跡の発掘調査の記録である。

多くの新しい、また確実な事実が明らかになった。その中には、今までの考えられていた事柄と異なった事実や将来さらに検討を必要とする問題を提起することとなった。

今回の発掘調査の成果を箇条書きにして述べたい。

1. 居屋敷遺跡の特徴を一口で言えば、弥生時代墓地群と古墳時代後期の横穴墓群そして最古級の初期須恵器を焼いた窯跡である。
2. 横穴墓群は、昨年発表した鋤先遺跡の4基の横穴墓を入れて、今回報告している。鋤先遺跡の横穴墓は居屋敷南支群とした。居屋敷S-1～S-4号横穴墓の名称としている。
3. とくに今回、最古級の初期須恵器を焼いた窯跡の発掘調査が目玉である。出土遺物は甕が多いが、その中に完品の甕が検出され、これが時期決定を明確にした。
4. 窯跡の年代については、考古地磁気法による年代測定を実施した。IV-(1)で論究のとおり、推定年代がA.D 440±10年という年代を得ている。この年代は夜須町の山隈窯跡群1号窯跡とほぼ同じ値である。5世紀前半ということになる。
5. 横穴墓から出土した人骨についてもIV-(2)の中で分析している。
6. 12号横穴墓から金銅製の鈴が8個出土している。ここに埋葬された人は女性3体と男性1体が葬られていた。横穴墓群の時期は6世紀末～7世紀初頭の頃が一番多い。須恵器編年型式ではIV-a・b期である。鈴もこの時期では珍しいもので、大きさも一定している。非常に精巧に造られている。ここに埋葬された人物はこの一帯の家父長・首長的存在の一家であったと考えられる。
7. 当該遺跡の窯跡については路線外であったため完全に保存されている。I区の弥生遺跡についても丘陵全体にひろがっている。横穴墓についても、法面が続いているために充分に残っている。そして、窯跡については群をなすものであるから、行政当局の保存の手立が必要となろう。豊津町及び行橋市に提起しておきたい。

以上が居屋敷遺跡のまとめである。発掘調査・整理報告作業に協力された方々に感謝する。

特に、県立美術館の濱地館長、新副館長、菊川総務課長、普及課の森主査、西本・吉村学芸員、そして金子謙には感謝の念にたえない。

(H 8. 1. 9)

椎田道路居屋敷遺跡で (野帳より)

大寒や

さむさも寒し

居屋敷かな

久仁 (H元. 1. 27)

春一番

吹くや明日から

弥生月

久仁 (H元. 2. 28)



第116図 居屋敷遺跡で働いた人々 (H元)

# 図版



居屋敷跡周辺航空写真  
○ 居屋敷跡跡



(1) 居屋敷遺跡 発掘前状態



(2) 居屋敷遺跡 表土剥ぎ

(1) 居屋駅跡跡全景（西から）

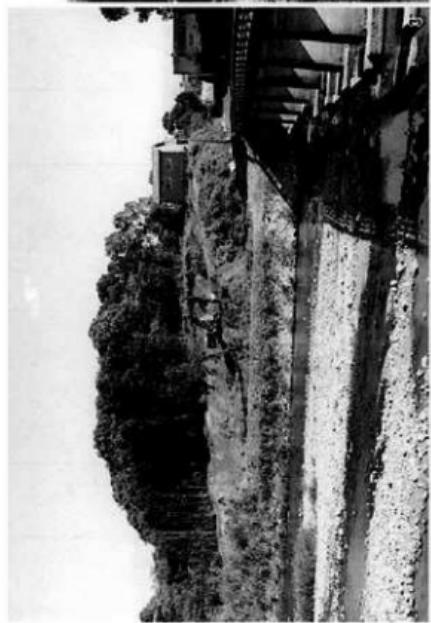


(2) 居屋駅跡跡近景（上から）





(1) 発掘地区伐採後の水田面の試験  
(2) 水田面の試験



(3) 表土剥ぎ  
(4) 発掘調査前の安全祈願祭



(1) 1区土壇墓群全景(西上空から)



(2) 土壇墓群南半(北から)



(1) 1号落とし穴状土坑（北から）



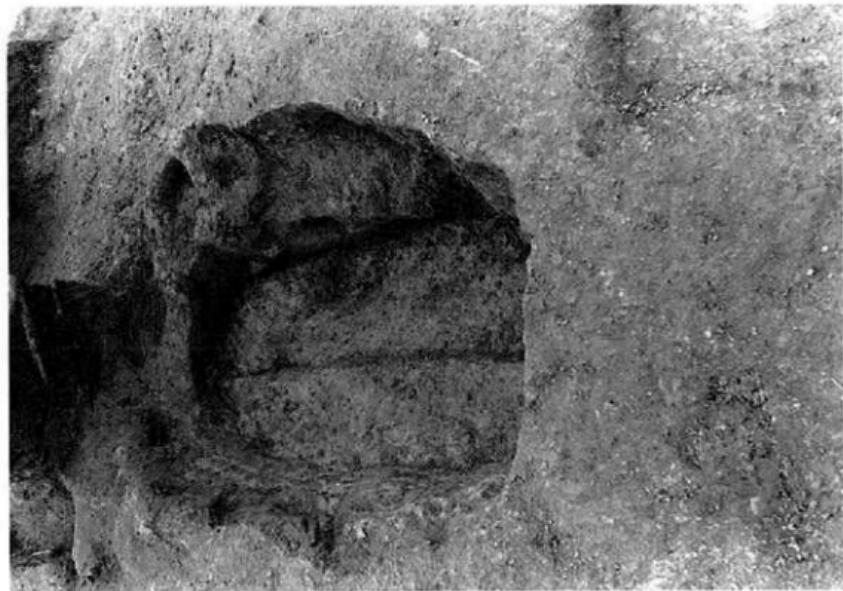
(2) 2号落とし穴状土坑（南から）



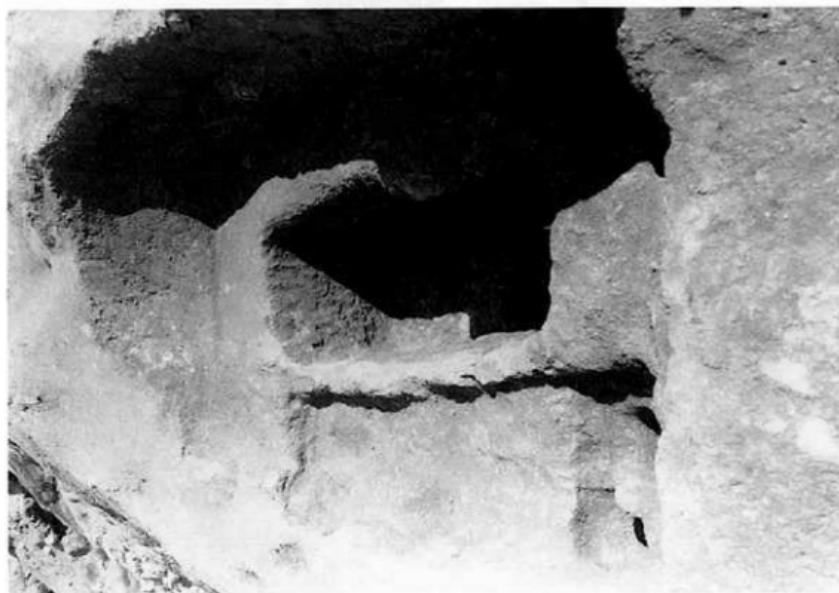
(1) 3号貯蔵穴（北から）



(2) 3号貯蔵穴（東から）



(1) 2号土壙蓋（北東から）



(2) 3(左)・4号土壙蓋（南西から）



(1) 土壇墓群南半（南から）



(2) 5号土壇墓（南西から）



(3) 6号土壇墓（南西から）



(1) 7号土塙墓（南西から）



(2) 9号土塙墓（南西から）



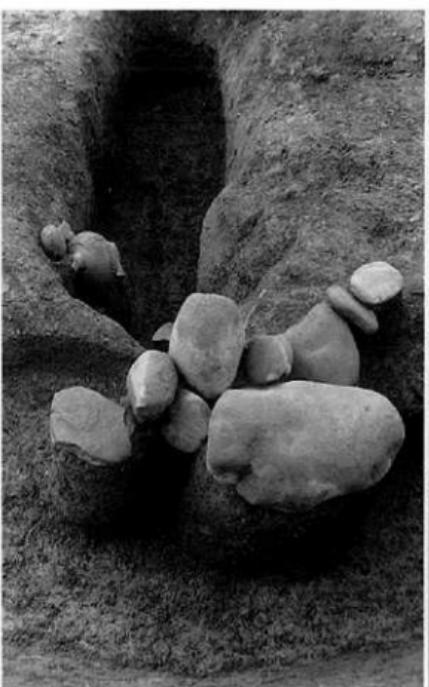
(1) 13(手前)・12号土壙墓(北東から)



(2) 12号土壙墓(西から)



(3) 同(東から)



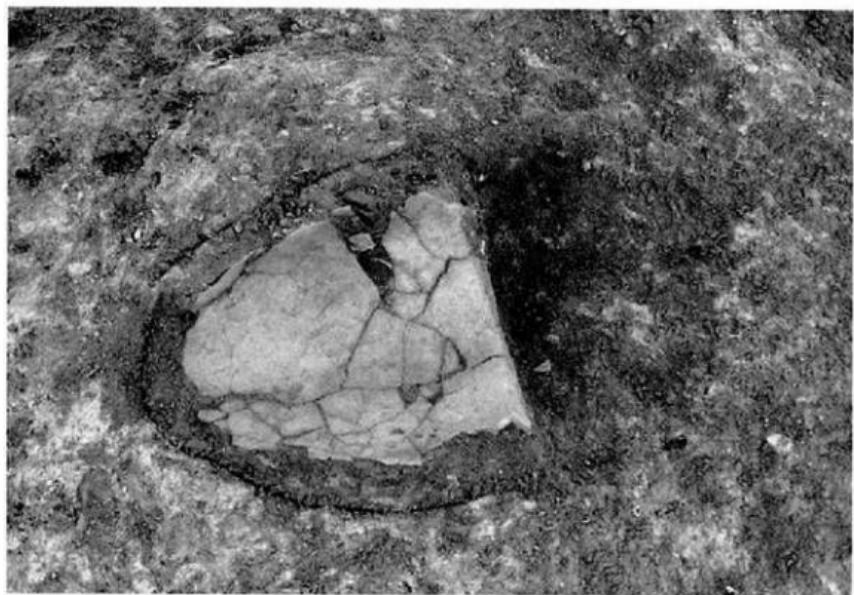
(1) 13号土壤墓（東から）



(2) 13号土壤墓 出土遺物



(3) 1号甕棺墓（西から）



(1) 2号墳棺基



(2) 3号墳棺基 (北から)



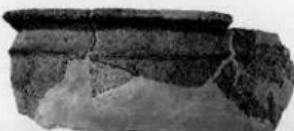
(1) 基壇状遺構（北東から）



(2) 土壌状遺構（北から）



第16図-②



第19図-1下



第17図-①



第19図-3上



第17図-②



第20図-①



第17図-③



第20図-④



第19図-1上



第18図-③



居屋敷遺跡横穴墓群全景（西上空より）



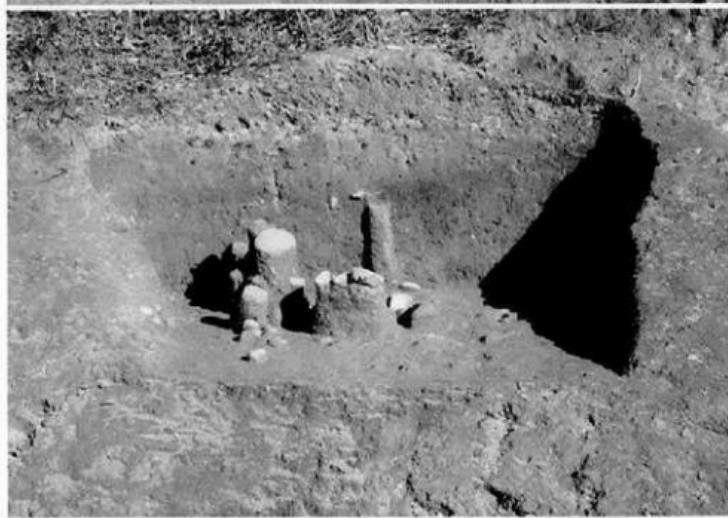
(1) 居屋敷道路 0 ~ 4—2 号横穴墓全景



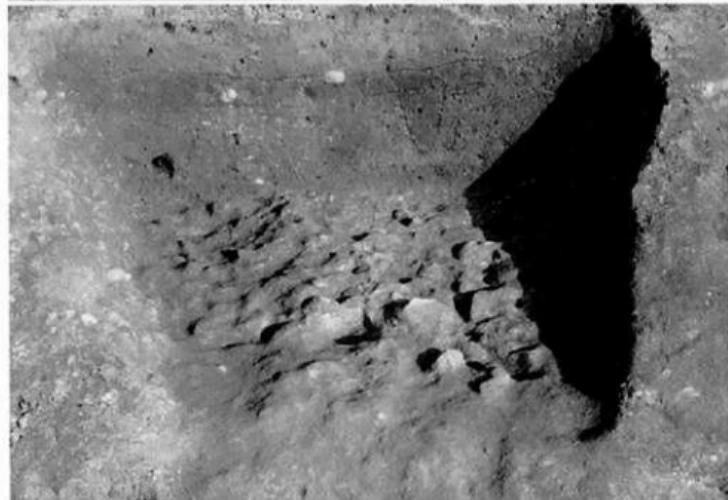
(2) 居屋敷 0 号横穴墓近景



(1) 居屋敷 1、2号横  
穴墓近景



(2) 居屋敷 3号横穴墓  
近景



(3) 居屋敷 3号横穴墓  
遺物取上後



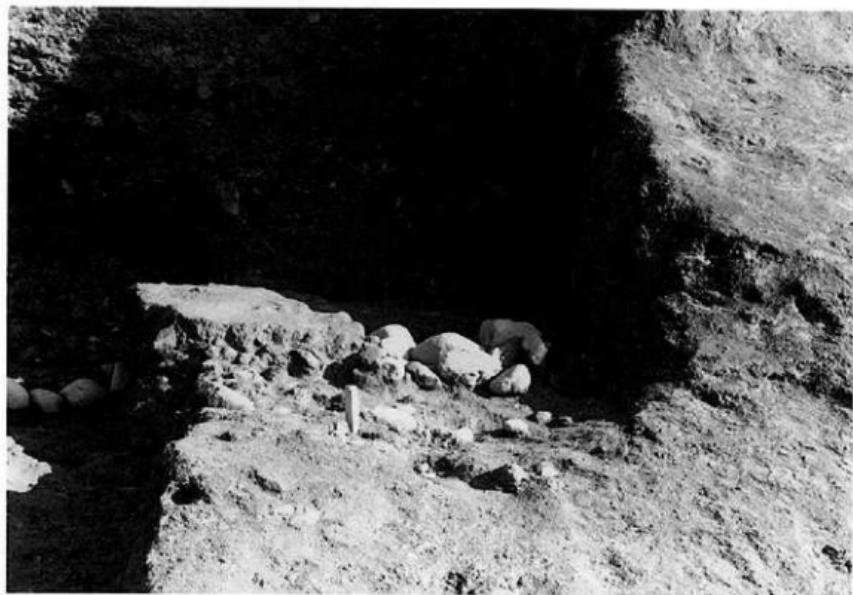
発掘風景



(1) 居屋敷4号横穴墓中心に近景



(2) 居屋敷横穴群近景（西から）



(1) 居屋敷4—1号横穴墓全景



(2) 居屋敷4—1号横穴墓近景



1



2



3



4



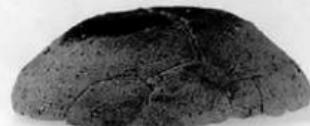
5



6



7



8

居屋敷4—1号横穴墓出土遗物



(1) 层级数 4 — 2号窖穴墓道出土物全景



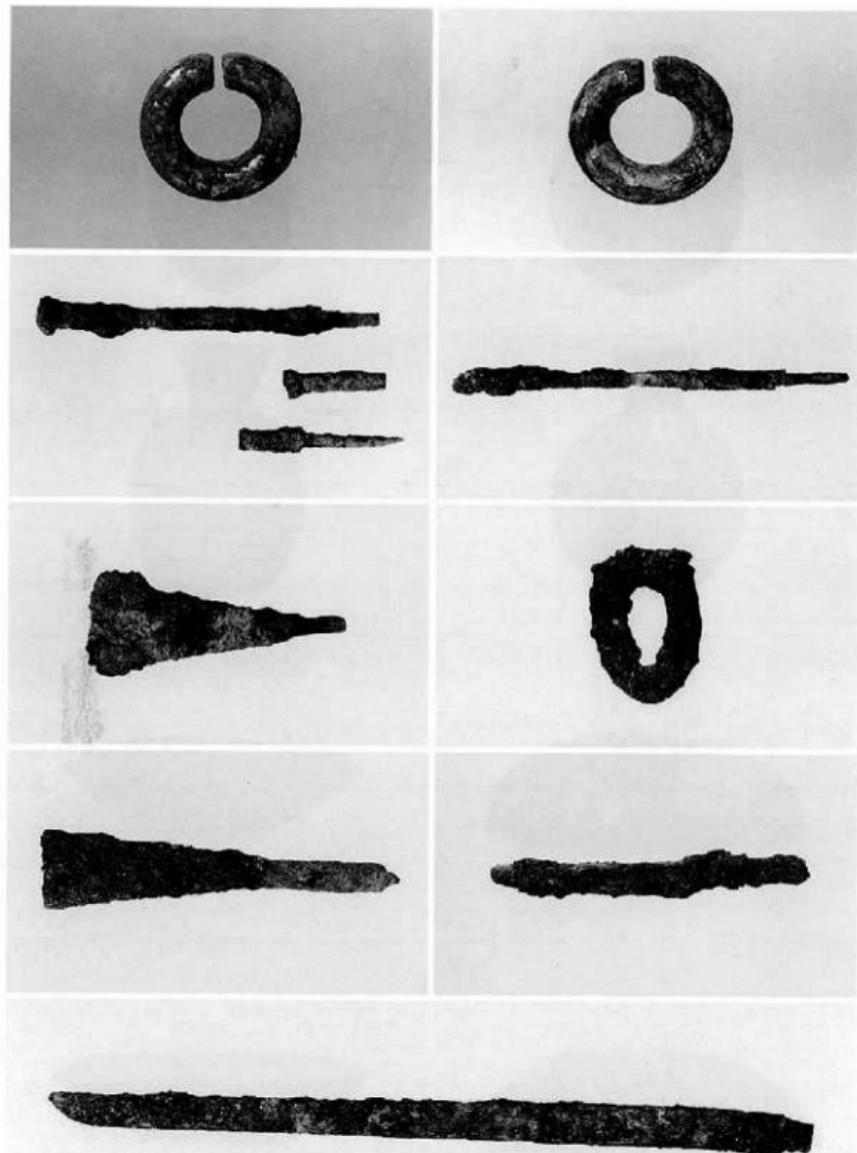
(2) 层级数 4 — 2号窖穴墓道全景



(1) 居屋敷4—2号横穴墓玄室内全景



(2) 居屋敷4—2号横穴墓出土遗物(直刀)状态



居屋敷4—2号横穴墓玄室出土遺物（耳環・鉄製品）①



1



2



3

4



5

6

居屋敷4—2号横穴墓玄室出土遺物（須恵器）②



1



2



3



4



5



6



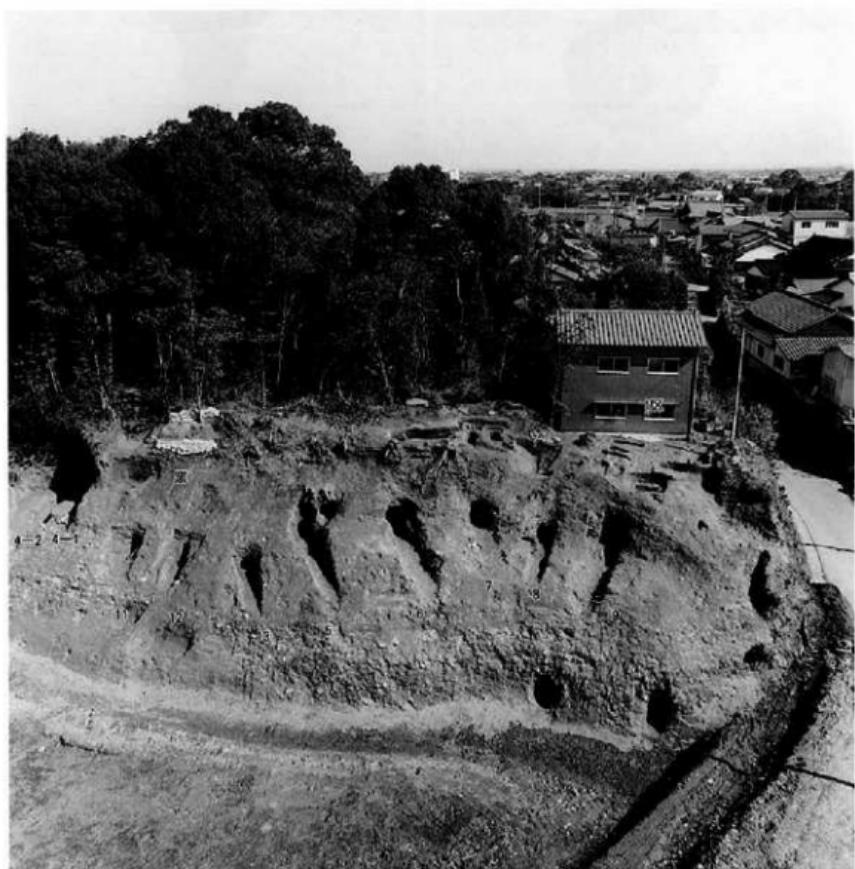
7

1・2 (3号横穴墓墓道出土遺物)

3 (第37図③) 4 (第37図②)

5 (第37図①) 6 (第37図④)

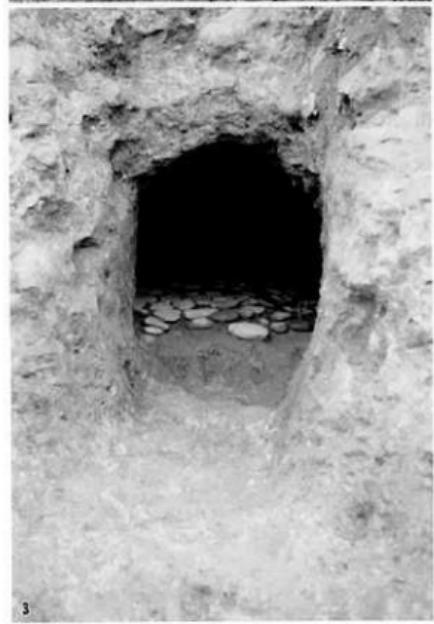
7 (第37図⑥)



居屋敷横穴墓群全景（4～13号横穴墓）



居屋敷5号横穴墓墓道全景（西から）



(1) 5号横穴墓道遺物出土状態

(2) 閉塞石からの遺物出土状態

(3) 5号横穴墓全景

(4) 敷石を取り除いた後全景



(1) 5号横穴墓玄室の敷石  
(2) 5号横穴墓敷石を取り除いた後近景



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

居屋敷5号横穴墓出土遺物（耳環・玉・鉄製品）①



1



3



5



2



4



6

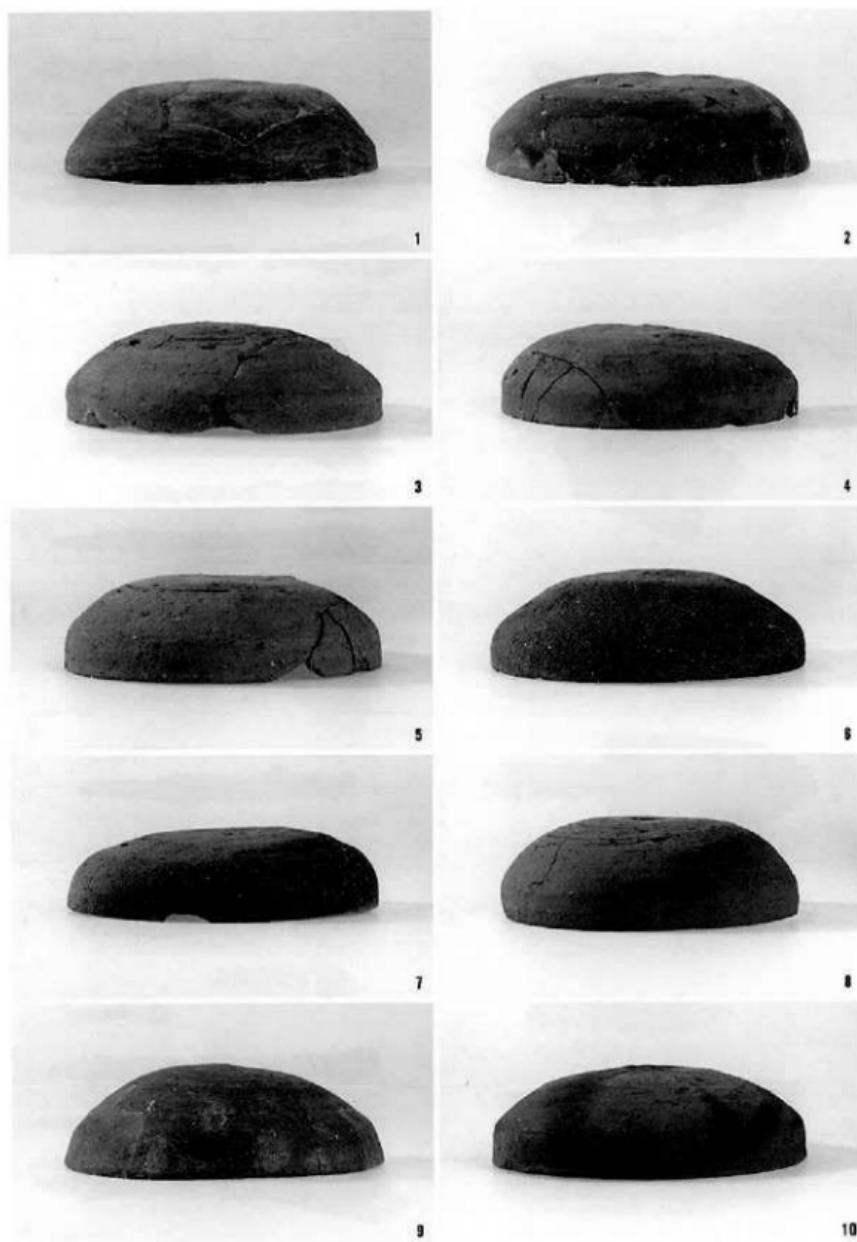


7

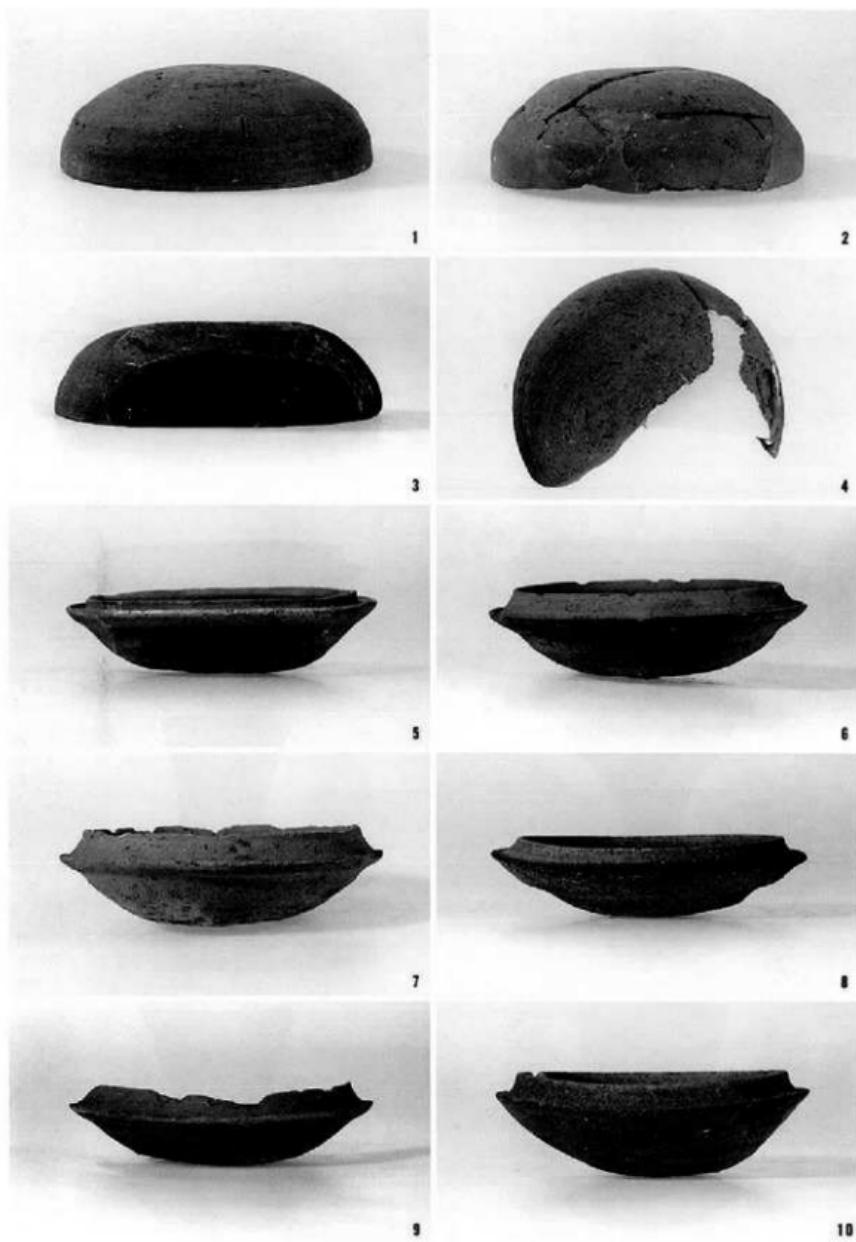


8

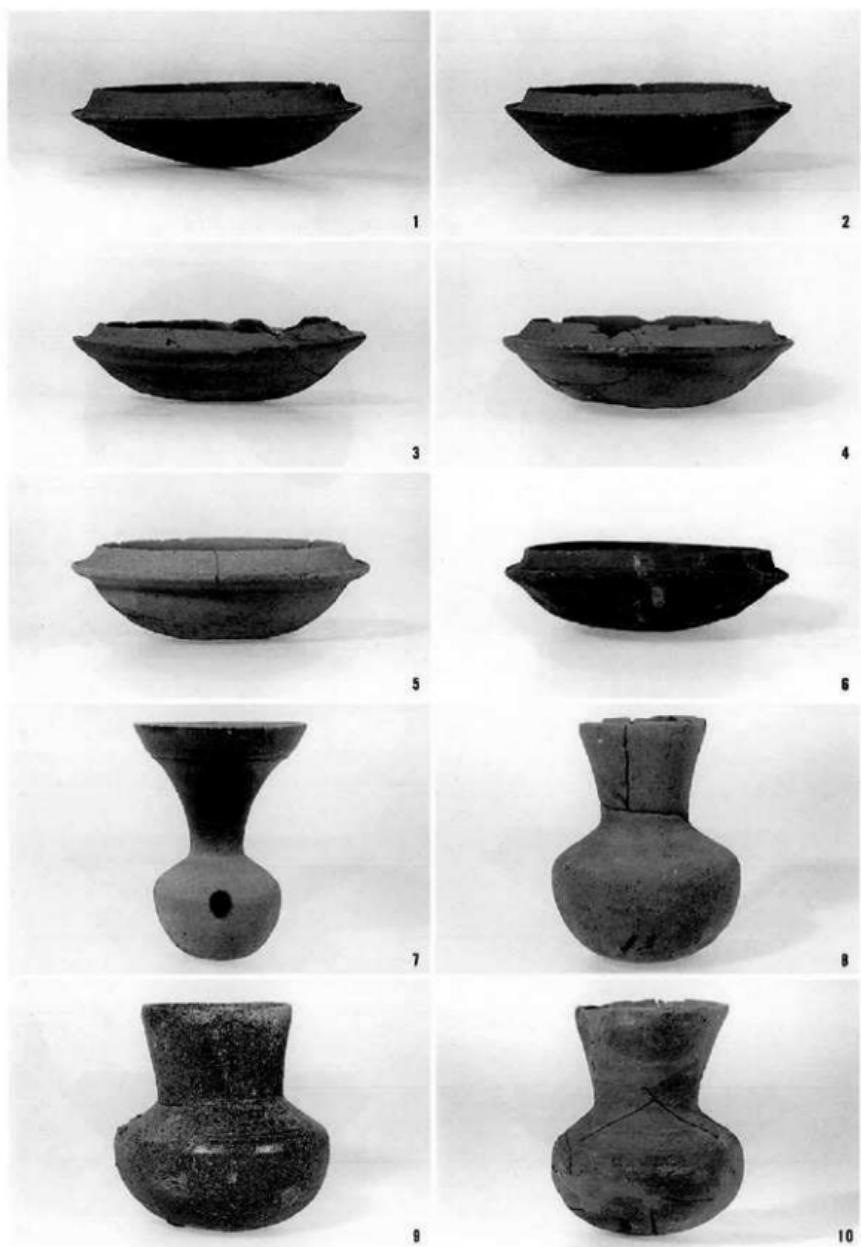
居星墩 5 号横穴墓出土遗物（铁制品）②



居屋敷5号横穴墓出土遺物（須恵器）③



居屋敷 5 号横穴墓出土遺物（須恵器）④



居屋敷5号横穴墓出土遺物（須恵器）⑤



1



2



3



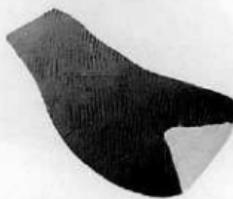
4



5



6



7



8



9



10

居屋敷 5 号横穴墓出土遺物（須恵器）⑥



1



2



3



4



5



6



7



8



9

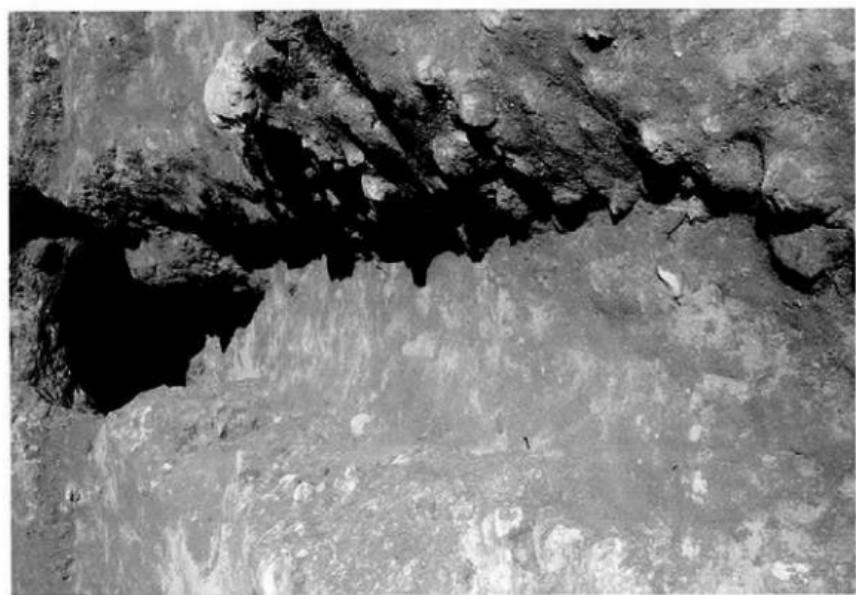
居屋敷5号横穴墓出土遺物（その他）⑦



居屋敷 6号横穴墓全景（西から）



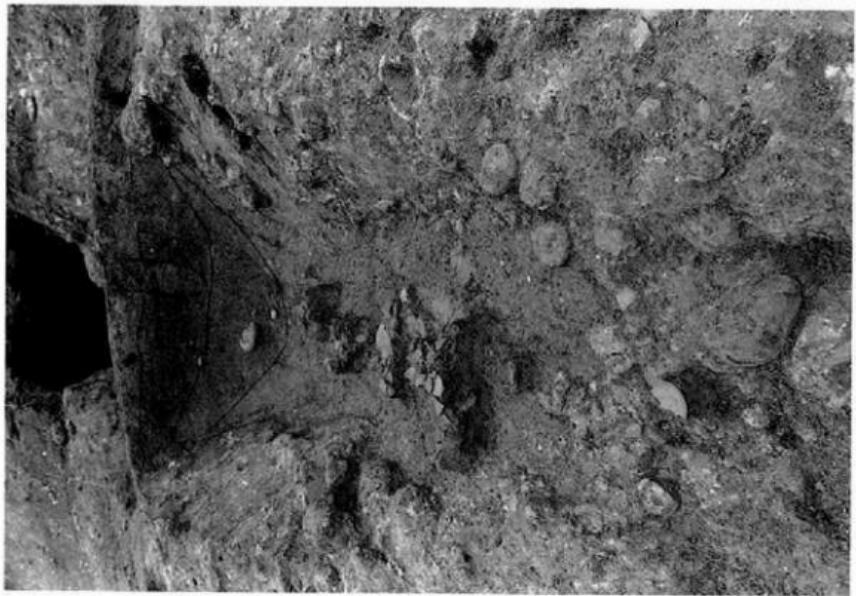
(1) 居层数 6 号棺穴墓近景 (随物出土状物)



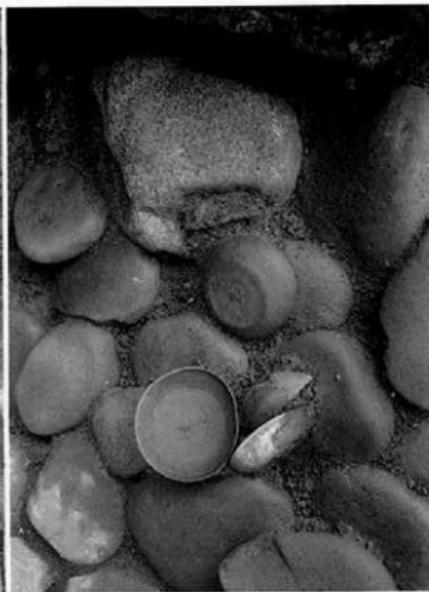
(2) 居层数 6 号棺穴墓近景



(1) 基礎遺物出土状態（上から）



(2) 基礎遺物出土状態（西から）



居室数6号竪穴墓玄室内の遺物出土状態



居屋敷 6 号横穴墓出土遺物 (耳環・玉・鉄製品・須恵器) ①



居屋敷 6 号横穴墓出土遺物（須惠器）②



1



2



3



4



5

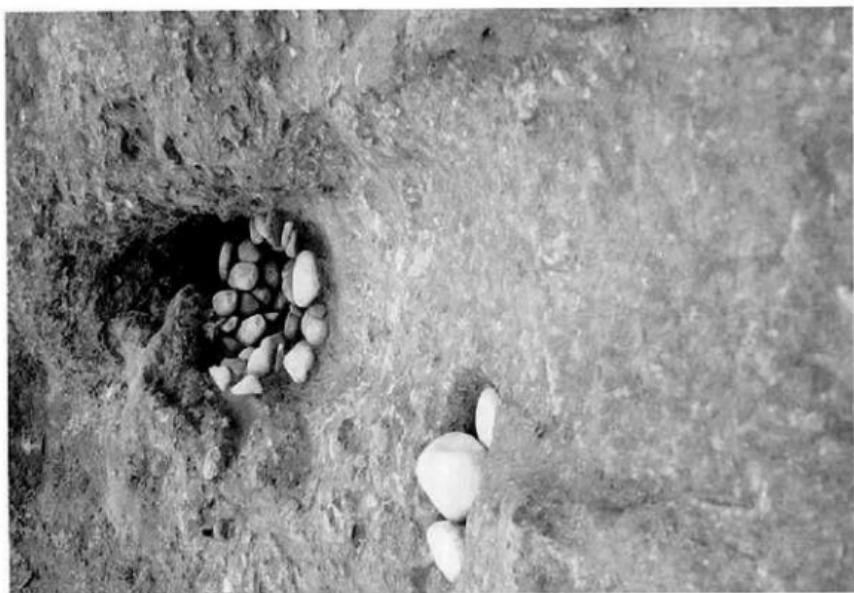


6

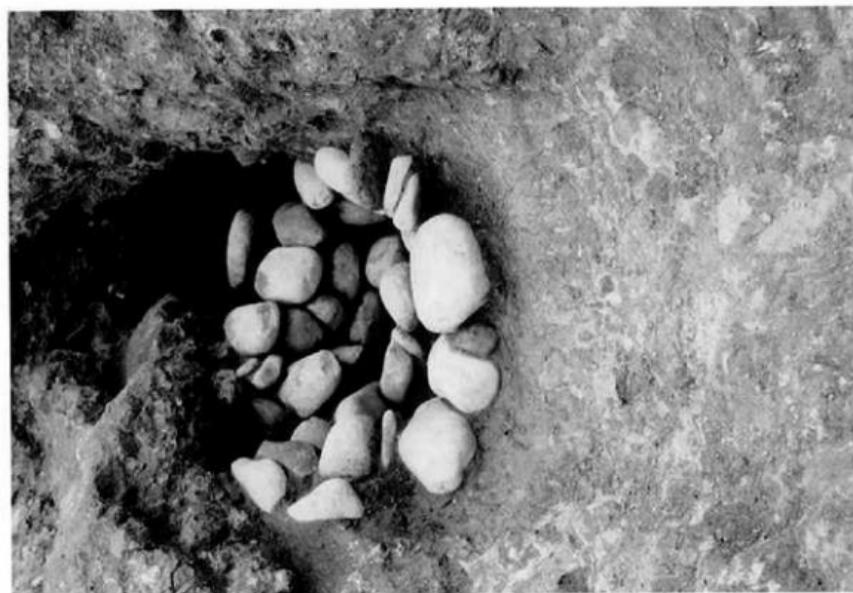


7

居屋敷 6 号横穴墓横防空壕内出土遺物（弥生式土器）



(1) 居塙數7号坑穴蓋石全景



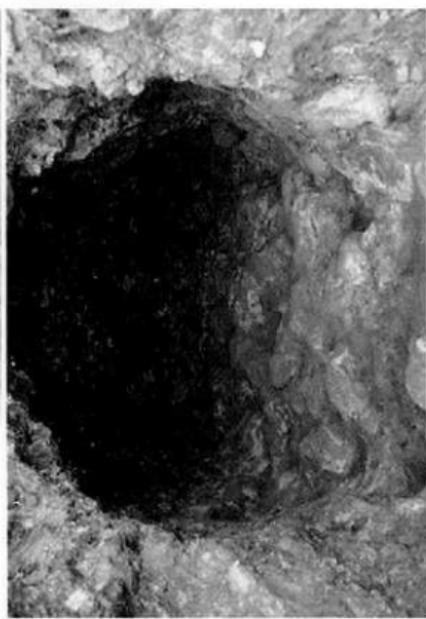
(2) 居塙數7号坑穴蓋石の状態



(1) 居住數7号櫻穴窯全景



(2) 居住數7号櫻穴窯玄室被石状態（上）



(3) 居住數7号櫻穴窯玄室被石除去後（下）



居屋敷7号横穴墓出土遺物（耳環・玉）と墓道石組遺構全景



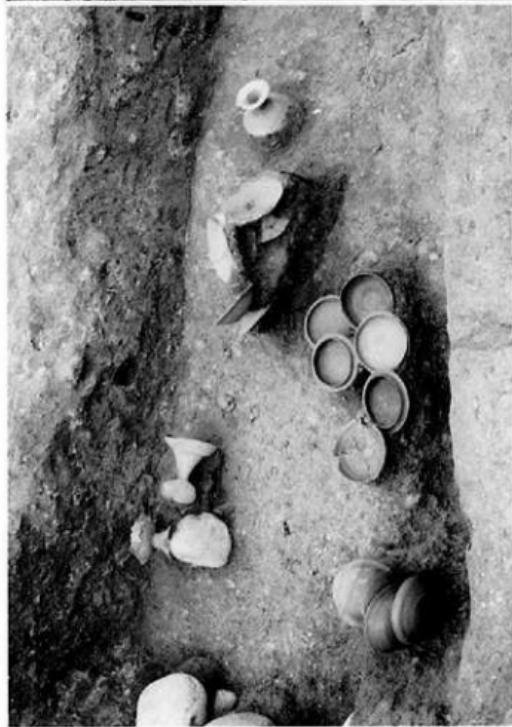
(1) 居居敷 8号機穴墓全景（西から）



(2) 居居敷 8号機穴墓近景（樋石附近）



(1) 居屋敷 8号坑穴堀跡出土遺物状態（西から）



(2) 居屋敷 8号坑穴堀跡出土遺物状態（上から）



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

居延城 8 号横穴墓墓道出土遗物（须惠器）①



11



12



13



14



15



16



17



18



玄室出土



18下

居屋敷8号横穴墓出土遺物（須恵器・土師器・玉・鉄製品）②

(1) 居塙数9号櫛穴墓全景

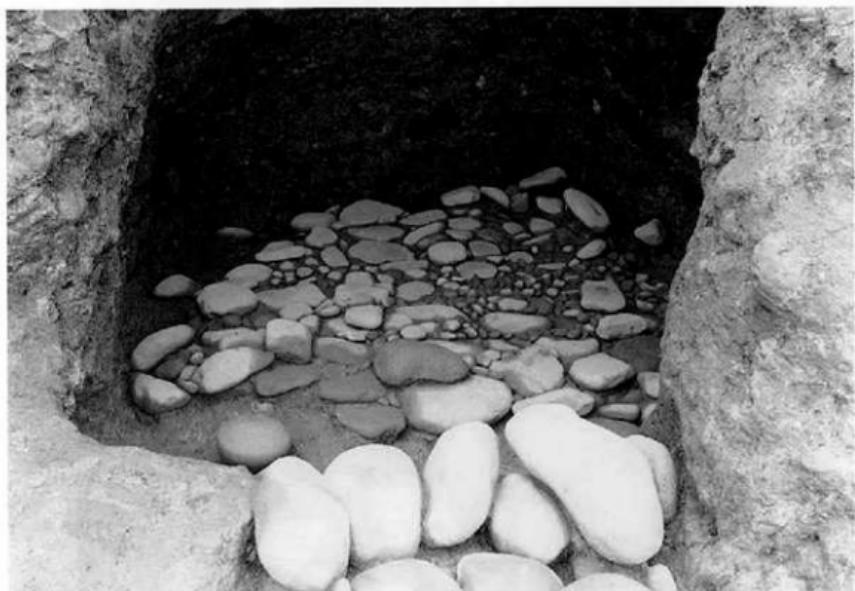


(2) 居塙数9号櫛穴墓開発の状態



(3) 居塙数9号櫛穴墓墓道からの出土遺物の状態

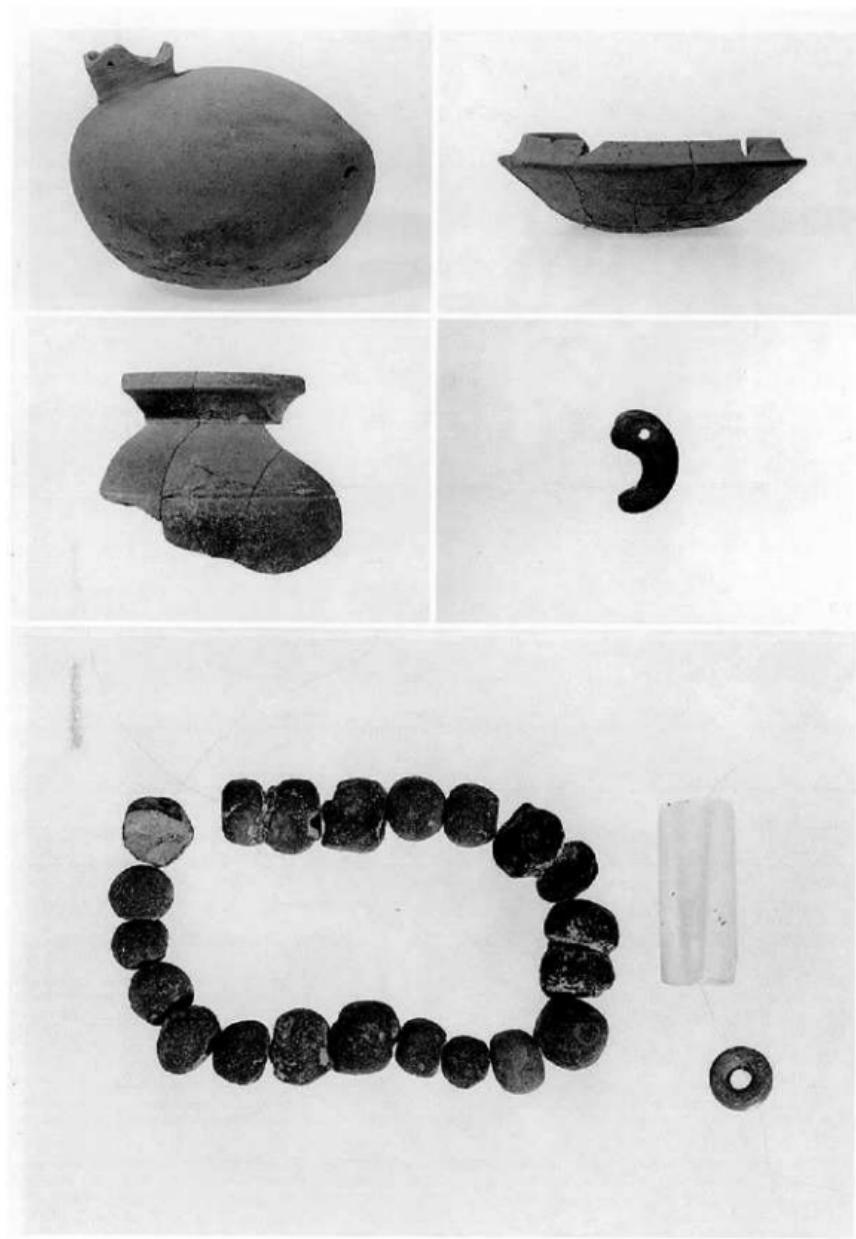




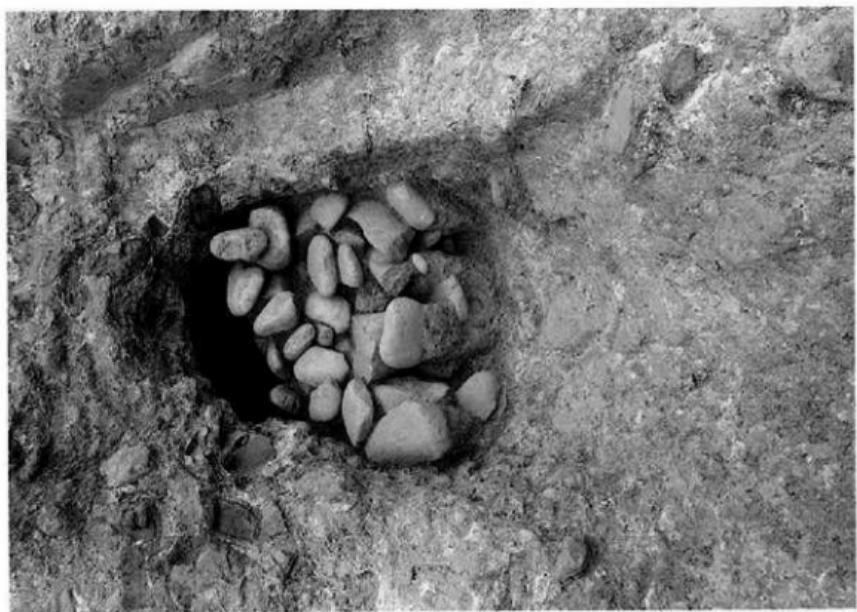
(1) 居屋敷 9 号横穴墓玄室全景



(2) 居屋敷 9 号横穴墓玄室敷石除去後



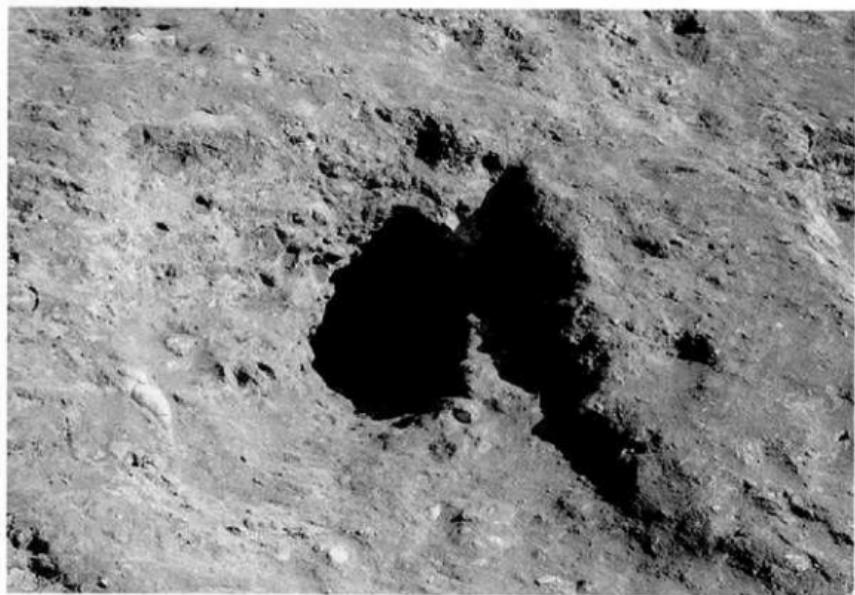
居屋敷 9号横穴墓出土遺物（須恵器・玉）



(1) 居屋敷11号横穴墓全景（西から）



(2) 居屋敷11号横穴墓開基状態



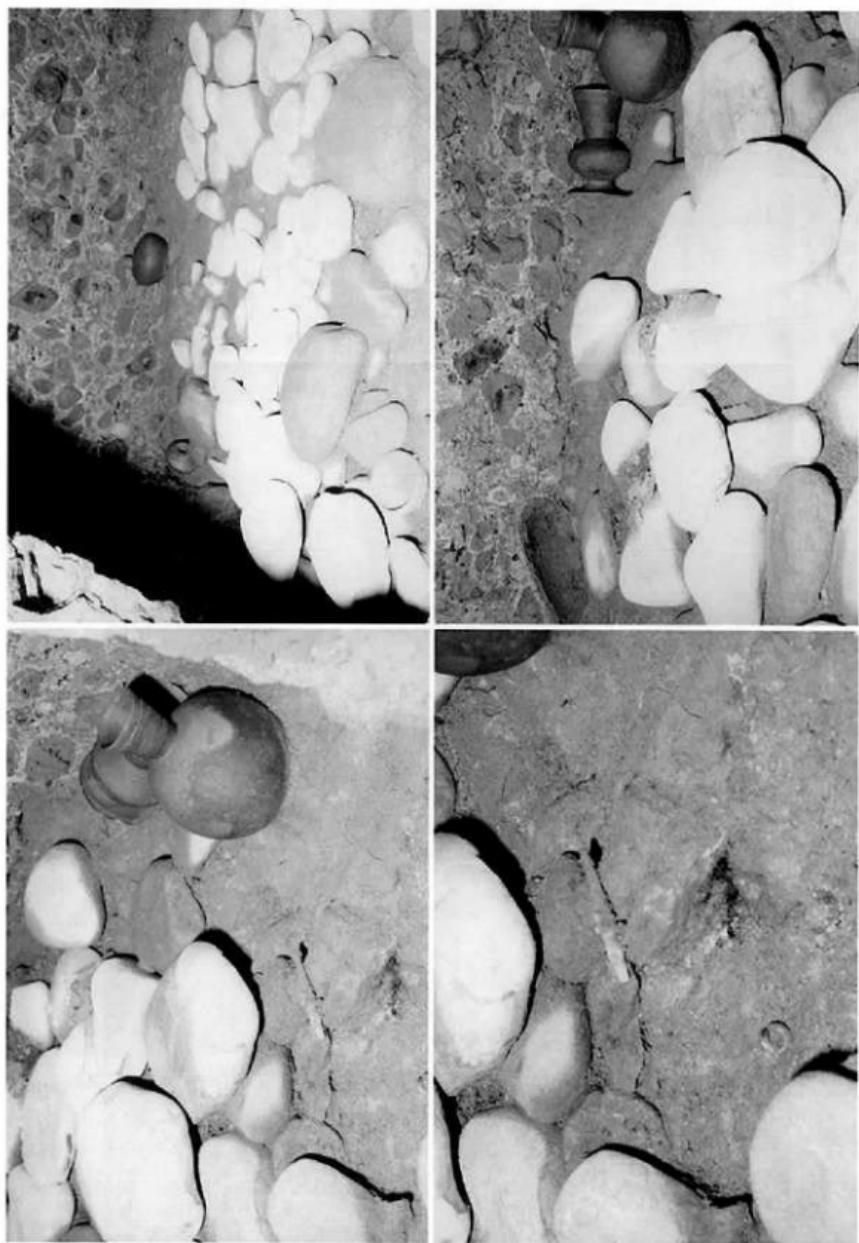
(1) 居屋数11号横穴墓全景



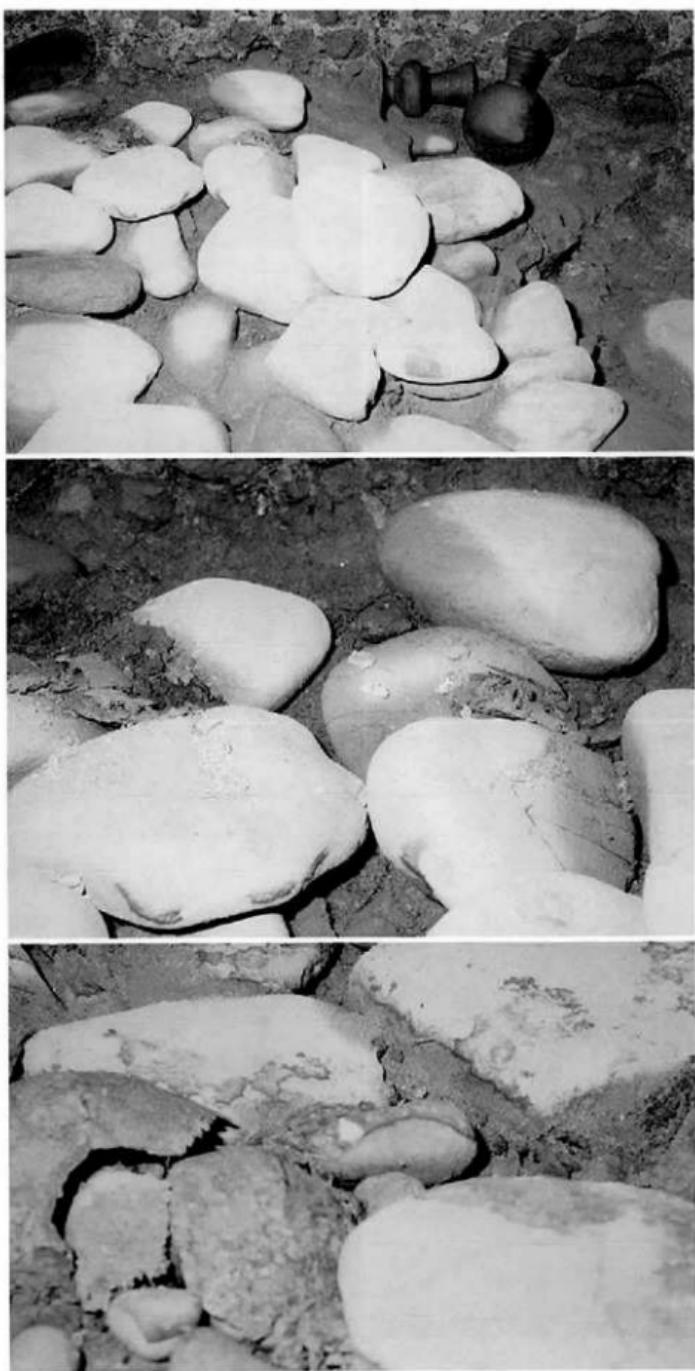
(2) 居屋数11号横穴墓近景



居屢数11号横穴竪閉塞状態と遺物出土状態 矢印 耳環



層層數11号標穴(黒巣)内の出土遺物状態



居屋敷11号横穴墓玄室内の出土遺物状態（人骨等）



1



2



3



4



5



6

居屬數11號橫穴墓出土遺物（耳環）



1



2



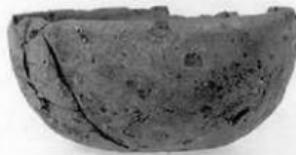
3



4



5



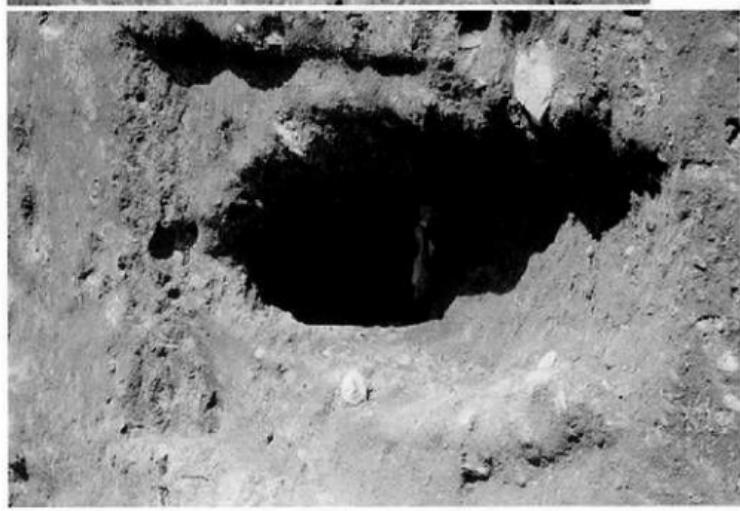
6



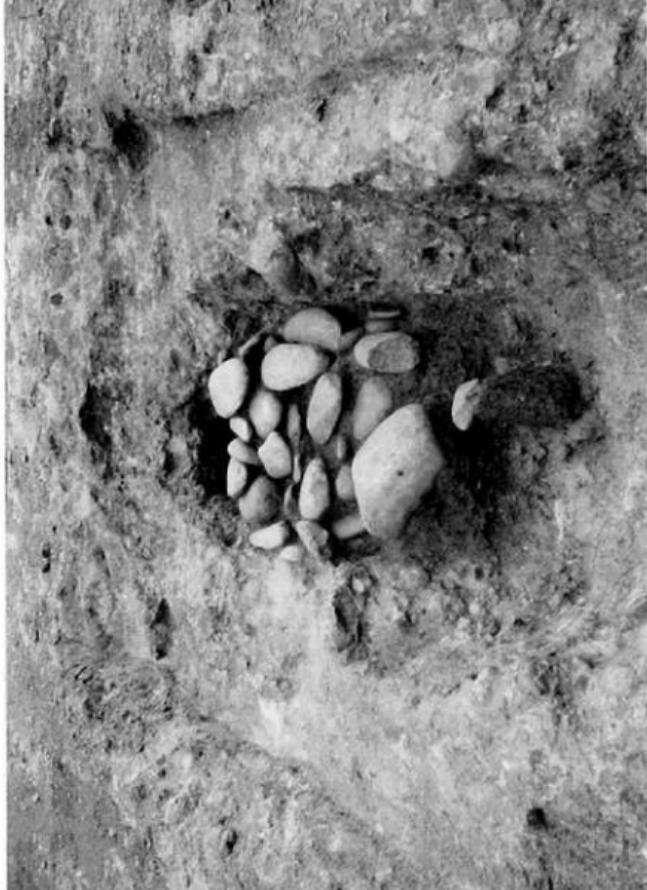
7

居屈敷11号横穴墓出土遗物（須恵器・土師器）

(1) 居塙数12号横穴墓全景(西から)

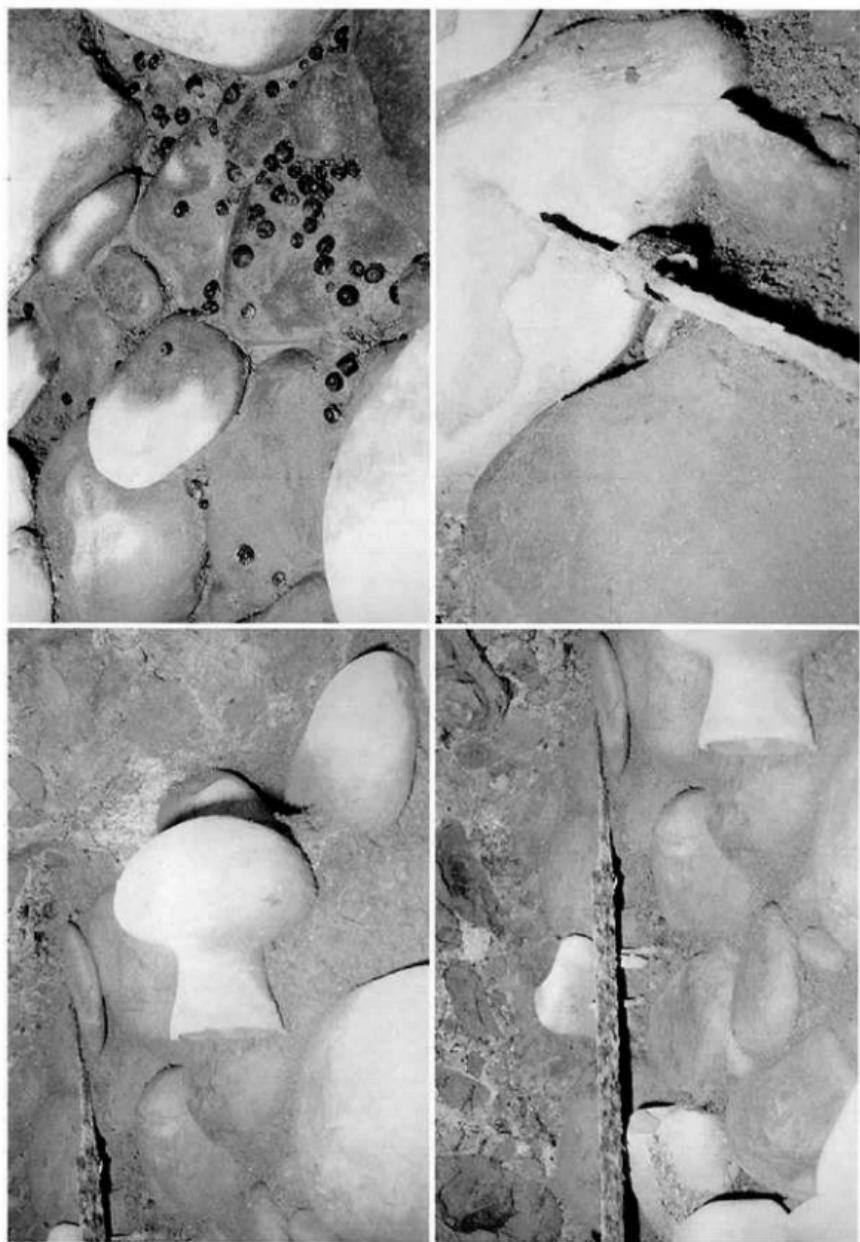


(2) 居塙数12号横穴墓調査後状態





居屋敷12号横穴墓玄  
室内の出土遺物状態  
(直刀・鎌等)



居屋敷12号桶穴窯内での出土遺物状態（直刀・玉等）



1

2



3

4



5

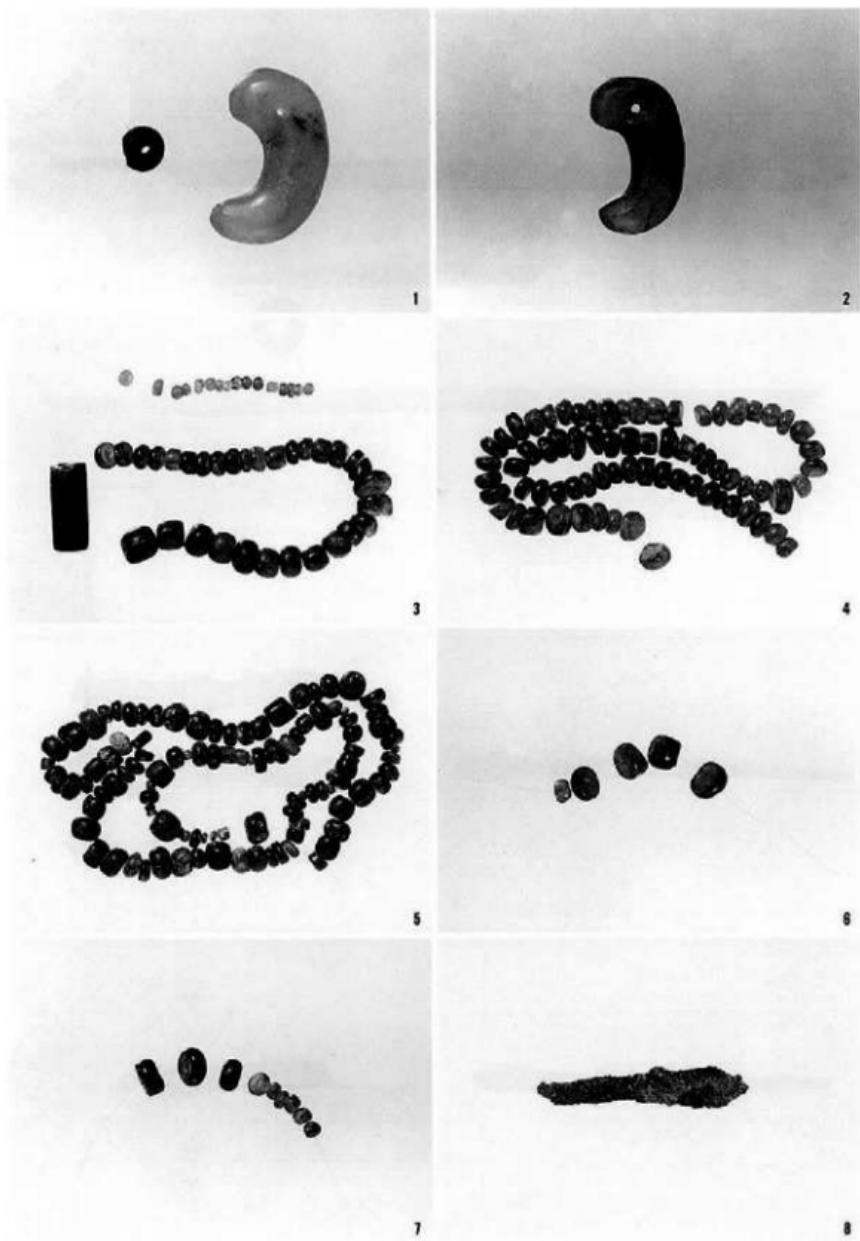
6



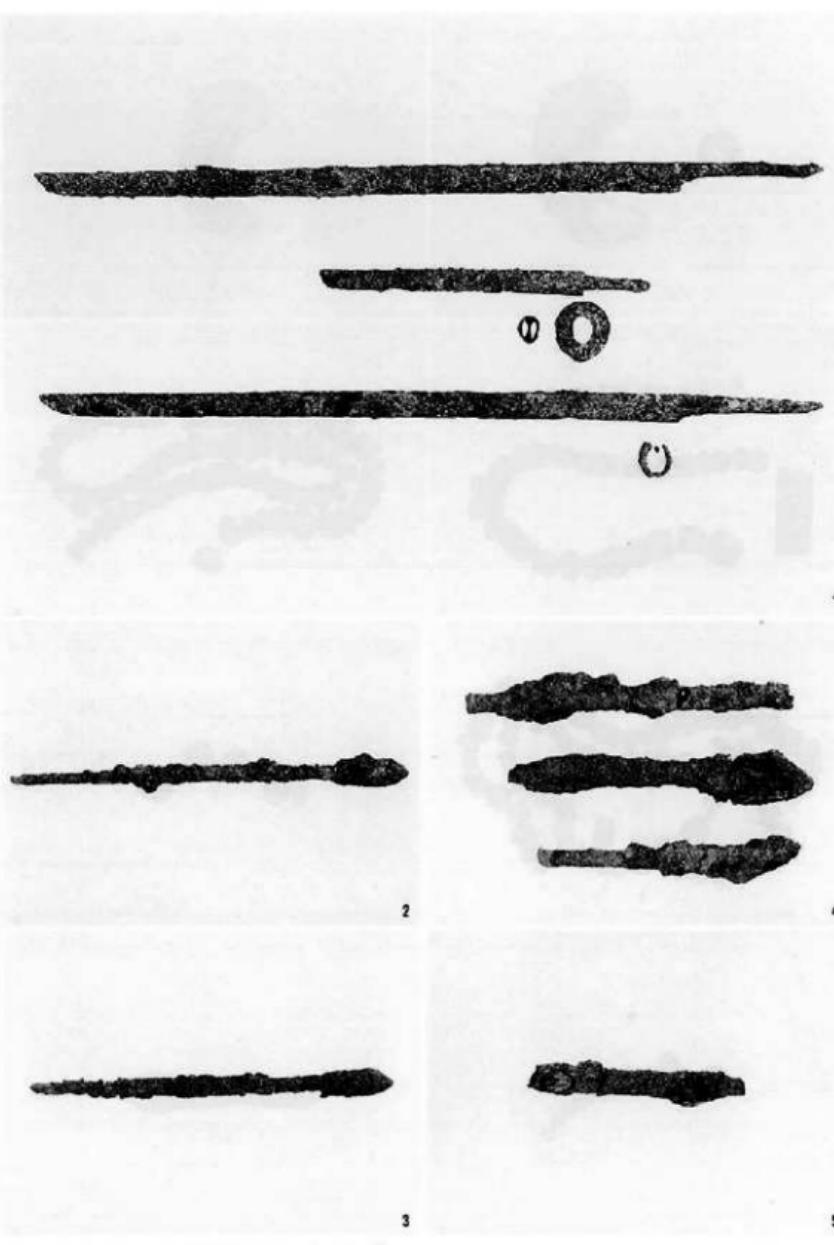
7

8

居屋敷12号横穴墓出土遺物（耳環・須恵器等）①



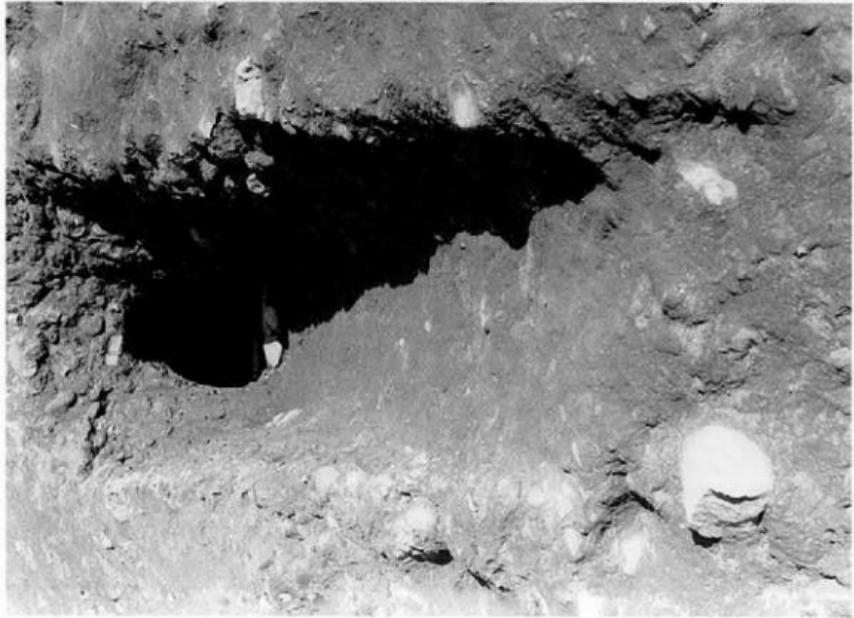
居星墩12号横穴墓出土遗物（玉·刀子等）②



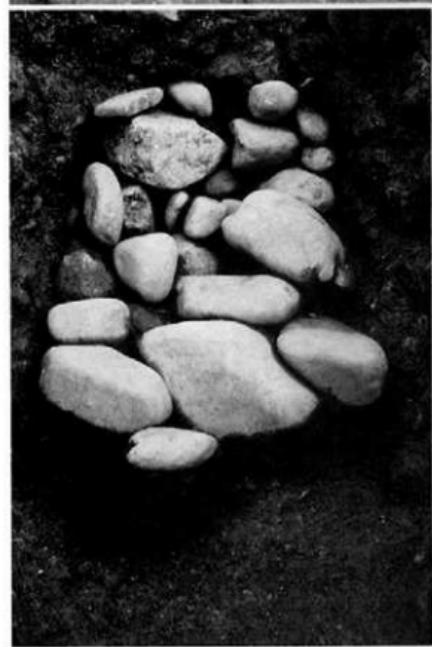
房屋數12号横穴墓出土遺物（鐵製品・直刀他）③



(1) 居居敷13号椭穴墓全景（西から）

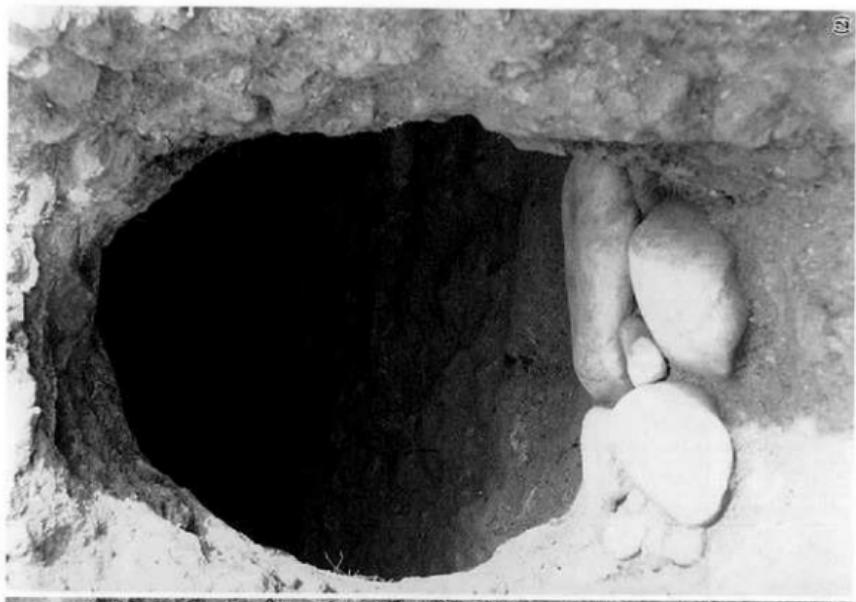


(2) 居居敷13号椭穴墓全景（調査後）



居屋敷13号横穴墓閉塞状態と遺物出土状態

(2) 砂石を除去した状態



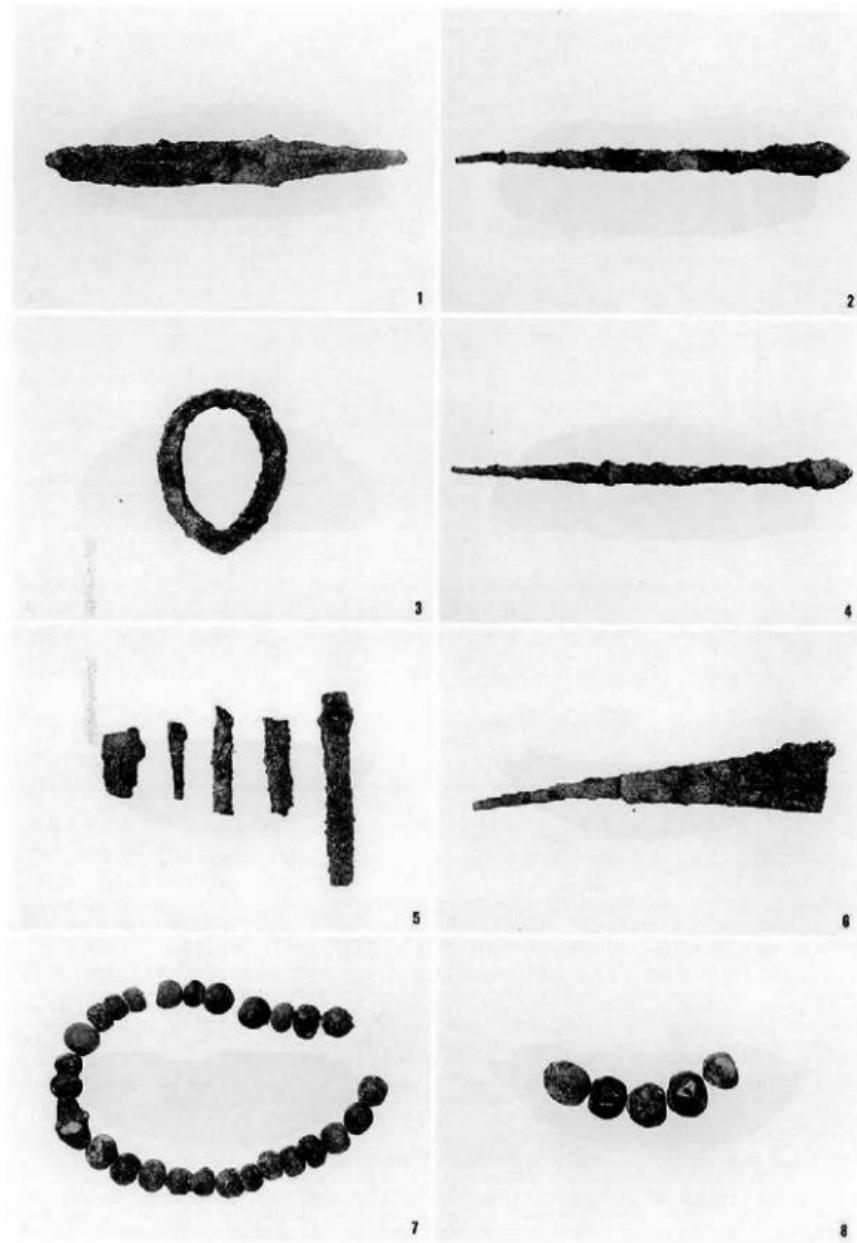
(1) 敷石と板石



居屋敷13号櫛穴墓玄室内部状態



居屋敷13号横穴墓出土  
遺物状態（直刀・  
鐵錐等）



居屋敷13号横穴墓出土遺物（鐵製品・玉等）①



1



2



3



4



5



6



7



8

居屋敷13号横穴墓出土遗物（须惠器）②



1



2



3



4



5



6



7

居屋敷13号横穴墓出土遺物（須恵器）③



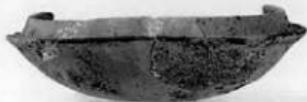
6 0 0



2



3



4



5

居屋敷13号櫛穴墓出土遺物（直刀・須恵器他）④



(2) 防空壕 1 近景 (下段)



(2) 防空壕 2 近景 (下段)



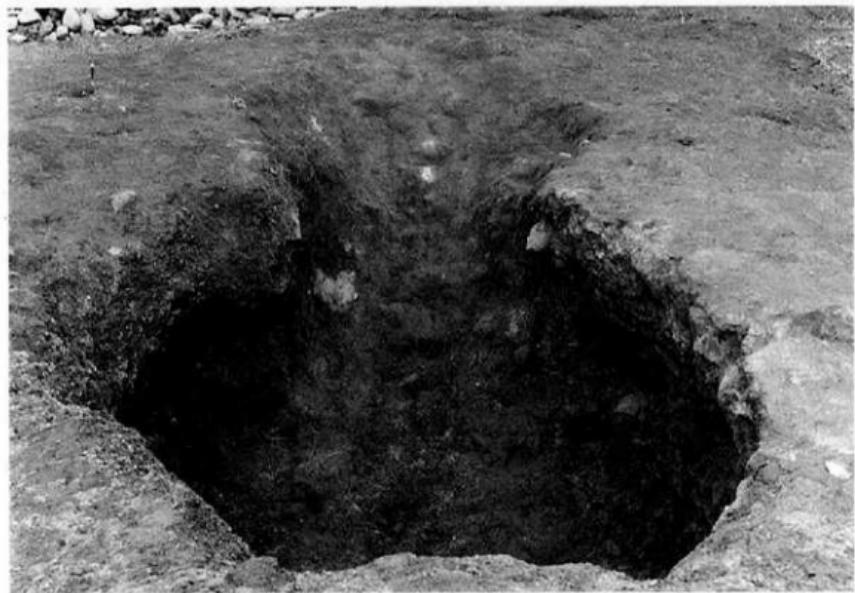
鍋先遺跡 0 区全景と居屋敷横穴墓南支群との関係（空中写真）



1. 居屋敷南支群全景（西上空から）



(1) 居屋敷 S-1号横穴墓内部



(2) 居屋敷 S-1号横穴墓完掘後



(1) 居屋敷 S-2 号横穴墓全景



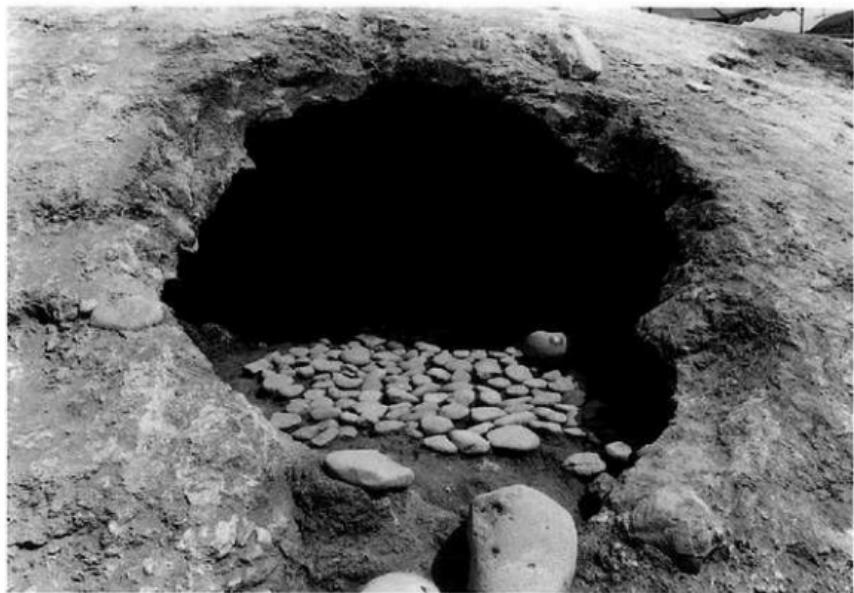
(2) 居屋敷 S-2 号横穴墓閉塞状态



(1) 居屋敷 S-2 号横穴墓内部



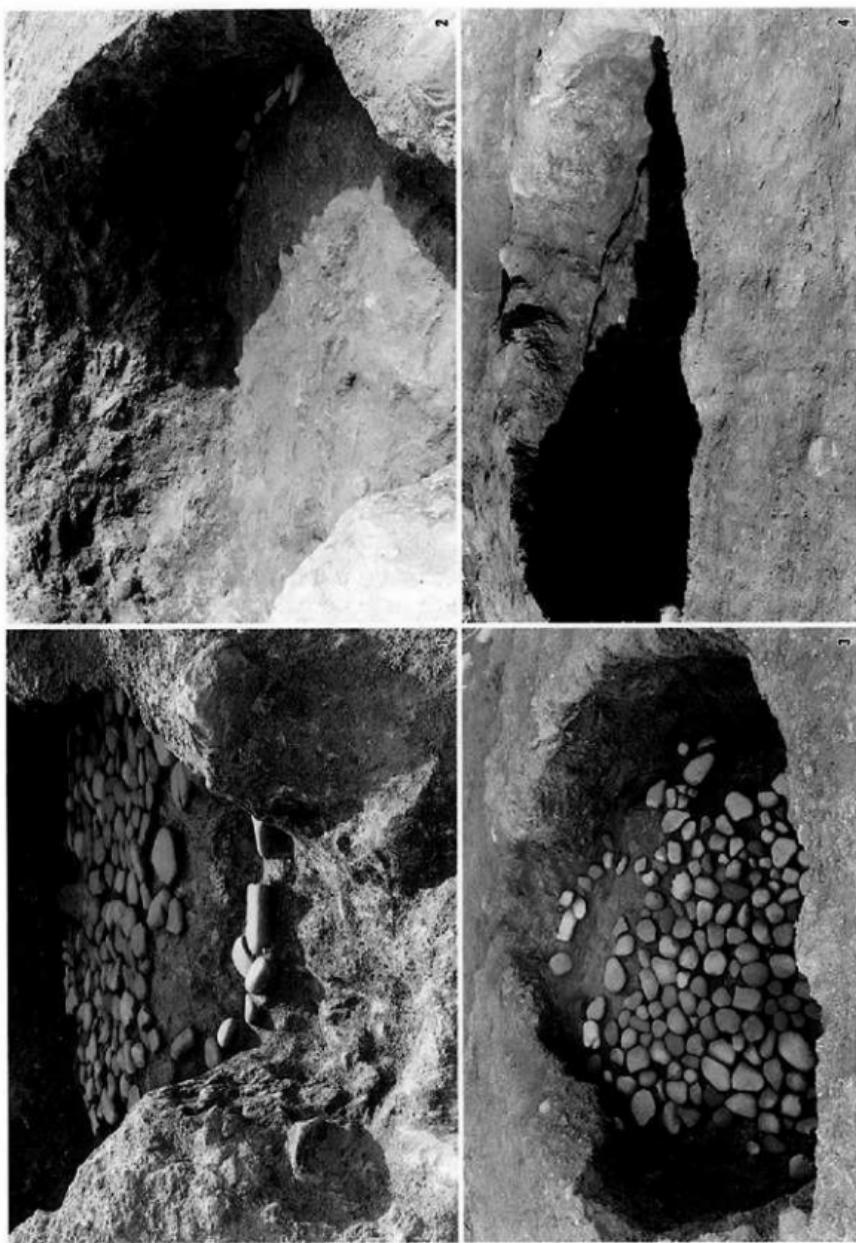
(2) 居屋敷 S-2 号横穴墓完掘後



(1) 居屋敷 S-3号横穴墓全景



(2) 居屋敷 S-3号横穴墓閉塞状態



3·4 居屋敷S-3号横穴墓完掘後

1·2 居屋敷S-3号横穴墓内部



(1) 居屋敷 S-4 号横穴墓内部



(2) S-4 号横穴墓完掘後

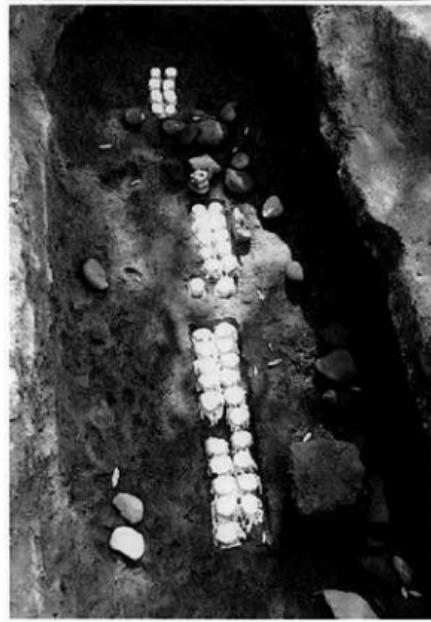


(1) 居屋敷 1号窯跡全貌

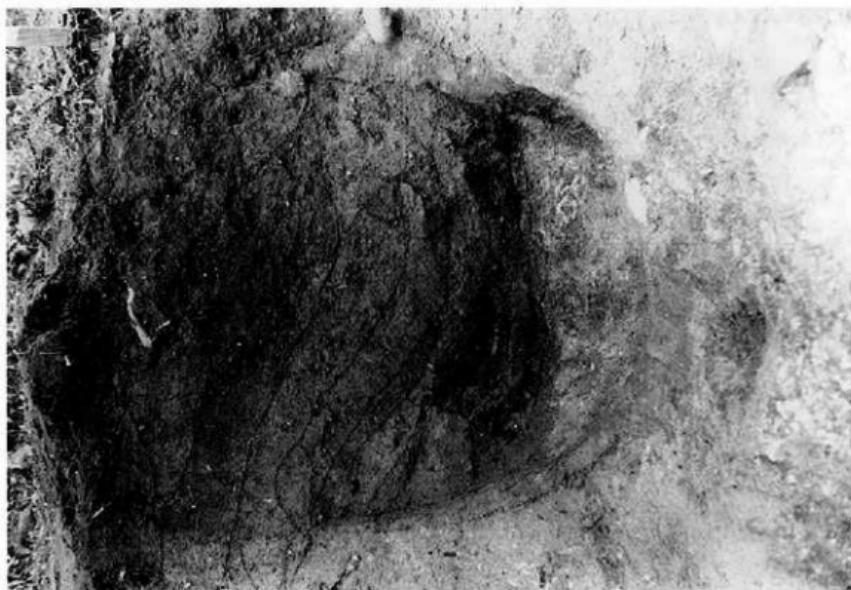


(2) 1号窯跡の煙出し部分付近の近景  
(3) 1号窯跡の窓内遺物出土状態 (下)





找尋磁氣年代測定調查風景



(2) 焼口部の土層状態 (西から)



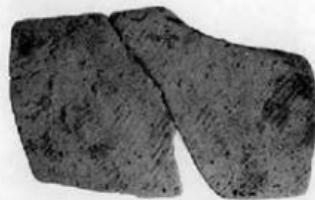
(1) 1号窯跡堂内土層状態



甕



甕



室内出土遺物（須恵器）②

## 報告書抄録

ふりがな	い や し き い せ き						
書名	居屋敷遺跡						
副書名	福岡県京都豊津町大字徳永所在遺跡の調査						
巻次							
シリーズ名	一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第6集						
編著者名	副島邦弘、飛野博文、伊藤晴明、時枝克安、土肥直美						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7番7号(092-651-1111)						
発行年月日	平成8(1996)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (当初面積)	調査原因
居屋敷	福岡県京都郡 豊津町大字徳 永字居屋敷	406244	33°41'14"	131°00'00"	1989.0106 1989.0412	(980m <sup>2</sup> ) 1050m <sup>2</sup>	一般国道 10号線椎 田道路の 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
居屋敷遺跡	弥生時代  古墳時代  近世	貯蔵穴3 土壤基16 カメ棺3 落し穴2 横穴墓14 初期須恵器窯跡1  墓壙状遺構 溝状遺構	弥生式土器 カメ棺  須恵器 鉄器 耳環・玉類 金銅製鏡8			初期須恵器窯跡	

一般道路  
10号  
堆山道路関係埋蔵文化財調査報告 第6集

## 居屋敷遺跡

1996年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
〒812 福岡市博多区東公園7番7号  
電話(092)651-1111

印刷 佛昭和堂印刷  
〒812 福岡市博多区桜田2-2-52健軍ビル  
電話(092)471-8200

福岡行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 10

## 一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第6集 居屋敷遺跡

## 正誤表

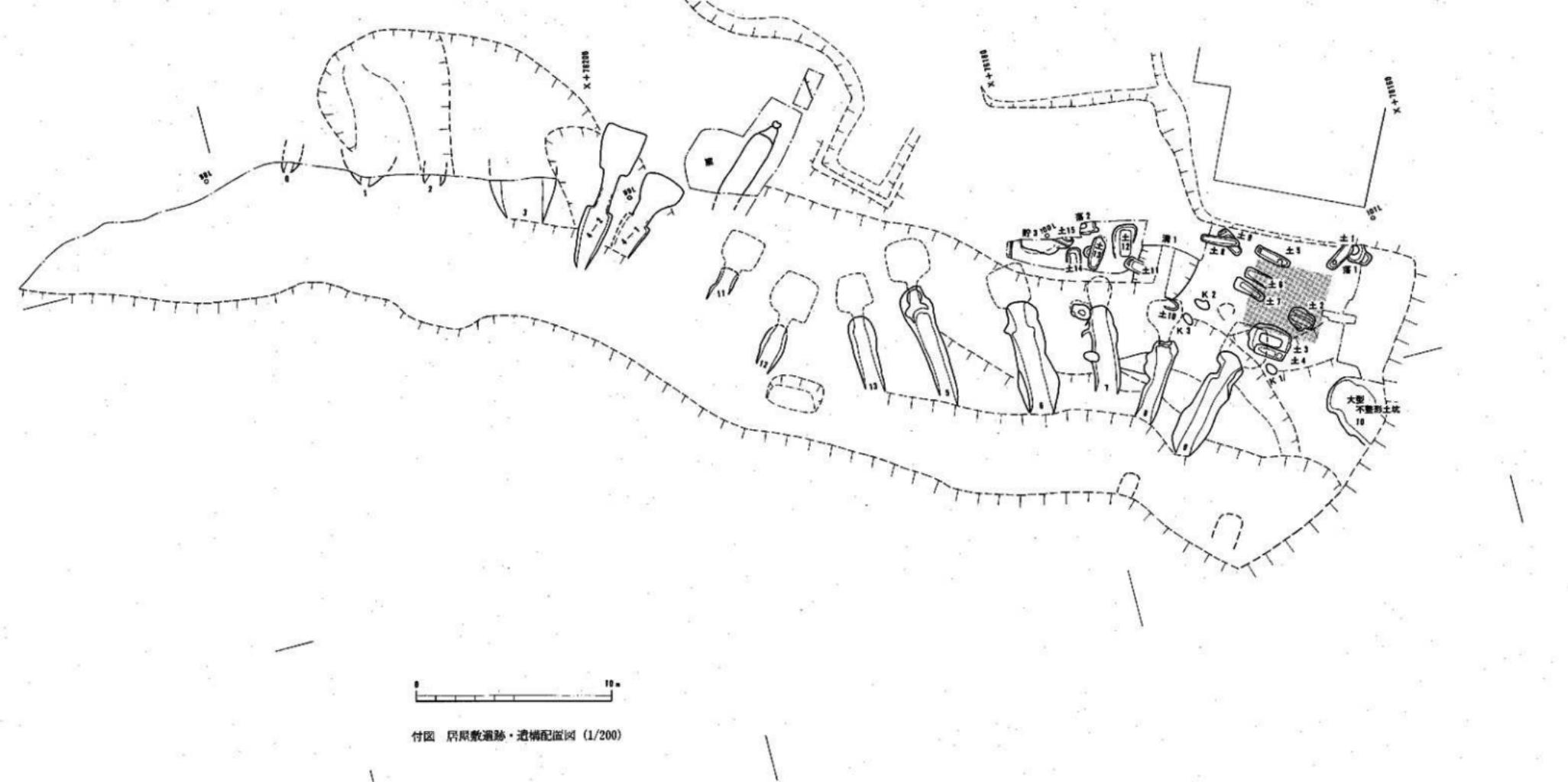
本文中に誤りがありましたので以下のように訂正致します。

	誤	正
本文目次 18行目	寫本位	本体
P111 第103図	実測図(1/60)	(1/30)
P114 2行目	寫本位	本体
P115 1行目	幅100m	100cm
P117 第108図	29.0cm	29.0m

一般国道  
10号 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第6集

# 居尾敷遺跡

付 図



付図 居住敷遺跡・遺構配置図 (1/200)

